

無個性ヒーローは無個性ヒーローNo.1を目指す

超ちくわ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無個性でこの世に生まれた少年、つやぼし 艶星 かなめ 萃。  
いじめられっ子の少年だった彼は幼き頃にヒーローに憧れた。

無個性と認識されてからは無個性なりに守るべきものを守り続けた。

無個性だから敵にサイラン勝てない…そんな屁理屈常識はぶち壊し、無個性でも敵を倒せると証明させていたら世間を騒がせることになった。

そんな無個性ヒーローのまったりしていそうではない日常です。

## 目次

#0	プロローグ 無個性ヒーローの誕生	1
#1	無個性と個性	9
#2	友達が出来ても嫉妬は嫉妬	16
#3	個性の相性と突然の展開	22
#4	兎と無個性	29
#5	無個性の暴走	36
#6	謹慎とお掃除と盗撮	43
#7	謹慎明けからのインターンシップ初日早々の出来事	50
#8	兎と無個性のはちやめちやな見回り	57
#9	いんたーんしゅぷさいしゅーび	64
#10	無個性 : らいじんぐ	72
#11	卵の根性と暴走と	78
#12	意識、暴走、自壊	84
#13	優心	91
#14	気持ち	98
#14.5	公式バトルイベント	106
#15	コレジヤナイ感	113
16話	互角	122
#17	無茶(マジ)と本気(マジ)	130
#18	海と特訓	137
#19	特訓とは(哲学)	143
#20	先生vs1年A組	149
#21	計画	157
#22	襲撃ふぃーばー	165

# 2 3	v s 侵略者（インヴェーダー）	172
# 2 4	悪魔	179
# 2 5	悪魔の子	186
# 2 6	はーどなおしおき	194
# 2 7	女性相手だと調子悪くなる。	202
# 2 8	Enemy of the truth	210
# 2 9	親、襲来。次いでに事件。	217
# 3 0	前夜のように見えて前夜ではない作戦会議。	225
# 3 1	厄介者は何処からでも	231
# 3 2	急成長	238
# 3 3	苦戦、勝敗、波	246
# 3 4	再来	252
# 3 5	一時的の平和な日常	260
# 3 6	安らぎの一日	267
# 3 7	擬似戦闘訓練	275
# 3 8	変装、下見、ゴキブロス	284
# 3 9	蟻の巣、地上、華	292
# 4 0	人と人、愛と相	299
# 4 1	侵略者（インヴェーダー）日本支部攻略戦、開始	306
# 4 2	ホイップクリームの概念	313
# 4 3	お調子者	320
# 4 4	情緒不安定	328
# 4 5	表のボス、真のボス	335
# 4 6	完全個体と真ボス	342
# 4 7	正体	348

# 4 8	全力を越えた先	354
# 4 9	目が覚めて	361
# 5 0	体のバグ、平和な一日	368

## #0 プロローグ 無個性ヒーローの誕生

「う、うわああああ！<sup>サイラン</sup> 敵だあああ！」

「ふええ…マジかあ…。」

俺は<sup>つやほし</sup>艶星<sup>かなめ</sup> 萃。

雄英高校を目指している無個性の人間だ。

僕の周りは個性を持つ人ばかりで、虐めを受けていた。

え？今？今は休日で街をほわほわ買い物とか行ってたよ？

そんでなんか敵<sup>サイラン</sup>に出くわした。

「あ…うん、闘るか。」

「おらああああ!!ヒーロー出てこいやあああああ！」

「きやあああ!!」

「うええええん！お母さあああん!!」

「ふんっ!!」

「殺らせるかよっ!!」

ベキッ!!

「ぐうううっ…!!」

闘るしかなかったが、子供が泣いていて危なかったんで庇ったら腕  
逝った。

だけどソイツはそこまで力を出していないのが分かる。

無個性で挑むのは「死」同然だが、守るべきものは絶対に守ると決  
めている以上死ぬまで闘ると決めていた。

「なんだあ？てめえは無個性か？てめえのようなヒーローモドキは消  
えな!!」

「だから何だ…！無個性でも護るもんは護るのがヒーローっつもん  
だろーがあああああ!!」

「ならここで潰してやるよ!!」

「殺れるもんなら殺ってみろやあああああ!!」

「お、お兄ちゃん!!?」

「無個性の力…見てな!!砲雷撃戦用意…！7. 7 m m機銃・対陸戦闘  
態勢!!」

「効かねー!!俺様の暴走列車には適わねーよ!!」

「どらららららららららら!!」

ズブツ

「ぐあああああつ?!?目がああああああ!!」

「おらおらおらおらあああああああ!!」

ドッ

「おぶっ…?!?」

「無個性筋力現段階最大100%36cm三連装砲・二砲同時発射!!」

ズドオツ!!!

「ごはあああつ?!?」

ビュンツ!!

「トドメだ…無個性筋力オーバーフロー!%計測不能!46cm三連装砲・撃槍!!」

「お、おいちよつと待てや…コイツ…まさか…!」

ドゴオオン…!!

僕は個性を持っているように見えて無個性だ。

僕の使っている技は大戦の時に活躍した日本帝國軍・海軍の軍艦達の装備の名前を使っているだけ。つまり、ただの殴り。

ちなみに闘ることに夢中になっていたりたけれど、野次馬達に撮影されていたみたいで動画でめちやくちや流されていた。

「あちやー…やりすぎちやったかな…?」

「やりすぎも何も…どうやったの!」

「普通に物理です。」

「答えになつてない!!」

「ふええ…?」

その後なんかめちやくちや感謝された。

他のヒーロー達にもなんか色々褒め言葉をもらったけれど、やはりその反面にはアンチ的なものもいた。

無個性が個性に勝てないとか決めつける人とか色々いたが、それは確かに分かる。だけど誰が個性に勝てないと公式に発表した?個性が無ければ頭脳で勝負したらいい、それだけだ。と言つたらなんか静

まった。

「いててて…腕逝っちゃっているから結構きちいな…。」

「H A H A H A H A !! よくやったな少年！」

「お、オールマイトさん!？」

「無個性ながらも個性を持つ敵に勇敢に立ち向かうのは久しぶりに見た！君は何て言うんだい？」

「つ、艶星 萃です…。」

「萃少年、君はよく頑張った。だが無個性でも強いとはいえ、負けてしまえば周りに危害を及んでしまうこともある。過信しすぎないことが重要だ。」

「分かっています。俺は無個性だからと言って虐めを受けていた身なので、出来ない相手と判断したらヒーローにお願いしようと思っっているのです。」

「うむ、いい判断だ。君の戦闘目撃情報もよく他のヒーローから聞いているが、ちゃんと分かっているようで良かった。そういえば、君は中学生だね?。」

「はい…え? 何故知っているんですか!？」

「さっき言っていたように、情報だよ。」

「情報…あ、もしかして!。」

「うむ！警察からの身元を見せてもらったぞ!。」

「やっぱりかあ…。」

「それと、君は雄英高校に興味があるかい?。」

「ま、まあ…気になってはいるんですけど…俺じゃあ落ちるの確定だなんて…。」

「私に任せておきなさい！君、個性を持ちたいかい?。」

「持ちたいですが、自分なりのやり方で個性と同じように扱える技ができましたので…今のところ大丈夫です。」

「艶星少年…雄英高校に入るには個性を使わなければならない…それに対抗できるか?。」

「俺の力でやってやります。時には個性に勝てる無個性もいるんだって知らしめてやりたいんです。」



「緑谷少年と似ているな…。分かった、だが君にも教えてあげよう、私の秘密を。」

「いや待ってくださいしれつと重要なこと言っちゃっているんですけど!?!」

「君は無個性でも個性より強いヒーローになれる。そう思ったからだ。」

「…分かりました。試験はキツいと聞いているので合格してみせませう。見ていてください。」

「ああ!見ていてやるとも!」

なんかオールナイトさんに会った。

入院している最中に入ってきてきてビビった上にすごいオーラかましてた。

しかもしれつと口外しちゃいけないものを聞くことになったが、俺には個性がない。個性がない俺にそれを聞いても意味ないと思うけれど、平和の象徴になったキツカケとか分かる気がする。

まあ聞いてみりや分かるかも。

それで、退院してから数日後。

「マズイ…なんか雄英高校に入る勢いになっちゃった…。」

「あら?萃ちゃんじゃない?」

「ぶえつ…ミッドナイトさん…。」

「ぶえつって何よぶえつって。萃ちゃんって本当に可愛いわね♪それっ!」

「ひゃあつ!?!ちよつと抱きつくのは厳き…ん….:コケツ すう…:すう…。」

「疲れが見えてるんだからゆっくり休みなさい、私の可愛い雄英生予定の生徒ちゃん♪よいしよつと…。」

「ん…お姉…ちゃん…。」

「本当…夢の中では甘えん坊さんなんだから…。」

ミッドナイトさんには色々お世話になっているので何もできないというか、とりあえずお世話になってる。

親がミッドナイトさんとめちやくちや仲が良くて俺を預けている

時はめちやくちや可愛がられてたの。ドSだけど。

「ま、萃ちゃんは無個性ながらもここまで成長したとしても他の子達とあの試験をやるには難しいから、萃ちゃんだけ違う試験にさせちゃうかしら♪」

「マ……マ……。」

「本当可愛いわね。襲ってしまいたいわ……。」

試験当日……。

俺はどうとう雄英高校の前に立った。

めちやくちや緊張する。

緑髪の男子も凄くばあああつてしていてオーラが凄かった。

めちやくちや憧れていたんだなって一目で分かったけれど、その男子には少し不安そうな表情をしていた。

「絶対に試験に受からないと……！オールマイトから授かったこの力は無駄になる……！」

「オールマイトの秘密……個性の秘密が分かるのかも知れない……。ここは無個性の俺でも受からないと……！」

「……えっ？」

唐突に始まったこの出会い方。

思わず口に出てしまったが、どうやらお互いに同じような目的を持っていた。ちなみに緑髪の男子は3時間前にオールマイトから授かった力を持っているみたいで、俺は完全に無個性で挑む。

お互いまさかこんな形で会うとは予想していなかった。

「萃ちゃん、あなたはこっち。」

「ミッドナイトさん？どして？」

「あなたは別の試験で決めてもらうわよ。」

「ちよつと待って?!俺は皆で挑む競い合いのところじゃないの!?!」

「危険になっちゃうから来なさい。萃ちゃんは私と戦ってもらわよ。」

「……はあ?!待って待って!?!ミッドナイトさんと!?!」

「私に勝てば、特盛りいちごパフェをご馳走するわよ?」

「ぐうっ……!や、やるよ……!スイーツで釣るなんて小悪魔だよっ……!」

「うんうん♪それじゃ、始めましょ♪試験内容は簡単、制限時間まで生存もしくは私を倒す…それだけ!さて、初手からダウンさせるわよっ!!」

「うわっ!いきなり眠り香なの!?ヤバい…眠い…。」

「さあ私に従いなさい♪」

バキッ!!!

「え…?」

「はあ…はあ…痛い…。」

「ちよつとそれは初めて見たわよ!」

「力加減無しで…いいんだあよおねっ!!!?」

ビビユッ

「ひえっ!?ねえ萃ちゃん!?本当に無個性なの!」

「俺は無個性だよミッドナイトさん。ライラン敵を倒して守るべきものを守る為に頑張ったんだもん。個性無しでも守れるってことを世に知らしめる為に…ねっ!!」

ヒユッ

「流石ね…だけど、私もこの個性だけで戦うと思っているのかしら?」

パシンッ!!

「ひっ…!?む、鞭…!」

「萃ちゃんのような可愛いらしくてか弱そうで小さい子は好きなのよ♪痛ぶってあげたくなくなっちゃうの…♪」

「はわわわ…み、ミッドナイトさんが…こ、怖い…!!」

ブワッ

「そろそろ本気出しちやおうかしらあ!!」

「あ、ダメだ終わった逃げられんパシッ あっ…グイッ うわあっ!!」

「ほらほらどうしたのかしらあ!?本気出さないと死ぬわよお!!」

「み、ミッドナイトさん待つてドガッ ぶあっ!!」

ミッドナイトさんと試験を受けていて、カメラに映されていることにすら気づかず、別の部屋から見ていた先生方がいた。

もちろんオールマイトも見ていた。

俺はミッドナイトさんの本当の力を知らず、そのままミッドナイト

さんの猛攻を受けていた。

「はあ…はあ…ガシツ ううつ…。」

「本気で闘るんじゃないかなかったの？本気でやらなければあなたは本当に死ぬわよ。」

「まだ…本気じゃないさ…ミッドナイトさん…女性として見ているから本気を出せないんだよ…だけど…ここに入るからにはあ…ぜつてーに…負けていられるかよおおおお!!64cm三連装酸素魚雷発射あああああ!!」

ゴチンツ!!

「あつ…くううううううう!!石頭ああ…!」

「…ッ!!(痛い…泣きそう。)」

「これだけで逆転できるとでも…ズキツ 頭痛いいい…!」

「最大火力で終わらせる!!無個性筋力%オーバー…46cm三連装砲・滅 発射あああああ!!」

ドゴオオオオオオン…

「そこまでっ!!」

「えっ…オールナイトさん!?」

「お、オールナイト…なんで!」

「タイムアップだ。」

「あ、本当だ…だけど…落ち…た…。」

バタツ

「艶星少年…君は合格だ。ミッドナイト、立てるか？」

「ええ…本当、圧倒されちゃったわ。あんなにか弱くてビクビクしていた小動物の頃とは違うわね。立派になってくれて良かったわ。」

「む?ミッドナイトは艶星少年と何か関係を持っているのかい?」

「この子のお母さんと友達でね、よく可愛がっていたのよ。本当に今も可愛いくて我慢できないわ。今襲ったら終わっちゃうわね…。」

「とりあえず艶星少年を医務室に連れて行こう。先程のダメージを蓄積した上に艶星少年の最大火力をこの手で受け止めた。この少年には無個性ながらも人間本来の力を引き出している。代償が大きすぎで脳が強制的にシャットダウンさせたようだ。」

「本当…無個性でも恐ろしい子がいるのは変わりないわ…。この子は特にそうね…。」

俺は医務室に運ばれ、そのまま治療を受けた。

ちなみに落ちたと勘違いしてギャン泣きしていたら合格してた。

雄英高校唯一の無個性ヒーローが生まれ、この先どうなるうとも守る覚悟ができた。死ぬなんてことは考えていないが、体が滅びるまで守り続けると心に誓った。

ちなみに合格したお祝いにミッドナイトさんが約束通りに特盛りいちごパフェをご馳走してくれた。めちやくちや美味しかったです。

## #1 無個性と個性

入学してから数日、俺はなんか目を付けられていた。

クラスメイトの皆も不思議がるようにこちらを見ていて、ソワソワと近寄って来た。

「あ、あの…お名前よろしくて…?」

「えっと…俺ですか?俺は艶星 萃と言います。まあ…見ていただけで皆が不思議がるのも分かります…。」

「わ、分かるんですの!?!」

「はい、試験で俺とミッドナイトさんが戦っている途中にカメラで見られていたことに気づいていたんで。」

「本当に無個性ですか…?」

「無個性つす。」

「本当にケロ?」

「本当なのです。」

「艶星君ツ!本当に無個性なのかいつ!」

「本当に無個性なのです。」

「…:…:けっ!!」

「???

「すごいよ艶星君!ミッドナイトとあんなに戦えるなんて!最初はどうなるかとヒヤヒヤしたけれど、眠り香に耐えながらタイムアップまでダウンしなかったのは本当に凄いよ!」

「あれは気合いでなんとかなったんだけどね…あはは…。」

なんか不思議がっていた皆だったけれど、逆に興味を持ってくれていたみたいで嬉しかった。いじめを受けていた自分が恥ずかしく感じた。

だけど、ここからが大変になる。

個性のあるクラスメイトに追いつけるかが課題となる。

「着席しろー…授業を始める。早速だが、身体測定をするぞ。」

「…」「マジか。」「…」

「その無個性君、名前は…何だ?」

「艶星 萃です。相澤先生。」

「艶星、お前も参加するか？」

「もちろん上等っすよ。俺だけ特別扱いされちゃあ困りますからねえ！」

「その目：お前は無個性ながらもいい度胸をしているな。頑張れよ。」  
「はい！」

身体測定開始した。

俺の記録は今のところこんな感じ。

100m走 5.279秒

反復横跳び 163回

走り幅跳び 36m

走り高跳び 9m25cm

これ全て本気の素<sup>す</sup>でやっています。

残すはハンドボール投げ。

無個性とは言えないくらいに身体能力と言われているけれど、ほぼ限界にまで本気をかましていたから結構やばかった。

ハンドボール投げはマジで自信がない。

普通の人間でも大体30m〜60m以上しかいかないからね。

無個性の俺だからこそガチで自信がない。

「艶星君、頑張れ！」

「もちろんだよ、出久君。あと萃って呼んでいいよ？」

「うん！」

「艶星、お前は個性を使えないから本気を出してしまっても構わない。だが、腕が逝っても喚くなよ？」

「もちろんっすよ先生。いきますか：すうー：はあー：。」

「何しているやる？」

「気持ちを落ち着かせているんだ。艶星君は僕達と違ってかなりのプレッシャーを持っているからね。どのような結果を持つかは分からないけれど。」

「無個性筋力%計測不能 現段階最大火力200% 風向き無し 4  
6cm三連装砲 弾倉一発発射準備良し：。」

「お、オイラは一体何を見ているんだ…!?!」

「すつごい筋肉してる!アレ凄くない?!」

(艶星、お前本気でやるつもりか…。壊してしまうだろうが、見届けてやろう。やってみたが、本当に無個性だ…無個性である以上俺には何もできねえ…。)

「最大火力200% 46cm三連装砲発射ああああああああ  
!!!」

ギョーンツ!!!

「いったああああああああああ!!!」

「なんぼいったん?!」

「おおおおおおお?!?!」

「あぐつ…!!くつそ…やつちまった…!!」

ピッ!

「おつ…艶星、お前の記録は683mだ。」

「へ…へへつ…何も言えねえや…。」

「萃君凄いや!とにかく医務室に行こう!?腕が痛いことになつてる!!」

「出久君ありがとう…あでで!!めちやくちや痛てえ…。」

「分かるよ萃君、僕も君と同じようになってるからさ。」

「そつか…出久君の個性はO F Aだもんね。いきなり100%ぶち込むと腕に大きすぎる負荷がかかっちゃうもん…。」

「うん、今後はオールマイトにアドバイスを聞きながら特訓をしないと体が追いついていけないからね。」

「だな、俺も調整すつかなあ…。」

「なんか、似た者同士だね。」

「確かに笑」

医務室に行きました。

リカバリーガールに治癒してもらったが、めちやくちや疲れが出た。

治癒速度を無理に上げているからそうなるのかな?

身体測定が終わって授業座学を始めるが、そこそこやれる。



「ただど…。」

「すう…すう…。」

プニツ

「もにゃ。」

「居眠りはダメですわよ？（寝顔可愛いですわ…。）」

「あ、ありがとうございますゆ…。やべ、涎出ちつた…。」

（萃君、身体測定から眠そうだ…元無個性の僕でもこのような感じは初めて見たかも…。もしかしてあの力を使った代償？）

「萃君、この個性の問題は分かりますか？」

「あ…：はい、パワー型はゴリ押しで相手を倒せるタイプですが、慣れない力でかますと負荷が大きくなり、下手したら再起不能になります。スピード型は速攻で片付ける系のタイプですが、持久戦には弱く潰されやすくなります。タンク型の個性は耐久戦を得意としますが、弱点を突かれると結構めんどくさくなります。」

「居眠りしていたのに流石だな…。」

「ぶえっ…バレてた…。」

（なんやあの子可愛いすぎやろ…！）

（コイツ…無個性の割にはいい度胸してんじゃねーか…。個性と無個性の違いを見せてやる…!!）

（見くびっていたよ萃君。君は無個性だから勝てないという概念を壊し、人間本来の力を引き出しているのはとても凄いことだ…だが、あの右手の震えはやはり目立つな。）

居眠りとか結構やらかしやすい。

しかも一撃をかました代償として右腕の痙攣が収まらず、左手で読み書きしていた。だいぶ慣れてきてはいるけれど、調整をしないと腕が使い物にならなくなってしまうかも知れない。

まあ、一撃をぶち込んでKOさせるのがやっとなんだけど（

キーンコーンカーンコーン

「さて、授業は終わり！次は自主訓練だからコスチュームの着用を忘れないように！」

「「「はーい！」」」」

「あと萃君、ミッドナイトが呼んでいるから来るように！」

「分かりました。」

「おい。」

「なんでしょか？」

「お前、俺と勝負しろ！」

「か、かつちゃん!?いきなり萃君に勝負を仕掛けるなんて…！」

「あゝあゝ!?!クソナードは黙ってる！」

「ご、ごめん…。」

「えつと…君は確か爆豪勝己君でしたね?どうして俺と…?」

「気に食わねーからだ。おめーのようなやつが無個性とか言うんじやねえ…!」

「そ、そつちですか!」

「文句あつか!」

「ないでござんす。」

「萃ちゃん!私が呼んでいるのになんで来ないのー!」

「あつ、それじゃ訓練場で勝負受けて立ちますよ。多分俺が確実に負けるけどさ…。」

爆豪君に勝負を仕掛けられ、そのまま乗ってしまった。

「だけど、どういう戦い方をするのか見物になるし勉強になるから寧ろありがたいのかも。」

俺は爆豪君を見た感じ、敵意というより興味を持った行動なのだと思ふ。無個性で個性に勝てる人間ってそうそういないから分からないかもしれないね。

「ミッドナイトさん、用はなんなの?」

「萃ちゃん、コスチューム無いでしょ?」

「あつ…そうだった…。」

「ふっふっふ♪萃ちゃんの為にコスチュームを作ったあげたのよ♪これよっ!」

「うわあい、なんかすっごいえっちいやつだあ、…マジ?」

「そうよ?だけどこれは普通のコスチュームとは違って、萃ちゃんの為にもう一本の腕を搭載されているの。着てみてちようだい?」

「うん…って見た目がちよつと恥ずかしいな…。」

「最初はね♪このコスチューム自体が萃ちゃんの神経とリンクしてあるから、性能としてはとっても優秀だから試して使ってみてね♪」

「なるほどね？このもう一本の腕の使い方が分かれば大丈夫ってことね？。」

「まあそうね。そ・れ・とく♪えいつ！」

モミッ

「ひあつ!?ちよつ…ミッドナイトさん……ッ！」

「私の可愛い萃ちゃんなんだから少しくらい襲っちゃってもいいわよねえ〜?じゆるり…。」

「せ、セクハラだってばつ…!ちよつと本気でやめとひやあああつ!？」

ドサツ

「私はあなたのことが好きなのよ?ちよつとくらいキスしてもいいじゃないの?。」

「先生と生徒の関係は結んだらダメだって言われてないんですかねえ?。」

「そ、それは言われてるわよ!だけど…あなたのことが好きすぎて毎日ストーキングしてるのよ!？」

「お巡りさんこつちでーす!。」

「やめて呼ばないで!分かったから!ストーキングしないからそんな可哀想な人を見る目で見ないで!。」

「そんなに俺の事が好きなら、手加減無し的一本勝負でミッドナイトさんが勝ったらでいいよ。俺も負けないからさ。」

「萃ちゃんツ:／／ちゅーしていい?。」

「ダメ。」

「むう〜!ケチ!。」

「可愛い。」

めちやくちやイチヤイチャした。

付き合っていないけれど、説明したようによく可愛いがられていたのでよくあることなのだ。

だけどミッドナイトさんもめちやくちや可愛いところあるんだけ

どね？

ドSなだけ可愛いところがヤバいくるんだよ。

甘えてくるところとか構って欲しい時とか猫さんみたいですっごいヤバいんです尊いんです。なんか年上好きって感じになっているのかも知れんけど、年齢関係なく可愛い見えるんですよ！

「やべ、爆豪君に勝負をかけられたんだった。行って来るね！」

「行ってらっしゃい。」

バタンツ

「ん〜：三本目の腕はどうやっていけるかなあ…。機銃としてもいけるし、三連装砲でもいけるけれどスタミナが終わるやつだなあ…。スタミナつけとくか。」

訓練場に着いた頃にはギリギリだったという…。

ちなみに爆豪君と勝負を挑むことにはなったが、まさかの先生からの許可が必要だったっていう…。

「おい無個性！勝負だああああ！」

「受けて立つぜ爆豪くううん!!！」

## #2 友達が出来ても嫉妬は嫉妬

初っ端から爆豪君に勝負をかけられ、そのまま訓練場で勝負することに。

本気出すことは禁じられるが、できるだけ力を出しすぎないように勝負しろと相澤先生に言われた。

相澤先生も実際被害者だからね。

こういうことになったきつかけは多分俺に原因があると思ってるし、絶対納得いかないからだと思つた。

「おい無個性！タメで正々堂々かかってこいや！」

「遠慮なくタメでやるぜええええ!!」

「えー、それでは爆豪vs艶星の勝負を始める。訓練だったのに何故こうなったんだよ全く…。あいスタート。」

ピッ

「どらあああ！」

「12cm単装砲ツ!!」

ボゴンツ!!

「ちっー！」

「あちちち…そう言えば、ミッドナイトさんが言つてたな…。やつてみるか。」

「ガンガン行くぞおらあああ！」

「換装、駆逐艦 島風型一番艦 島風!…でりやつ！」

「は!?!」

ドスッ

「ぐふっ…!!」

「これ…絶対コスチュームの強さだよな…。」

「ちっ…くしょおお…!おらおらおらおらおらあああああ!!」

「わっ!ちよつと!乱射しすぎっ…!!俺も対抗しちやる…!7.7m機銃じゃああああ!!」

「す、凄い…!萃君、かつちゃんの遠距離攻撃を萃君の拳で抑えてる!無個性ではほぼ不可能と言われていたはずなのにそれができちゃっ

ていて、しかもコスチュームの補正でしっかり狙いが定まって正確に当てているとは…!」

「す…凄いですわ…コスチュームに着いている腕を既に使いこなしていますわ…。」

「艶星を敵に回すとなれば、厄介な相手になつていたな…。」

「おいおいアレ見ろよ!萃のやつバクゴーに対抗できてるぜ!?しかもしっかり攻撃を防いだ後に攻撃も仕掛けられるとか個性のある人間でさえムズいぞ!!」

「くつそ…!拳でやってやらあああ!!」

「なら俺も拳一つで決める!!行くぞおおお!!」

ドガアツ!!!

ブオツ!!

「おー…すげー衝撃波。あれは勝負がついたな。」

「ぐっ…!」

「くうっ…やっぱり…ダメかあ…。」

「おめー…無個性のくせにやるじゃねーか…その腕を使わず、おめーの個性のねえ拳一つでなんてよ…。気に入らねーがなあ…!」

「はいそこまでー。艶星は回収して医務室行きな。爆豪はそのまま自主練な。」

「艶星さんは私が運びます。無理してしまうかも知れないのでとても心配で…。」

「分かった。艶星は八百万の肩を借りろ。無理したら縛り付けるからな。」

「分かってますよ…もう少し力量を考えないとなあ…。」

俺は八百万さんの肩を借りて医務室に向かったけれど、身長差があつてお姫様抱っこされるハメになった。

歩けるのに運ぶと言っていたのでお言葉に甘えて運んでもらいましたお嫁に行けません助けてください( )

(この子体が軽すぎますわ…ちゃんと食べているのかしら…。)  
グギョルルル…

「うっ…は、恥ずかしい…。」

「ふふっ、艶星さんだったら本当に可愛いところありますわね♪」  
「か、可愛いなんて言わにや…言わないでええ…。」

(ダメ…この子可愛いすぎて人をダメにする危険生物だわ!)

「それで…お姫様抱っこは恥ずかしいからそろそろ降ろしてくれても…。」

「ダメです、怪我しているのですから無理してはなりません!」

「あっはい。(なんか強く掴まれているから一向に動けない…。)」

医務室に着いたが、リカバリーガール完璧に不在( )

まあそうだよな。治癒させるためだとしても相手のことを考えた方がいいかもだしね。

ちなみに俺と八百万さんの二人だけです。

「…。」

「…。」

「あ、あの…おひとついいでしょうか?」

「どうぞ。」

「女性にナンパされたことありますか?」

「…ほえ?」

「い、いえ…やっぱり聞かなかったことに…! (私ったら一体どういう質問しているのかしら!?)」

「なんか年上にナンパされるかな。よく分からんけど。」

「ええ…。」

「まあ、大体強引に食事に誘われて終わるだけなんだけどさ。」

「逃げられなかったのですね…。」

「うん。個性を使つてでも食事に誘いたかったとかそういうのよくあるし、めっちゃくちゃ困ってるの。ミッドナイトさんにはよく連れ回されるけれどね。」

「ミッドナイト先生と?」

「言つてなかったね。小さい頃からミッドナイトさんによく可愛いがられて色々な場所に連れ回されてたの。今は完璧に変態になってるけど。」

「な、なんか悔しいです…。」

「へ？」

「も、もし私と艶星さんがお互い勝負することになって、私が勝ったら一つだけお願いを言ってもよろしいでしょうか!？」

「う、うん…別に大丈夫だけど…手加減しないでね…?こう見えて結構しぶといって言われているからさ。」

「約束ですわよ!？」

唐突に変わった展開。

八百万さんと勝負することになったらお願い事を一つ聞くということになった。もちろん手加減無しの勝負だけど女の子相手だと絶対に力加減をしてしまうため、どうしようもできねーと思った。

ミッドナイトさん相手なら容赦なく行くけれどなー( )

そして賑やかな授業の時間が過ぎた放課後…。

「じゃ、また明日。」

「ええ、艶星さんもまた明日。」

「あ、峰田君一緒に帰る?」

「おう!もちろんだ!」

「ありがとう。」

「なあ、一つ聞きたいことがあるんだけどいいか?」

「うん、いいよ?」

「萃つてき、女子に弱いだろ?」

「ごふっ!!」

「大丈夫か!？」

「ご、ごめん…クリティカルヒット喰らった…。その通り、女子に弱いんだ…。」

「やっぱりな、萃の表情が分かりやすいぜ?ヤオモモに肩借りてた時の顔真っ赤にしたのオイラ見たんだぜ?」

「峰田君、恐ろしい子…!」

「ミッドナイトとも仲いいのも羨ましいな…。」

「あー…ミッドナイトさんはマジでやべー人だから気をつけた方がいいかな…。あの人めちやくちやドSな上に強いからもう勝てない…。」



「マジかよ！そーいや、どうだったんだ？入学試験さ、別だったろ？」  
「うん、めちやくちや痛くて死んだ。」

「お前すげーよ…。」

「おつと…なんかミッドナイトさんがすっげー顔で手招きしてるぞ…。」

「ウツソだろお前…。」

峰田君と帰宅している途中、ミッドナイトさんがすっごいヤバい顔をしながら手招きしてた。

舌なめずりしているってことを知った瞬間、俺は悟った。

「峰田君、逃げよう。あのマジでヤバいことする。」

「え?」

「萃ちゃん? 何で逃げようとするのかしらあ!? 一緒に帰りましょおお!」

バチン!!

「ひいやあああああ!?!」

「全速後退だア！（海馬感）」

「萃どーなってるんだよこれ!」

「嫉妬深いからよくあーゆーことする人なんだ！とりあえず全力で帰るぞおおお!」

「そーれっ!」

パシッ

「あっ。」

「あ。っ…。ズザザザアア いやあああああ!!助けて (☒

☒) スヤア…」

「か、萃ええええ!?!はっ…! 帰らないとヤバい…! すまん萃! サラダバー!」

「つーかまーえたっ♪私の可愛い萃ちゃん♪」

ミッドナイトさんに捕まりました。

強制帰宅<sup>連行</sup>させられ、ミッドナイトさんの家に放り込まれた。

亀甲縛りをされて宙に浮いたまま俺は起き、どうしようもできない状態でした助けてください ( )

「ぶえっ。」

「お仕置き好きよね？」

「無理矢理俺をお仕置きしているのに、無理矢理好きって言わせにやいでくdギユムツ もんにゆ。」

「お仕置きはキスでいいかしら？」

「やだ。」

「他にあるとしたら腹パン20発、鞭打ち30発、ビンタ30発、首絞め5分間、関節技20連発のどれかしか無いわよ？」

「まだ腹パンの方がマsdゴツ うぶっ…!!？」

「これを20発よ？耐えられる？」

「ご、ごみえんにやしやい…き、きしゅでおねがいしましゅ…。」

「じゃ、キスを10分間でキスマーク入れるわね？」

「うう…絶対に勝ってやrchウウウ… んむうう…。」

(ほんと…唇柔らかいわね…♪八百万ちゃんと保健室に行ったの目撃して思わず萃ちゃんのお腹に一発入れちゃった…。萃ちゃんは私のもので…を身に染み込ませておかないと…。)

ミッドナイトさんのお仕置きを受け終わって解放されたが、帰るのがめんどくさくなったのでそのまま彼女の家に泊めさせてもらった。

襲われはしなかったが、めちやくちや距離が近くなったり無理矢理一緒にお風呂入れさせられる事態も発生していた。

彼女は俺のことがめちやくちや好きみたいで、こういう行動をとっているみたい。ちなみに歳離れしているが、お母さんと友達なので彼女との血縁関係はない。

「やべ、体育祭の練習しないと死ぬじゃん。」

### #3 個性の相性と突然の展開

「体育祭…どうしよう…詰んだなこれ。」

「艶星さん、よろしくお願い致しますね♪」

「相性的にヤバイやつだああ…。」

「ヤオモモ嬉しそうじゃーん!! 萃ちゃんもガンバだよー! 萃ちゃんを溶かしてえちえちにしたら良かったけれどねー!」

「芦戸さん、それはヤバくないかな…?」

ソッコーで決まった体育祭の対決表。

八百万さんと対決することになった上に、先生と特別に対決することになった。いや待って基準が頭おかしい( )

なんか無個性が先生と勝負するところを見てみたいと言う希望が多くて、それが決まっちゃったみたい。

「ねえ帰っていい?」

「萃、お前死んだな。」

「おい無個性! おめー負けんじゃねーぞ! おめーの強さが分かるからこそ言ってるからな! 根性と気合いでぶっ殺せ!」

「爆豪君…口は荒いけど言っていることは間違いないね。頑張るよ。」

「かつちゃん…やつぱり凄いや。よし、僕も負けないように頑張らないうとー!」

個人での特訓が始まった。

俺はミッドナイトさんと八百万さんの対処方法を探らないと勝機がなく、弱点を見つけないとヤバイ。

本当誰なんだよ俺とミッドナイトさんの対決が見たいって言ったやつ…! あとでしばき倒してやらあ!

「確か、コスチューム無しで対決だから三連装砲は撃てないか…。単装砲か連装砲、機銃に高角砲くらいしか行けないかもな…。」

一方、八百万さんは…。

「艶星さんとの対決では接近戦は免れないですわね…。手加減無しで挑むのであれば、このやり方でやってみるしかないですわ!」

俺の対策をしていた。

ちなみにめちやくちや弱点があるからすぐに八百万さん側の勝機が見えてきた。俺は一切勝機が見えない。

寧ろ絶望しか見えないんですけど( )

「はあああ…どうしよおお…。対策できねええええ！八百万さんって確か材質が分かれば限界まで生成できるんだったつけ…。流石に難しすぎじゃねーかあああ！」

「萃ちやーん！ヤオモモ対策してるのー？」

「あ、芦戸さん「三奈でいーよ！」三奈ちゃん聞こえてた!？」

「うん！めちやくちや聞こえてた！」

「マジか…：あ、そうだ！三奈ちゃん、俺の相手してくれない?!八百万さんと同じ戦い方で！」

「あ、うん。いーよ！だけどエツチな状態になっても怒らないでね！」  
「それどゆこと!？」

昼休みに屋上で八百万さん対策していたことが三奈ちゃんにバレてしまったが、何とかできそうなことを三奈ちゃんに再現してもらうことに。

「だけど注意するべき点は、三奈ちゃんは酸を使うため服がジュンジュワーしちゃうところ。だけど濃度的には服が溶けるほどの濃度にして…いや待って服が溶ける程度ってやばくね？」

「そーれっ！」

「待ってそれって八百万さんの使う技!?いや待てよ…もしかしたら…！三奈ちゃん！そのまま自分なりのやり方でお願いしていいかな?！」

「分かったー！てりやあああ！」

ベチャッ

「ぼじゅっ！」

「あっ…！萃ちやんごめえええん！大丈夫!？」

「だ…大丈夫b目があああ!!！」

「わあああああ！ム○カ状態になってるううう!？」

ハプニングは起きたけれど、三奈ちゃんの攻撃パターンでなんか掴めた気がした。そういえば騎馬戦で勝ち進んだ後にタイマンするみたいだけど、今回はタイマンから始まるみたい。

まあそうした方がいいかもだし…多少はね？

待って、八百万さん対策出来ていない？やばくない？オワタよね？

とりあえず徹夜してでも対策を考えていたらもう遅かった、体育祭当日が来ちゃった。急展開すぎる。

「マジでどーすつか…。」

「艶星さん、負けませんわよ？」

「お、俺だつて負けないからね！」

「萃君…頑張れ！」

「おい無個性！勝つなら勝て！負けるなら動けなくなるまでだ！根性かましやがれえええ！」

「バクゴ―すつげ―気に入ってんだな…。萃はどう攻撃するんだろうか…。」

「萃、負けるんじゃないぞ…！オイラも応援してるぞ！ヤオモモも頑張れ！」

パシッ

「八百万さん、負けないからね…！手加減無しで…いくよっ！」

「それでは…八百万 百 v s 艶星 萃のタイマンを開始する…。始めッ!!」

バラアッ

ポコッポコッ

「へ…？」

「あ、マトリョーシカです。」

「何故マトリョーシカ…。もらつておこ。」

「スキありますっ！」

「ぬおっ!?!…なんちつてね☆64cm酸素魚雷ッ！」

ゴチーンッ!!

「あうっ！い、痛いですわ…。」

「あ…ご、ごめん…大丈夫…？」

「にやり…。」

ギユムッ

「ふにやつ!!」

「身長差で言えば私の方が勝ち!このままやりますわよっ!」

「あっ…や、ヤバ…。」

「や、優しさが仇になってる…。」

「ちっ…やつぱり無個性だから期待した俺がバカだった…!」

「艶星君、戦闘中に優しきは仇となるんだ…。時には必要だけど、流石に優しすぎますよ…。」

八百万さんの罠にまんまとかかかってしまい、ホールドされてしまった。

しかも身長差で余計に出られなくなっているので、動こうにも上手く動けないし動いたらまた捕まるかも知れないしでどうしようもできなかつた。だけど、諦めないししぶとすぎてやかましいって言われたことがあるのが俺だ。

「ま…負けにやいんだからあ…!がぶっ!」

「痛ッ…!ふんっ!!」

ブンッ

「うわあっ!!」

ズザザザ…

「わ、私の腕に噛み付くなんて…ひ、酷いですわ!」

「ごめんって!勝つても負けても何かするからさ!ね?!」

((((あー…弱点分かりすぎるやつだ…)))))

「言いましたね…?それじゃあ…負けてくださいっ!」

カチャッ

「え…?やば…。」

ドンッ!!

「終わったな、あの無個性。」

「やられるだけのタイマンなんて面白くねーな。」

「他のやつのタイマン見たいから早くくたばってくれねーかな…。」

ロケラン用意してたとかやられた。

捕まった時に背後でロケランを創造していたなんて予測できない。

しかも直撃だから俺自身も終わったと思っていたけれど、どうやら

そうはいかなかったみたい。

「ぐううツ…！終わらせねえ…！体が動く限りは勝っても負けても諦めないんだからあああああああああ！」

「自ら右腕を犠牲に…!?!」

「12cm単装砲…!!」

「ううっ…！肉弾戦なら…私も負けませんわ！」

「やっと本気出してきたね…！てりやっ…!!」

肉弾戦が始まった。

お互い不利な状況になっているため、もう投げやりに肉弾戦になっちゃった。ブーイングが来るかと思っていたけれど、めちやくちや歓声が聞こえた。他に見られない戦い方をしているからだね。

観戦席側めちやくちや盛り上がった。

「や、ヤオモモが肉弾戦を?!」

「いや待て！ロケランで一撃喰らったのに耐えてるってどういうことだよ!?しかも右腕を犠牲にしてるとか根性ありすぎだろ！」

「ロケランに耐えられる切島がそれ言うの?!」

「アレこそ無個性の根性じゃねーか…！もつと見せやg…ダメだ、アイツ負ける。」

「かつちやんも分かったの?!」

「見りやわかんだろクソナード！無個性の野郎の動きで見分けがつくだろーが！」

「うん…他にも右腕を犠牲にしたことよって左腕だけだからブレが生じて遅くなってきたる…。」

俺視点に戻る。

「はあ…はあ…おぷっ…。」

「艶星さん…耐久ありますわ…。降参してください…。」

「こ、降参なんて……しない…!」

「それなら…無理矢理にでも…！あなたが軽くて良かったですわっ！」

バシイッ!!

「しまっ…！グイッ うぐうううう！」

「いい加減…諦めなさいっ!!」  
ブンツ!!

「あ…やばっ…。」

謎の布生地で脚を取られ、八百万さんにそのまま投げ飛ばされた。普通なら死ぬくらいの高さだけど耐えることは出来たものの、出血量が半端なくて瀕死になりかけていた。

観客席側も決まったかと思つて静まった。

「はあ…はあ…。」

「ぐうっ…まだ…まだ負けてな…い…。」

「艶星さん…。」

「負け…ら…れない…んだよおお…！無個…性…でもお…！絶対…に…！ヒーローになる……んだよお…!!ヒーローはあ…諦め…ない限…り…！まだ…立てるからあ…!!」

「…艶星さん、あなたの言う通りに手加減無しで気絶させます。優しさが仇となってあなたの思考が一気に崩れたのですから…。その上、その体じゃ私に勝てるでもお思いで？しっかり学んで出直して来なさいっ!!」

バチイン!!!

「あ…。(あーあ、負けちゃったな…だけど色々学べたし…いつか…。)」

ドサツ

「ぶえっ。」「ピツ

白旗振りました。

白旗を振つたまま気絶していて、八百万さんは思わず笑った。その笑う顔が似合うなと思つたまま意識が遠のいた。

ま、結局医務室で泣き崩れて慰められたんですけどね。

「ミッドナイトさんとのタイマン…辞退したいんだけどお…。」

「それなんだけど、急遽変わってNo.5のミルコさんになつたらしいですわ。」

「いやだああああああ!!うさぎさんとタイマン張るなんて絶対無理iiiiiiii!!」



（この年齢になって動物にさん付けするなんて可愛いのではないですわ。）

負けて号泣したのにもっとヤバいことになってまた号泣した。

結局突撃参加してきたミルコさんとのタイムマンになるまで医務室で泣きまくってめちやくちや目が真っ赤になった。

八百万さんに慰められるなんて申し訳なく感じた。

## #4 兎と無個性

「やべえ…ミルコさんとか絶対に勝てないし…!」

俺は今待合室の隅っこでどんよりと蹲ってた。

だってミルコさんが相手とかますますヤバいし、勝ったことすらない人だし。

向こう側の待合室ではミルコさんがすっげーやる気満々になっていて、オーラをめちゃくちゃ感じた。死にたい○

「萃ちゃんが相手かあ…楽しみだなあ!」

観客席側では…

「あの無個性は言葉に力あるけど、タイマンでは力にならねーな。」

「だなwあの無個性を除いた競技とかねーのかよwww」

「他のクラスや先輩方がもう飽き飽きしちゃってる…。」

「これはしょうがないよ…萃君はクラスメイトに手加減無しでも流石に躊躇っちゃうからさ。」

「優しさが仇となってきたね…。だけどヤオモモとタイマンして学んだはずだから切り替えると思うよ!」

俺の話題でなんやかんや盛り上がっていたけれど、飽き飽きしちゃってた。まあ、無個性と個性の戦い方は断然ちがうからしようがないと思う。

だけど、中にはもう一度あの肉弾戦を見たいとか無個性でも立ち上がるのは凄いと褒めの言葉やアンコールを期待してみたみたい。

ちなみに、俺とミルコさんはコスチュームありで戦います。

「YEAHHHHH!!始まったぜええええ!教師vs教師のタイマン勝負!だが、今回はそれだけじゃねー!とある生徒達がこれを見て欲しいとリクエストしてくれたので特別戦をかましてからやるぜえええ!」

「は?」

「え?」

「来たね、萃君…今度こそ頑張つて!」

「本当はミッドナイトが出る予定だったが教師とのタイマンで待機し

ているから、特別戦として突撃参加してきたヒーローNo.5 ラ  
ビットヒーロー・ミルコとド根性無個性・艶星 萃が戦うぜえええ  
!」

「二二はあああああ?!?!」

「マイク先生：俺のこと言わんといてくたせえなあ…。」

「あーあ、言っちゃったな!萃ちゃんと私の勝負を見られるのは本当  
に少ないから楽しませてやらないとね!死ぬ気でかかってくること  
を願うしかねーな!」

「両者登場だあああああ!!」

ビュンツ!! シュタツ

「やほやほー!皆元気にしてるー?!ほら萃ちゃん出て来なー!」

「み、ミルコさん何でそんなに平気で言えるのさー!」

「いーじゃんいーじゃん!ほらピースピース!」

「ていつ。」

プニツ

「ぶあつ?!何するのさー!」

「ミルコさんがそーやるからだけど…。」

「はいはいプライベートのことはプライベートでやりましょーか、は  
いスタート。」

「じゃ、早速先制取らせてもらおう…ねっ!!」

ズドツ!!!

「うぐっ…?!?ごぼあつ?!?」

「やっぱり柔らかいなあ♪…あれ?」

「おえっ…ミルコさん…手加減無しなの…?」

「そうだけど?萃ちゃんでも容赦なくいくからねっ!!…ってひゃあああ  
あ!?!」

「なら俺も本気でやるからね…!36cm三連装砲!」

「あつ、このゼロ距離はヤブドズツ うぐっ!!」

「標的捕獲…角度85度…脚部出力35%…!10cm高角砲!!」  
ビュンツ

「あー不味い…この高さは正に不味いね…。って言うでも思った?」

「え…？ガシッ あ…ヤバ…：…うつそだろおおお!!」

「あんたが真っ先に落ちなあああああ!!」

ブオンツ!!

「うわああああ!!?!」

ドガアツ!!

「がはっ…!!!ぐうっ…：…！右脚…：大破…：背骨…：軽傷…：左脚小破…：死ぬなこれ…：…。」

俺の技でもあり軍艦の装備である10cm高角砲がミルコさんの技で無効化され、逆に俺が喰らうハメに。

え？ミルコさんとは何の関係があるのかって？

ミッドナイトさんと同様に可愛いがられた人で、怒るとめっちゃくちゃ怖い。何回か骨逝ってるし、噛み跡とか酷いもんだよ？

あとは気分でめっちゃくちや撫でくりまわされたり、もふもふさせてくれたりしてる。めっちゃくちやもふもふです。

「やっぱり弱いな萃ちゃんよお！そんなのでヒーローになろうだなんて100年早えんだよ！」

「ム力ついた。俺の本気…マジで出す。」

「死ぬ気なんだ。なら…そのまま逝きなあ!!」

「筋肉質量測定不能、最大出力300%オーバー…：標的補足、砲撃準備…：…！」

「右脚逝ってるのにそれを使うんだな！根性だけはいいんだけどなあ…！」

「これが…俺の全力だああああああ!! 46cm三連装砲・激滅大乱射あああああ!!」

「遅い遅い！もっと早くなつたのかと思つてバキッ うぶっ!!」

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらおらあああああ!!」

観客席側。

「お、おい…：あんなの見たことねえぞ…。」

「コスチューム頼りかと思つていたけれど…：あんなに壊れるまで連続で拳を出すなんて…。」

「萃君の大技だ…！本気をあまり出せなかった原因ってそれだったん

だ…！力加減が上手く行かずにこうなることもなりかねないからだ！だから制限していたんだ！」

「艶星さん…そこまでしていたのですね…。」

「け、けろお…あの動きは素人じゃできないわね…。」

俺は全身を壊す覚悟でミルコさんに大技を繰り出した。

ミルコさんも避けきれずにダメージを負い、体勢が崩れて喰らいに喰らっていった。

だけど俺の技は通用したものの、流石No.5。

俺の腕に限界が来る頃に襲うという選択をしていた。

「とつとと…倒れてよおおおおお!!」

「倒れねーからな！お前じゃあたしに勝とうだなんて到底できないからなあ！あんたが倒れなあ!!」

「いやだ!!でりやあああ!!」

ガッ

バキツベキベキツ

「うぐううううッ!!」

「や、やるじゃん…！けどねえ…あたしを舐めないでねっ!!」

ズダアン!!!

「つがあああああああ!!ガシッ あっ…！」

「とつとと…寝てる!!」

バガツ!!ズダアン!!!ドゴツドガアツ!!!

「本当…相変わらず負けず嫌いなんだから…。」

「あ…うう…！ま…まだ…負けねえ…！俺だつて…負けていられねえんだよお…！」

「ド根性脳筋バカが…！」

「無個性…舐めんなああああああ!!」

ガブツ

「い…っ…!?!」

ダンツ!

「おりやああああああああ!!」

ゴッ

「おごっ…!？」

「うぶっ…ごぼっ…ごはあっ!!ほんと…ミルコさんは強いや…これ…俺は0勝153敗…か…。」

ドシヤツ

「き…決まったああああ!勝者はNo.5ラビットヒーロー ミルコだああああ!」

「萃ちゃん強くなったなあ…。よいしょっと…相変わらず体の部分を壊すなあ…。ミッドナイトが激おこになるのにさ…。こんな勝ち方は納得いかないけれど、いいとこまで成長したね。」

「よ、ちゃんと本気出したのか?」

「あ、イレイザーヘッド。本気出したさ。手加減はしてないけれど、死んだら困るから死なないような技でやってるつもりだよ。」

「ま、その通りにしねーとあんたも終わっちゃうしな。…にしても艶星のやつ…。」

俺は最後の 一撃をミルコさんの顎に拳を入れた。

しかし、ミルコさんは俺よりも筋肉質量が高く硬いヒーローであるため、KOにはならなかった。

だけど観客席側の人達は賞賛の言葉も出ていて、A組のイメージは一気に激変してすげーやつ クラスという語彙力がなくなった勲章的なものももらった。嬉しいよう で嬉しくねえ…(○)

なんか最近相澤先生が俺のことを調べようとしていたのはまた別のお話…。

「あ、リカバリーガール…。俺の体…ヤバいですか?」

「そりゃあねえ…あの攻撃を喰らったり無理矢理限界突破させて体にダメージを入れているんだもの。次もまたこのような無理矢理限界突破するようなことがあるば、艶星君の体は崩壊するよ。」

「やつぱりなあ…。ミルコさん相手にこんなになっちゃうやあキツイよなあ…。」

「萃ちゃん生きてるかー!？」

「あ、優おねーちゃん。」

「なんでミルコにあんな自分を犠牲にして壊れるようなことしてんの

さー！本気で食べちゃうよ!？」

「優おねーちゃん食べないで…。お願いだから唾液まみれにしようとしなくて…。」

「全く…18禁女にも呆れるわ！私の萃ちゃんに色目使いやがってえ…!。」

「おねーちゃんはいつ俺のものになったの？」

「ずっと前からでしょ!？」

「ただの幼なじみじゃなかったっけ？」

「食べるよ?。」

「やだ。」

「じゃあキスして。」

「やーだ。」

「襲うよ?。」

「人いるよ?。」

「…えいつ!。」

「へ?。」

ボフツ

「ん〜ッ♪やっぱり萃ちゃんって抱き枕になるわぁ〜♪」

「全く…おねーちゃんったら…。」

M t. レイコと岳山 優に絶賛抱き枕にされています。

幼なじみです。おねーちゃんと呼んでいます。

俺の周りの知り合いに何故女性ヒーローが多いのかは分からん。

ただ一つ言えるのが、女性ヒーロー強すぎる。

特にミルコさんには勝てない。あの人の本気が強すぎて骨数本持って行かれたもん。ちなみにミルコさんに負けたらめちやくちや頬っぺとかぶにぶにされたり、抱き枕にされます。

めちやくちや絞められて毎回死にかけます。

「萃ちゃん大丈夫k先客いたかあああ!。」

「あ、ミルコ。」

「ミルコさん、どしたの?。」

「どしたのじゃないよ!あたし本気出しちゃったから萃ちゃん大丈夫

なのか気になってさー!」

「そなの?俺は大丈夫だよ。ミルコさんこそ大丈夫なの?」

「いやあ…その…ごめんね…?熱が入ってあんなこと言っちゃったことを反省しててさ…。」

「いいよ、だって俺もそれに乗ったし無個性の人達に自信を持たせられると思うし。無個性代表として俺が頑張らなくちゃ。」

「とりあえずさ…お詫びとしてだけどさ…耳触る?」

「うん。もふもふしたい。」

( ) ( やっぱり可愛い。 ) ( )

この後ミルコさんの耳をめちやくちやもふもふした。

ぴこぴこ動いていてミルコさんがより可愛いと感じた上にすっげーもふもふしてた。身長差は結構あるけれど、ミルコさんはどちらかというとおねーちゃんというよりおねーさんって感じ。

かっこいいし可愛いし強いからかな。

この時俺は気が付かなかったけれど、俺の目標はいつかミルコさんを越えたいという目標を持っていた。



## #5 無個性の暴走

体育祭が終わって数週間、俺達は実技試験に向けて対策をしていた。

学力テストはそこそこな成績。

だが、一番不安なのが実技試験だ。

俺自身の力の制御が上手くいかず、失敗ばかりでクラスメイトから色々なアドバイスをもらいながら練習と対策に励んでいた。

「ぐええ…ちかれたあ…。」

「お疲れ、スポドリいるか?」

「ありがとう、障子君…。」

「…萃、一つ教えて貰いたい。」

「ん?」

「どうしたら…君みたいに強くなれるんだ…?」

「ん…努力! って言いたいところだけど…努力じゃどーにもならないかなあ…。俺は障子君みたいに強くないし、寧ろ君の方がよっぽど強いよ。ちゃんと先まで見えて動いているし、しっかりターゲットを逃していないからさ。俺は全然強くないしまだまだだよ。」

「そうか…だが、君の動きやアドバイスを学ぶことができた。実戦の時は宜しく頼む。」

「もちろん!」

「萃ちゃんすっかり馴染んでるね。」

「そうだね、勇気ある人は無個性でも立ち向かうんだってね。萃つてば本人を動かすね。しかも可愛いし。」

「そうそれ! あの子つて本当は個性あるんじゃないの?!」

「いや、それは流石にないかも。技が拳な上に相澤先生の個性を使っても効果がなかった。つまり真正正銘の無個性つてことだよ。」

「なんか凄いなあ…萃ちゃんが雄英初の無個性ヒーローになるってことだよね? それつてスゴすぎない!」

「スゴすぎるとかそれどころじゃないよ。個性無個性関係なく人々を助ける人こそヒーローだつてことを世間に教えたいんだと思う。あ

の子の目標はそう決めてるんだって。」

「盗聴したんだ…。」

「うん、萃のことも知りたかったからね。」

「襲つてもよかつたんじゃない?」

「反撃されたらどうしようもなくなる!?!」

「大丈夫だよ? 萃ちゃん、結構力加減分かってきてるようだし。ほら!」

「出力30%、12.7cm連装砲ツ!…あつやべつ!」

ドゴオツ!!

「あちやー…直前で暴発とか力加減つて難しいなあ…。」

「ごめん、前言撤回。」

「まあ、戦闘時のみしか使わないから大丈夫でしょ。」

「だね!」

(萃君、デク君の個性に似てるけれど違うもんね。だけど凄いなあ…。うちも頑張らんと!)

「萃ー!俺と相手してくれるかー!?!」

「もつち!切島君!」

女子達は話をしつつもほんわかした空気を醸しながら訓練に励んでいた。俺は切島君と訓練、さっきは障子君とやっていたが交代交代でやることになった。

対策と技術向上だな。

お互いにどの点が苦手でどの辺りが上手くないかアドバイスを返しあつたり、苦手克服とか色々しまくった。めちやくちや頑張った。

そしてその夜…。

「疲れたあ…。」

「お疲れ様。皆どうだった?」

「俺は弱点まみれ。」

「僕はまだまだかな。」

「オイラは…自信ねええええ!」

「皆色々対策しないとイケないからなあ…。バクゴーはどーだ?」

「あ？俺なりにやっつてらあ！文句あつか!?」

「ええ……(困惑)」

…とまあ皆様々な返答だった。  
ちなみに寮で暮らしています。

数ヶ月程経って寮が完成してヒーロー科1年A組メンバー全員分  
入れた。

もちろん皆入っています。

男子棟と女子棟に分かれているのだけれど、俺は何故か女子棟に…  
なんでだよおおおおお!

「ねえ誰か俺の部屋と変わってガツ もごっ!?」

「はいはい萃ちゃんはお部屋に戻ろーねー!」

「あああああああ…!」

「行っちゃった…。」

「か、萃のやつ…羨ましいぞこんにやろおお…!」

「だけど萃君は大変らしいよ?彼曰く、よく質問責めされたり癒し系  
に使われているんだって。」

「くっ…!俺もアイツみたいになりたかったぜ…!」

一方、俺氏は。

「ねえねえ。」

「なーに?」

「なんで俺が女の子の格好を?」

「いーじゃんいーじゃん!ヤオモモー!萃ちゃんにこれ似合うよねー  
!?!」

「とても素敵ですわね♪艶星さん、他にも沢山ありますから!」

「ふええ…こ、困っちゃうよお…。」

『続いてのニュースです。午後6時頃、都内で敵による無差別襲撃が  
発生しました。容疑者は逮捕されておらず、今も捜査は難航している  
模様。』

「ねえ、この襲撃のニュースって何かおかしくない?」

「そうかしら?私から見るとそんなに変わっているようには見えない  
わよっ。」

「萃君、急にどうしたん？」

「その…普通ならヒーローと協力して捜査を続けています的な発言だったのに、今回は捜査だけだった。このアナウンサーは必ずヒーローと協力してゝ的なことを言うのに、今回はそれが無いんだよ。」

「読み忘れではないの？」

「このアナウンサーの読み忘れはありえないかも。読み間違いや読み忘れは絶対になかったと記憶に残ってる。」

「つまり…？」

「ヒーローによる捜査は行われていないってことだね。危ないなこれ。」

ドゴオオン…!!

「きやあつー！」

「なんじゃ!?!」

まったりしていた俺達が住んでいる寮に突然の敵サイラン襲撃。

しかもなんか脳ミソ丸出しのやべーやつが数体、コスチュームもな  
い上に皆少し慌てている。

夜だからこそなのだろうか、その油断によって隙が生まれてしまっ  
たのかも知れない。

「おいおいおいおい…！なんだよあの脳ミソ丸出しのやつは！」

「とにかく皆避難しよう…！誰か先生方を呼んで！僕達がこの場で抑  
えてるから！」

「お、俺もやらないと…！（だけど個性のない俺はどうしたらいい…？  
足を引っ張るんじゃないのか？個性があつたとしてもあの脳ミソ野  
郎達に勝てる算段はあるのか…？寧ろ敵の方が優勢サイランになっ  
ていないのか…？）」

「G A A A A A A A！」

「萃君！危ない！」

バキッ

「ぐあつ!!」

「い、出久君!!」

「萃君…早く…先生に…！」

「だ、大丈夫…飯田君が全力で伝えに…あ…。」

「おまえ…：ヒーロー…：じゃない…：！殺す…！」

「に、逃げるんだ…：…！」

「いやだ…：逃げたくない…：…！」

「今のままじゃ…：君は壊れるんだよ…：!?」

「俺の体よりも…：自分の体の心配をしてよ…：。俺だって逃げたいよ…：

！逃げたいけれど…：仲間がやられている姿を見てさ…：ギョロツ 悪

意のある敵を殺らねばならないんだよなあ…：!!」

「か、かな…：め…：君…：…：!?」

俺は禁断の箱を開けてしまったのかも知れない。

決して触れてはいけないもう一人の自分。

仲間、家族、友人が傷ついてしまった時に出てこようとするとても

危なっかしいもう一人。

俺はこう呼んでいる。

もう一人の自分 悪殺し。

「標的、敵…：殺意、殺気等の感情のみ。ヒーローの命に危険あり、奴

らを殲滅する。設定変更、殺戮形態に入る。…：…：ひやあつはあああ

ああああああ!!」

「!?」

「おい萃！いや…：動きが…：動きが萃の動きじゃない…：!?」

「くきききききき…：うちのシマあ…：荒らして楽しいかあ？」

「GRRRRRR…！」

「答えるつもりはねえようだなあ…：なら…：…：殺す…：!!」

バツ

「お、おい…：アレは本当に萃なのか…：?!」

「違う…：萃君じゃない…。」

「似てる…：俺のダークシャドウの暴走に…：…！」

「力…：カヲもつと…：！もつと…：強イヤツを…：…！」

「貴様にやあ生きる価値やあねえんだよ！クソつえーやつに勝とうな

んぎ…：6兆年はえーんだよクソゴミがああああああ!!」

「なんか口がすつごく悪くなってる!？」

「月の審判 大鎌!!」

ズバツ

「チ…チ…カラ…。」

ドシヤツ…

「力を求めるなら…俺達に勝つてからにしろ…。生ゴミが。」

「SYAAAAA!!」

「てめえは死ぬ。」

グシヤツ!!!

ピクピク

「悪い遅くなつちまつ…た…何だ…これ…。」

「おい無個性!その勢いで潰しにかかれ!」

「言われなくても分かってらああ!シマを荒らした生ゴミ共をぶつ殺す!!!」

「UGAAAAA!!」

「な、何…あれ…?艶星さん…?」

「艶星君!先生が来たから戻りたまえ!」

「不味いな…飯田、艶星はヤツらを殲滅することに夢中で声が届いていない。悪いが、飯田は芦戸達と一緒に緑谷達を安全なところに頼む。俺は敵をやる。艶星はその後だ…とは言いたいがもう終わったようだな…。」

「はあ…はあ…つ、疲れ…た…。うぷつ…気持ち悪い…。」

ドサツ

「こりや派手にやったなあ…。」

俺はその後の記憶は覚えていない。

医務室に運ばれてそのまま部屋で看病されていたらしい。

相澤先生曰く、暴走したままずっと敵と戦っていて抹消しようとしても変わりがなかったとのこと。

他の先生方は無個性であるの暴走はありえないと言っていたのだが、カメラではつきり分かっていたため理解してた。早い。

どうやら、俺が派手に殺った奴らは脳無と言われている厄介者らしい。

「脳無か…そーいや個性が複数出てきていたな…。」

「艷星、お前覚えてるのか？」

「まあそこそこですけど…。一応危なっかしいもう一人の俺でも記憶ははつきり残るんで。」

「二重人格か。」

「ぎっくり言えばそうですね。」

「とりあえず…複数の個性が出てきていたのはどういうことだ？」

「舌を伸ばしたにも関わらず、目からビームかましていました。あとはなんか念力みたいな何かですね。力でねじ伏せしましたが。」

「お前…本当に壊れるぞ。」

「そうですね…流石におねーちゃんにもこんな姿見せられん…見られてたわ。」

「とりあえずお前は危なっかしいからミッドナイトをお前に付ける。暴走したら強力な眠り香を使ってもいいように言っておいたからな。」

「そうしてくれるとありがたいです。」

暴走しないように18禁ヒーローならぬ俺限定セクハラヒーローミッドナイトさんが付くことに。

また面倒なことになりかねないけれど、暴走しないだけまだマシだと感じた俺でした。

ちなみに夜はめちやくちや抱きつかれて眠れませんでした。

髪めちやくちやもふもふでした。

## #6 謹慎とお掃除と盗撮

「謹慎喰らった。」

「そりやそうだよ萃…あんな派手でヤバい暴走すると流石に問題視されるよ…。」

「うわあああああん！萃ちゃんが謹慎だよおおおお！」

「とは言ってもお掃除や片付けくらいですわよね？」

「お掃除は結構ミッドナイト先生が厳しいらしいわよ。」

「萃君かなり根性必要みたいだね…。」

「お仕置きだけは勘弁だから頑張ります…。」

「行ってくるねー！」

「それじゃ萃君、行つてきますー！」

「行つてらっしゃーい…。」

「いい友達持つてるじゃないの萃ちゃん♪」

「俺の服の中から出てこないで変態。」

「おねーさんに向かってその口なんてひつどーい！キスしちゃうわよ？」

「するならすればいいじゃん。」

「…気にしてるのね、あの襲撃のこと。」

「そりや気にするさ。気にしてないなんて言ったら金属メンタルでしよ。」

俺達は一昨日、突如現れた脳無と言う脳ミソ丸出しなクソ敵サイランの襲撃に遭つてひとまずは無事に済んだ。

だが俺の暴走によって俺は要注意人物として問題視され、教師の中で一番関係深いミッドナイトさんが見ることに。

暴走したら濃厚眠り香を送られます。死にます。

「もし、また俺が暴走したらさ…お願い。殺る覚悟で止めていいから。」

「萃ちゃん…小さい頃から本当に変わってないわね。」

「…なんで？」

「平気でそんなこと言わないでほしいの。助ける算段なんて山ほどあ



るし、あなたなんて簡単に止められるわよ。すぐに…ね?」

「どうやって俺を助けたのさ。その傷だつて俺がつけたんだよ?」

「ふふっ…あなたを侮っていたからこうなった…その油断でこうなつたは私よ。」

「だけど、俺が本気の暴走だけは本当に殺る気で止めて。敵はサイランどうでもいいけれど、俺の初めてできた友達や仲間、ヒーローを傷つけたくない。だから…お願い…。」

「分かったわよ。あと、すぐに泣くのはやめなさい?男の子なんだから、強くなりなさいよ。」

「な、泣いてないもん!!ただゴミが目に入ったただけだもん!」

「ほら泣いてる。その口調で分かるんだから♪抱きついていいから来なさい?」

「…:うん。今日だけはおねーちゃんって呼んでいい?」

「本当、甘えん坊ね♪おねーちゃんって呼んでいいわよ♪」

俺は少しの時間だけミッドナイトさんに抱きついた。

甘くていい匂い、癒し効果のあるラベンダーの香り…これは眠気が来るわけだ。

ソファの上で少し寝ちゃったけれど、掃除をパパツと終わらせて食器等を洗い終わらせた。お風呂掃除が一番疲れたかな?

「っ、疲れた…。」

「ふふっ♪お疲れ様♪ちゅーしてもいいかしら?」

「や、やだよ…おねーちゃんにされるとなんか恥ずかしいもん…。」

「可愛いなあああああ!」

「襲うのはやめて。」

「キスだけしたい!」

「うう…わ、分かったから…その…舐め回そうとするのはやめてくれない…:かな?」

「じゃあちゅーするね!!」

「ちよつと待つてぶええ…。」

欲のセクハラヒーロー ミッドナイトさんは今日も元気です。

ちなみにめちやくちや襲われるけれど、勉強とかちやんと教えてく

れて凄く頼りになります。寝たらガチビンタ喰らうけれど。すつごく痛い。

そして夕方…。

「たっだいまー！萃ちゃん寂しかったー？」

「しーつ…。」ヒョイヒョイ

「あつ寝てる…可愛い〜♪（小声）」

「どうしましたの？」

「（小声） 見て見て！萃ちゃんの超貴重な寝顔！すつごく可愛いよ！」

「おお…可愛い…。写真撮っちゃお。」

「わ、私も一枚…。」

「んっ…パ…パ…：…マ、マ…。」

「撮るのやめようかな…。」

「にへえ…しゆきい…。」

「やっぱ撮るツ!!!」

カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ

「女の子に人気ね萃ちゃんったら…。」

「先生は撮らないんですか？」

「大丈夫、撮ったから☆」

「おお…萃君の寝顔…！めっちゃ可愛えやないか…！」

「癒されるわね♪頬も柔らかいし触れる機会があつてよかったわ♪」

「萃ちゃんめちやくちや可愛いじゃーん！すつごくなでなでしちゃうもんねー♪」

男子達が学校から戻って来てからも女子と同じような感じになった。

ミッドナイトさんにずっと膝枕されていてあまり動かなかった。

ちなみに女子達で交代交代で膝枕されていたのには全く気が付かなかったでございます（）

「ふにや…？？」

「おはよ、やっと起きたのね？」

「うん…今にゃんじ…？」

「20時過ぎよ？」

「あ：お風呂入れてなかった!!」

「大丈夫、私が入れておいたから。」

「ごめんなさいミッドナイトさん：。」

「大丈夫よ、可愛い寝顔に免じて許すから♪」

「うう：その：お詫びにはならないけれど：一緒に寝りゆ？」

「寝るわよ♪抱き枕にして涎まみれにするからね♪」

「ごめん、やっぱり床で寝る。」

「やーだー！萃ちゃんと一緒に寝ないと落ち着かないー！」

「全く：可愛いじゃないか：！」

チラア

「おほお♪イチャイチャしてますなあ♪」

「可愛い：私も艶星さんのような子が欲しいですわ：。」

「ヤオモモ、あの子奪っちゃう？」

「ず、ズルくなりますが：奪いたいです！」

「それじゃー拘束具を大量生産だー！」

ドルドルドルドル：

俺は気が付かなかった。

女の子達が俺を奪うということに：。

ちなみにミッドナイトさんの他にも優おねーちゃんとミルコさん  
にでさえ襲われています。R15な意味で。

んで、謎の音の正体はすぐに判明されるです。

「ふわあ：お風呂入りゆ：。」

「一緒にいる？」

「やーだ、そもそも異性同士で入るのはダメなんだけど：。」

「小さい頃は一緒に入っていたのに、もう入れなくなるの？おねー  
さん寂し〜！」

「本当、甘えるのだけはベテランだわ：。」

「だけって何よ。」

「とりあえずガツシリ掴んで離さないならもうしようがないな：。一  
緒に入りましょ。」

「ふふっ♪ありがと♪」

「だけどタオルはして。」

「むー…分かったわよ…。」

「分かったからと言って俺の胸を触らないでセクハラおねーちゃん。」

「あ、バレた?」

「モロバレ。」

チラア

「盗撮準備OK?」

「こっちは盗聴準備大丈夫。」

「マジックミラーなのがすごいね〜♪」

「あ、来たみたい。」

ガララッ

「!!?!」

「ミッドナイトさん、なんで俺を抱き抱えるの?」

「可愛い上に女の子みたいにタオル巻いているからでしょ?」

「誰のせいで胸を隠さなきゃいけないなくなったんかなあ?」

「いいじゃない♪萃ちゃんなら女の子になっても大丈夫でしょ♪」

「何さそれ…。」

盗撮されていることすら気がつかず、そのままシャワーのところにぽすんと座って洗い始めた。

ちなみにミッドナイトさんからどんなに距離を取ろうとしてもめっちゃびったりついて来るので諦めています ( )

「ふおおおおお…萃ちゃんの裸…しゅげええ…!」

「艶星さんなんて綺麗なお肌…!はわわわ…全身が…全身がああああ…!」

バタッ

「ヤオモモおおお!!!」

「萃ちゃーん♪洗ったげるよー?」

「ひゃあっ!?!ミッドナイトさんちよつと恥ずかしいから見ないでおお…!」

「可愛いわねええ〜♪ほらほら頬っぺぶにぶに〜♪」

「もんにゆうう…ひやめへええ〜！」

「こ、これはなんて言えばいいのか分からないわね…。可愛いらしいというか大人っぽい絡みみたいなの…。」

「こりやたまらんわあ〜、鼻血が止まらん…ティツシユくれへん？」

「あれ？透は？」

「さつき突撃していったよ？」

「んなっ…!?!」

チャプツ

「あゝあゝ、生き返るわあ〜、」

「萃ちゃん疲れて寝てたわよね♪盗撮とかされないように気をつけるのよっ。」

「寝顔盗撮したんだ…。」

「どうやら、他の子にも見られているみたいだけどね？ほら。」

「へ？」

「やほー！」

「きゃあああああああ?!?!透ちやあああああん?!」

「てへっ☆」

「ふええん…お嫁に行けないよおお…！」

バシヤンツ!!

「ぷくぷくぷく…。」

(か、可愛い…ツ！)

透ちゃんに裸を見られて泣きました。

ちなみになでなでされてなんか落ち着きまみた。

上がった時には俺は体が真っ赤になるまで入っていたんで逆上せまみた泣きたいです。

「の、逆上せたあ…。」

「はいアイス。」

「ありがと…んで、なんでアイス一つだけなん？」

「萃ちゃんに口移s「ていつ！」ベシツ 痛っ！」

「アイス食べていいから寝かせて！ミッドナイトさんほんとスケベす

ぎるよ!？」

「なんでさー!大抵の男の人はご褒美じゃないの!？」

「ご褒美かも知れないけれど俺からしたら罰ゲームだよ!クラッ  
うっ…。」

ポスッ

「間接キスは嫌い？」

「ぎ、嫌いじゃないけれど…そういう問題じゃ…:はむっ。」

(可愛いなあ〜♪こーうやると楽しくて萃ちゃんをもっとからかいた  
くなっっちゃうのよね〜♪)

ナゲテ…

「ふあ。」

「私の娘にしたいわね♪」

「俺は男なんだけど…。」

「男の娘でしょ?」

「漢字が違うけれど…実際そうさせられてるのもあるから何も言えな  
いや…。」

チラア…

「うう…:羨ましい…:!なんであんなにイチャイチャしているの〜!  
最高に尊いんだけどー!」

「奪えはしませんでしたが…:盗撮で奪うことができましたので、私は  
満足してますわよ♪」

「むう…:しようがないや…:次ある時は奪っちゃお!」

「諦めないのですね…。」

謹慎は少し続くが、俺の謹慎生活はこんな感じになるようです。

平和な日常ってなんだろうなあ…:

18禁おねーちゃんもいるしセクハラするしで彼女はやりたい放  
題だからちよくちよく反撃はするけれど敵わないしどうしたらいい  
んでしょうかねえ…:(

ちなみに寝た瞬間に襲われたと思ったけれど、抱き枕にされただけ  
でしたいい匂いしてました。

## #7 謹慎明けからのインターンシップ初日早々の出来事

「謹慎明けから終わったわ。」

「ミルクとインターンシップとか羨ましいじゃんか!」

「あのNo. 5のミルクとインターンシップだなんて…! 体育祭以来じゃないかな?」

「いや、俺は嬉しくない…。」

「どーしてだ?」

「ミルクさんもミッドナイトさんと同じように可愛いがられた挙句、彼女とは違ってキツく扱われたからさ…。」

「お前にうってつけじゃねーかよ無個性。シバかれまくってインターンシップ明けに勝負しろ!!」

「マジすか( )」

インターンシップが始まる季節が来た。

俺はミルクさんのいるところで始めるのだが情報提供が早すぎるせいか、俺が来ることによってミルクさんがめっちゃ燃えてるみたい。

北海道産の人参沢山持っていこ。

そしてインターンシップ初日から事件発生した。

「迷子になったー!!」

初日から迷子になりました。

ちゃんと連絡して待ち合わせ場所に来たと思ったら全然違う場所に来た。はりきり過ぎた。

ちなみに人参いっぱい持って来ちゃったのでめっちゃくちや焦ります。

「どうしよう…人参いっぱい持って来ちゃったから時間内に目的地に行かないと…。」

「萃ちゃん、どーしたのっ?」

「ま、迷子になっちゃってミルクさん!」

「そろそろルミって呼んで欲しいなー!」

「だ、だってー!」。

「とりあえず早く行くよツ!」

「ちよつ…ちよつと待つてビュンツ!!! ひゃああああああああ!?!?」

「本当お前は高いところダメだな! 飛ばすぜええええ!」

「いいいいいやあああああ!!!」

ミルコさん宅に着いた。

「も、もう立てないよおお!」。

「全くよ…ほら、肩貸してやるから…つてお前小さいんだつた。」

「し、しようがないじゃん!」。

「とりあえずお前は修行だ。高いところに弱い上に力の調整ができて

ねえ。明日から敵<sup>サイラン</sup>潰しに行くよ!!」

「分かったよ…。てカルミ姉つて本当に事務所持たずにやってるんだ

ね…。ちよつとびっくり。」

「ま、ゆっくりしてな。…んで、その鞆はなんだ?」

「人參。北海道産だよ。」

「マジで!?くれ!!」

「そんなにがつつかなくても…はい、いっぱい持って来ちやつたから

大変だったんだ。」

「さんきゅーな萃ちゃん! 冷蔵庫にぶち込んでいい感じに冷やしてか

ら食べるわ!」

(ルミ姉めつちや可愛いんだけど…)。

耳をめつちやぴこぴこ動かしていた上にすっこいるんしてた。

すっげー可愛い。

事務所を持たないからこそその自由だとは思うけれど相澤先生曰く、

ニュースを見て飛んできたりするらしい。

特攻隊隊長か何かなの?

「てりやつ!」

「へあ!?る、ルミ姉!」

「ぶにぶにしてがるなあ! 食っちゃまうぞ!」

「ちよつとそれはダメでしょ! ミッドナイトさんと同じくなくなつてガ



ブツ　　「ブツ　　いってー！」

「あんなのような可愛いやつがそのまま居られると思ったか？」

「ぶえっ。」

「発情期が来た時は…よろしくな☆」

「や、やめろー！それだけはやめちよくれえええ！」

「お前あんなに乱れていたのにまだそんなこと言うのか!! そうなればもっと墮としてやるよー」

「まずこれは18禁じゃないから！R15だからその発言控えて！」

「メタ発言やめろバカ！犯すぞ！」

「大胆に脅迫したよこの人!!」

ルミ姉怖い。

ただそれだけ。

ウサギさんと同じように発情期が来るのだが、この人はめっちゃくちゃ凶暴になる上に俺にしかターゲットを捕えるからやばいんです。

発情期に入ったら逃げないとやばいし捕まればやばいしで俺の心と体に危険が及んでいるのです。その時期だけは戦争が起きます

○

ナデナデ

「ルミ姉、いつまで俺はこのままなん？」

「いいだろ別に、可愛いお前は捕食される側だろ。」

「ルミ姉には一生勝てねえや…。」

「だけど久しぶりかもな、お前とこうやっているのはさ。」

「ま、まあね…。」

「そーいやミッドナイトにも襲われているらしいじゃん。」

「ぶえっ。」

「ま、お前のことだからしやーないだろ。」

「うう…だつてあの変態姉さんは眠らせてくるからよく襲われてるんだもん…。」

「ドSの変態だからなあ…。萃ちゃんの怖がる顔が好きみたいだからな、分からなくもねーよ。」

「ルミ姉だつてドSじゃん。」

「うっ…それは言い返せない…。」

「ねーねー、暇だから見回り行こーよ。ついでに買い物もしたい！」

「相変わらず可愛い喋り方だなあああ！襲うぞ！」

「襲わないで！」

なんやかんや平和です。

喧嘩する時はルミ姉のサンドバッグにされるけれど、必ず何かで仲直りする。買い物で好きなものとか買ったりしてプレゼントしたり、レストランで好きなものを注文してあげたり…あれ？これ付き合っているようなものになるじゃん??!

「本当の姉弟みたいだねルミ姉。」

「だな！お前のような弱つちいやつの面倒とかはめんどくせーけど、お前みたいな性格はめちやくちや楽だ！」

「わあゝ、素直すぎるうゝゝ」

「なあ、もしきアタシが敵に襲われてぶっ倒れても暴走すんなよ？」

「…分かった、暴走しない。んで、何でそんなはなsドガアアン!!!!

どううえええええい!?!」

「こういうことが起きたからだなっ!!」

バキッ

「GRRRRR…」

「ちよつと待てやー！何で脳無がいんのさー!!殺るしかねーじゃん！」

「あの脳みそ丸出しのやつか。どんなやつか知らねーが、蹴ってみりや分かるな。」

「ルミ姉気をつけて！コイツら複数の個性を使ってくるから！てか、俺も加勢する！」

「萃ちゃんはまだ出るな！アタシの手本見せてやるから…なッ！」

見回りがてら買い物をしていた中、突然現れた脳みそ丸出し君。

また数体出現してムツカーした俺。

ルミ姉と一緒に戦うつもりだったが、まずは戦い方を見て学べと言われて頬を鷲掴みしてめちやくちやぶにぶにされた。

「おらあああああっ!!」

ベキヤツ

「うがあっ!!」

「まだまだ行くぜええええ!!」

「る、ルミ姉すげえ…俺には見せなかつた暴れ方をしてる…。しかもちゃんと着地点を把握してる…。」

「くたばれえええ!!」

「G A A A A A A A!!」

「ルミ姉避けて!!」

ドスツ

「うっ…!?!」

「る、ルミ姉…大丈夫!?!」

「急所喰ら痛え…普通こんな喰らつても立てるけれどなあ…。先輩として、世話係として萃ちゃんに情けねーとこ見せちやつたな…。この程度じゃ死なねーけどな!どーやら萃ちゃんともう一人の萃ちゃんの出番だ!悪いけど、運んでくれない?アキレス腱もやられた。」

「そう言われなくても分かってるよ…本当、無茶しやがる…。ルミ姉、申し訳ないがこのままで居てくれないか…?俺の体が抑えきれねえ…ギョロツ 殺るしか…ねえ…!殺す…!!」

「G R R R R R R R…G A A A A A A A!!」

「通常設定から緊急変更、殺戮形態に入る。月ノ裁判 絶葬。」

ズブツ

「G A : a A a A A A a a a A A a!!」

「…死にな。」

ズビヤアアア…!!

「うっわあ…派手にやったなこの子。」

「狩りの時間じゃあああああ!!!」

「ちよつと待つてあの子萃ちゃんじゃないの!?!」

「あ、ミッドナイト。悪い、脚やられてあの子のあの子が抑えきれなかった☆」

「ミルコのバカー!あの子ヤバくなってきてるのに何してくれてんの

「さー!!」

「え、マジっ?」

「そーなのよ!?あの脳みそ敵が初めて出てきた時なんてもーヤバいのよ!?あの子ったら悪魔みたいに変貌して形を留めていないくらいに殺っているのよ!?!」

「あー…すまん、あの子もうやってる。」

「ひゃああああっはあああああああ!!!」

「……………どうしようもできないわねこれ。」

ルミ姉が負傷したことにより、また暴走した俺。

そして見に来ていたミッドナイトさんにまた目撃され、野次馬もまた俺の暴走を撮影していた。

殺戮形態から通常形態に戻った時にはぶっ倒れてそのまま気を失った。

被害は出ていなかったものの、俺の声が敵そのものに聞こえていて逆に怖がっていて、ミッドナイトさん以外寄ることがなかった。

「萃ちゃん!」

「み、ミッドナイト…さん…?」

「…バカー!これ以上謹慎喰らったら大変なのに!!いくら無個性でもそんなことしたらマズイのよ!?!」

「あはは…笑い事じゃないけれど…:…またお仕置きされちゃうね…。」  
「ほんと、たつくさんお仕置きしてやるから!身も心も私のものにするくらいにしてあげるから!!」

「つたく…ミッドナイトは相変わらず仕置き好きだな…。」

まあ結局、俺はミッドナイトさんにめちやくちやお仕置きを喰らった。

だけどそのお仕置きはただ痛いだけじゃなく、何処か優しい叩き方をしたお仕置きだった。

ルミ姉にもお仕置きという名の頬っぺぶにぶに攻撃を喰らわされた。

これ以上暴走とかさせないようにする為の修行も開始されるが、通常一週間のインターンシップが俺だけ二週間のインターンシップが

行われることになっていた。その理由としては、案の定  
もう一人の自分の暴走やスイッチのオンオフを制限すること。  
エザイルキラ

そこから始まるのだが、ルミ姉はそこだけとても厳しいから頑張ら  
ないと罰として北海道産の人参をまた大量に買わされることになる。

俺はそこだけは負けたくないと決め、二週間インターンシップと修  
行に挑み始めた。

## #8 兎と無個性のはちやめちやな見回り

「萃ちゃん待てやこらああああ!!襲わせろおおおお!!」

「はあ…はあ…いやーだー!!」

遡ること数時間前…。

「ルミ姉ルミ姉!」

「あ?なんだよ萃ちゃん…。」

「あのお店行つてみたいっ!!」

(やべえ…なんだこの可愛い生き物ツ…!)

「ルミ姉?」

「襲うぞ!」

「なんで!」

俺とルミ姉は敵<sup>サイラン</sup>退治した後、見回りがてら買い物再開。俺はなんかすつごいキラキラした目でルミ姉を見ていたらしい。

だけどルミ姉の襲うは恐ろしいものなの。何故かって?

動物に発情期つてあるじやろ?ルミ姉の個性は兎さんじやろ?

発情期が来るとどうなる?襲われます。

毎回めちやくちやられていきます。血縁関係はないから大丈夫だけど、ルミ姉にかなう相手なんざいないから歯止めが聞かない。

止めようとした人もいたけれど毎回首吹っ飛ばされてるの。

「なあ萃ちゃん。」

「にやにー?」モツチモツチ

「襲つていい?」

「やだ。」

「なんでさー!」

「だつてルミ姉強いし勝てないし痛いんだもん。てかなんで俺を襲うの?」

「耐えてくれるやつがお前しかいねーからだな。一応女を襲つてたことあったけれど、やっぱり耐えられないらしいからさ。」

「男じゃなくて女を襲つてたの!?!」

「まーな!だけどやっぱりお前の方がよっぽど締めつけがいいからさ

☆

「ねールミ姉これR15だよ?」

「メタ発言やめろバカ!蹴るぞ!」

「ひえっ。」

ルミ姉が暴走しそうだったのでとりあえずメタ発言。

唯一止めさせる一言ではあるのだが、運が悪ければ襲われる。言わば鬼蛇だ☆

だけどこれは泣く。ルミ姉に襲われて食べられていることを隠していたかったのに大胆にバラシやがった許早苗。

「萃ちゃん、とりあえず頬噛んでいいか?」

「やだ!」

「蹴るぞ!」

「なんでさ!」

「噛みたいのに拒否るからだ!」

「噛まれたくないよ!ルミ姉の痛いもん!」

「痛くないようにしてやるから!」

「頬っぺ持つていかれるからやだ!」

「蹴る!!」

「逃げりゅっ!!」

ガタッ

「待ちやがれえええええ!!」

ビュンッ

「待たないッ!!」

「どりやああああ!!」

ゲシッ

「うみやっ!!?」

「うわわっ!萃ちゃん!」

「げっ:ミッドナイトさん!」

「てことは:ミルコも一緒だね!」

「おらああああ!萃ちゃん捕獲じゃああああ!」

「はあ:やつぱりね:。助けたら言うこと聞く?」

「うぐっ…い、言うこと聞くから助けて！」

「じゅるり…それじゃ、眠らせろガバツ きやああああ?！」

「萃ちゃんに手出したらあんたも襲うぞ！」

「何この子!? どんだけ欲湧いてるの!？」

「ミッドナイトさん後はよろしく!!!」

ピューン

「こらああああ! 逃げるなああああ!」

逃げきれた。

ルミ姉の欲の湧き具合が尋常じゃなかった。怖い。

だけど一つ問題が起きたことは逃げ切った後に気がついた。

「あれっ?…どこぞ?」

迷子になりました。

無我夢中に逃げ回っていたら知らないところに来ちゃった。

ルミ姉とミッドナイトさんがある意味恐ろしいことは理解してい

るものの、ちゃんとくっついていればよかったとちよつと後悔。

気がつけば面倒なことが起きたという負のサイクル ( )

ヴィラン

「敵だあああ!」

「うっそーん…この街治安悪スギイ!」

「街でつえー奴出てこいやああああ!! オールライトいねーのかああああああ!」

「いでで…しくじった…。てか、乳繰りあってる場合じゃなかったな!!」

「眠らせるの失敗しちやった…萃ちゃん何処行つた!？」

「そーいや見てねー! アタシらを見て止められねーからアイツ猫みたいにすぐ逃げちまったんだった!」

「あんたのせいじゃない!!!」

「それは認めるわ!!」

「ルミ姉にミッドナイトさん何呑気に話しながら捕まってるのさあああ!!」

「あ、おせーよ萃ちゃん!」

「あはは…ごめんね捕まっちゃった☆」



「捕まっちゃった☆じゃないわ!!今コイツぶっ飛ばすから待ってて！」

「ああ?コイツ噂の無個性じゃねーか!ぶっ潰してやるよ!!」

ブオンツ

「きやあああつ!」

「おいちよつと待てやあああああ!何処狙ってんじやボケエエエエ!!」

ガシヤアアン!!

鳴り響く金属音と爆発音。

逃げ遅れた上に足が挟まって動けない女性がいて、ピンポイントで車をぶん投げた。俺は思わずツツコ Nonetheless だけれど止めるの結構しんどい。

ルミ姉達は終わったなって顔はしておらず、寧ろニヤツと笑みを浮かべていた。

「無個性は無個性らしくくたばってな!」

「全くよお…本当に何処狙ってぶん投げてんのさ。車を受け止めるだけでも無駄に面倒くさいのによお…!」

「ははっ!やつぱり萃ちゃんやんは萃ちゃんだな!」

「本当、無駄に動きが早いんだから…。」

「こ、コイツ…おらあああああああ!!」

「よいしょつと…とりあえず逃げ遅れた人はもういないんで大丈夫です。あとはやり返すだけなんで。」

「い、いくらなんでも無個性の君じゃ無理だ!…って拳が飛んで来てるって!!」

「粉碎すりやどうかかなりますよ…つと!!」

「二うわああああああああつ!!」

ドオオン…!!

「……へ?」

「20.3cm連装砲ツ…!二連砲撃!!」

ドツドゴオツ!!

「ぐおっ…!?!」

「ふあっ!?あの拳を殴った…!」

「お、おい…アレって噂の無個性のやつじゃねーか…?本当に無個性なのかよあれ!!」

ヒーロー達もびっくりしていた。

無個性は力が劣ると言われている人達がいるけれど、それを目の前で覆したからだ。

ヒーロー達は予想外だったかも知れない。だけど、二人のヒーローは予想していた…いや、完全に分かっていた。

「さーて…俺が行こうと思っていたお店がぶっ壊れたから倍にして返してやるよ!!」

「か、萃ちゃん!コスチュームは!?」

「あつ。」

「アイツ何忘れてんの!?!」

「だってだってー!ルミ姉達が暴れていたせいで予定が早まって俺の楽しみにしていたスイーツにウキウキして思わず一人で普通の格好で来ちゃったんだもん!」

「な、なんだその理由…。」

「俺の前でなーにぺちやくちやと喋ってんだああああ!!とつとくたばr」「お前うるさい!」あべしっ!!」

「」「あつ…。」」

バタツ

「ん?」

「ツツコんただけで倒れちゃったわ…。」

「技名のない殴りだけか!いくらなんでもそれはねーぞ!!」

「その前に落ちるううう!!」

「そーらよつと!」

「萃ちゃん…可愛いクセにかっこいいところあるじゃない…!」

「とりあえずルミ姉も着地できないからそのまま行くよつ!」

「萃ちゃん早くしてええええ!!流石に落ちた状態は着地できねーんだよおおおお!」

「キヤーツチ!!」

ポフッ

「な、ナイスキャッチ…さんきゅーな…。」

ペキッ

(痛え…。)

ツッコミパンチを敵の顎サイランにめがけて仕留めたため、一撃で倒れちやった。しかもドジッて捕まったルミ姉とミッドナイトさんはそのまま落下したが、ギリギリ二人をキャッチしてなんとか済んだだけでもちやくちや痛かった。ガッツリ骨折していたので病院行きました。

「てりやつー！」

ベシッ

「いてっ！」

「萃ちゃん無茶しすぎ！」

「だ、だってー！あのままだったら終わってたんだよ!?他のヒーロー達は救助や避難で手一杯だったのにー！ポンッ んにゃ。」

「ま、お前らしいが…無茶したということで襲うからな？」

「な、なんでー!?!」

まあ色々あつて現在に至るのだ。

ミッドナイトさんにも襲われたけれど、ハグハグされただけだった。

ルミ姉に関しては俺を襲うことしか頭になくて、僕はそのまま全力逃走しました。

「お前がアタシに勝てると思っただかー!?!」

「ぎゃあああ！捕まってチュウウ… んゝむゝうう…。」

無理でした。

ルミ姉に捕まってそのまま襲われた。

えちえちな方じゃなくて俺の唇が襲われたの。

必死に引き離そうとしてもガッツリ抱き締められているから離すことも離れることもできなかった。あの筋肉で離れられるワケないもん！

ルミ姉の力には勝てないもん！

「ふええん…もうお嫁に行けないよおお…。ぐすつ。」

「んじや、帰宅してそのままやるぞー！」

「いややああああ!!」

「お持ち帰りはさせないわよ！私が管理かつ持ち帰りするんだから！」

「なんでそーなるの!?!」

「お礼するって言ってたじゃない！」

「それはするけれどお持ち帰りは聞いてないよ！」

「お礼するって言っていたなら、私の命令に従いなさいよ！」

「それって完全に服従じゃないの!?!」

「ごちやごちや言ってるねーで早くやるぞ萃ちやああああ!!」

「早くインターンシップ終わってええええええ!!」

ルミ姉とミッドナイトさんがいると大体カヲスな展開になる上に巻き込まれる。襲われるのもよくあるけれど、紛れてセクハラも容赦なくしてくるから正直怯えてる。

インターンシップの最終日はもつとヤバいことになりそう ( )

## #9 いんたーんしつぷさいしゅーび

「ルミ姉ルミ姉ー！」

「んー？どしたー？」

「ひまー！」

「見回り行ったのかー？」

「異常なさすぎー！」

「だからって甘えてくるなよ萃ちゃん…困るだろ？」

「だってルミ姉しか構ってくれないんだもん！」

「お前可愛いすぎんだろーが！襲うぞー！」

「それはやだー！」

「はあ!?お前はあたしに襲われるだけでいいんだっつーの！」

「ルミ姉それ酷くない!？」

「うるせえ！覚悟しろおお！」

「ああああああ!!」

朝から騒がしい日常です。

ルミ姉と俺がいる街では敵の出現率が下がり、なんか暇になっちゃった。脳無とかは例外だけど、本当に暇。

なのでルミ姉にめちやくちやかまちよしてた。

かまちよしてたら襲われた。以上！

「このまま終わってたまるかあああ！ってルミ姉待って待って！ヘツドロックはやめトゴキツ うぎやつ！」

「相変わらずアタシには弱いなあ！もしかしなくても力はアタシの方が勝ってるからか？」

「ぎゅうう…。」

「まあいつか…んん？」

『速報です。〇〇市で敵が出現して暴れ回っている模様。ヒーローは苦戦しており――』

「萃ちゃんー狩り行くぞ!!」

ベシッ

「ぶにやつ…んえ…?ちよつ、ルミ姉待ってー！」

相変わらず自由奔放で動き回るルミ姉だ。

ルミ姉の可愛いところつてもふもふしたところもそうだけど、やっぱりこの性格とすぐに飛んでくるところだ。

毎回絞め技喰らわされたりするけれどね…うん、だけどそれがいいっ！

…とりあえず現場に着きました。

「ぐっ…何だコイツ…！」

「オールマイトはここらにはいないか…。ヒーローもそこまで強くもない…消すか…。」

「クソツ…こんなガキにいつ…!!」

「おいコラ離れろおおおお!!」

ドゴツ

「ぐっ…!?!」

ズザア…

「あ、あんたは噂の無個性ヒーロー…!?!」

「大丈夫ですか!?!とりあえず安地に移動して手当てします！」

「チツ…無個性のクセにやるじゃん。」

「あ…予定変更!怪我人はすぐに安地に配置しつつ、敵を捕獲もしくは蹴る!ルミ姉行くよ！」

ベシッ

「痛い！」

「萃ちゃん!アタシに命令するな!蹴るぞ！」

「しようがないじゃん!緊急的なことになったんだから！」

「しよーがなくねーだろ!後で蹴るからな！」

「ルミ姉酷い!!」

「あ…ごちやごちやうるせえ…!無個性…お前から消えろ!!」

「とりあえず俺から相手のようだな!ルミ姉は観戦してて!ヤバくなったら援護求む！」

「わーったよ!とりあえず死ぬんじゃねーぞ！」

「気をつけろ!そいつに五本の指で掴まれると確定で死ぬ！」

「ご忠告感謝！」

敵対心丸出しの敵は俺を始末するようで、俺は闘る気満々に立ち向かった。もちろん勝てる相手ではないことは分かっているが、骨を折ることくらいでやれば何とか撤退はしてくれるだろうとは思っていた。

「だけどやっぱり強敵な敵には通じない。」

ドスッ

「うぐっ…!?!」

「どうした無個性…そんなもんか…?噂の無個性ヒーローは結局雑魚だったってことだよなあ…?」

「へっ…そう言つてな…「萃ちゃん!!」ルミ姉はまだ出ないで!」

「最期に言うことはあるか?」

「まあ…強い相手には強い人がいるってことかあ…。だけど負けないさ!」

ガリッ

「ッ…!!!」

ドゴッ!!

「無個性の全力をナメちや困るわ!」

「てめえ…個性がねえのに個性があるのか。」

「ま、無個性だけどな!!!」

「黒霧、一旦退く。厄介な奴が現れた。」

「もちろんですとも。」

「あっ!お前逃げんのか!!」

「深追いはダメだ!!」

「ええ!?あともうちよつとだったのに!!」

「ヒーローは悪人を捕まえることだけど深追いは違う!自殺行為とか言えないし、今のあんたじゃアタシにできえ勝てないのに勝てるわけないでしょ!」

「うっ…そ、そうだよね…。行動を泳がせてみるよ…。」

「いい子だ。とりあえず逃げ遅れた人がいねーか見回ってみる。何かあったら呼べよ?」

「分かったよルミ姉。」

俺と戦っていた敵が言っていた無個性なのに個性があるというのは理由があった。それはミッドナイトさんとの出会いから始まったからだけど、また別のお話で。

ルミ姉と俺は手分けして逃げ遅れた人の救助や捜索に回って終わらせた。そして俺の知名度はその崩壊敵戦以来、無個性ヒーローの称号(仮)を持つことができた。それと取材がすごい来た。

「質問で申し訳ありませんが、無個性ヒーローさんのヒーロー名はなんでしようか？」

「お、俺…?」

「はい！」

「る、ルミ姉…。」チラッ

「あー…この子はまだインターンシップ中で名前はまだ本名のままで！それと、私の愛弟子だ！」

「ほえっ!」

「愛弟子さん！師匠のミルコは普段どうい感じですか!」

「え、えつと…闘争心の塊?」

「おいこら。」グニユ

「もんにゆ…頬っぺ掴まにやいで…。」

(ふあああああ!!この二人…なんて尊い…!!)

「あ、ヒーロー名今決まったわ。」

「お前もう決まったの!」

「決まるの早いですねツ!!聞かせていただきます!!」

「今日から俺のヒーロー名は…無個性ヒーロー【ラビットシップ】だ!!」

そこからネット記事や新人ヒーローに関するニュースが上がり、コメント欄では名前の由来とかも考察されていた。

当たっていたり外れていたりと閲覧していた俺はちよつと楽しんでいました。もちろんこれは単純すぎてどストリートな由来です。

ルミ姉に似た兔技と俺の技である拳技・総称 艦艇拳に因んだもの。

あと、インターンシップ前にヒーロー名を皆で考えていたけれど全



く思い浮かぶことがなかったのでミッドナイトさんに報告して爆豪君と同じような感じになった。

気がつけばニュースやネット記事に上がってから数日経ってた。

「そーいや今日インターンシップ最終日じゃん！」

「そーだぜ？」

「なんでそんなのんびりしてんの!？」

「だって暇だろ?ここら辺の敵も出なくなっちゃまったんだしょ？」

「ニュースでは大分面倒事になってっけどな？」

「よっしゃ行くぞ萃ちゃん!!」

「待って待ってコスチュームがああああああ!!」

ドオオン…ドゴオオオン…!!!

「だから何でインターンシップ最終日にクソデカ敵がいんのさああああああ!!」

「的がバカでけーから捕獲しやすいだろ!!おら行けええええ!!」

ブオンツ!!!

「いつものやつかよおおおおおおお!!?!」

俺とルミ姉はソツコーで駆けつけた。

クソデカい敵な上にクソデカい的なので顔面クリーンヒットして倒れて元の人間に戻った。

「ただどそこに違和感があった。」

「ルミ姉、この敵…。」

「ああ、これは予想の斜め上をいく面倒事になりそうだな…。」

「個性の類が分からねえ…。」

「複数とかそういうレベルじゃねーなこれはよ！」

「ヒーロー…殺ス…人間コロす…!!」

「うーわめんどくせ!!ルミ姉、これ二人でどうにか出来るよーなもんじゃねーぜ?」

「オールマイトは出張中だから駆けつけるにも時間がかかるから期待はすんなーっかプロヒーローが何人いても闘りきれねーけどな!」  
「とりま避難優先に…ってワケにはいかないようですねおねーちゃん。」

「そうだな！まずはあの拳を…！」

「蹴り／ぶつ壊す!!！」

「でりゃああああああ!!！」

「コスチュームがねえから…このままリミッター解除する!!！」

個性には類がある。

炎系／爆破系／氷系／パワー系etc…だけど、俺とルミ姉と鉢合わせしている敵はクソデカだけどデカいだけではないやつだった。

つまり、個性判別測定不可なものだ。

個性が複数あれば大体判別はつくが、この敵は複数というレベルではないスケールのデカさだった。

もちろん無個性ヒーローは太刀打ちできません！しかもコスチューム置いてきたからね!!

「通常形態維持、標的確認。二隻武装換装、航空戦艦 伊勢、日向…35cm連装砲準備。火力調整…片腕火力、275%!!ルミ姉、このまま蹴ったら避けて!!」

「おうとも!!」

「伊勢型航空戦艦一番艦、二番艦砲撃用意!!35cm連装砲、爆裂砲撃じゃああああああ!!！」

クソデカ敵の拳を破壊したけれど、流石にキツイ。

コスチュームで力の調整をしていたけれど、今現在の最大火力である300%手前のほぼ全力の火力で連打撃を繰り出したものの、両腕が一時的に再起不能になった。

もちろん脚は使えるが、そこまで強くさせていないので雀の涙程だと思っただ方がいいな。

「いってええええええ！両方折れたああああああ！ルミ姉ええええええ！」

「言われなくても分かっているぜおらああああああ!!」

ポーン！

ガコツ!!

「おゴお…!!ヒー…ロー…!!潰ス!!」

俺はルミ姉に合図を送って空高く蹴り上げてもらって、ついでに感

覚でルミ姉は敵の顎に蹴りをぶち込んでよろけさせた。

ちなみに俺の技では通用しないのでたまたまルミ姉と似た技を使おうとしています。敵は結構ピンピンしてるけれど時間かけていられないのでソツコーで倒そうと思います( )

「何処見てんだクソデカ野郎!!俺がいるぞこらああああああ!!」

メキメキメキ…ギギギギ……ギユルルルル!!

「脚力300%…現状限界領域到達…目標確認、回転速度上昇!もう決めちやうわ!!ルナリング・フォールアウト月輪落下!!」

トスツ

「からの月輪直下蹴!!」

「ウがああああああああああああああ!!」

ゴオオオ!!

「倒れるやボケええええええええええ!!」

ドゴオオオン!!ベキベキベキツ!ガコツ!!

「ううっ…どんだけ折りやあ気が済むんだよ…俺は…さ…脚クツツいてええええええええええええええええ!!そして落ちるううううううううああああああああああ!!」

ズズウウン…

スツ

「おめー無理しすぎだろ!!」

「しよーがないじゃんルミ姉!あんなクソデカ敵を延長戦に持ち越したら街全体が終わるんだもん!!」

「まー一件落着だからいつか!!」

「とりあえず病院行きたい!!すっげー痛てー!」

病院行きました。

病院によると、脚は折れたけれど両腕は全脱臼で済んでたらしい。いやいや、あの連打撃をかましといて脱臼はありえなくね?つて言っただけで、俺の体がぶにぶにで柔らかいから衝撃を和らげていたらしい。脚は筋肉の塊みたいなものになっていたので筋肉が硬すぎて衝撃に耐えられなかったとかなんとか…。いやどゆこと?

インターンシップはこれで終わりだけど、ミッドナイトさんにめ

ちやくちや怒られてめちやくちやもふもふさせられて溶けました（

「ルミ姉もふもふしてた。」

「あら、尻尾触ったの？」

「耳。」

「蹴り飛ばされればよかったのに。」

「なんで!？」

「なんでも?!」プイッ

「えー!？」

病院内でミッドナイトさんとお話していたけれど、めちやくちや和んだ空間になってました。なんか嫉妬してるミッドナイトさん可愛い。

## #10 無個性 : らいじんぐ

インタビューシップ明けてから一週間。

雄英高校で俺の話題で持ち切りばかりだった。助けて。

「ぼえー…。」

「萃、脚大丈夫か？」

「あ、焦凍君。脚はまだ難しいかな。」

「テレビで見てたが…普通の無個性じゃできない一撃だろ？」

「まーね…だけどアレは正直結構キツイかな。」

「どういうことだ？」

「あの強さを出すには無理矢理引き出すことによって生まれるものなんだ。人間本来の力の100%を出せば筋肉がボロボロになるんだけどね。言わば火事場の馬鹿力ってやつと同じ。」

「つまり…萃はそれを慣らせたということでもいいのか？」

「そこそこね。今は100%のところが限界かな。」

「ん??」

「どしたの?」

「100%のところ限界ってどういう意味だ？」

「あ、言ってなかったね。俺の場合は現段階で300%まで力を引き出すことができ、痛くならない領域が100%なんよ。」

「な、慣らしすぎだろお前…。300%にまでいくとどうなるんだ?」

「使った場所の衝撃が重すぎて粉碎骨折。」

「お前よく治せたな…。」

「あはは…本当俺でも俺の体にビビるよ。」

「おいこら無個性!!勝負すつぞ!!」

「かつちゃん!?萃君は今脚を怪我してるから勝負できないよ!?!」

「なんだとおお!?!」

「あはは…ごめん爆豪君…。あと数週間待つちよくれ。」

「ちっ…!お前はしっかり完治してから勝負だ!!また期間が伸びたら許さねえからな!?!」

(言葉荒いけれどめっちゃ良い奴やあ…!出久君、いい幼なじみを

持ったもんだなあ…。)

モニツ

「もんにゆ。」

「萃、何暗くなってるんだ。お前は一人じゃねえ、お前のお陰で俺を含めて無個性の価値観を知るようになったんだ。個性無個性であれ、お前はヒーローになるんだ。無個性で唯一入れたんだ。無駄にするなよ？」

「う、うん…焦凍君。それとなんで掴んでるの？」

「饅頭みたいに柔らかいからだ。」

「なんじゃそれ。」

(はっ…！轟さんが艶星さんの頬っぺを…!? 尊いッ!!)

「とりあえず見られてるからそろそろ離しちよくれ。」

「すまん、それと完治したら俺も手合わせしてくれないか?。」

「もっち!。」

俺は出られずにいたが、焦凍君の言葉に動かされた。

焦凍君はなんやかんや人を動かすことができる人間なんだなっと思っただし、爆豪君も口は荒くても言っていることがしっかりしているから不器用って本当は器用な人より器用なんじゃないかなって感じた。

そんで放課後。

「萃君!。」

「どした出久君。」

「教えてほしいんだ!。」

「技はそんなにないけれど…。」

「君の技を教えて欲しいんじゃないんだ!。」

「へ?。」

「萃君ってNo. 5のミルクとインターシップを行ったでしょ?あの息の合わせ方と合図が普通じゃできないやり方だって気づいたんだ!。」

「おうふ。よく気がついたね。目で合図を送っていたら気がついたら二人でできた。」

「あの距離じや目を見ることは出来ても合図が分からないはずなのに…凄いや！僕にも教えてくれるかい?!」

「もっち。だけど出久君は俺にはできない合図の送り方なかったっけ?」

「そ、そうかな…?僕はかつちゃん仲間がいいとも限らないし…。」

「いや、そんなことないと思うよ。爆豪君は思っていることを表に出さないだけだと思う。それに爆豪君の名前が真っ先に出たってことはやれそうってことじゃないかな?」

「そうだと思いたいな…。」

「まあなんて言うんだろ…今後、出久君は爆豪君と絶対に誰にも負けない最強で最高のコンビになると思うよ。俺はそう見えるしそう思ってる。」

「分かった、やってみるよ!」

「ガンバツ!」

俺は友達というものができてよかったと感じた。

だけど不安はやっぱりあって、本当に友達になれたのか?また騙されていないだろうか?という気持ちに追い回されていた。

中学まで無個性だからと言ってハブられたこともあったし、皆よりも弱くて強くなつてなれなかった。

帰り際にそう思いながら寮に着き、おふとうんにダイビングした。

「友達かあ…。<sup>こ</sup>雄英に来てから初めてその概念持ったな…。」

コンコン

「ふあーい?」

「艶星さん…入って大丈夫ですか?」

「大丈夫よー?」

ガチャツ

「お邪魔しますわ…ってなんて可愛いお部屋…!!」

「あれ?見たことあったよね?」

「ええ、だけど模様替えしました?」

「あ、うん。模様替えした。そーいや模様替えした後の部屋見せてなかったね。」

「はわああ…！もふもふしてますわ…！これ何処で買いましたの!？」  
「それ？ネット限定ストアで買ったの。」

ガチャアアアツ!!

「かーなめつちー！生きてるー!？」

「あ…そーいや女子棟だったわここ。」

「今更!？」

ギュー

「もにゆうう…。」

「萃つち抱き枕みたーい！抱き心地が凄くあるー!？」

「芦戸さん!？ず、ずるいですわ！私にも抱かせてください!？」

「もちろんいいよー!？」

「あれ？俺抱き枕にされてる?？」

八百万さんが入って来たり、芦戸さんが入って来たりでわちゃわちゃしてた。ちなみに俺は動けずじまいで思考停止しました。

動こうにも動けないんだもん！

つーか部屋は男子が入れるレベルの距離じゃないし寧ろ女子と女子の間のだ真ん中で二階にあるんです( )

「ね、ねえ?ちよつとすつごい擦くすくりたいよ?もしかしてヤバい匂いしてる!？」

「そんなことないですわ…スンスン…甘い匂いしてますわね…♪」

「なんでそんなに甘い匂いするのー?？」

「そ、それは…分からん!？」

「男子には取らせませんわ!! (大迫真)」

「ヤオモモ本気ヴォイスく!？」

めちやくちや和みました。

それとご飯や掃除は毎週代わる代わるやる形となっていて、今週は俺含む6人ご飯担当になりました。

「今日のご飯何にするー?？」

「すまん、決めてない。」

「俺もだ。」

「あー…あたしも決めてない…。」



「私も決めていませんわ…。」

「僕も決めてなかった…。」

「皆決めていなかったのね…。まあしようがないよね、色々なこと起きたワケだし。とりあえずカレーとかシチューにする？迷ったらこれが一番！」

「「「賛成く!!」」」

「んじや、素材は…っと。結構使うね…。」

緩い感じでご飯を作っていたので周りもすっごい和やかになってた。

もちろん何もしていない。

言うなればアレか、やさしいせかいってやーっだな？

それにしても、耳郎さんの袖クイクイ可愛いすぎて吐血しちやったわ。

そしてわちやわちやしまくった後、就寝時間になった。

「ふわああ…ねみ…。」

「萃っち眠そうだね〜。」

「それもそうですわ。この子も頑張っていましたもの。」

「すう…すう…。」

「あ、寝た。」

「いい寝顔してるなあ〜♪写真撮っちゃおーつと！」

「ぬあっ!?そ、それはアカンと思うんだけどお…?」

「あたし達の秘密ってことにしておきましょう。」

寝顔撮られたことすら知らないまま就寝した。

襲われることなく無事に朝を迎えたのだが、しっかりとオフトウンに入った状態で抱き枕まで用意されてた。

「ふわああ…朝かあ…。皆部屋に戻って寝てくれたのかな？」

バタアアン!!!

「萃君大変やああああ!!」

「いきなりなんざや!?!どしたん麗日さん!?!」

「宣戦布告状が萃君宛に来てるんや!!」

「What!?!」

朝から事態が急変。

一部のナンバーヒーロー達が本当は俺に個性があるのではないかという疑問や疑惑を抱いていたため、宣戦布告を出してきた。

体を回復させている最中なのに唐突な展開に対して俺はフリーズ&クラツシュしてしまい、麗日さんはめっちゃくちやびつくりしてからの悲鳴が出た。

「あー…萃ちゃんまだ回復してねーからなあー…。ま、アイツは回復してなくてもやる時はやるからいつか！見てくつか！」

「ムムツ!? 艶星少年に宣戦布告だつて!? それは大変な事態だ…早く止めねば艶星少年の体が不味いことになる!!」

「これは歯止めが効かないわ…。萃ちゃんには申し訳ないけれど、頑張ってもらえないわね。」

「…こりや止まらねえな。艶星には個性がねえから無闇矢鱈むやみやたらに他のヒーローの個性を消すわけにはいかんな…。」

事態が発生した為が故にクソデカリングが設置されており、俺はそこへ入ることに。

ちなみに休日の朝っぱらからとんでもねーことが起きていたから皆パニックっていた。俺は何故か冷静にはなっていたが、その理由は単純に理解していた。

「俺の実力はめっちゃくちや弱い説ってやつだなこれ。」

## #11 卵の根性と暴走と

「いや〜めんどくさいな〜。」

「私達が近くで見ている、画面越しからでは伝わらない人もやっぱ  
りいるんだね〜。」

「芦戸さん俺への見破りがすごいよ?」

「萃ちゃんに褒めてもらえると嬉しーなー!」

「艶星さん、お怪我は大丈夫ですか?」

「いーや流石万全じゃないね。」

「萃君、僕止めてくるよ!」

「出久君、気持ちは有難いけれど…多分止められない。相手がすつご  
い目で見てる。」

「あつ…(察し)」

「…万全だったらフル稼働は可能なんだけど、どーやら今回はそうい  
かないみたい。」

俺は朝っぱらから唐突に宣戦布告状を受け、クソデカリングが設置  
された場所で待機していた。

先生方もいたけれど止めることができなくて、結局プロヒーローと  
戦うハメになり、先生方は俺に謝罪をしていたが俺自身は気にするこ  
とはなかった。

「さあ始まりました臨時対戦!個性を隠し持っているのではないかと  
疑念や疑問を持った自称無個性ヒーロー ラビットシップ(笑)が今、  
リングに上がりましたああああ!!」

「(笑)を付けんなバカ。」

「この自称無個性に対する対戦相手は〜…コイツだあああああああ  
ああ!!」

「やほー♪ラビットシップの実力が気になって参加しちゃった♪」

「なーんで女性ヒーローなのおおおおお?!?!?こんな意味不な対戦す  
るくれーなら男性ヒーローと戦わせてよおおおおお!!」

「弱点丸見えだなあ…。」

「しかも萃っちが怪我しているからってMt.レディと戦わせるって

どーゆーことよ。」

「つーか…プロヒーローと戦わせる時点で無謀じゃねーかよ…。しかも萃のやつ怪我してんだぞ…?」

「メディアの奴らまでいやがる…。アイツらぶつ殺していいか!」

「か、かつちゃん!それは流石にマズイよ!」

「オイラ…正直結果が見えない…。萃がまた怪我してこの繰り返しだったらずーつと雄英で保健室か病院生活になるぞ?」

「もう見守ることしかねーよ。」

「No. 5のミルク!?どうしてここに!」

「弟みてーなもんだからな。メディアの連中が何を企んでいるのか知んねーが、アイツはそう簡単に斃くたばらねーよ。何をしてもな。」

「あ、あの時…そう言っていましたわ…。立てる限りは諦めない…つて。」

「アイツのド根性、見届けるぞ。」

クラスメイトや他の学年の人達も見ていて、一般の人達も観覧していた。ちなみにそのクソデカリングはどうやって建てたのか分からないけれど、ちゃんとした作りになった。なんかプロレスみたいな作りです。

カアアアアン!!!

「ゴングがなりましたあああ!それでは開始でええええす!!」

「Mt. レイさんと戦うなんてええ…。あーもー死ぬこれ。」

「さーて、実力見せてもらおうかなっ♪」

「早速巨人化ですかい…ヤル気満々ですわねえ。俺終わったな。」

「ふんっ!!」

ゴオツ!!!

「まーヒーローコスがあるから助かるし…やるか…。主砲火力現時点限界300%から限界突破、350%に火力限界上昇…主砲装備、46cm三連装砲から20cm三連装砲に変更し出力限界上昇…!連続射撃じゃあああああああ!!!」

ズドドドドドド

「そんなの痛痒い程度よ…ん?痛痒い?」

「オラオラオラオラオラオラオラアアアアアアアアアアアア!!!」

「待って痛くなってきた…あたたたっ！ちよつと何この子足の腹に集中してボゴツ イヤなところ入ったあああああ!!!」

「はあ…はあ…！手加減したいところですがあ…！本気でやらせてもらいます!!でりやあああああああ!!!」

バゴツ

「くッ!!!脛すねはやめろこのチビツ子!!」

ブンッ

「へ…？ベゴツ!!! ぶいあっ!!!」

ドガアアツ!!!

「か、萃君っ!!!」

「艶星君!!何故だ…！艶星君にだって限界はあるのに…!!」

「げほっ！いつてえ…コスが無けりや終わってた…。っーか今も体終わってらあ…。多分三本は逝ったかなあ…。」

「おく耐久性抜群だね♪だけどこれはどうかなっ!？」

「緊急換装、島風!」

ボガアツ

「あの一撃は終わったな。」

「だな、結局個性持ちのヒーローが自称無個性ヒーローにバフをかけただけだな。」

「Mt. レディに敵う相手なんて巨大敵しかいないだろうし。」

「流星に死んでないよね…？踏み潰しちやったら結構どころかかなり不味いよね!？」

「その心配…ないんですけどね…Mt. レディさん。」

「いつの間に!？」

「10cm高角砲!!!」

ドストドスト!!!

「痛ああああ!!痛いじゃないこのチビツ子!!」

ブオン!!!

「…え?」

俺は死を感じた。

敵でもなく悪の立場ではないヒーローである立場の個性の持ち主による一撃が俺を襲った。

何の防御もできず、俺はそのまま一撃をまともに喰らって表から地面に叩き落とされた。まるで蠅ハエを叩くかのように。

ドガアアンツ!!!

「Mt. レディ何してんの!?!あの大ききで萃ちゃんを強く叩いたら:!!」

「ヤバ!いくらなんでもやりすぎちゃった!!」

「萃君!!!」

「おいコラ萃ええええ!!死んだら殺すぞゴラああああ!!」

一方俺は……。

「……あれ?ここどこだ……?」

「よう、本体俺。」

「もう一人の俺?君がいるってことは……やつぱりか……。」

「死の淵を彷徨っていんだよ。このバカ。」

「あはは……やつと一撃を与えたと思ったら浮いたままMt. レディさんの一撃には太刀打ちできないよ。」

「全くお前はどうかしようもねえ奴だな!こんな茶番に付き合ってくれえなら自分自身めえで主催者を潰せばいいだろ!!」

「もちろんそのつもり。奴らは無個性アンチのバカ連中だからな。無個性の本当の恐さを叩き込ませてやるさ。」

「その意気だ。お前本体が死んだら俺が出て来られねえだろ?」

「だね。それに俺は君には助けられてるな。」

「んなことねえよ。それと、悪いが俺も出るからな。」

「え?」

「奴らのタチが悪いんだよ。プロヒーローを操ってまで無個性を殺ころしたいっつー考えがな!」

「ああ、そのことか。もちろん出て来てよ。常識をぶっ壊してやろうじゃん。」

「一つの体で俺と本体俺が出たらかなりの負担が出るがな。」

「いいさ。何れいずにしろ、直じきにこの体はもう壊れる。」



「……G r r r…ろス…あク…こロス…。」

「ククツ…日本に潜入してからは最高じゃねえか！ここはスパイ天国かよ！日本を乗っ取るのは時間の問題だが…まさかこの計画が採用されるとはnガタツ 誰だ!!」

「てメえ…アク…。」

「ああ…噂の無個性ヒーローだったっけか？ここに何の用だあ？個性持ちの俺様に太刀打ちできるってか？やってみろよ！」

「びース…とモー…ど…ヤ…ツぎ…キ…。」

「八つ裂きだあ？素手でかよw w w 俺様の個性である鉄壁に敵わねえんだvブチツ は…？え…？」

「マズ…イ…サみシ…イ…。」

俺は壊れかけの体を鏡の前で眺めながらそう呟いた。



## #12 意識、暴走、自壊

『続いてのニュースです。昨夜、何者かにより首筋を噛みちぎられて死亡している人がいると通報が入り、警察は現在捜査中です。判明した内容は死亡した被害者は海外からのスパイであり、こちら日本を乗っ取る計画をしていたことが判明しました。』

「萃ちゃん…。」

「ミッドナイトしつかりしろよ！萃ちゃんは帰って来る!!絶対にだ!!」

「帰って来ないわよ…あの子…萃ちゃんじゃない…!」

「…何が起きたか聞かぜ?」

美女説明中…。

「ああ…萃ちゃんが獣のようになってアンタの匂いを嗅いで去ったってワケか…。」

「私臭いかしら…?」

「いや、そういうモンじゃねーよ。まさかな…。」

「どういうこと?」

「あの子な、時々おかしい行動を取ることがあんだよ。匂いを嗅ぐ行動をたまに見かける。」

「…?」

「多分あの子は善か悪かを嗅ぎ分けていると思う。」

「つまり…私の匂いを嗅いだ理由って…。」

「そういうこと。あとアンタいい匂いしてるからな。治まらない暴走でもアンタの匂いで意識が戻れる為に忘れないようにしているか、助けを求めてんだろ。」

「変態なことしかしてないの…?」

「認めてんのかよ。」

ミッドナイトさんの自宅にてルミ姉と話をしていた。

俺がいなくなっただけにより、ミッドナイトさんは凄く裏やつれていてルミ姉は驚いた様子。

「とりあえず見つけ次第捕まえる。あの子はまだまだ未熟でカッチカ

子の卵だ。最善の策を考えておきな。最悪、殺されるかも知れねえからな。」

「あの子はまだ死なせない…。ミルコ、あんたは萃ちゃんをどうしたいの?。」

「私か? 私は萃ちゃんに言われてんだ。あの子が暴走したら殺る気で殺れってな。」

「相変わらずあの子らしくないわね…。本当は弱いのにいざとなれば殺れって…。お説教してやらないとダメね! お仕置きもしてやらないと!。」

「その意気だぜ! んじゃ探しに行つてくるわ。」

ルミ姉は俺を探しに、ミッドナイトさんは対俺用超濃縮催眠弾を作成した。もちろんすつごくバテていたとのこと。

出久君達も暴走した俺を探してくれていたのだがその時の俺は察しがついたせい、道を避けるようになった。

「Grrrrr…チツ…。」

「萃つちー! 出てきてよおおお!!」

「艶星いいい! お前もいねーとバクゴーがまた暴走すつぞー!!」

「萃…! お前は良い奴のハズだ…! 折角お前とも友達になれたのに…!」

「か、萃くーん! 君とまた動物の話したいから早く出てきてええ!」

「……………」

「萃君…一体何処に行ったんだ…! そう言えば、どうしてミッドナイトの匂いを嗅いだんだろう…?」

俺は無意識の中で未だに漂っているが、薄らと意識が見えて来た。

今の俺は俺ではないことはハッキリ分かっていたが、この俺は正しく…敵だ。先程までの行動も敵のような動きだった。

つーか、なんで俺四足歩行になつてんの?

「敵だああああ!! ヒーロー助けてくれえええ!」

「……………Grrrrrrrrr!!!」

シュバツ





「艶星さん!!! しっかりしてください!!!」

「艶星いいいい!! やつと見つけたと思っただら何なんだよお前ええええええ!!!」

バシユツ

「え…?」

「G…A…a a…?」ドツ

「ふう…やつと間に合ったわ…。まあアレを見れば少し遅かったけれど…。」

「ミッドナイト!?!」

「どうも♪全く萃ちゃんったら本当におバカね…。」

「どういうことですか?」

「この子ね、助けてほしいって伝えていたらしいのよ。私の匂いを嗅いで…ね?」

「匂い…あー!」

「そう、この子ったらすぐ抱え込むから…ミルコもたまに萃ちゃんの行動を見てそう伝えられたことあったんだって。しかもこんな体を無理に壊しちやつて…本当お仕置が必要ね。起きたら承知しないわ。」

「ミッドナイト怖い…。とりあえず萃君はどうする?」

「そこは私達が引き受けよう。」

「警察の人まで出動する自体になつてんじゃん!!」

俺はミッドナイトさん特性催眠弾を撃ち込まれたままなので起きるまで何処にいるか分からず、真つ暗闇の拘束部屋に閉ざされていた。

もちろん暴れたり妙な動きをしたらめちやくちや痛いものが飛んでくるみたい。

「やあラビットシップ。気分はどうだ?」

「げほつ…。こ…こは…? ガシヤツ なに…こ…れ…?」

「覚えていないのかい? 君が暴走した記憶。」

「お…れ…びよ…う…いんか…らの…の記憶…あま…りない…。」

「あまりつてことは多少残っているんだね? 分かる範囲でいいから教

えてくれるかい？」

「覚め…た…とき…くる…し…かった…。あし…どさん…危な…  
かつ…た…。」

「ふむ…ミッドナイトとラビットシップのクラスメイトの言っていた  
ことが一致しているな…。ミッドナイトは彼が目を覚ましたと同時に  
頭を抱えながら苦しくもがいて泣いていた…それとクラスメイト  
が脳無という脳みその敵による攻撃を受けそうになった瞬間に身代  
わりになって受けて助けてくれた…。彼の言葉は本当だな。」

「警部、本当ですか？嘘を言っているのかも知れないですよ？」

「無個性だからこそ分かるんだよ。しかもクラスメイトがそう言っ  
ていたんだ、嘘を言っているようには見えない。」

「なるほど…。」

「うっ…。」

「ん？」

「うっ…うう…痛…い…痛…い…あ…た…ま…い…たい…!!あ  
…ううう…!!ぐあ…がああAAA AAA!!」

「まずい…今すぐ看守に伝えるんだ!!麻酔を打たせろ！」

「AAAA Aaaa aaaaa!!」

「ぐうっ…!なんて声だ…!!耳がおかしくなる!!無個性にしてはあま  
りにもレベルが桁違いだ!!!」

突然の頭痛と暴走により俺は叫んだ。

ビリビリと空気が振動し、この部屋の中の人達の耳もおかしくして  
しまうほどの声が出た。

バキィッ!!!

「ら、ラビットシップ!!暴れちゃダメだ!!これ以上暴れてしまえば体  
が持たないぞ!!」

「G A A A A A a a a a a a a a a!!」

ベキヤツバキィッ!!!バキバキバキッ!!!

「くそっ…!看守はまだか!!アクリルガラスが持たない!!」

「コロす…!!コロス!!ヴいらんコロす!!!マっさツスル!!!」

ガチャッ!!!

「警部!!こちらへ!!」

「すまない!!」

ガシャアアアアン!!!

「GRUAAAAAaaaaaaa!!!」

バシユツ

ビスツ

「Ga...!! a...: A a...: A A A a a a a a...!!!」

「くそっ!ヒーローの卵がこんなことあっていいのかよ!!しかも麻酔耐性あるなんて聞いてねーぞ!!強め打つぞ!!」

バシユツ!!!

俺は飛びかかろうとした直前で倒れ、そのまま救護室へ入った。

頭蓋骨には罅ひびが入り両腕は複雑骨折、肋骨は4本折れており、右脚首は完全に骨折、左膝は逆向きに折れていた。

それで立っていられたことにも驚きがあったらしく、俺は過去に事例がなかった超要注意危険人物として監視されることになった。

そして俺は手術はされたものの、暴れられないようにしっかりと四肢を固定させられ、意識を彷徨っていた。

「全く...とんでもない卵を見つけてしまったようだな...雄英高校。」

## #13 優心

「うーわひでえなこれ。」

「もう一人の自分<sup>ラー</sup>はどうしたらいいと思うかな？」

「いやもうどうにもならんだろ。」

「だよね。多分同時に発動しようとしたらなんか知らんけど歪みが生じて暴走しちゃったね。」

「スイッチが大事ってワケかい。」

「そーした方が安全かもね。」

気絶した時に意識の中で俺はもう一人の自分<sup>ラー</sup>と話していた。暴走した俺はいるのかって？

それはいない。暴走した原因は俺ともう一人の自分<sup>ラー</sup>が同時に表に出そうとしたら性格の歪みが生じて意識のバグが起きたとのこと。つまり、混ぜんな危険だクソがってやつよ。

そして意識内の中の俺視点から現実視点にモドール。

「G：rrr…。」

「せっかくの国民が期待していたヒーローの卵でもあり、話題の無個性ヒーローがこんなじゃなあ…。」

「どうやらラビットシップの中のエヴィルキラア？ってやつとの関係があるらしい。ラビットシップは彼をもう一人の自分、キラアと呼んでいるみたいだ。」

「とは言え、そのキラア？ってやつ大丈夫なのか？敵の連中と同じじゃないか？」

「彼曰く、大丈夫だってさ。最初は暴走していたものの、切り替えも上手くできるようになっていたらしいんだ。だけど今回は全く別物が出てきた。獣のような動きで敵を殺戮していた。仮の名前だが、その超要注意人物 ラビットシップのもう一つの性格を獣人<sup>ビースト</sup>と呼ばせてもらっている。」

「ビー…スト？」

「キラアは彼のもう一つの性格だ。キラアがあんな動きをした覚えはないだろう？」



「確かにないです…。サイコパスみたいな感じはありましたが…。」

「さ、サイコパスって…他に言い方はなかったのかい？」

「それしか出てきませんでしたツツ!!」

「ぐ…うう…ガシヤン ……?」

「目を覚ましたところで済まない。暴走して体の一部がやられてしまつては元も子もないから念の為拘束しておいた。」

「お、俺…は…。」

「君は今、どつちだ？」

「キラ…じゃ…ない…。」

「うん、どうやら戻つたみたいだね。暴走してからの記憶はあるかい？」

「そんなに…ない…です…。」

「あの記憶だけってことかな？」

「はい…。」

「うむ、とりあえず監視を付けておこうか。ラビットシップ、申し訳ないんだが君にもう一人監視を付けておくことにする。君が暴走してしまうと歯止めが効かないからね。」

「…言うことは何も…ないです…。」

「すまないね。リユーキュウ、ラビットシップを頼んだよ。」

「分かりました。ラビットシップ、これからよろしくね。(こんなに可愛い子が暴走するなんて…何かあるはずよね…。)」

「は、はい…。」

「さてと…ラビットシップ、皆が君に会いたがっている。判断は…君に任せる。」

「ラビットシップ、どうする?」

「お、お願い…します…。」

暴走した後なのに皆が会おうとしている理由は俺には分からなかった。

俺の立場上敵の立場になるのだが、そう考えてもおかしくないはずなのに、何故か俺を敵判定にすらしなかった。それすら全く理解が出来なかった。

バアアンツ!!!

「萃ちやあああああああああああん!!!」

ガバアツ!!!

「ぐえっ!!!」

「み、ミッドナイト…ラビツトシップに飛びつく勢いが…。」

「だつてえ…だつてえええええ!萃ちゃんのバカツ!本当あなたは何しているのよっ!!!」

「ぐ、ごめんによしやい…。」

「萃君!良かった…戻つてる!」

「萃ちゃん!ちゅーしていいわよね!?元に戻つてもしっかりお仕置きしないと落ち着かないわ!!」

「か、勘弁してください…ちよつと待つてあああああああ!!」

「艶星君戻つたんだn何しているんだねっ!!!」

「拘束具のせいでミッドナイトさんからのちゅーは避けられなかったあ…。」

「〜♪」

「あ、あはは…ミッドナイトの暴走は止まらないみたいだね…。」

「あ…それと皆、迷惑かけて本当にごめんなさい!俺…暴走していた記憶はほとんど無いけれど「大丈夫だよ萃君」でも…!」

「僕達が見てた。暴走とは言つても君の暴走は敵を捕まえる方の暴走に走つてた。やりすぎていたこともあったけれど…。」

「萃ちゃん、警部さんから聞いたけれど私の匂いを嗅いだことと芦戸さんを庇つたこと以外覚えていないの?」

「はい…全く覚えていなくて…。」

「ビースト。」

「…え?」

「萃つち、ビーストモードって言つてた。なんか腕の筋肉が凄いことになつてて、髪の毛が凄いバサアつてなつてた。とにかく語彙力がなくなるくらい凄いことになつてたんだよ!まあ…表情が見たことないくらい怖かつたけれど…。」

「そうなんだ…ごめん、怖い思いさせちゃつて…。それと多分暴走し

た原因が分かった。」

「どういうこと?」

「俺の中にいるもう一人の自分ライと一緒に表に出そうとしたら性格に歪みが生じて暴走したんだと思う。暴走後、麻酔を打たれて意識がない間に中で現実の俺の姿を見たからさ。」

「待って待って、どうやって自身の体を見たの?」

「つ、つまり…艶星さんは一度抜けたってことよね…?」

「うん、八百万さん正解。まあ…一度じゃないけれど、何度も抜けて見てるの。」

「簡単に言えば幽体離脱ってやつだな?」

「そゆこと、クイズみたいになっちゃったね…。とりあえず寝てる間だけなら自由にとまではいけないけれど適当にやったらそれが出た。」

皆驚いた様子だった。

まあそりや自由にやれたら今でもできるんだがな。

適当っていうかコツを掴みながら適当にやったようなもんだけど正直なところ、抜けると起きた時めちやくちや疲れる。

今回は疲れるといったようなことは起きなかったが、普段は汗びっしりです。

んで、一時的に捕獲されていた俺だが、監視を強化されつつも皆と

雄英に通えるようにまで回復して休日に入った。

「…。」

「…。」

「……………」

「あの…。」

「なにか?」

「いつまで俺の腕を抱いているんですか…?」

「暴走させないためよ。ダメかしら?」

「い、いえ…ただその…。」

「?」

「人がいないからといって…ガツシリと腕を抱くのは…。」

「むう…可愛いからいいじゃない…。少しは癒しをくれない?」

「なんか急にキヤラ変わったぞこの人。」

「あー!!りゅーきゅー!!私の萃ちゃんになんてことしてるのおおおお!!」

「あなたのじゃありませんよミッドナイト。皆のラビットシップですから。」

「はーじまったよこれ…。」

監視役二名（大人女子）と雄英生一名での謎のお出かけ。

ミッドナイトさんは相変わらず俺に抱きつくわキスを責めてくるわ眠らせてくるわ襲ってくるわでもう既に大変です。

それとは真逆でリューキュウさんは大人しくて面倒見のいい人でなんとなく落ち着く。だけど腕をガツシリ絡ませてくる。痛いです。

ちなみに買い出しではなく、ただ単に欲しいものを買いたかっただけなので買わされに来たわけではないです。だけど嫌な予感がします。

「ねえねえ!萃ちゃんにこの服似合いそう!」

「何言っているのですか。こっちの方が絶対似合いますよ?」

「いや!萃ちゃんは可愛い方が似合うの!」

「可愛いだけではなく、大人しめも似合うと思いますが?」

「ねー!俺の欲しいやつを買ってからそーゆーの買って!?!」

「むう!萃ちゃん大改造したかったのに!」

「とりあえず今は休戦しましょうか。ラビットシップの欲しいものが優先なので。」

「ちえく。ま、萃ちゃんだから許そつと!」

「あ!おかーさんおかーさん!ラビットシップいるよ!」

「ほえ?」

「こちらら!…ごめんなさい!この子ったらラビットシップの大ファンで…。」

「はわわ…そうなのですね…?」

「えへへく♪」

(うん、子供と接してる姿最高に可愛い。)

「ねーねー！サインほしい！」

「こ、こら！本人に対してそんなことを…。」

「大丈夫ですよ。お嬢さん、ちよつと待っててね？ミッドナイトさん、ペンありますか？」

「え？ええ、あるわよ？あ、書くの？」

「そですけど？」

「成長したわねえ…。本当天使みたいだわ…。」

俺はたまたま声をかけられ、サインが欲しいと言っていた少女にサインをしてあげた。もちろんサインはしたことがなく、俺のファンだということも知らなかった。寧ろファンが居たなんて思わなかった。

「えへへ〜♪」

「いいのいいの♪」

「わざわざすみません…ほら、ありがとうは？」

「ありがとーラビットシップ！だいじにするね！」

「こ、こちらこそ…／／ ファンがいたなんて思わなかったけれど、こんなに嬉しいことだつて気付かされました…。」

「わたしもラビットシップみたいにつよくなるからね！」

「この子、無個性で生まれた子なのですが…ラビットシップを見て憧れを持ったんです。グッズが出たら全部欲しいっていうくらい大好きで…。」

「萃ちゃんやったじゃん！ファンがいて、その上元気をもらった子もいるのよ?!とても嬉しいことじゃないのー！」

「う、嬉しすぎてどんな表情していいか分からない…。」

そのあと俺とリユークウさんとミッドナイトさんはそのファンの子の家族と別れ、俺はめちやくちや嬉しそうな顔をしたまま買い物をした。

帰り際は事件もなく久しぶりの平和な休日を送ることができた。

そしてその夜。

「はあ…疲れた…だけど良かったな。今日の休日は。」

「嬉しそうじゃないか…ラビットシップ…。」

「…!!し、死柄木…弔…!?!何故ここnスツ ツツ…!?!」

「あと一本の指で掴まれたら君はバラバラになる…。抵抗はしない方がいい。」

「も、目的は…何だ…。」

「君を知る為に来たのさ…。殺すつもりはないが、抵抗したら雄英ごと消す。」

「へえ…らしくない質問だな…。オールフォーワンが指示したんだな？」

「……………」

「やつぱりか…すまないが、君が知りたいとしても俺自身も全く分からないんだ。俺は人間の出来損ないだからな。」

「はああ…そういうことか…。今君を殺すのは惜しい…実…つ…て…から殺してやる。」

パツ

「死柄木弔、過去に何があったのかは分からんが…俺のクラスメイトに手を出したら真っ先に牢獄にぶち込む。」

「それはどっちのセリフだろうねえ？それじゃあな、未来の無個性ヒーロー君。」

スウ…

「……………ぶはあああああ!!死にかけたああああ!!なんやねんいきなりい!!物理的に殺害予告してんじゃねーよ!!かまちよなの!!?ねえ!死柄木君かまちよなの!?!ゆっくりしている日に心臓止まらせかけるのやめてくんねーかなあああ!!」

急に死柄木弔が黒霧のワープで侵入してきて殺害予告とか知りた  
いこととか聞いてきた。もうなんだよこれ死にかけるわ(○)

平和に終わったと思っただらまーたこれだよ!

平和ってなんでしょうか…?

ちなみに就寝時はゆっくり寝られましたでしたが、翌朝は芦戸さんが突撃して起こしてきたので心臓止まりました(○)

## #14 気持ち

「最近、日本側からの連絡が取れていない。連絡はしてみたか？」

「いや、連絡はしたものの一切出て来ずだ。」

「気付かれたか…?」

「ボス！何者かに殺されたと今情報が入りました！」

「何だと？奴の個性はヒーローでも厄介だと言われているハズが…  
殺った奴は誰だ？」

「今捜査中です！」

「日本を乗っ取るまであと一歩だったハズが…！今すぐ奴を探せええええ!!」

俺達の平和な日常は続いていたものの、俺達の知らない裏側では闇社会が動き始めていた。その発端は俺が暴走した数日後に起こっていた。そう、暴走した俺が噛み殺した敵から始まっていた。

「ふわああ…おはよー…。」

「おはよう萃君。凄く眠そうだね…。」

「うん…最近ねー…キラーが毎度毎度一緒に出てこようとして大変…。」

「萃君とキラーって意外と性格が真逆なんだね？」

「そうなんよ…180度真逆なんよ…。」

「デク君萃君大変!!とんでもないことが起きてもうた!!」

「麗日さん／お茶子ちゃん?」

「これ見て!!」

ザザッ

『不味い不味い不味い!!!逃げろおおお!!プロヒーローですら苦戦してる程の敵が来てるぞおおお!!』

『いやああああ!!お願いだから来ないでええええ!!』

『かーっはっはっはっは!!お前ら雑魚には雑魚死がお似合いだぜええええ!!』

ブツッ

「……………ッ。」

「な、なんだよ…何だよこれ…!!」

「雄英生出動の話も入ってるって…。」

「悪い…俺パス。」

「な、何を言ってるんの萃君!?!」

「そうだよ!…こんなに酷い状況が動画で出てるのに!!」

「いくら俺が回復したところでそこに行けば暴走する。結果は分かっているハズだ…。こんな…こんな俺が救助するなんてできねえ…。怖がられて当然だよ…!」

「そんなことない! 芦戸ちゃんを助けた時に感謝してたんだよ!?! なのに怖がられるなんてことg「あるんだよ。市民達に…。」なんなら…!」

「分かってくれねーんだよ。暴走した俺のことが根強くイメージに残されているはずだ。どんなに分かってもらおうとしても逆に殺されかけるだけなんだよ…。」

「認めてもらえるようにしたらええやろが!! あんたは殺されかけていようが死にかけていようがお構い無しで戦闘に突っ込んでいるクセに今更殺されかけるのが怖いなんて弱音吐くなボケ!!」

バンツ!!

「萃君…確かに分かるよ。君が怯えてる理由も救助したくても恐れることも…。だけど君は違う筈だ!! そんなこと言っていたって成長できななんだよ!?!」

「できないんだよ!!」

「ツ…!!」

「俺だって皆に追いつけるように成長しようとしたってできねーんだよ!…どんなに努力しても、どんなに考えても、どんなに変わろうとしたって君達ができることをしたって俺はできねーんだよ! 暴走した時なんて皆を傷付けたくなって逃げたしとんでもねー迷惑かけtバキツ!!! ぐツ…!!」

「そこまで言うなら成長しなくていいよ! 君だけ成長できないなんて言っている時点で大間違いだ!! 萃君がそこまで言うなんて珍しいとは思ったけれど、人を襲うかも知れないから救助に行かなくていいみ



たいなことを簡単に言わないでくれ!!こんな…以前の僕を見るようだよ!!」

バンツ!!!

「……はあ。なんでこんなこと言ったんだろうな…俺…。」

「…どうしよう…萃君を殴ってしまった…。凄く気まずい…。」

お互い複雑な気持ちを持ったが、俺が悪い。

お茶子ちゃんや出久君の言う通り、俺は今更弱くなったところで何も変わらないし何も出来ない。

似たようなことを誰かに言われたような気がしたが、俺は未だにそういうことは成長できていない。出久君が言っていたように成長しなくていいところは無理にしなくてもいいかも知れない。

俺はダンマリとしたまま放課後を迎え、図書室で読み物を見ながら考えまくっていた。

「成長しなくていい…か。バカだよなあ…俺。」

「あら、何ぼけーつとしてるのよ?抱きたくなるわあ〜♪」

「しれつと過激なセクハラ発言しないでくれませんか?」

「いいじゃない♪減るもんじゃないし♪」

ギョツ

「はあ…全くこの人は…。」

「珍しく抵抗しないのね?何か悩んでいるのは分かるわよ?あのことをまだ引きずっているの?」

「そ、そうですけど…。」

「もう大丈夫なのよ?皆分かってくれているし、無理に治そうとしたって余計に体への負荷がかかるだけ。だからあなたはゆつくり治していけばいいのよ。救助活動すらできないくらい不安もあるだろうけど、あなたはもう子供じゃないし一人で考えていけるんだから。あなたにしかできないことだつてあるのよ…。」

「俺にしかできないことつて…?」

「私を誘惑させること。」

「聞いた俺がバカだった。」

「待つて待つて!行かないで!あなたは緑谷君と同じようなことがで

きるのよ！だから、目指すものを目指していきなさい？」

ドガアツ!!!

「なんじゃ!？」

「敵ね!? タイミングが悪すぎる…! 萃ちゃんの中にいて!」

「まずい…!! あそこに出久君とお茶子ちゃんが!!」

「なんですって!？」

一方…

「くそっ! なんだよこの個性…! 初めて見る個性だ…!!」

「デク君! 気を引きつけるから仕留めて!」

「分かった!!」

「がーっはっはっは!! 悪いなあ! 俺の個性は個性からのダメージを無効化させる個性だからなああ!!」

「ワン・フォー・オール…フルカウル…ツ!!」

ゴツ!!!

「がはっ…!!!」

「デク君!!」

「麗日さん…逃げ…て…!!」

「イヤや! 逃げるならあんたも連れてくわ!!」

「おうおうおう! お友達の面倒を見る暇はないぜえ?」

ガッ

「うぐっ…!」

「雄英生って結局弱いもの集いじゃねえかよw あ、俺がさいきよーだからか!! はっはっは!!」

「…麗日…さん…!!」

「…脚部換装 駆逐艦 島風 全速力+64cm 酸素魚

雷ツツ!!」

ベキヤアツ!!!

「おごおっ!？」

「うわっ!？」

トテッ

「はあー…本当俺って成長できてねーなあ…。」

「かな…め…君…?」

「ごめん、出久君。俺が間違えてたよ。バカでポンコツな俺だけ…今は俺にしかできねえことをやる!!あの時の発言は前言撤回だ!!死者を出さずに救助してから敵をぶっ飛ばして牢にぶち込む!!」

「萃君…本当バカ。最初からそう言っていればよかつたのにつ!!」

「とりあえず二人は安全なところに!こいつぁ俺と相性がよさそうな奴だな!!」

放課後に起こっていたことが幸いだったからか、俺は出久君と一緒に鍛錬していた場所に砂塵の勢いで敵がいることに即で気がついた。

出久君は普段砂塵を起こすような特訓をしないし、遠隔攻撃の特訓しかしていなかったからね。

「私はまだ行けるよ!萃君にだけ無理はさせられへん!!」

「僕も…これ以上負担はかけさせられない!!」

「本当…雄英に入って正解だったわ!!二人とも行くよ!!合図を送るからそれに合わせてほしい!!お茶子ちゃん、重要な役割になるけどいいかい?!」

「うん…!」

「今のうちに蔓状のものか木の根っこでもいい、奴を縛れるようにしたいんだ…!」

「分かった。」

「よし!そんじゃあ…行くぜっ!!出久君は遠距離攻撃で頼む!奴を観察していたから分かるが、攻撃属性に変換された個性を無効化する個性だ!」

「そういうことか…!任せて!」

「なーに(ご)ちや(ご)ちや言ってるんだガキ共おおお!!」

ブオンツ

「てめーうつせーぞ!!」

ベゴオツ!!

「ツ…!何だコイツ…力が…!!?」

「相手は彼だけじゃないぞ!無化澤 効司!!」

「…何故俺の名前を知っているクソガキヤあああああ!!」

「出久君は何故か名前を知っていた。  
多分すぐに調べたと思う。早すぎる。」

敵の個性は無効化、全ての個性で攻撃属性となった個性は無効化される個性だ。だが、奴自身は全てを無効化できると思い込みすぎて理解していなかったご様子。過信しすぎたんですね。はい。

結構凄い体格はしているが、動きは鈍くてすぐに避けられる物理攻撃ばかりだった。弱点多すぎじゃね？

「ワンフオーオールフルカウル…！デラウエアスマツシュ エア  
フォース!!」

バシュシュシュ!!!

「いでっ!!何故だ!何故無効化するハズのもが無効化されない!!」

「お前自分の個性を分かかってねえなああ!全ての攻撃を無効化なんて出来るわきやあねえだろーが!!バカ野郎おとおお!!」

「なっ…!?!」

「全力アツパーあああああああ!!!」

ベキヤアツ!!!

「おごっ!!」

「ワンフオーオールフルカウル!シュートスタイル…セントルイス  
マツシュ!!!」

ドゴオツ!!!

「何故ええええええあああああ!!!」

「脚力40・9%…!!目標補足…砲撃準備完了ツ!!」

「お、おいおいおい…嘘だろっ…!?!」

ビュオツ

「お前は選ぶ相手を間違えた!!牢でしっかり反省しやがれ!!」

「ワンフオーオールフルカウル…20%…!!」

「金剛型戦艦参番艦 榛名 火力100%…!!」

「なんて思ったかガキども」

「ド根性マンチェスタースマツシュ!!／36cm三連装砲!!」

ドガアアアツ!!!

「ごほあああああああつ!!!」

「お茶子ちゃああああああん!!」

「でえやあああああああああああ!!!  
解除おおおおおおお  
お!!!」

ガガガガガッ!!!

ズドオオオオン!!!

「着地いいいいいい!!!」

ドオッ!!!

「萃君派手に着地したけれど痛そうだなあ…。」

スタツ

敵を無力化させ身柄拘束したのは良かったが、出久君とお茶子ちゃんが酷くではないけども怪我をしていた。

出久君は打撲と骨の一部に罅ひび、お茶子ちゃんも同じく打撲で擦り傷、俺は静かに怪我をしていた。

敵との拳の撃ち合いによつて手全体に罅が入つて一部骨折、腕に多少の罅が出ていた。

「はあ…はあ…いやつと追いついたあ…!つてもう捕獲したの!」

「ミッドナイトさん遅いです!」

「報告しなきゃいけないかったのに貴方が急に飛び出すからでしょ!」

「とりあえずあの敵を眠らせて!気絶しているからもう少ししたら起きちゃうの!!」

「えっ…まさかあの敵…!」

「誰か知っているのですか?」

「萃ちゃん…これはとてつもない異常事態になったわ…!緑谷君、麗日さん!」

「はいっ!!」

「貴方達は保健室で体を休ませて回復しておいて!もしかしたらゆっくりできる暇が無くなる!」

「ミッドナイトさん…?」

「萃ちゃん、このことは私が先生方に伝えておくわ。貴方達が協力して拘束したことももちろん伝えるわ。だけど、コイツ…本当に面倒なことになったわ…!!」

ここからまたえげつない事件に巻き込まれるなんて俺は知らなかった。

いや、もうとつくに巻き込まれた上に巻き込んでいたのだ。

ミッドナイトさんにひよいと抱き抱えられたまま言われていたから説得力はなかったけれど…。

## #14. 5 公式バトルイベント

「ねえー！ミッドナイトさんなんで教えてくれないのおおおー！」

「しようがないじゃない！萃ちゃんに教えたらまた貴方壊れるでしょ  
おおおお!!」

「おーしーえーてー!!」

「いーやーよおおおお!!」

「おねーちゃんって呼ぶよおおおお!!」

「言われる前に眠らせたるわあああああ!!」

「ねえ、ミッドナイト先生と萃君がすごいことしてるよ…?なんか凄く癒される光景なんだけど…っ!」

「まるで姉弟だねえ…。」

現状を説明すると、帰り際に起きた敵との戦いでミッドナイトさんが気になるワードを放っていたので細かく聞こうとしていた。

最近雄英に侵入者が多いのはそいつらが原因かと思う程なので気になってめちやくちやしつくく聞いてみたのです。

グググ…

「もによおおお…!」

「かーなーめーちゃーん!!はーなーれーてー!!」

「いーやーだー!!」

「なら眠らせるだけよ!!」

グイッ

「ひゃあ!」

「しっかり寝ておけええええ!!」

抱き抱えられたまま眠らされました。

離れようとしていたのにまた引き寄せるなんて…。

ミッドナイトさんには勝てないし、可愛いし綺麗だしで何も逆らえないっす(○)

あれ?さつきマイダーリンって言ってなかった?

パチッ

「お、目が覚めたな。ミッドナイト先生が運んで来たらしいが、また暴

走したのか?」

「おはよ障子君：敵が侵入してきていたけれど俺と出久君とお茶子ちゃんできつ捕まえただけだから大丈夫。あんまし覚えていないけれど、ミッドナイトさんが気になるワードを言っていたから無理矢理聞こうとしつこく詰め寄っていたら強制的に眠らされた。」

「そ、そうか?。」

「障子君。」

「なんだ?」

「障子君って個性の中で上手く使いこなすのが難しそうなイメージするけれど、実際のところ難しいの?」

「まあ：難しいと言えば難しいかも知れないが、こなせば大分楽だ。」

「ほへえ：警戒する時に周囲を見渡すのはかなり大変だったりする?」

「そりやな、俺の個性はメリットがあってもデメリットがあるんだ。」

「どんなデメリット?」

「例えばこの腕で沢山の目を使うとして、最初に出した目と新しく出した目があるとする。」

「ほむほむ。」

「最初に出した目と新しく出した目でどちらが見えやすいと思う?」

「んー：一般的な考えだとしたら新しい方が見えやすいってなるけれど、デメリットとしての考え方だとしたら、新しい方が見えにくくなって最初に出した方が見える…って感じ?」

「そう、出せば出す程質が悪くなっていく。だが、自身を鍛えることによって大分範囲が広がるんだ。」

「ほほう：俺も無個性ながらも使える技の範囲が広がるのかな…。」

「お前なら無個性でも広がる筈だ。無個性の中でも強い存在ではないか?」

「いや、俺はまだまだ弱いさ。特に心コイツが弱い。」

「あるあるだな。」

「あ、萃君起きたんだね!」

「おいコラ無個性!!タイムマンやるぞコラア!!」



「かつちゃん落ち着いて!!?」

「萃っちいいいい!!」

ボフツ

「ぎよべっ!!?」

「三奈、寝起きだからあまり刺激するなよ?」

「ごめんごめん!萃っち、このニュース見た?」

「なんじゃ?」

芦戸さんが見せてきたのは二年に一度開催される公式のバトルイベント、ヒーローとヒーローの勝ち抜きバトル。

雄英生も参加するという特大イベントで、あの殺意マシマシな非公式クソイベントとは違い、しっかりとしたルールが設けられている。

「ん」と、『戦闘不能、気絶、失神、リタイアをすると試合終了。上位ナンバーズヒーローが対戦相手になることもあるが、そこはリタイアしてもよい。だあが!血気盛んな生徒やヒーロー達は対戦相手になったとしてもリタイアせずに挑んでヨシ!』…なんか文章のテンション急すぎない?」

「萃っち知らないんだっけ?」

「うん、俺こういうのあんまり分かん。」

「どうせ参加することになるから、皆で対策を練ってみない?」

「ヒーローに関することならあのクソナードに聞いてみる。キモイ程メモしてやがるからな。」

「き、キモイって…。」

「とりあえずコイツの学びっぷりは侮れねえから死ぬ気で教えてもらいやがれ!」

「爆豪君めっちゃ優しいやん…。ツンデレのツンだけが究極に強化されたやつやん…。」

「か、かつちゃん…一体何があつたんだろ…。」

出久君は珍しい表情で爆豪君を見ていた。

彼曰く、発言がいつもより丸くなっていたとかなんとかだと言う。

俺は全く分かんが。

「無個性…デク…アイツら二人には負けたくねえ…!上り詰めて俺が

最高のヒーローになってやるんだ…！」

「おいバクゴ―！なにしてんだ―？」

「切島かよ…！ビビらせんなクソが！」

「相変わらず口が爆弾だな！なあ、俺と組んでみね―か？」

「あ？」

「なんつーか…お前の個性に耐えられるのってクラスでは俺と轟とヤオモモくれーしかいね―からさ。」

「何故アイツの名前まであんだよ。」

「防面では中々たけ―から。あとその二人は他のメンツと組むってなった。」

「…しゃーね―なア！俺の足引つ張んじやね―ぞ！」

「おうよ！」

一方、俺は…。

「やべえ…いねえ…。」

「二人で一組って書かれていたから一人にさせてしまうのは申し訳なく感じるんだが…。」

「よし、大丈夫だ。俺に秘策があるからな！」

「…「あるの!?!」」

「思いつきだけだな！」

「マジかよ…。」

俺達はその公式イベントに出場が<sup>強制</sup>確定されており、一般人も見られるようなものになっていた。

俺はもちろん出るものの、とんでもね―批判が飛びそうなのは分かっているけれど、対策もすっかり考えた。もちろんその場の思いつき。

そして数日が経って公式イベント当日…。

「さあやって参りました！ヒーローvsヒーローの公式バトルイベントオオ！あの有名なヒーローからヒーローの卵達まで勢揃い！もちろんタッグバトルで出場があるわけですが、2vs1でのバトルも可能となっております！」

「うわ…マジで2対1の戦いあんじゃん…。俺終わったつぽくね？」



「ううっ…！み、耳がああ…！」

「なんちゅーデカさ…!!」

「観客からの罵声が雑音にしか聞こえなくなってきたか…!!だが分かるぞ…その気持ち…」

「俺に悪口やら何やら言うのはいいけどよお！てめーらの周りをよく見てみるよ！楽しんで見ようとしている客が目に入らねえのか!?俺に罵声を浴びせることだけ楽しもうと思つてたりしてねーだろーなあ!!てめえらのその行動を見て他のヒーローファンはどう思う!!?俺は別として、他のヒーローの応援をしようとしていた人達からしたら不快極まりねえ行動だぞ!?場を弁<sup>わか</sup>ま<sup>ま</sup>えろ!!」

「うっ…た、確かにそう…だよな…。他のヒーローを応援したい人からしたら俺達のやっていること…敵と同じようなことをしているな…。」

「アイツ暴走するから何を言つても正直言われたくねーな。」

「それな。あんな危険人物に言われるくらいなら死んだ方がマシだぜ?」

「そ、そんなことないもん!!」

「ち、ちよつと…！」

「あら？萃ちゃんのファンの子…？」

「ラビットシップは凄く可愛くてカッコイイヒーローなんだもん!!私知ってるんだから！他のヒーロー達よりもすごーく強いんだから！どんな強い敵にだってやられても負けないし挫けないし、倒れたりなんかしていない!!ラビットシップはムコセーでもどんなコセー相手にだって負けないで立ち上がり続ける最高のヒーローなんだからああああ!!」

「……………!!」

パチパチパチ

「よく言った少女！君はラビットシップ君のことをよく分かってくれているよ！」

「うん、こういうことを人前で言うのって勇気いるけれど、君はしっかりとっていて素晴らしいよ！萃君！聞こえたかい?!」

「おうとも！ありがとね！！君のおかげで冷静さを取り戻せたよ！あとで何かサービスしたげる！！」

「はわああ〜！ラビットシップありがとうとおおお！！頑張つてえええええ！！！！」

（（うわあすつごい和む…））

「お、お嬢ちゃん…その…すまねえ…。俺らはどうやら彼を勝手に悪者扱いにしてしまっていた。お嬢ちゃんの言葉にラビットシップへの熱意が伝わったよ…。確かに彼は個性相手でも怖気づくことなく怪我人を守っていたし、助けられていたのを思い出したよ。謝罪と同時に感謝するよ…ありがとう。」

「あ、あの…そろそろマイクを…。」

「あつ…すみません、どうぞ…（汗）」

「さ、さてさて！仕切り直しづらいところ申し訳ありません！続けていきます！ラビットシップが出場し、対戦相手はどんな相手になるでしょう！！対戦相手は〜！この人だああああああ！！」

ガコツ

「…………ウツソだろおい…！！」

「あ、ラビちゃん。」

「また萃ちゃんじゃねーかよ！！もう皆飽きてるだろ！！」

「！！「わあああああああ！！」！！」

「来たあああああ！！この組み合わせでの戦いは正に恒例と言つていい程じゃん！！！！」

「しかもリユークユウまでいるからもつとハードな戦いになるぞとおおお！！」

「ラビットシップー！頑張つてえええええ！！」

「ふふっ♪全くこの子は本当にラビットシップ大好きなんだから…♪」

「いやマジかよおおおお！！お世話係担当してる人じゃねーかあああああああああ！！！！」

い つ も の 〇



「いきなり押されてんじやねーか!!雑魚になってんじやねーぞクソ無個性!!気合い出せやコラア!!」

(うぐっ…ヤバい…早速追い詰められた…こんなの…俺が消されるにっ…!!)

ドズウツ!!!

「くぴゅっ!!?」

「先制攻撃には弱いよね。だけど、私達には関係ないから!」

「今まで何してきたコラア!!本気出しな萃!!!あたしに殺られる前に闘れ!!!」

ボゴオツ!!!

バキツ

「がつ…あ…!!?(不味い…死ぬ……コスの意味がつ…!)」

「ま、負けちやイヤ…!ラビットシツプ頑張つてよおおお!!負けないでええええええ!!」

(わ、悪い…お嬢ちゃん…俺……力が…出せないや…闘つてやる…!!)

ザツ

「もう一人の自分頼む!!!」

「やつと来たわね!!」

「クヒビ…!久々に出たぜえ…!!ミルコ、リユーキュウ…てめえらをぶっ飛ばす!!」

「萃ちゃん切り替えたな!？」

試合開始されて五分が経つてキラアが発動された。今の俺ではいきなり不味い状況に追い込まれてしまった為、キラアを呼び出したりあえずは交代した。

本当は通常形態で戦いたかったんだがな。

「こんのっ…!月輪!!!」

「兔踵撃ツ!!!」

ドゴツ

「うぐっ…!!」

「ぐほっ…!!?」

「隙が見えるよラビちゃん!!フンツ!!!」

ゴオツ!!!

「やっべ。」

ドガアアツ!!!

「ぐあああああつ!!!」

ピョンツ

「一撃…重かったぜ萃ちゃん!!ルナ・フォール月面落下!!!」

「おいおい…隙が無さすぎだろ…。」

ズガアアツ!!!

パラパラ…

「お、おい…どうなった…。」

「ミルコ相変わらず容赦してねーな…あんなの喰らえば多分死んだろ。」

「うっ…うう…ラビットシップう…!負けてないよねえ…!!負け  
ないんでしょおおお!?返事してよおおお!!」

「んー…おつかしーな…手応えがねえぞ?」

「そんなはずないわ。寸まで動きを止めてたはずよ?」

「そーなんだけどなー…。」

「あつ…。」

「はあ…はあ…はあああ…!!」

「ん?」

ズパツ!!!

ラビット・シッケル!  
「兎の脚鎌…!」

「ラビちゃん…!?!」

「お嬢ちゃん、俺は負けてねーから安心せい…!」

「ラビットシップううう!!」

「俺らの知らねえとこでいきなり成長しやがったかあの無個性!」

「だが艶星君の様子がおかしいぞ!?髪型が…。」

「萃君、無茶したんだ…。ミルコの一撃が避けられないからリユークュウに押さえつけられて寸で離れた後、少しだけしか動けなかった筈だけど右肩を犠牲にして、体が浮く程の衝撃を利用して離れたんだ



…。萃君体が軽いからね。」

「めっちゃ分析してるやんデク君…。」

「萃の勝利は見たことねーから勝ってほしいって思うんだけど、やっぱりあの鬼タッグだから余計に難しいか…?」

「いや、ほんの少しだけど勝率が上がってるよ。彼、雰囲気めっちゃくちゃ変わってる。」

「んー…やっぱり慣れねー…複雑な感じだ…。右肩めっちゃくちやくソ痛え…。キラーの奴無理しやがって…あとで説教だな。」

出久君の言う通りルミ姉の一撃を喰らったものの、なんとか態勢を立て直していた。もちろん元の俺の人格。

元の俺は本気を出そうにも相手の本気が強すぎて何もできなかつが、このイベントが始まる前までの数日間は何もしてこなかったワケではない。獣<sup>ビースト</sup>の発動に専念していたのだ。

めっちゃしんどかった。

<sup>ビースト</sup>「獣モード…兔!」  
<sup>ラビット</sup>

「私のいないところでそんなことをしていたのね…!!早く倒れて休みなさい!!」

「…休めません!!」

「萃ちゃん、よく見てみな!今のあんたは井戸の中の蛙だからな!」

「ルミ姉…それは負けフラグってやつ!」

「あ、やべっ。」

「そんなフラグなんてへし折ってやるわよっ!!」

ゴオツ!!!

「折らせない!!」

ドンツ!!!

「はあああああああああつ!!! 《<sup>ぶんぬ</sup>兔の憤怒》!! <sup>ラビット・レッグジェット</sup>兔 噴射!!」

ビュツ!!!

ドゴオオツ!!!

一方観客席では――

「なんなんだ!今までの萃とは違いがありすぎる!!」

「このまま押せるんちゃう?!」

「いや！このままじゃ押し返せない!!」

「緑谷どうしてだ!？」

「萃君の髪は今金髪から白に変色しているけれど、よく見たら元の色に戻ってきてるんだ!」

「時間制限付きかよ!!!」

「アイツ本当に無個性なのか!?!個性がある気がするんだけど!？」

「個性が発現する前人間が皆、無個性だった頃に一度も例がなかった事件があったんだ。」

「どういうことだ...?」

「戦時中、とてつもない力で侵略者を撃退して死角からの攻撃をも避けて圧倒させた人が一人いたらいいんだ。」

「なんだよそれ、マンガの見すぎじゃないのか!？」

「最初はそう思ってたんだよ。だけど彼は最後の奥の手として残していたらしいんだ。しかもその人は目立つような位置にはいなかったけれど、教科書にも載っていた人なんだ。」

「それは...誰なんだ...?」

「せき てつみね隻 鐵嶺。通称、人間戦艦や人間戦車と呼ばれていた人なんだ。『隻腕の砲台』『轟速の隻』って言われて二つ名になったんだって。」

「それが今の艶星に関係あるのか!?!オイラ、難しいことは分からねーから簡単に教えて欲しいんだ!」

「つまり、萃君はその人との関係があるんじゃないかって話なんだ。」

「なんだと!?!おいクソナード!あとで無個性の野郎に問い詰めるぞ!!!」

「かつちゃん!?!聞いてたの!?!」

「つたりめーだろーが!丸聞こえだぞ!!」

「だよねえ...」

俺はちまちま新しい技をぶっ込んできてはいるもののやっぱりキツイ。

まず俺の髪型はうさ耳になっていたり、小麦肌ではないがルミ姉と似ていたりで紛らわしいとか何とか言われてた。だけど盛り上がった。

獣 は髪の色が白くなって一時的に脚力と腕力が上昇、スピードも三倍程の速さを持つようにはなるが、スピードの出し過ぎには注意だな☆

俺視点に戻る。

ビキビキツ

(うっ…！脚に罅ひびがつ…!!)

(ぬううっ…！な、何なのこの子ツ…！力がさつき以上につ…！)

「おりやああああ!!」

バキツ!!

「けひやつ…!?!」

ズサアツ…

「おいおい飽きさせんなよ萃ちやくん…♪相手はリユーキュウだけじゃねーんだぞっ…」

「ううっ…プロヒーロー二人は鬼畜すぎる…っ。」

「今すぐ諦めて降参するか、骨を折られるか…どっちがいいんだ？」

「ミルコ、流石に言い過ぎじゃない？」

「いーんだよ、この子は潔く決めるからさ。」

「おっとおおお!!?ここでラビットシップが微動だにせず!ここでラビットシップはダウンするのかああああ!!?」

(するわきやねーだろ…まだだ…もう少し……!)

「コイツ……!」

ビキビキツ!!!

「リユーキュウ!避けろ!!」

「え…?」

ビュンツ!!!

「死ぬ気で倒す!!!ラビットトロービード 兎魚雷・自壊!!!」

「は、速っ…!!…!!」

ゴキヤツ!!!

「あううっ!!なんて威力なのよ…!!脚がやられた…!!」

「うぐううううっ…!!いつてええええええええええ!!!やつぱやらんきやよかつたあああああああ!!!」

「脚を抱えてる暇はねーぞっ!!」

「あつ…くつそ…!!」

「ルナ・フオール月面落下ツツ!!!」

ズガアアアツツ!!!

「うぐううつ…!!!やつべ折れr」

バキツ!!!

「ああああああああ!!!こん…のおおおおとおおおっ!!!」

ブンツ

「おつと…。まだ鬨る気か?!いい加減諦めろよ!!」

「いやだ…絶対に負けられねえ…!!ぶつ倒sベチツ　ぷぎやつ!」

「あつ、潰れた。」

「私のこと忘れてない?」

「ううつ…ち、ちか…ら…があ…入ら…ね…。」

シュウウ…

「成長が早いわラビちゃん。私達も手を負わせる程にね…褒めてあげるわ。だけどっ。」

プニツ

「ぷぎゅっ。」

「自爆行為はダメよ?」

「つーかよ、成長しすぎじゃね?萃ちゃん、後で話聞くからお前寝てろ。」

「やだ。」

「ラビちゃん、最後の最後でその発言は可愛すぎない?」

「最後じゃにやいもん!頬っぺぷにぷにしにやいでくらひゃい!」

「可愛いなあああああ!!萃ちゃんどんだけ可愛いんだよこのやろお  
おおおお!!」

「ルミ姉そろそろ呼び捨てして欲しいんだけど!」

「可愛すぎる。ミルコごめん、この子予想以上の可愛さに負けちゃった。」

「アタシも負けたわ!萃ちゃん、お前の勝ちだわ!」

「……………え?」

「審判悪い！コイツの勝ちだ！」

「……………えっ?!」

「いーからコイツの勝ちだから結果を言えー!」

「し、勝者は…ラビットシップです!最後の最後にラビットシップの奥義である可愛いさで二人を圧倒させたああああ!!」

「おいこらどーゆーことだああああ!?!」

「急展開すぎて情報量が掴めねーよ!!」

「ラビットシップちゃん可愛いわよね…♪映像に写ってる彼の姿は確かにズルいわ!これは負けるわよ!?!」

「ラビットシップって可愛いってイメージよりもポンコツなイメージが…。」

「誰だー!今ポンコツって言ったやつはー!!出てこーい!!」プンスコ

((((あ、これは確かに可愛い。)))

急展開過ぎて皆もびっくり。

俺も勝った感じがしなかった。

俺には分からないが、俺が可愛いという理由だけで負けを認めたらしい。コレジャナイ感が強いし望んだ勝ちはこれじゃねー!って思わず叫んだ。

「こんなの認めない!!俺がこんな勝ち方するのなんて納得いかない!ルミ姉!サシで勝負して!!」

「わり、無理!」

「ナンデ!?!」

「ん。」

「ラビちゃん…可愛すぎじゃない…!こんなの…守りたくなるじゃないの…!!」

「あー…うん、分かった…。俺のこんな勝ち方は認めないけれど…今度はちゃんと勝負してよね!!」

「おうよ!今度は手加減しねーからな!」

この日、俺は納得のいかない勝ち方をして俺の一日目が終わった。

初めての勝ちとは言え、医務室にぶち込まれながらも負のオーラを出しながらブツブツと呟いていた。

勝ったことを祝福してくれた出久君達にも申し訳なかつたけれど、正々堂々とした勝ち方をしたいと言いつたのだが、皆ももちろん認めしてくれた。ちなみにミッドナイトさんに頭をめちゃくちゃ撫でられた。

## 16話 互角

二日目。

なんとか回復はしたが、未だに痛みが残る。

ルミ姉の一撃で俺の右腕が死にかけていたから完治までとはいかなかった。そして俺のいる部屋に小さなお客さんが入ってきた。

バアアアン!!!

「ラビットシップううう!!」

「おおっと!?!あの時のお嬢さんじゃないの!!」

「こらー!ラビットシップが痛がっちゃうでしょー!?!」

「お母さん大丈夫ですよ!俺はこー見えて丈夫な体なので!」

「本当、娘がすみません…。」

「いえいえ!お嬢さんも元気そうで何よりです♪」

「私ね、みなかた南方はるか 遥はるかって言うの!」

「遥ちゃんって言うんだね…可愛い名前してるなあ〜♪」

「えへへ〜♪」

「私はこの子の母親の南方 ありさ有砂と言います。私も正直、ラビットシップに心を惹かれて応援していますが…遥にはやっぱり敵わないくらいで…。」

「こんな俺を応援してくれるなんて…ありがとうございます。」

「いえいえ!!そんな…!」

「ねーねーラビットシップー!私ね、ラビットシップのお嫁さんになりたい!」

「ふあっ!?!」

「は、遥!?!」

「ラビットシップみたいに強くなつてラビットシップを超えるヒーローになつてメロメロにさせたいんだもん!」

(やんべえ可愛い。)

こんな可愛いお客さんにそんなこと言われるとそりや俺も惚れるわ。

そう思いました。まず、こんなこと言われて惚れるとか言ったら口

リコンじゃねーかって思われる。死ぬわこれ( )

バアアアアアン!!!

「かーなめつちいいいいいい!!!」

「なんじゃあああああああ!!!」

「ピンキーだー!可愛いいい!」

「あ!昨日の女の子!かっこよかったよおお!!萃っちもすつごく喜んでたんだよー!」

「芦戸さん!」

「いーじゃんいーじゃん!あ、そうそう!萃っち、次の対戦相手はヤバいよ!今度はクラスメイトとの対決になるんだって!」

「うっそだろ!」

「今度は緑谷とお茶子のタッグとだって!」

「余計にまずいじゃん!!」

終わったと悟った俺。

しかも名コンビすぎる名コンビ。

出久君は攻撃特化の継承型個性で、お茶子ちゃんは攻撃とサポートの両方が可能な個性だからかなり苦戦するやつ。

足場を取られたら勝ち目すらないのも目に見えてるし、多分先にお茶子ちゃんをダウンさせてからの出久君に移るかも知れない。

考えていたら出場ゲートに着いてた。

「うぐうう…先にお茶子ちゃんをダウンさせるか、出久君をダウンさせるか…どっちにしたらいんじやあああああ!!」

「お待ちせしましたあああああ!二日目の2回戦目の出場者はこのタッグとあの人だあああああ!!!」

「うーわ司会者変わってんじやん。めっちや苦手なテンションで来るのはやめちくりい…。」

「よっしやあああああ!待ってたぜラビットシップ!!今度はどんな戦いを見せてくれんだあああああ!!」

「話題のラビットシップちゃんと雄英体育祭で活躍した子が対決するんだって!楽しみになってきたわ!」

「う、麗日さん…すつごい歓声だね…。」



「めつちや緊張するわあ…。」

「だ、だけど作戦通りやっていくよ！頑張ろうっ！」

「うん!!」

ギイイ…

「昨日と同じく、ゴングが鳴れば試合開始!!以上!!」

扉が開くと同時に出久君とお茶子ちゃんが現れ、俺は少し遅めに出てきた。めちやくちや緊張しています。

両者が定位置に着くとお互いに一言を言い始めた。

「出久君、お茶子ちゃん…本気で行くからね…!」

「もちろんだよ。僕達も本気で行くつもり!」

「うちも本気でやらせてもらうから!クラスメイトだからって手加減はしないからね!」

「スタートオオオオオ!!」

カアアアン!!

(ヤバいどうしよう作戦なんて考えてなかったわ。どう動こうか…。)

(まずは様子見で動かさず…いや、萃君も様子を伺っている…?お茶子ちゃんには彼が動いたら用意してもらおうところなんだけど…もしかして僕達が動くことを狙って…?)

(あかん、萃君全く動かん!どっちから動くんやろ…!)

(そう言えば萃君の利き足はどっちだ…?!そこをしつかり見ていなかったせいで予測ができない…!)

(やつべえ圧だこれ…。きちいよおお!!ええい!動いちやえ!!)

シュツ!!

「左だつて…?!」

「あかん!デク君お願い!」

「狙わせないよっ!!」

ガツ!!

「ひえっ!?!しつかり作戦考えてんのね!?俺がサポート役を狙うの分かってたか…!」

「予想だね!萃君つてたまに予測不可能な動きをするから!!」

バツ

「ふんぬっ！」

ベキッ!!ピシピシッ…!

(来たっ…!)

「64cm…酸素魚雷ッ!!」

ドヒュッ

「ワンフオーオール…フルカウル…!!デラウエアスマツシユ・エア  
フオース!!」

バシユッ!!!

「ほわっ!」

「麗日さん!!」

「あいよおおおおおお!!」

ゴオオオッ!!!

「マジかあああああああ?!?!」

俺は予想はしていたけれど、それ以上に予想外なことが起きた。

お茶子ちゃんは重力グラビティの個性を最大限に使い、その場内の地面を抉り出した。いや、俺が力加減も無しに亀裂を作ってしまったことから始まったんだけどね。

しかもめちやくちや浮いていたし、落ちてる。

「ううっ…立ち直れないっ…!」

「もらったよ萃君!!」

「まだまだじゃあああああ!!」

「ワンフオーオール…!!」

グググッ…!!!

「落下距離推定30、角度調整…。緊急火力調整…出力75%、火力調整20%…!」

「おいおい不味いぞ!萃がこのまま落下して普通に死ぬぞ!」

「艷星のやつ、緑谷タツグとの戦い方が特殊すぎて対応していないんじゃないのか!」

「落ち着けやボケ!!あの無個性がそのまま落下すると思ってるのか!!」

よく見てみやがれ!!」

「むっ…? 艷星の動きが少し変わってるぞ。」

「緑谷と似た動きをするんだな。これは真似出来ないくらいだ。」

「デトロイトスマアアアアアアッシュ!!!」

「15.5cm三連装砲おおおおお!!!」

ズドガアアアアアン!!!

「ううっ…!! 衝撃波が尋常じゃない…! デク君は大丈夫なんか!？」

パラパラ…

「はあ…はあ…よ、避けられた…。」

ドカツ!!!

「ぶえっ!!」

「!？」

「あたたた…着地って慣れないもんだな…。」

「萃君流石だよ…あの距離をコンマで躲すなんて。」

「あの高さからの体勢を変えるなんてやっぱり慣れないよ?!」

「そろそろ現段階での最大火力で行くよ…!!」

「よし、準備運動終わったから本気で行こうか!!」

「ワンフオーオール30%…!!」

パリパリ…

「<sup>ビースト</sup>獣モード…!!」

ゴオツ!!

「デク君、援護するよ!! 解除ツツ!!」

ビュオオオオツ!!!

「いい足場があるじゃんっ…!!」

「まずい!!」

シュツ…

「あっ…。」

「そいつ。」

トスツ

「こ…こんなん…は、速すぎ…やろお…。」

バタツ

「麗日さん!!」

「サポートがいると不利になっちゃうから…申し訳ないけれど寝てもらったよ。」

(うう…なんとか意識を保てたわ…だけどこのまま動けばやられるだけや…。様子を伺ってみるしか…。)

気絶させきれなかったことに気づかず、彼女をそのままにしていた。

ちなみにサシでやり始めるのだが、やはり個性と無個性の場合火力が桁違いで、太刀打ちできるかすら分かっていない。

増強系の個性と対決するとなれば、俺は必ず何処かをやらすかも知れないというのも分かっていた。

(さてと…対策考えていなかったわ。)

「行くよ萃君!!」

ビュオツ

シュバツ!!

ラビットバースト

「兎 裂!!」

「でやああああああ!!」

バガアアアアアツ!!!

ピシッ!

「うぐっ…!!」

(まだ怪我が完治しない…!?なら、ここは僕が優勢かも知れない…!!)

「捕まえた…!!」

「んなっ!?」

「そおいやああああああ!!」

ドカツ!

「がはっ!何処まで強くなって…ブンッ うわっ!」

「10cm高角砲おとおお!!」

「萃君の力絶対おかしって!!とりあえずは壁があって助かったけれども!!」

ドツ!!!

「あ…やべつ。だけどスピード勝負なら…!!」

ビュツ

ラビットラビリススハイド  
「兔の迷宮!!」

「ラビットシップって本当に無個性なのか…？個性を持った無個性ではないのか？」

「そーなりや普通に個性じゃねーのか？」

「そう言えば…私の知り合いに個性が発現される前の時代に人間兵器って言われていた人がいたって聞いたことがあるわ…。」

「へえ…人間兵器ってどんなもんならろーなあ…。」

「詳しくは知らないけれどね！」

「てか、目で追えない速度になってない!？」

「映像でもギリギリじゃないか!!しかも壁がベコベコになってるし!!」

ビュババババツ!!!

「ここで決めるっ!!ワンフォーオールフルカウル…!!!」

ラビット・リベンジ!  
「兔の逆襲!!!」

「デトロイトスマアアアアアッシュ!!!」

ドゴオオツ!!!

無個性とは思えない程と言われるくらいの速度で出久君を追いかけて、壁もボコボコにしている腕全体がボロボロになっていた。

そして出久君のタイミングに合わせられてしまい、俺も咄嗟に技を繰り出し、拳と拳の衝突による衝撃波が強くて周囲に砂塵が巻き上がった。

結果が分かったのが砂塵が収まってからだだった。

「お、おい…結果はどうなったんだ…？」

「無個性の野郎…!」

「大分収まって来ましたわ。」

「ん？まだ二人が立ったままだぞ！」

(いつまで倒れたまままでいたらええんや…?)

「はあ……はあ……!!」

「ぐっ……うう……!!」

「し、勝負あり……ってところだね…。」

ブシュツ

「うぎっ……!!ま、まだ……負けてnポカツ　うえあっ!」

「はあはあ……!!とつとつと休んでよ萃ちゃん!!倒れた演技すんのめっちゃ疲れるわ!!気絶させるならしつかり気絶させんかいボケエ!!」

「う、うぐぐ……足りていなかったのか……!ならっ……!!」

ビュツ!!!

「んなっ……!?!」

「今度は強めにツ……!!」

後半へ続く。

## #17 無茶（マジ）と本気（マジ）

「今度は本気でツ…!!」

「麗日さん避けて!!」

「ツ……………!!」

フワツ

「おうっ?!」

「…え?」

「あつ…か、解除おおお!!」

ゴオオオツ!!

「ぬわっ!!?」

ガシヤアアアアン!!!

触れたもの、人を浮かせることが出来るお茶子ちゃんの個性「重力」。

俺には理解が出来なかった。触れられた感じがなかったのに、浮かせられて吹き飛ばされるなんて分かるワケもなかった。

そりやそうだ、彼女は俺が気付かぬようにこっそり触れていたのだから。

「麗日さん、どうやって萃君に触れられたの?」

「えっへへく♪ここだよ!」

「靴の…底?」

「そう!… 緒意識を失ったけれど、すぐに覚めた時もまだ居たからこっそり触れられたんよ! しかも現段階の最大重量よりすごーく軽いからね!」

「想定外なことになったけれどよかったあ…あともう少しで決着が着くはずだ…! 行くよ!」

「うん!」

「獣モード…ラビット…部位欠損61%…最大火力…79%…脚力7

8%…腕力37%…。脚は…まだ行ける…目標二人…自身勝率

…6%…相手勝率94%…無理だこれ。体がまともに動かん。」

フワツ

「マジかよ…。」

「ワンフォーオールフルカウル…!!」

「ラビット兎のオ…!!」ギョルルルル

「セントルイススマアアアアアアッシュ!!!」  
レジスタンス

「抵抗アアア!!!」

ベキヤツ!!!

「うぐっ!!!」

「があっ!!!」

ドガアアアア!!!

「解除…。」

腕に力が入らず、脚で対抗するしかなかった。

とは言えども、やっぱり個性の方が圧倒的に強くて遂に脚まで罅ひびが入ったのと同時にお互いに吹っ飛んだ。

お茶子ちゃんのサポートが強力で対抗なんてできるワケがない。

そもそも距離を取られるとまず対策なんて不可能だ。

パラパラ…

「ううっ…。」

「っ、強…すぎ…だ…ちくしょう…。」

ザツ

「えいつ。」

ピトツ

フワツ

「…え?」

「解除おとおお!!」

ビュンツ

「ぬあああああああ?!?!」

ベシヤツ!!!

「ぶえあっ!!!」

「麗日さん…何をしてっ…!?!」

「まだでしょ…!まだ力残ってるんでしょ萃ちゃん!!!」  
グアツ



「お茶子ちゃん…もう力が出ん」「嘘つかないで!!」ぬあつ!?

ズガガガガガ!!  
「麗日さん!萃君はもう力が入らないんだ!これ以上の攻撃はやめるんだ!!」

「まだや!逃げられる余力があるなら動けないまでやらんと嫌な予感がする!!」

「何故そこまでして攻撃をするの!?!お茶子ちゃんらしくないよ!」

「まだまともに勝負してないし、私だけ無事にいるなんて絶対に嫌や!私だつてヒーローになる人間なんや!!デク君のサポートになれていたのはいいけれど、守ることはできなかつた!!だから今度は…うちが守る番や!!」

「そつか…なら、俺も本気で行かせてもrズキツ うぐつ…!!」

「行くよ萃ちゃああああああああん!!」

ゴアアアアツ!!

「目標確認、相手飛弾数約20…両腕大破、現段階最大火力36%…最大発弾速度86%…。両腕火力20%、発弾速度最大でぶつ壊す!!」

「油断とか手加減なんてさせないから!!」

「想像換装、吹雪型壱番艦・駆逐艦吹雪…小口径主砲…12・7cm連装砲・大連射ああああああ!!」

ズガガガガガ!!

「うぷつ…!…!…!はあああああああああ!!」

「でりやあああああああああ!!」

ベキツ!!

「うぐううつ…!ドスツ!! うつ!!」

ゴオツ!!!

「ふんぬあああああああ!!」

バゴオツ!!!

最後となる巨大な瓦礫は脚で砕いたものの、俺の腕は完全に壊れて動かなくなった。お茶子ちゃんとなればかなり手強い対戦相手だと観客側は思ったらしい。

出久君は立ち直ることが出来たものの、戦闘できるような状態ではなかった。俺との一戦で一部をかなり負傷してしまっていたから。

「はあ……はあ……痛てえ……！すっげー痛てえ……！！」

「な、なんでそんなに耐えるの!?そろそろ倒れてよ!!」

「ラビットシップ……どんだけ耐久力高いんだよ……」

「無茶しすぎじゃねーか!?無個性とは言っても素手とコスチュームだけであの瓦礫を破壊するなんて普通はできねーんだぞ!?ぜってー個性持つてる!!」

「普通はねえ……」

「無個性ってこんなに強いんだ……無個性のことをナメてた自分が恥ずかしいんだけど。」

「あの女の子からの攻撃を受け続けても立ち続けるなんて素晴らしい他ないわー!ラビットシップちゃん素晴らしいわよー!」

「チツ……うるせーな向こうの奴ら……。あの無個性野郎と一発闘れると思っただが……今回もできねーなア!!」

「バクゴー落ち着け、萃と闘れる機会はまだまだあつからさ!」

「麗日君が艶星君に猛撃仕掛けているんだが……大丈夫なのだろうか……」

「オイラ……萃が心配だ……。アイツ大丈夫だよな!」

「お茶子めつちや攻めすぎてない?!萃つちがこれ以上耐えられないの分かるハズだよ!」

「それにしても……艶星のラッシュはすげえな……。普通は腕が使えない状態になるはずだが……」

「重力女と無個性野郎の戦い方、じっくり見てろ雑魚共!」

ボタツ……ボタツ……

「はあ……はあ……!!」

「うぷっ……おええっ……!!」

「無茶しすぎだよ二人共……!萃君……まだやるのかい……?」

「ま……だ……脚……が……あ……る……!!」

「くっ…！無茶されると…こつちも困るんだ!!」

ダツ!!!

「ワンフオーオールフルカウル45%オ…!!」

「目標確認…以下略省…。兔ラビットオ…!!」

「テキサスマアアアアアアアツシュ!!!」

「オーバーレック超越脚・ファースト初撃!!!」

メッリッ…

ピシピシッ

「おおおおおおおあああああああああ!!!」

「ぐっ…！負け…ねええええええええ!!!」

ググッ

「あっ…押さr」

ドガアアアッ!!!

「はあ…はあ……萃君…君の分は…僕達が背負うから…。」

この日、俺は敗退して医務室に運ばれた。

お茶子ちゃんの猛撃は無個性だと普通なら腕は消し飛んでいる筈なのだね、俺の腕や指が無くなることはなかったとしても案の定両腕骨折。

脚は罅ひびが入り、歩くことは結構めんどいやつになってしまった。数日経つたらなんか治っていたが。

「まーた医務室生活かよー！やりすぎたあああああ!」

「萃っち無茶しすぎー!」

「いつからそこにいたー!!!?」

「こつそり入って来たー☆」

プニッ

「うにゅっ…。頬っぺ摘まにやいで…。」

「無理したアンタをお説教しに来ただけどね!服溶かすよ?」

「やめてください死んじやいます。」

「あー…ごほんっ!」

「あ、常闇君。」

「邪魔してすまない、今回の勝負を見て分かったんだが…艶星、本気出

「していなかったな？」

「やっぱり勘が鋭いなあ……。出していなかったっていうより……出せなかったが正解だね。」

「どういうことー？」

「つまり、ミルコとリユーキュウのタッグと戦って治りきつておらず、本気を出せなかった……。ということか。」

「そゆこと。まあ……。言いたいことは分かるが……。すまない。本気を出せずに勝負してしまった……。」

「いや、いいんだ。俺は艶星の戦い方と緑谷に教えてもらったやり方を融合させておこうと思って勉強させてもらっただけだ。寧ろ感謝する。」

「感謝されるようなことしてないんだが……。まあ、どういたしまして？かな？」

「萃っちー！今からお説教すr」

「常闇君、すまないが……。芦戸さんを連れて行ってもらえないかね……？」

「う、うむ……。芦戸、行くぞ。艶星が痛がっている。」

ズルズルズルズル……

「ああああああああ……！」

「はふう……。ま、数日経ちやあ治るからいつか。それにしても……。芦戸さんすつげーテンションで食いついてくるなあ……。」

そして一週間続くイベントが終わって怪我もほぼ癒えてきた頃、雄英の裏側では秘密裏に計画を立てていた。

それは、俺もクラスメイトも全校生徒が知らない先生方によるとんでもない計画だった。

「対侵略者迎撃型ヒーロー……とはなんでしようか校長……。」

「元雄英<sup>元</sup>出身生徒からの情報を耳にした。いつ起こるか分からないが、予想を遥かに超える戦争が起きる。我々の住んでいる日本を侵略する国、組織が動き始めた。敵というより、侵略者<sup>インヴェイダー</sup>だね。オールマイト君に任せようとは思ったのだが……。そろそろ時期が時期だから、補助に回ることになる。」

「……と言いますと……？」

「1―A組の戦力増強のサポートをお願いしたい。特に暴走を起こしつつも敵のみを仕留めた無個性君には注視するように。あの子はよく体を犠牲にするからねえ…。」

「分かりました。艶星少年にはなるべく暴走を起こさぬように伝えておきます。」

「それと、この計画は無個性君にかかっているからね。」

「んなつ…!?ま、まさか艶星少年を…!」

「悪く言ってしまうえば彼を兵器にする。」

「当時は個性が発現しなかった時代では無個性最強と呼ばれ、二つ名で人間兵器と呼ばれたあの方と同じ運命を辿れと言うのですか!!」

「…そうなってしまいかも知れないね。彼を最大限までサポートするつもりだが…。あとは彼の気持ち次第による。」

「校長…拒否権はあるのですか。」

「…それは君に任せる。」

敵の次に出てきた厄介な敵 インヴェーダー 侵略者。

奴らは国そのものを奪い、自身の国にする連中だ。

政府も頭を悩ませていて、ニュースに載ると言えば簡単には載らない極秘の問題である。

ニュースに載せない理由としては平和に過ごしている一般人を巻き込むワケにもいかななくて、その上警戒しつつも不安に怯えながらの生活だけは回避させたいとのこと。

ま、敵がいるからそこまで不安になることはないが（フラグ）

「さあーて…トレーニングやってくかねー!」

「おい無個性!完治したなら勝負しやがれ!」

「よっしゃー!挑むところだー!」

俺達はすっげー賑やかな生活しているがな☆

## #18 海と特訓

イベントが終わって数日経ったある日、俺はミッドナイトさんの下<sup>もと</sup>へ尋ねた。

「攻撃の避け方を習得したい?」

「うん。ミッドナイトさんの武器の一つである鞭って結構複雑でしょ?だからそれを元にして突っ込みながら攻撃を避ける方法を探りたいの。」

「私目当てに来たワケじゃないの?」

「んなわけないでしょ。」

「ピキッ 酷いコト言うわねえ…!最近生意気になっているからお仕置きしてあげないとねえ!」

パシンッ!!!

「ひえっ!?!」

「今謝ってくれたら許してあげるわよ♪」

「ごめんなさい許してください何でもしまさ」

「ん?何でもするって言った?」

「何でもしません。」

「よし許さない。」

寝かされました。

しかも何故か彼女も俺に抱きついたまま寝ていました助けてください。

ちなみにミッドナイトさんの寝顔が可愛くてそのままの状態でした。

…ワケないでしょ!?!もぞもぞと抜け出そうと試みたんだけど、彼女の腕のみならず、脚でガツシリとホールドされていて抜け出せませんでした。

(ふふっ、可愛いわあ〜♪顔を真っ赤にしながら抜け出そうとしてる…♪ちよつとイタズラしちゃおうかしら♪)

ギチッ…!!!

「んぶえっ!?!」

「すう…すう…んー…。」

「あつ…ちよつと…お、起きてツ…!？」

(本当、彼氏にしたいわね♪まあ…ダメだろうけど…。)

チュツ

「あうつ…うう…頬つぺにちゅーされたあ…。」

「んー…あら、おはよ♪抱き枕にしちゃってたわ♪お仕置きはこういうことだから、もしされたくなければ言葉を選ぶことね…ふわあ…。」

「もうお嫁さんに行けないよおお…。」

「私がいるじゃないの♪」

「冗談はよして!？」

「むう…ケチいゝ。」

「とりあえず早く特訓させて欲しいんだけど！眠らされたせいで数時間無駄にしたんだけど!？」

「分かったわよ。だけど…手加減はできないからね?」

「うん。」

「それと、私のことはお姉ちゃんって呼んで?」

「ふあつ!？」

「呼び方がやっぱりぎこちないでしょ?だから私のことはお姉ちゃんって呼んで?」

「わ、分かったよ…お、お姉ちゃん…／／／」

(照れ顔可愛えええええ!!)

「んで、早く特訓させてくれます?!」

「もちろんよ♪だけど、厳しくいくわよ?」

「はーい。」

めっっちゃユルい返事したらビンタ喰らった。めっちゃくちや痛い。

DSモード発動したお姉ちゃんはすっごく怖い。

俺がビビって怯んでいるところを舌なめずりしてニンマリした表情をしているのが俺にとって恐怖でしかない。

「さあ…特訓開始よ!!」

ビシユツ

「ぬあっ!？」

「避け方が汚い!もつと綺麗に避けなさい!」

バシインッ!!!

「わつとと…。ふんぬっ!」

「ほらほら休んでいる暇ないわよ!!」

バチンッ

「づっ!!」

(ヤバいわね…すつごく虐め倒したい…!治まらないわ!!)

「待つて待つて待つて!!お姉ちゃん激しすぎだつて!!」

「避けている貴方の避け方が重いからよ!!」

「俺重くないもん!!」

「そつちじゃなーい!!」

3時間後。

「はあ…はあ…まだまだ行けるわよねえ!」

「いちちち…お姉ちゃん、ちよつと休憩しよ?避ける俺よりもお姉ちゃんの方がだいぶ辛そうだよ?」

「私に歳だからつて言うつもりじゃないでしょうねえ!!」

「ち、違うよ!?!ただその…お姉ちゃんの腕にすごく負担かかっているから少しは休憩した方がいいかなつて思つて…。」

(何この子優しい襲いたい。)

お姉ちゃんは多分肉食系ですなハイ。

休憩中に俺の頭を撫でながらすつごくニッコリしてた。

え?その笑顔にキュンッと来てないのかつて?めちやくちや来てるし、肩に寄せられて眠らされると思つていますよ?だけど彼女は俺を眠らすことはなく、話をかけてきた。

「萃ちゃん、私ね…正直心配なのよ?」

「どゆこと?」

「貴方怪我しすぎだし、身の程知らず。その上自身の体を犠牲にしてまで敵に挑んでボロボロになつて帰つてきて…いつ死んじやうんじやないか不安になつているのよ?」

「あ…。」



「心当たりあるのは分かっているでしょ？」

「うん…ごめんなさい…。」

「いいのよ、分かっているだけでも。だけど無茶はしないで？私が貴方を虐められないから。」

「そっち!？」

「萃ちゃんしか虐められないもの!!他の生徒をいじめたらパワハラで訴えられちゃうでしょ!？」

「むう…やっぱりお姉ちゃんってちよつと曲がってる…。」

「何か言った?」

「イエナニモ。」

「その怯えた表情大好きよ♪」

「むぐぐ…お、お姉ちゃんそろそろ特訓再開しよ!?!なんか付き合っているような感じがして怖い!!」

「えっ!?!付き合っているんじゃないの!?!」

「寧ろいつ付き合うって言ったの!?!」

お姉ちゃんに心配されるのは確かに嬉しいけれど、付き合うなんて一度も言っていないよ?俺氏困惑だよ?

結局この日は合計7時間程特訓したのだが、まだ足りなかったのとある仕込みをして明日にまた特訓開始しようと考えていた。

そこで翌日の休日。

「よし…これなら動ける範囲だけといけそうだな…。」

「萃ちゃんー!海行くわよー!」

「なんで!？」

「そっちの方が脚力鍛えやすいでしょー?」

「急に言われても着替え持ってきて」着替え要らないから早く来なさい!」わーったよ!!」

海行くことになった。急すぎます。

ちなみに彼女は水着の姿になっているのだが、俺は水着無しで特訓再開することに…。

お姉ちゃんすっごい自由気まままで気まぐれすぎるけれど、お姉ちゃんらしいことをするから憎めないし可愛いんだよなあ…。

「さーで、着いたわ！私のお気に入りの浜辺よ！」

「…とりあえず特訓させて？」

「えーっと…貴方の水着はこれね。」

パスッ

「ぶっ…んんん??お、女物の水着…!?」

「ちなみに私によ♪」

「着んわ!!」

「着なさい!!!」

「やだ!!」

「襲うわよ!!!」

「やめて!!」

「力づくで着させるわよ!!」

「やれるもんならやってmパシッ ああああああああ!!!」

無理矢理着替えさせられました。辛い。

ちなみに下も脱がされるところだったが、必死こいて死守して自分で履きました。お姉ちゃんはすっごく沈んでたけれど、俺の姿を見た時にはすっごく明るくなって息を荒くしていた。

「か、萃ちゃん…すっごく可愛いわ…!!涎が止まらないわねえ…!!」

「恥ずかしいから見ないで！」

「恥ずかしさのあまりに女の子になつてるのも可愛いわあ〜！ねえ、

一回だけでいいから襲わせて!!」

「趣旨変わってない!?早く特訓しよ!」

「違う特訓もあるわよお!!はあ…はあ…!!」

「お姉ちゃんが襲いたいだけじゃん!!!」

「いいじゃない別にー!!」

「よかねーよ!!」

「抱きつかせてえええええ！」

「いやあああああああ!!!」

ガッ

「あっ…!!」

「ちよっお姉ちゃんほわああああ!」

ドサッ

本当にミッドナイトさんなのかと疑う俺。

イチャイチャカツプルかのようにお姉ちゃんにいじられたり、逃げる俺を追いかけようとしたものの、お姉ちゃんが勢いよく躓いて俺を巻き込んで転んで倒れた。

「うう：萃ちゃん大丈夫あつ。」

「んむむむ：ぐるゝじい：。」

「か、可愛い：：やつぱりこのままにしておきたいくらいだわ：！」

ググググ：

「んゝむゝむゝむゝむゝ：パッ　ぷはあっ!!お、お姉ちゃん苦し

いよ!?!なんで押し付けたの!?!」

「虐めたかったから♪」

「本当ドS：。」

「いいじゃない♪せっかく二人きりになってるんだしい♪」

「も、もう：：とにかく早く特訓しよーよ！時間がなくなっちゃう!!」

「しょうがないわねえ：傷ができてても文句は言わないでね♪」

「無理矢理着せたお姉ちゃんが言うかそれ!?!」

ドゴオオン!!!

「ほわっ!?!」

「萃ちゃんと海に来れたのに敵が来るとか有り得ないわねえ!!空気読みなさいよ!!」

特訓を始める前に敵戦が始まってしまったお☆

しかも水着姿且つ女物の格好で○

## #19 特訓とは（哲学）

「お姉ちゃん、敵ってアレなん？」

「らしいわね。多分ナンパに失敗して投げやりになったバカね。」

「あー…たまににいるよねー…。ナンパに失敗して暴言を吐くクズとか人の目気にすることなくナンパするバカとかしつこくナンパした挙句ストーカー行為と見なされて\*ワツパかけられたりする奴。」

\*ワツパ⇨手錠

「へいへい姉ちゃん達遊ぼうぜえええええ!!」

「いやああああ!!キモイ!消えろ!死ねええええ!!」

「イケメンな俺にそんなこと言うなんて酷いなあ〜!カラダで教えてあげようかああ!?!」

「きやああああああ!!」

「ええ加減にしやがれボケクソがああああああ!!」

バキッ!

「ごふっ!!」

「ひゃああっ!?!」

「よっ!!」

ポスッ

「あ、ありがとおお…!怖かったよおお…!」

「お姉ちゃん、この人を安地に避難させといて。他のヒーローが来るまで時間を作っておく。」

「ダメよ、また萃ちゃん怪我するわ。」

「大丈夫、今度は怪我しないから。」

「そう言っって何回何十回怪我してるのよ!ここは私に…!」

「違うんだよ!!」

「な、何がよ!!」

「あの敵はかなりヤバいんだよ!お姉ちゃんの個性は室内での戦闘に向いているけれど、ここは潮風が強くて一般人を眠らせて被害を生む!!その上、一本鞭やバラ鞭じゃ対応しにくいやつなんだ!」

「なんでそこまで分かるのよ!」

「奴の感触に違和感があったんだよ！」

「いつてえなあ…！誰だあ？イケメンな俺の顔に傷を付けた奴はあ！！」

「あーもー！起き上がっちゃったじゃん！！とりあえず見てなよお姉ちゃん！！」

「…おつひよおおおお！！ナイスバディな姉ちゃんが二人追加されてんじやーん！俺と遊ぼうぜえええええ！！」

「きめえ…お姉ちゃん、やっぱ殺るわ。キモすぎて吐き気する。」

「そうね…半殺しにしてやりましょ。避難させてから向かうわね。」

「そんじや頼みます。」

俺はふと思った。

二人??まさかな…?と思いつながら戦闘態勢に入った。

お姉ちゃんは被害者を安地に避難させに行ったが、厄介なのは敵の特徴であります。

女好き、ナルシ、やべーやつ、お餅の個性持ち。餅だけに。

「可愛い貧乳の姉ちゃん遊ぼうぜえええええ！！」

ボンツ!!!

「のわっ!!」

モチヤツ

「…うん??」

「なんで躲すんだよおおお！女のクセによおおお!!」

「あー…すっげーめんどくs今さつき俺のこと女って言ったか？」

「わりーか!!」

「わりーに決まってるだろのボケクソがああああああ!!」

「ぎゃあああああああ!!!」

数分後…

「ごほっ!!ど、どうなつていやがるんだ…コイツの個性は…!」

「うっせ、お前は俺を女だと認識していて分かっていなかったようだな。俺は無個性の男さ。」

「お、男…だと!?!その見た目でか!?!」

「付いてるの分からんか?お前の目エ節穴なんか?」

「お、つぶ…こんなに可愛い男がいるなんて…それも…いい…ツ!!」  
ガクツ

「あ、死んだ気絶した。」

「萃ちゃん！戦況はどうなったもう終わったの!?!」

「あ、お姉ちゃん。んとね、終わっちゃった。俺を女だと認識していたけれど、男だと分かっててもそれでいいって言って死んだ気絶した。」

「死んだの!?!」

「あ、そっちの死んだんじやなくて気絶の方。」

「処理が早くて助かるには助かるけれど…怪我してないわよね？怪我したらお仕置きだからね？」

「し、ししししてないよ!?!?」

「怪しいわねえく？ちよつと見せてみなさい！」

「いやああ!!お姉ちゃんがセクハラしてくるよおおおお!!」

「してないわよ!!ほら見せなさい！」

「そんなことより早くコイツを連行してよ!!」

敵は連行されたものの、お姉ちゃんには相変わらずもみくちやにされてぐったりしていた。

怪我はそこまでしていかないのだが、いつも怪我するからそういうこととするようになるのかなと感じて気づいた。ちよつと反省。

ちなみに特訓再開したのは2時間後だったという…。

「萃ちゃん、怪我していなくても体はキツチリ見させてもらうからね?」

「なんで?!」

「いつも敵戦で怪我しているからでしょ!?!」

「だからって体をお姉ちゃんに見せるなんて嫌だよ!?!」

「裸にしてとか脱いでとか言わないわよ?!折れていても無茶するからその確認をするためよ!?!」

「あ、そっち?!」

「貴方が変なこと考えているじゃないの!!」

「お姉ちゃんがそーゆーことしてるからでしょ!?!そんなに怒らないでよ!?!」

「怒らせているのは貴方ですよ!?毎回怪我して戻って来てるのは何処のおバカさんよ!!」

「ごめんじゃしい!!」

「分かれば良し!!」

ナゲナゲ

「あふっ…。」

(可愛いから頬っぺスリスリしちゃおっ。)

スリスリ

「ぷえあっ?!」

「萃ちゃん、このままハッテンして「それはダメですよ!」じゃあキスだけ!!」

「じゃあじゃないよ!?っってお姉ちゃん聞いてる!?待って待って分かったからキスしようとしなくてええええええええ!!」

何とかキスは免れたのだが、にゃんこの如く持ち上げられたまま帰宅した。ちなみにお姉ちゃんが無理矢理俺をお姉ちゃんの膝の上に乗せて来てすぐさまシートベルトをされ、助手席に乗せてくれませんでした。

「ねえ萃ちゃん。」

「なーにー?」

「萃ちゃんって獣<sup>ビースト</sup>モードになったら髪型と髪色が変わるでしょ?」  
「うん。」

「あれって個性に入らないの?」

「入らないみたい。俺の中に二人いるの知ってるでしょ?」  
もう一人の自分とは違ってその獣<sup>ビースト</sup>の姿がアレなの。兎ちゃんなの。「もう個性じゃないそれ。」

「そうなんだよね、だけど病院では俺の個性因子が完璧に0だって言われてんの。先生も一件もそういう例がないからって言っただけで、すっごく困惑してた。」

「ま、萃ちゃんの遺伝子は凄く特殊なものだからね?」

「どゆこと?」

「なーんも?」

「えー!? 教えてよお姉ちゃん! 気になるよー!」

「だーめっ! 貴方が知るにはまだ早いのっ!」

「むー! けちー!」

「かーわいっ♪」

帰り際もめちやくちやイチャイチャしてたわ。

カップルかっつてくらいにイチャイチャの度合いが強すぎるし、怪しまれるどころか熱愛報道されるレベルだと思うんですがそれは○

家に着いた頃には俺の髪はすっごいもっさもさになっていました。

お姉ちゃんにめちやくちやわしやわしやされたからねしょうがないね。

「お姉ちゃん、俺の髪どーしてくれんねん。」

「あははは…ごめんごめん♪」

「お姉ちゃんももっさもさにしてやろうかあああああ!」

「その前に眠らせるッ!!」

「ほわあああああああああ!!!」

眠らされた。

翌日。

「萃ちやーん! 朝よー!」

「んゝゝ…眠い…」

「全く…スイーツ食べに行かないのー?」

「そんな気分じゃない…」

「はあ…お布団に入るわよー?」

「やだ。」

「むっ…。それえええ!!」

ガバアツ

「ぶっ!!」

「はあああああいい匂い…♪萃ちやんって本当女子ね♪ベリー系の甘酸っぱい匂いが好きなのね♪」

「あー…もー…好きにして…」

「それじゃそうさせてもらおうわ♪」

体がバキバキで動けなくて寝込んでいたのに、お姉ちゃんが俺の才



フトウン（お腹辺り）へダイビングしてすつごく死にかけた。

ちなみにダイビングされた後ポカポカ叩いた。反撃のビンタ喰らった。

痛かった。

「お姉ちゃん痛い。」

「いきなり叩くからでしょ？」

「お腹にダイビングされると流石に反撃するでしょ!？」

「器が小さいわねえ…。」

「それとこれは別でしょう!？」

「まあ痛かったらごめんね？お詫びに何かするわよ？」

「あ、それじゃなでなでしてほしい。」

「それだけでいいの？」

「うん。」

ナデナデ

「えへへ…／／／」

「たまに子供みたいになるのは狡いわよ？襲いたくなるじゃない。」

「襲うのはやめて？」

特訓はまだまだ続くけれど、お姉ちゃんとの関係はめちやくちや訳ワカメな関係ですはい。

まあ一つあるとしたら完全に付き合っていると思ひ込んでいますな。

俺は付き合っつてすらいないし、上と下の関係くらいしか見ていないんだけど…これマジでどうしたらいいんですかね？

と考えさせられながらまったりと一日を過ごしました。

## #20 先生VS1年A組

寮にて…。

「はあ!?先生と対決!」

「うん、またなんだ…。」

「やだやだー!もう先生と戦いたくないー!!」

「あちやー…子供になつてん…。」

「おーい!今さつきすんげー声が聞こえたぞー?」

「あ、切島君!」

「おつ、艶星もいんじゃない!今日は珍しく寮にいな!」

「まーね、別に遊び歩いているワケじゃないからね?」

「そりや分かつてるさ!んで、先生との対決第二弾で驚いたつてワケだな?」

「お察しが良いようで。」

「萃君はもう存分に力の差を知ったからもうコリゴリだつて言つてたから…。」

「だつてあんなの作戦練つたところで確率が高くて半々だからね!?!」

「それだけでも十分だよ。勝つことが目的じゃないからさ。」

「あ、そつか。」

(( (凄いい早さで納得した…! )) )

組む相手は芦戸さんなのだが、何故か男子と組むことが少ないのが変だと感じていたが俺と組みたい女子がめっちゃくちや押し寄せて来ていたらしくて、やむを得ず組ませることになったとか。

対決相手はセメントスこと石山先生だ。

触れたコンクリートを操る個性で、場合によってはめっちゃくちやキツイとのこと。ちなみに戦うつていうより先生に触れば勝ちらしいです。

話聞けよ俺氏 ( )

数日後。

「萃っちよろしくねっ!」

「ごちらこそよろしくね芦戸さん。」

「萃つちと一緒なの嬉しーっ！抱きしめていいーい?!」

「言う前に抱きしめてるじゃにゃいの…。」

「えっへへ〜♪」

「さて、どんな攻撃を仕掛けてくるか…お手並み拝見としようか。」  
「始まりました。」

俺はちやんとやっていけるか不安でしかなかった。

だって抱きつかれたまま石山先生を探してるんだよ？大変なので  
すよ？可愛いからしようがないけどさ？

「ねえねえ芦戸さん？」

「なにー？」

「芦戸さんの個性って酸だよね？」

「そーだけど…どしたの？」

「戦闘時にその酸を俺の手に纏わせてほしいの。」

「なんで!？」

「まあそれはその時に見せるよ。…つと石山先生がいたね。」

「来たか…珍しい組み合わせだね。私も少々苦戦するかも知れない  
な。」

「まずは…素手でコンクリの硬さを確かめるかっ!!」

シュツ!!

「でりやああああああああああ!!!」

「なるほどな…!」

ズドドド!!!

ボガアツ!!!

「あ、やべっ。」

スツ

「萃ちゃんどうだった？」

「やっぱ素手じゃ無理☆」

「だよねー！もう手から血イ出てるし!」

「よーしアレお願い!」

「おっけー!…っとなるわけあるかああああ!!」  
バシヤアツ

「にやーにしてくれてんのおおお!!」

「右手から血出てるのに纏わせるわけないでしょー!!」

「左手あるでしょー!!」

「それでもダメ!!」

「なんでさー!!」

「萃ちゃんをあまり怪我させないよーにするためだから!」

「もう俺怪我しちゃったよ!」

「仲間割れしてる場合かねっ!!」

ズドドドドドドド!!

「ああああああああ!!」

芦戸さんはどうやら先生にお願いされたいらしい。

絶対お姉ちゃんが言ったやつだなこれ。

芦戸さんは個性を上手く使いこなして滑るように着地をしたのだが俺は個性すらないので着地はおろか、転がってすっ飛んでいきました。

ちなみにぶつかるとはなかったのだが、芦戸さんにキャッチされてから気づいたけれども、お姫様抱っこされていたのは恥ずかしかったです。

「えっへへ♪お姫様抱っこしちゃった♪」

「とりあえず顔を真っ赤にするのはいいから前見てえええええ!!」

「そおれっ!!」

ジュワアアア…

ビジャツ

「ぶえっ!俺にもかかっちゃったっていうかコスが溶けてるんだけど!?!」

「ごめん!量が多すぎちゃった!!」

「謝ってくれたからヨシ!!」

「ふむ、一時戦線離脱か…私の個性を試したのだな?」

一方、俺達の戦闘を見ている側の部屋では…。

「うう…芦戸さん羨ましいですわッ…！艶星さんをお姫様抱っこするなんてっ…!!」

「萃が寝ている時にヤオモモはいつもお姫様抱っこしてるでしょ？」

「ううっ…！そ、そう言われましても…。」

「俺のシュガーラッシュと相性合いそうだな。今度手合わせとかしてみてーな！」

「そーいや俺、萃にお願いされてたことあつたわ！忘れてた!!」

「ん？上鳴君、それってどんなお願い？」

「萃が帯電してみたいって言ってたんよ。」

「またとんでもないこと考えてるよね萃君!!」

「萃らしいやり方だわ。」

「無個性野郎の言うことだ。あのままの状態じゃ面白かねえってこつた!!おいデク！今度勝負すつぞ!!」

「急すぎない!？」

（艶星少年…色々試しているみたいだな…。元無個性の私でさえ思いつかない方法を生み出すとは…流石だ。だが、彼は無茶をするが大丈夫なのだろうか…。）

俺視点にモドール。

「萃っち！何度言ったら分かるの!？」

「だーかーら！一回試さないと分からないでしょー!？」

「それがダメなのー!!いつも怪我するからあまり戦わせないでってミッドナイトに指示されたのー!」

「やつぱりかあああああ！後でお説教してくrバツ もごおっ!？」

「静かにつ！石山先生が近くにいるっ！いきなり口塞いじやつてごめんね…？ちゃんと聞いていなかっただけれど…萃っちの作戦ってどういうものなの？」

「ぶはっ！えつとね…まず俺と芦戸さんでもう一回石山先生と戦うでしょ？その時に俺が攻撃を仕掛けると多分防壁を張るから、その時に俺が下がって芦戸さんの攻撃を数発でいいから連射しながら俺の左手に酸を纏わせて欲しいの。」

「萃ちゃん、私の酸は濃度的に操れるとしたら結構幅が広いから教え

てくれない?」

「コンディショナーくらいの濃度でお願いできる?」

「分かった、それで…その後はどうするの?」

「俺は獣モードになって石山先生の背後を狙う。先生は反応が早くても同時展開は遅くて三秒程で完璧に塞がれるけれど、上手くいけばギリギリでタッチできるかも知れない。もし芦戸さんが行けそうだったら俺に構わず自分で考えた作戦で先生をタッチしてほしい。」

「ん…アタシからもいい?」

「いいよ?」

「アタシの酸で先生の足元全体を溶かせば早く済むんじゃない?」

「あつ…。」

「あれ?!何で涙目になってるの!?だけどやっぱ可愛いな!!」

「俺の練った作戦が泡沫となっちゃった…。」

「ごめん!今さっき思いついたからさ!!」

「大丈夫…だけど落下時間考えるとちよつと厳しいから死角のある高さから突っ込んでいい?」

「あ…鷹みたいに突っ込む形ね?いいよ!その時に合図送るからよろしく!」

「うん!」

作戦は一気に変わり、芦戸さんの作戦に変えた。

俺の作戦は慎重になりがちだからかなり遠回りした。

もちろん泣きました。撫でられました。

作戦通りに芦戸さんは先生の前に立ち、俺は獣モードで少し離れた建物の二階にスタンバイし、距離からしたら93m程離れた位置で死角となる場所に入った。

「おや、艶星君は何処に行ったのかな?」

「萃っちは先生でも考えられない所にいますから!」スツ

「むっ…!彼が不在ならば都合がいいものだねっ!!」

ドドドドド!!

「濃度96%!アシッドマン!!かーらーのおおお!!」

ビツ!!

(来たッ！脚部出力153%…標的確認…よし！)

「マズいな、避けるしかないか。」

「アシッド・ウエーブ!!」

バツ!!!

(ふむ…これは厄介だな。私からしたら相性が悪く、芦戸君からしたら相性がいい形だ…。それにしても艶星君は何処に…?)

ヒュッ!!!

「艦上攻撃機・九七式艦攻!!!」

「なるほど…！よく考えたものだ!!私の死角からの位置に居たわけか!!だが、これはどうかなっ!!」

ピタッ

ギョルルルッ!!!

「その防御壁は対策済みですよ先生!!」

「アシッドレイン!!!」

ジュッ

(くっ…中々やるじゃないか。芦戸君の個性で半個体の酸性雨を降らせ、私の防御を弱体化…艶星君は無個性とは思えない程の速度で的確に私の位置を狙ったのか…。)

ジッ

「ううっ…！でえりやああああああ!!!」

バガアアッ!!!

「ここまで成長していたとは…！これは少々悔っていたようだ!」

「タッチいいいいいい!!!」

石山先生に触ることができ、勝つことができた。

喜んだ芦戸さんが抱きついてきてめちやくちやもみくちやにされた。

クラスメイトにも褒められたりなでされたりされたりしたが、ここ雄英に  
来てここまで言われることがなかったからすっごい照れた。

だけど俺は芦戸さんの作戦があったからこそ上手く行けたと言っ  
たらまたもや撫でられまくった。

ちなみに撫でられすぎて髪が大変なことになった。

「あれ？そう言えば萃君。」

「なんじやらほい？」

「髪の色戻ってなくないかな…？」

「えっ!？」

「本当だ！萃つちの髪色が戻ってない！しかも兎耳!!」

「どゆこと!？」

「まだ獣<sup>ビースト</sup>モードになってる状態じゃない？」

「いや、元の状態になってるんだが…。」

「あ、目見たら確かに元に戻ってる。獣<sup>ビースト</sup>だと赤目だもんね。」

「うん。ちなみに赤目に気づいたのら特訓していた時に最近知ったの。」

「艶星さん本人が気づかないとダメじゃないかしら!?!だけど…これもこれで可愛すぎますわ…!」

「なあ艶星。」

「なしたの焦凍君？」

「触ってもいいか？」

「いいよ？」

サワツ

「お、おお…なんだこの…なんだ？」

「轟が語彙力を失ってるぞ！艶星何したー!」

「俺何もしてないよ!？」

「にしてもなー…オイラ、艶星の凄さに憧れるなー…。」

「なして？」

「オイラは艶星みてーにあんなにはなれねーからさ…。」

「んなことないよ？峰田君だって中々いいものあるっしょ？」

「そーか？」

「うん。峰田君の個性は攻撃には不向きだけど、敵側からしたらめちゃくちゃ厄介だと思うんよ。ゲームで言えばめちゃくちゃ凄いデバフ要因。」

「例えが分かりやすいな。艶星、峰田の個性はシンプルでも強くさせることはできるのか？」



「できるね。実践するとまた凄いことできるかも知れないよ？」

「マジか。」

「おい無個性、話がある。」

「どしたの爆豪君？」

俺は爆豪君に呼ばれて二人きりで話すことになった。

しかも二人きりで話をした内容が衝撃的且つ何故知っているんだというくらいの内容だった。

あ、ちなみに獣<sup>ビースト</sup>モードを解除しても姿が変化しないのでこのままの姿で生活することになりました。

## #21 計画

「無個性、お前限界知らねーだろ。」

「限界って言葉そのものを忘れてた。」

「バカかお前！」

「ごめん…。」

「んなことはどうでもいいとしてだ!! 本題だ。」

「？」

「お前、てつみね鉄嶺てつみねって知ってるか？」

「じいじのこと?」

「…は?」

「え?」

「再度聞くぞ? 隻 鐵嶺だぞ?」

「ん? じいじのことでしょ?」

「てめえ…。」

「どしたの?」

「なんちゅーもんを隠してたんだ!!!」

「どゆこと?」

「お前のじーさんのことだ!!」

「???」

「ダメだコイツ! 話になんねー!」

爆豪君に話があると言われて二人になったのだが、俺はアホの子のような顔で? を浮かばせていた。

正にその通りだ、俺の祖父である隻 鐵嶺という者をよく知らないのだ。祖父のことを知っている者は極僅かであり、爆豪君はその話が多またま耳に入っていたのでこっそりと校長室の前で聞いていたのだ。

「お前のじーさんが何をしていたか聞いてねえのか?」

「うん、あんましね。ただ戦争に駆り出されたって話しか聞いてないね。」

「他は聞いてねえのか?」

「うん。」

「お前のじーさん自体隠していたつもりが知らぬ間に出ていたわけか…。聞かなかったことにしろ。」

「なんでなん?」

「ちつ…これ以上言ったからには言うしかねえか…。お前のその持っている力を雄英<sup>こへい</sup>で利用しようとしてんだ。インヴェーダー? つて連中の対策としてお前が選ばれていた。」

「インヴェーダー…侵略者ってことか。やっべえ面倒事になりそうだな…。」

「はあ!? てめえどーゆーことだそれ!!」

「暇潰しに敵を捕まえていたらね、日本を乗っ取ろうとする連中がちらほらいんのよ。しかも見つけたアジトでたまたまその計画を目にしたんよ。しかも敵のほとんどがアジア系の外人だったよ。」

「お前の暇潰し感覚で敵を捕まえること自体おかしいだろ!! つーか俺の話した内容よりもっと重大な情報じゃねーかよそれ!!」

「あ、マジ?」

「マジだわボケ!!」

「んで、そこで聞いているのは相澤先生ですか?」

「!？」

「…察知能力が高すぎだろ艶星。個性持っているだろ。」

「たまたま気配を感じただけですよ。うちのじいじの話をしようとした辺りからいましたよね?」

（艶星…お前は無個性とは言え、五感がかなり研ぎ澄まされているな…。）

「もしかしてですが、先生方全員知っているんですね? この話そのものを。」

「ああ…そうだ。」

「何故…俺なんですか?」

「お前の祖父、隻 鐵嶺の孫である上に相当な力を持っているからだ。」

「あんまし期待しないで欲しいのです。」

「もちろんだ。お前の強さはクラスメイトと関係しているからな。お前のサポートはいるから安心しろ。一人ではやらせねえよ。」

「お前が暴走しても俺が爆殺させてやっかん!!」

「爆殺はやりすぎじゃない?」

「とりあえずそーゆーこった。まだタイムンしてねーし、先に斃くたばつたら許さねえぞ。」

「わーってるよ。」

爆豪君、俺、先生達しか知らない話になった。

当日がいつになるかなんて誰も知るわけがないし、分かるまで全く分からない。その上、襲撃だっけいつ来るのかさえ分からない状態だ。

今日であればすぐに対応しなければ秒で混乱になりかねない。

俺は敵陣に突っ込むけれど○

「おい。」

「ん?」

「お前は何故無個性で雄英こごに入ろうと思った?」

「んー…分かんね。」

「はア!?!」

「いや、理由はあるだろうけど…なんか分かんない。」

「ヒーローになる為じゃねーのかよ!?!」

「なる為なんだけど…なんでだろ…思い出せない。」

「…まあいい。お前が思い出すまで待っていてやる。今の状態だとモヤモヤしかしねえからな。」

「すまんね。」

「あ、いた! かつちゃん何処行つてたの!?!」

「うっせえ! お前にや関係ねー話だ!」

「萃ちゃん何か言われた?」

「んーん、ふつつーに内緒話だよ。何か言われたって言われても酷いことすら言っけなかつたよ?」

「か、かつちゃん…いつからそんなに丸くなった…?」

「う、うっせえ!! そんなん別にいーだろーが!」

「爆豪、丸くなったな。」

「最近そうだよね。」

「オイラもそう思う。」

「お前ら、雑談は後にしろ。とつとと始めるから次出る者は準備するよように。」

次々と対決していき、個性を活用した技の組み合わせを考えたりしていた生徒もいたが、皆の結果としては五分五分といったところだった。

個性の組み合わせには相性があるが、上手く使いこなせば相性が合わない個性同士でも飛躍的に変化することも。例とするならば轟君、彼は氷と炎の二つの属性を持った個性だ。

実践でドライアイスに熱を加えて爆発を起こすことができるし、自身の現段階の限界まで超高温と超低音にすることにより、超火力を引き出すこともできる。だけどやっぱり個性にはデメリットは付き物で、体を物理的に壊すくらいの火力を引き出すから、本人の状態によるとのこと。

「そーいや、緑谷と麗日と艶星で急に現れた敵を捕まえたんだってな？」

「あえ？切島君聞いてたの？」

「ああ、ミッドナイトから聞いたけれど、敵の個性がかなり厄介だったらしいな？」

「うん、確かね…物理的に触れられたら個性を無効化される個性だったよ。切島君だったらかなり苦戦していたと思う。」

「うっわ相手にしたくねえ！ソイツ無敵じゃねーか！どーやって捕まえたんだ!？」

「間接的な攻撃方法と気合い。」

「気合いで片付けたぞコイツ。」

「出久君の個性も無効化されていたから、最終的に二人で敵を力でねじ伏せた。お茶子ちゃんも凄く活躍してたよ。てか、お茶子ちゃんがいなかったら多分連携取っていたとしても時間がかかったと思う。」

「いやスゲーわ。艶星、今度タッグ組もーぜ！」

「もつちーあ、上鳴君との用事終わってからで大丈夫かな？」

「おうよー」

数日後。

俺は上鳴君にお願いしていたことを試みていた。

個性は持たなくても、多少は溜め込みができるんじゃないかなと思っただので、思いつきで試しているのだ。体内帯電を。

「艶星、本当に大丈夫か？」

「うん、最初は微弱からお願ひしてもいい？」

「もし痛かったりしたら言えよ？俺こういう調整すつげー苦手だからよ。」

「おっけ。その時は言うよ。」

「よし、行くぞっ。」

パチパチッ

「んっ…結構来るもんだね…。」

「一応これでも弱くしてるからな。もうちよい上げつか？」

「うん、頼みます。(コイツを体内に溜め込むイメージを作って…。)」

バチバチバチバチッ!!!

(あれ？艶星…耐えすぎじゃね…!?なんか急に耐性が強くなってんぞ?!)

「ん…ん…ぱはあああああ!!一旦休憩しよつか!!」

「へ？お、おう…。つか艶星大丈夫か？」

「ん？何が？」

「何がって…急に耐性付いたからだよ!!普通だったら悲鳴上げるくれーやべー火力なんだぞ!!」

「あ、マジで!？」

「コイツやべー!!なんかスゲー奴見つけたんだけどおお!?とりあえずどーだった!!？」

「うん、溜め込むイメージは作ったけれど中々溜め込めないね…。溜め込んだ電気が漏れちゃう。」

「お前多分アレじゃね？器がねえから漏れてるんじゃないかな？」  
「器？」

「そ、器。俺は今のところ130万Vまで出すことはできるが、そんなに一気には出してねーんだ。器から取り出すような感じで使っているからな。」

「ほほう…なるほど…器か…。んー…あ、なるほど分かった。イメージで作れた。」

「お前覚えが早すぎだ!!てか、艶星つてつえーのにまた強くなつてどーすんだ?。」

「いんや、俺はまだ弱いさ。力が強くなっていたとしても、心が弱けりやただの強がりなんだ。皆は痛かろうともそれは二の次にして目標や目的に立ち向かっているのに俺はまだ痛くないフリをしたただの痩せ我慢さ。まだまだスタート地点には立っていないんだよ。」

「そんなことねーよ艶星。」

「なんで?。」

「俺はバカだけだよ、お前には力以外にも強いところは十分あるぞ。聞いただけなんだけどよ、もう既にお前にファンがいるらしいじゃんか。お前の影響が強いおかげで無個性の人とか無個性の子供達にすっげーいい影響を出したんだってよ。お前には人を動かす力があるんだ。緑谷と同じくらいすげーよ。」

「…俺には実感が無かったけれど、既にそこまでいったのね。だけど俺はもつと上を目指すよ。暴走しないようにね。」

「だな!あ、お前はこういう感じで使うんだ?。」

「これは追撃で使うつもりだよ。イメージはついてる。」

「一応サンドバッグはあるから試すか?。」

「うん、試す。」

俺は上鳴君の電気で耐性を作り、帯電することに成功。早すぎですね。

サンドバッグも用意はされているが、壊してしまいそうで少し不安なのだが。まあ、不安ながら前に立って構えた。

「しゅうう……っ。」

(見たことねえ構えだな…。たまに見かけるけれど、格闘技でもこんな構えは見たことねえぞ…。)

「脚力強化65%、腕力90%…追撃火力200%、その他調整…標的確認。仮 独創型零番艦 クウハク…二連…!!!」

シュバツ

「…早くね?」

「電磁砲ツツ!!!」

ビシヤアアアンツ!!!

パラパラ…

「……………は?」

「ごめん…壊しちゃった。」

「んーと、まず何が起きた?」

「イメージ通りにやったらこうなっちゃった。」

「いやそーじゃねーよ!?!なんであんな早くなんだよ!?!」

「まず脚に帯電した電力65%を付与させて脚力上昇させて、腕本体には力を入れずに電力にほぼ任せて腕に電力を束ねて纏わせて二連撃を高速でぶち込んだ。」

「バカでも分かるけど、最後のやつは雷槍みたいなやつだな?てか見えなすぎだし、どんだけイメージを出してんだよ…。そーいや、さつき言ってた名前って一体なんなんだ?」

「アレは練習用として使う名前。どれに付けるかは技を発動したあとに決める予定かな。」

「付ける…?」

「うん、初めてやることだけどね。俺には艦艇の種類を色々使うから、その内のどれに組み込もうかなって…多分拒否反応起こすかもだけど。」

「ぞっくり言うとか?」

「筋肉ぶっ壊れる。」

「うんやめとけ。」

「あい分かった。」

上鳴君に注意されたのであまり新しい技を組み込むのはやめておこうと思った自分がいたが、結局入れました。

ちなみに常時の俺には使えないので、もう一人の自分<sup>ライ</sup>に無理矢理組



み込んだ。珍しくめちやくちや抵抗してた。

一見平和的に見えるが、裏では敵がとんでもねえ早さで計画が立てられており、死柄木達とは全く違う勢力 インヴェーダー 侵略者の連中が動いていた。

## #22 襲撃ふぃーばー

とある休日…。

「おーい艶星。」

「力道君なした〜?」

「スイーツ作り過ぎてさ、良かったらいるか?」

「欲しい!力道君流石ツ!」

「良かったらだけど、リビングに行つて食べないか?」

「もっち!部屋でのぼっちは寂しいもんだからな…(´ーωー、)」

「お、おう…。」

少年達移動中…

「よお艶星!上鳴から聞いたぜ!帯電を覚えたんだってな?!」

「あー…まーね。技は模索中つてところだけどね。」

「個性無個性関係なく、萃っちが凄いやね?」

「もうこれさ、艶星に個性がある疑惑が浮上するんじゃないか!」

「メディアが今でもそんなことを書きそうで怖いな。」

「大丈夫、そんなときや俺本人がメディアをぶっ壊すだけだね。」

「萃君物騒なこと言うなあ〜…。」

めちやくちやまつたりした空間です。

しかも久々のゆっくりとできた休日なので皆とこうやってお喋りし合うのも久々な気がする。

ちなみにツンデレボーイの爆豪君も参加していました。珍しい。

「習得したところで、個性相手に対抗できんのか?」

「それはできないかな、習得しても会得できる力は補助的なものだよ。

言わば追撃メイン。もちろんデメリット付き。」

「デメリットはなんだ?」

「もちろん知つての通り、使えば上鳴君から電力を貰わないと行けない上、彼の範囲に入らないと帯電ができない。その上、使えば数秒間の麻痺、数分の意識喪失が今のところのデメリットかな。」

「デメリットが大きすぎますわ!どうしてそうなるのですの!」

「実践したらその結果だった。」

「度胸が俺達よりも上をいつてるじゃん！」

「まあだけど習得できるものはちゃんと限度があるから、何でも会得ができるワケではないんだ。そこもちゃんと理解はしているよ。」

ドドドオオオン!!!

「おおよ？なんだろう？」

「皆、あそこって……!!」

「校舎のド真ん中じゃねーかよ!!」

「おいおいまたか!!しかも今度は瓦礫がびよんぴよん飛んでいるんじゃないか!!」

急に起きた爆発。

また襲撃じゃないかと思ひ、A組全員駆けつけた。

案の定また襲撃イベントですふざけんなクソが（本音）

「……めんどくせえなこれ。」

「ひやははははは!!ユウエイってのはココなんだナ!?ココを破壊しまくれれば日本を略奪できるんだナ!？」

「りや…略奪だなんて…!アレはなんなの!？」

インザエーダー  
「侵略者…。」

「い、いんべーだ…?」

「敵連合とは全く別の組織で、海外から来た敵の連中が日本を奪い盗ろうとしてる外道よりもクソ汚え連中だ。」

「何故それを…?」

「まあ個人的な事情でね。」

「Hey!来たね!ちよーつと援護してもらえると助かrrrrrrrr  
rrrああああああああああ!!!」

「せんせーうるしい。」

「はい耳栓。萃大丈夫?」

「ありがとう響香ちゃん。」 スポツ

(うん、可愛い。)

「んで…俺の相方を殺ったヤツは何処のどいつだあ…?この写真に見覚えはねえかああああ!？」

「誰?」

「誰だ？」

「知らね。」

「あ、俺だわ。」

「萃っち!？」

「暴走した時にコイツすつごく悪いヤツだったから容赦なく殺つちやったヤツだ。」

「艶星さん：そう言えばそう仰っていましたわね……。まさかのトリガーがそこからだっただなんて：ちよつと艶星さん!？」

「大丈夫、多分俺に用があると思うから邪魔が入らないように見張つていてもらってもいいかな？」

「わ、分かりましたわ：もし危なかったら退いてください！」

「もっち！」

トテトテ…

「そつかそつか、俺の相方を殺したのはお前か！」

「うん、そだよ。」

「ぶつ殺す!!」

「あ、急にキレた。」

どうやら俺も次いでに探していたみたい。知らんけど。

聞いたらあらびつくり、俺を殺害しようとしているじゃありませんか。もちろん適当に反応したので余計に怒らせちゃいました。

ヒュッ

「あ、消えた。」

「艶星さん後ろっ!!」

ドカツ!!

「ツ……!!」

「ひやはははははは！俺の個性は『瞬間移動』だ！テメエの個性に当たるこたあねえんだよ!!」

「……遅え。」

「は……?」

「遅すぎるよ。侵略者♪」

「こ、コイツ…!!ぶつ殺すツツ!!」ビキキツ

ヒュツ シュバババツ!!

「ファントムブレット幻影弾丸!!」

ガガガガツ!!ドスツ!!

「おうっ…! やっべ入った…。」

「チビガキがあああああ!!! 死ねエ!!」

「ピキツ あゝあゝ…?」

パシツ

「……………は?!」

「おrrrrrrらああああああ!!!」

ブオンツ!!

「ぎゃああああああああ!!!」

ドカアアンツ!!!

「萃っちどしたの!?!」

「芦戸! 今はこの連中をなんとかしないと不味いぞ!」

「っ、艶星さん…?」

「コイツ! 俺のことチビって言った! ガキならまだしも、チビって言われるの一番ムカつく! ちっちゃいとかわられる方がいい! 響きが可愛い方が好きなのに、暴力的にチビって言った!!」

「怒るところそこですのね…。」

「この俺の瞬間移動を使った『ファントムブレット幻影弾丸』を掴むとは…テメエ何の個性だ…!!」

「は? 無個性だけど。」

「んなっ…!?! くっ…ひやははははははは! 無個性がこんなことできるわきやねーだろ! 馬鹿でも分かるぞチビガキ!」

「よし殺す。命乞いしても殺すから。」

遂にスイツチ入った。

クラスメイトや身内になら許せるが、敵相手や知らない人は知らない禁止ワードがある。それを今戦っている侵略者インヴェーダーの一人が言ってしまったのです。俺、静かに怒っています。ぶんすこです。

ザツ

「様子見はここまで…死ぬ覚悟はあるな?」

「ひやはっ！マグレで掴めたからって調子に乗んなよチビガキ！」

「すううう……。 (艦艇じゃ太刀打ちできねえ…別のものので殺るか…。)」

ヒュッ!!

「おらあああああ!!」

「そーれっ。」

バヒュンツ!!

「…は？うっそだろ!?あんなの届かねえぞ!!」

「やつぱりな。騙せると思ったか？」

「もう見破られていたのかよ!このクソガキヤああああ!!」

「バレバレに決まってんだろ。瞬間移動にしては遅すぎる。ルミ姉の方がもつと速エわ!高速野郎!!……ん？」

「っ、艶星さん…なんて目の良さを…。あれで遅いだなんて…次元が

違いすぎますわ…!」

「クソがつ!!斃<sup>くたば</sup>りやがれええっ!!」

「くそっ…なんだあの個性は…!いくらなんでも耐性がありすぎじゃねえか…!!」

「大きすぎる…!!こんな大きい敵がこのまま進行されたら…雄<sup>こ</sup>英<sup>こ</sup>が不味い…!」

「ねええええ!!オイラのもぎもぎが全然効かねええええ!!地面が抉れるんだけどおおお!!」

「ここは僕に任せてっ!ネビルレーザーツツ!!膝カックン!」

カクーン

「オ、ヴツ…!!」

ズズーン…

「こんなの足止めにすらなんねーけど…崩すことならいくらでもやってやらあああ!!」

「(なるほどな…コイツはリーダーではないワケね…本命は別にいるんだな?) スウウ…八百万さん!!」

「はい!!」

「予定が変わった!!緑谷君達のところへ行行って援護をお願いします!!俺はコイツをソッコで終わらせてから向かいます!!」

「分かりましたわ!艶星さんも気をつけてください!」

「あいさあああ!」

「行かせるかつ!!」

「テメエの相手は俺じやろがボケえええええ!!サマーソルト・フオール兎踵落下!!!!」

ベガアアアツ!!!

「うおおっ!」

「テメエは俺を殺りに来たんだろ?なんなら俺を殺ってからにしろ。」  
「ひひっ…!コイツあ生かしちゃいけねえヤツだな…!相方の仇討ちをしてからが本番開始だああ!!」

ヒュビツ

俺を殺りに来たハズなのに目的がコロコロ変わるやべー相手だけど、正直な話、コイツは幹部とかそういう類ではないと推測した。

目的が変わる、石ころみたいにいるようなチンピラの口調、個性を似たような動きで嘘をかます…こんなやつが幹部だったら組織が終わってるよ!

「速度少し上がったか。だが…遅せえ!!」

「もらったぜ…チビガキ!!」

「ブチツ!!ぶっ殺す!!」

ビュオツ

「そんなもんじや当たらんガシツ…は?」

「フエイタルラビット・レジスタンス兎の致命的なる抵抗!!!」

ゴオツ!!!

「ウツソだべガアンツ!!ぶえがっ!!こんのっ…ガkビダアンツ!!!!

ぐべあつ…!」

ビュオアンツ!!

「!?」

「ラビット・ルナフオール月面落下!!!」

ギャンツ!!

「ぬあああああああ!!?」

一方的でした。

倒したけれども、ほぼ瀕死の状態にしておいて出久君達の下へ加勢しに向かった。

先生方もかなり苦戦しているほどの難敵且つ巨大な相手だった。

跳び上がった時に見たけれども、なんかめっちゃくちやデカかった。

オールマイトでさえ苦戦しているみたい。

「加勢しに来たぜこらあああああ!!」

「待たせんじやねーぞ無個性このやろおおおおお!!」

「悪い！相手が俺を怒らせたから遊んでた！」

「あ、あれで遊んでいたのですか…?」

「ま、瀕死でさせちやったけれど。」

「萃君やり過ぎじゃ…。」

「あら萃ちゃん！ちよつと私をあそこまで運んでくれない?!」

「お姉ちゃ…先生、それってまさか…そういうこと??」

「ええ、少しばかり…ね?」

お姉ちゃんこと香山ミッドナイト 睡を運ぶハメに。

まさかお姉ちゃんまで参戦しているとは思ってもいなかったし、キツかったんじゃないかと思っていた。

いくら眠らせるにしても、ラグを起こしてからの反応だからめっちゃくちや大変だったのでは?と感じていた上、お姉ちゃんは隠している素振りを見せていたからすぐに気づいた。

侵略者インヴェーダーの襲撃により、お姉ちゃんの脚が折れていた。



## #23 VS 侵略者（インヴェーダー）

「お姉ちゃん。」

「何よ〜私が怪我しているから大人しくしろって〜?」

「そうだよ。無理しないでよ。脚折れてるのにどうやって戦うつもりなの?」

「ま、まあね…ちよつと無茶しちやっただけよ?」

「無茶したからあそこまで運べと?」

「ええ、アイツを眠らせる為に…ね。」

「断る。」

「な、何故よ!?!」

「あんな巨体にお姉ちゃんの個性が効くかなんて知らないけれど、まず不可能に近い。その上、眠らせたとしてもお姉ちゃんの体にかんりの負担と支障が出る。だからやらせられない。もしやれるなら…。」

「保健室に行つて。」

「むう…分かつたわよ…。」

「誰かお姉ちゃんを運んで行つてもらえるかな?」

「あたし行くよ! 萃つちはどーするの?」

「俺は気分が悪くなったから、あのクソデカ野郎を殺す。」  
ぶちのめ

ゾワツ

「わ、分かりましたわ…艶星さん、役に立てるかどうかが分かりませんが…これを…。」

「ありがとう。タイミングを見計らつて使うよ。」

俺はお姉ちゃんを傷つけられたことによつて静かに怒っていた。

巨大な侵略者の攻撃によつて脚がやられていたらしい。芦戸さんと八百万さんはお姉ちゃんを安全圏にまで送り、他のメンバーは戦闘態勢に入っていた。

そして俺は怒りの影響で放電状態になっており、知らないうちに強化されていた。

「もう一人の自分、力借りるよ。」

『珍しいな、お前が俺の力を借りるなんてよ。』

「しゃーねーだろ、ちよつと殺意沸いたからさ。」

『まあいいわ、俺の出る幕じやなさそーだしな。』

「萃君、どう?」

「あのクソデカ野郎にちよつと殺意が出た。」

「無理だけはしないようにできるかい?」

「ああ、大丈夫。」

「皆で守ろう…僕達の雄英を!僕達の街を!!」

「もちろんだ!!」

「おいおい、おめーら二人で何盛り上がってんだ!!俺達もいるだろーが!」

「お、オイラも戦えるんだ!女子にカツコイイところ見せてやるんだ!!」

「負担をかけさせるワケにはいかなからな、戦える人は存分にいる!」

クソデカ侵略者インサエーダーの大きさは推定だが150m、幅はあんまし分かんらん。人型なので既に算段はつけてる。

背後に回れば勝ち確だとは思っているが、重さが重さなのでかなりダメージを与えないと多分まずいと感じている。

「俺の考えたやり方だけど上手くいくか分からん。俺と出久君、峰田君が最初の要だ。出久君、峰田君、行けるか?」

「も、もちろんだ!オイラはやれるぞ!」

「もちろん。麗日さん、峰田君を頼むね。」

「うん!それじゃあ、準備始めておく!」

「飯田君に囹役をしてもらっているけれど大丈夫かな…。」  
侵略者インサエーダー「こつちだ!俺を狙ってみろ!!」

ドルルンツ!!

「チビ共…邪魔だああああああ!!!」

「不味いッ…!」

ダダダッ!!

「出久君!やるぞ!!」

「うん！行くよ萃君!!」

「バチバチツ!!!<sup>ラビット</sup> 兎オ:!!」

「ワンフオーオール:フルカウル:!!」

「<sup>レールガン</sup>電磁砲!!!/デラウエアスマッシュ!!!」

ズドオオンツ!!!

カクーン

「うおっ:!!?」

「峰田君!!」

「おっしや待つてたぞおおお!!おりやおりやおりやおりやおりやおりやおりやあああああああ!!!」

ビタタタタタツ!!

「艷星！準備完了だ！」

ポスッ

「ナイスキャッチ!!力道君、尾白君!!このまますっかり掴まってなよ!!」

「おおう!!」

「現段階 限界領域脚力300%!!」

俺は全力で尾白君と力道君を抱えて120m程すっ飛んだ。

俺も正直その高さにまで至るとは思わなかったけれど、まさか予想以上になるとは…。ちなみに脚は案の定ぶっ壊しました。

「後頭部にぶち込んで来てやれ!!」

「もちろんだ！」

「やつてやるさ!!」

「<sup>ラビット・カタバルト</sup>兎上甲板 <sup>ヘヴィロングシヨット</sup>長距離重量級発射!!」

バヒュンツ!!!

(やつべ:脚ぶっ壊れた:。)

「うおおおっ?!艷星めちやくちや急成長してるじゃんか!」

「無個性の力ってすげーな!艷星の期待に添えてやらねーとな!

『シュガードープ』ツツ!!」

「はああっ:!!!」

「シュガーラッシュ!!」

「尾空旋舞!!!」

バゴオオオンツ  
!!!!!!

「うぐツ:!!?」

グラフィッ:

「轟君!!!爆豪君!!!瀬呂君!!!」

「待ってたぜ艶星いいいい!!行くぜ二人共おおおお!!」

「しっかり狙え!!!」

「準備完了してる。」

「おrrrrrrらああああああああ!!!」

ブオンツ!!!

「アイツの胸元でグラつかせるぞ!!」

「ああ!行けるか!!!?」

「行けるに決まってるんだろ!!A・P・ショット!!!」

「膨冷熱波!」

ボゴオオオオツ!!!

「く、クソチビ共がああああああ!!!」

ブオツ!!

「マジかよっ:!!」

「爆豪!捕まれ!!」

「ああ!!」

パシッ

爆豪君と轟君が宙に浮いている影響で自由には動けず叩き落はたとされるかと思いきや、爆豪君は轟君に掴まって轟君が火力小さめの膨冷熱波で高速で回避して落下のスピードを爆豪君が爆破で和らげたではないか。凄いです。

巨大な侵略者インヴェーダーを相手にクラスメイト全員の力でどうにかできるかと言われたら難しい。

捕えられるかと言えば捕えられる。ただ相手がクソデカいだけだから時間を喰うだけなのです。

それと芦戸さんと八百万さんは途中から来たが、事前にメールでやり取りをしていたのでちゃんと把握していました。

「八百万さん!!!」

「はあ：はあ：！お待たせしましたわ！ええええーいっ!!!」  
バッシュンツ!!!バサアツ!!

「常闇君!!耳郎さん!!切島君!!」

「御意!!」

「りよーかい!!」

「OK!!二人共耳栓の用意した?!」

「もちろんだ!!」

「硬化ツツ!!」

「纏え：黒影!!」  
ダークシャドウ

「あいよっ!!」

「深淵闇軀 宵闇より穿つ爪!!!」

「ハートビートサラウンド!!!」

「二合体技 影の音圧落とし!!!」

「ぬうっ!?!?」

ズドオオツ!!

「ぬああああああああああっ!!!」

「倒れる…ツ!!」

「うおらああああああ!!」

「油断した…!このチビども「青山君!!」ん…?」

「待たせたね!ネビルレーザーツ!!」

ペカアアツ!!

「目眩しかつ…!!」

「葉隠さん!!口田君!!」

「う、うん…!!」

「おっけー萃ちゃん!!そりやああああっ!」

グネツ

ズブシツ

「うおおおああああああああっ!?!?」

「あ、刺さった☆」

何故クソデカイ相手が攻撃できないのかって?

皆で必死に腕を弾いたり、一撃一撃をぶち込んでいるから。

俺が指揮しているのは捕える為だけの指揮だ。

腕や脚が邪魔をするようであれば、狙うところだけ邪魔が入らないようにしてくれると助かるって伝えたら皆やってくれました。お礼しなくちや。

ちなみに一部のクラスメイトを飛ばしているのは俺、八百万さん、出久君、爆豪君、麗日さんだ。麗日さんの負担が大きいから空中組と地上組に振り分けていたのです。先に説明しておけて話な○

「よし…つと。俺もそろそろ出ないと…ズキツ いゝでえゝえゝえゝッ…!!」

「艶星無理するな！皆に言われただろ!？」

「ごめん障子君…。だけど俺が指揮だけをするのは間違えているんじゃないかって思ってたさ…。」

「そんなことない！お前は俺達の為、人の為に考えてくれているじゃないか！」

「そかな…?」

「そうに決まってる!!」

「…ありがとう。よし、無理はしないけれど…ちよつとばかし体勢整えるね。」

「おやおやあく？指揮をしているガキはそのチビちゃんかなあく？」

「ごめん障子君。あのクソ侵略者インヴェーダーのせいで殺意沸いた。」

「落ち着け、ここは俺が時間を稼ぐズツ!! ぐつ…!？」

ドサツ

「障子君!？」

「君には用がないのだよ♪用があるのは…そのチビガキ。」

「障子君！しつかり!!」

「す、すまん…だが致命傷ではない…。俺はまだ…戦えるツ…!!」

「ほほ…う…私の個性に耐えるとは…。やりがいがありそうだねえ♪」

ズブツ!!

「ぐあああああつ!!」

「障子君…ダメだ!!」

「ごふっ…!これしきの…ことでツ…!」

「トドメ…いつちやおうかなあ…?そくれっ!」

ビュオツ!!!

「ぐっ…。」バタツ

「あら…?刺さる前に倒れちゃったねえ…。所詮はガキか。」

「障子君…ごめん…。俺…もう…:…:我慢できねえ…!!」

「や、やめる…んだ…。」

バリバリツ!!!

「GRRR…。」

「おお…怖い怖い。そこのチビガキ、君は死ななきやいけない存在だ。大人しく死んでくれたまえ。」

「死ぬのは…:てめえだ…。」

障子君が俺を庇って倒れ、俺はそれを見て俺の中の何かが割れたよ  
うな気がした。もちろん冷静に保っていられるはずがない。

そしてこの日、俺は我を忘れて敵味方関係なく暴走した日でもあ  
る。

## #24 悪魔

バリバリバリバリッ!!!

「ん〜？情報によりや無個性だと聞いたのだがねえ〜？オールフォーワン A F O からもらった個性なのかね？」

「GRRRR……。」

「つ、艶星……!!」

「まあいい。大人しく死んでくれたまえ!!」

ヒュヒュッ!!

ブスッ!!!

「…くききつ。」

（あの笑い方…マズイ…!!早く緑谷達に知らせないと…!!）

「くききききかかかかかかかかかかか!!」

「うおっ!!なんだ!!笑い方気持ち悪っ!!」

「たーゲツと…ホソク!!!殺ス!!!」

（あんな笑い方おかしいぞ…。前の暴走ときとは違う…!!）

「クソッ!!やっぱアイツと一緒にやないか!!危険すぎる!!」

シュッ!!

「げっそう月爪!」

バキイッ!!

「ぬあっ?!私の棘が…!!貴様ア…!!死ねええええ!!」

「きけけけけけッ!!幹部げっそうこうがのクセに器が小せエなア!!月爪光牙!!」

（なんだ…艶星の技…!無個性ってあんなことできるのか…!?脚力で風圧を作って上鳴の電力を纏わせるとは…。しかもさっきの攻撃で三倍の量を高速で…。）

仲間がやられたことにより、俺は我を忘れた。

名前はとりあえず知らないけれど、インヴェーダー侵略者の男幹部は器が小さくて、俺自身は何故か面白がっていた。

「ち、ちよこまかとやかましい…!!」

「くけけけけ!!なら当ててみやがれやバーカ!」

「ブッツ 死ねクソガキイイイ!!」



シュシュツ!!

「けけっ!やるじゃねえか。だがなア:遅せえよ!!テメエが死ぬ!!」

バツンツ!!

「あ:え:?:」

パタツ

「艶星イイイイ!!」

「あ、あはは:な、なんだ:?あのガキ:やつぱりヤツとは違ったか:?  
い、いや!今はとにかくトドメを刺しておかねば!私達の計画が台  
無しになる!!」

ズブツ!!

上鳴君から充電していた電力が切れ、バッテリーが切れたかのように倒れた。無個性だからこそその大きな代償だ。

とは言え、本来の俺ならの話だ。

「……。」

「クソツ:クソおおおお!!」

「すまない障子君!艶星君は!!」

「今:トドメを刺された:!!」

「何ツ!？」

「ふう:またガキが増えたか:。このガキには少々手間取ったが:  
こご 雄英を破壊させてもらう!」

「くっ:指揮をしていた艶星君がやられてしまったのはかなり痛手  
だ:障子君、歩けるか?」

「あ、ああ:。」

「大人しく死んでくれたまえっ!!」

「俺は艶星君を回収する!障子君は無理をしないように緑谷君達と合  
流して事情を説明してくれ!」

「分かった:やられるなよ:飯田!」

「ああ!」

俺が倒れて数分後に飯田君が駆けつけ、俺を回収するつもりだった。  
た。

だが、インヴァーダー 侵略者は甘くない。

何せ、日本を乗っ取る為ならばどんな手段を使つてでも俺達を潰すからだ。女性、男性、子供関係なく殺す組織でもある。

日本人を世界から消し、中身が文化すら無くなった名前だけの日本にさせて、良質な素材を強奪する為だということだ。

飯田君と棘の個性を持った侵略者インヴェーダーの相性は良くなく、飯田君が近づけば簡単に刺してしまう距離だ。

簡単には回収させてくれない面倒くさい相手だ。器が小さいのに。「悪いねえ、あのガキは死んだよ。しっかりトドメを刺させてもらつたからね。」

「お、お前エエ!!許さない!!艶星君は無個性でありながらも自力で這い上がってきたヒーローなのだ…!侵略者インヴェーダー…俺はお前達を許さない!!」

「騒ぐなら口だけにしなよお？そつれつ。」

ブズツ

「がああああああつ!?影からも棘が…!?そこからも出すのかアイツは…ツ!!」

「君の個性はその大事な脚だろう?だから動けないようにしておけば、痛くて走れないだろ?」

ユラア…

「…?!つ、艶星…君…?!」

「…な、何故生きてる!!トドメは刺したはずだ!!」

「……。」

ギョロツ

「ツ!?!」

「急所を狙い損ねたか…しっかり始末してやる!!」

(なんだ…?艶星君の目が人の目をしていなかったぞ…。気のせいとは思えないくらい恐ろしい目をしていた…!)

「………きひっ。」

「ニードルラッシュユ!!」

「………閃セン。」

ズパツ!!

「なっ…!? コイツ…!!」

「ごめん飯田君! 遅くなった! …って大丈夫!?」

「あ、ああ…大丈夫だ緑谷君。俺は艶星君を回収するつもりだったが…奴の個性が予想外なところから来てやられてしまった…。」

「萃君は…?」

「今…ちよつと不味いかも知れない…。下手に加勢したら巻き込まれるかと思われる…。」

「…え?」

「こんのクソガキヤあああああ!!」

「……………~~ゲツ~~。」

バキヤツ!!

「ぐあ…っ!! クソがあああああ!! 計画を邪魔する外道がああああ  
あああ!! 奥義…! 影国針山地獄!!」

「……………~~ゼロ~~。」

「えあ…?」

ゴトンツ

俺は意識すらしておらず、俺でも何でもないモノになっていた。

本来ならば体が動けずに意識がなくなつて倒れて数分後に目を覚  
ますハズだった。普通におかしくね?

「あの萃君…違う…! 飯田君、逃げるよ!」

「な、何故だ!? 確かに変だとは思うが、何故逃げる必要が…!!」

「今の萃君はキラ〜でもビーストでもないんだ!! あの目は敵味方関係  
なく攻撃する無差別攻撃型なんだよ!!」

「我々でどうにかできないのか!？」

「今の僕達に萃君を止める術はない!! 先生方に頼むしかない!!」

「きひっ♪」

「不味い! 飯田君、しっかり掴まって!!」

「あ、ああ!!」

「きひひひひひっ!!!」

「萃君怖いんだけどおおお!!?」

「緑谷! 何が起きた!!」

「切島君!! 萃君をどうにかできない!？」

「ああ!?! どういうことだ!?!」

「障子君が伝えた通りだよ!! 萃君が萃君じゃない状態なんだ!!」

「おっし分かった!! 止めてやらああ!!」

「きひやひやひやひやひやひやひや!!」

ガシィイツ!!

「よお艶星ィ…! お前どうしちまったんだア…!?!」

「きひひひひ…!!」

ミシミシッ

(くっ…! 明らかに様子がおかしいぜ…! 緑谷達が先生方のところへ向かうにも二分以上はかかる…! 俺が止めねーと余計な被害が出る…!!)

「すうう…。」

「おいおい嘘だろ…!?! させねーぞコラア!!」

ドゴッ!!

「うぶっ…!!」

「いくらクラスメイトだからと言って手加減はしねーぞ艶星! 目エ覚ますまで止めてやるからな!!」

「うっ…おええっ…!!」

「あれ? 俺そんなに強く蹴ったか?」

「きひっ…きひひひひひひ…!! きひやははははははははははは!!!」

「やっベコイツイカれてるわ!!」

一方、出久君視点

「飯田君大丈夫かい？」

「大丈夫だ…だが、走れるかと言えば走れないところだ…。貫通させられてしまったな…。」

「リカバリーガールにお願いするしかないね…。先に先生方のところへ向かっていいかい？」

「もちろんだ、一刻を争う時だ…! 艶星君を止めるにしても先生方の力も借りるしかないな…。」

「緑谷少年、どうしたんだ？」

「オールマイト！実はかくかくしかじかで…！」

「艶星少年が…!?見えないところでそんなことになっていたとは…!!  
私はすぐに向かう！君達はすぐに他の先生方に報告し、避難してくれ  
!!」

「分かりました!!」

俺がこうなったキツカケは目の前でクラスメイトである障子君が  
庇って倒れたことから始まり、暴走とは違った暴走が始まっていた。

いや、本当の暴走が始まってしまったのだ。

俺視点に戻る。

「艶星イ…お前、成長したのはいいけどなア…!その暴走が気に食わ  
ねえんだ!!それさえなけりゃこんな余計なことなんてしなくて済  
むつつーのによお…!!いい加減に…目エ覚めろおお!!」

バゴツ!!!

メキツ…

「かつ…は…!!」

ドツ…

「はあ…はあ…!艶星…お前なんつー力持ってやがんだよ…。」

「きしししし…!」

「お前…悪魔かよ…!!」

ギユオツ

「きひやはははははは!!」

「A・P・シヨットオートカノン!!」

「!!」

「バクゴ…!!」

「何じやれてんだテメエ!とつとと沈めろ!!」

「悪い、思っていたより艶星が硬くてな!」

「きししし…!」

「気味悪いわ…こりや誰でもビビらあ…!」

「助けるにしろ、今はもう既に艶星じゃねえからな。今見ているのは  
悪魔そのものだ…!」

パキパキパキパキ…

「何してんだアイツ？」

「隙ができてんなら沈めるだけだ!!」

ギョルルルル!!

「……………廻!!<sup>カイ</sup>」

「バクゴ―避ける!!」

「おrrrrrrらああああああああ!!!」

ボゴオオン!!

「き、きひひ…きししししし…!」

「コイツ…!!」

ガシッ

「うおっ!？」

「きしやつはああああああああ!!!」

「バクゴ―おおおお!!」

俺は悪魔と思われるような笑い方をしたままクラスメイトの爆豪君を倒そうとしていた。

悪魔のような俺は最早俺ではなく、正に悪魔と同等だった。

## #25 悪魔の子

「SM A A A A S H!!」

ドゴオオン!!

「きひやつ!」

「うおつ!」

「オールマイト!!」

「待たせてすまなかつた!!そして艶星少年…君は一体何者だ…?」

「きしし…!」

「なるほどな…手遅れになる前に終わらせねばな!!」

「待つてオールマイト。」

「ミッドナイト!?まだ安静にしなければマズイはずじゃ…!」

「きひつ!」

「はあ…萃ちゃんだったらそんな姿で仲間を傷つけるなんて…。今まで以上にキツイお仕置きしてやらないとねえ…!」

「きひ…ひいっ…!!」

「なんだ…?ミッドナイトに怯えていないか…?」

「よかつた。僕の予想が当たっていたよ。」

「緑谷!予想ってどういうことだ?!」

「萃君は女性に弱いんじゃない、特定の女性に弱いんだ!彼はミッドナイトとの縁がかなり深いことを前に聞いたからもしかしたらつてやってみたんだ!萃君には悪いけれど…ここで倒れてもらわなきゃ彼を救えない!!」

「それってどういうことだ!」

「萃ちゃんをこのまま放置したら本来の萃ちゃんではなくなるってことよ。彼は私に対するトラウマを持っているから。」

急に出てきたオールマイトとミッドナイトさん。

爆豪君を倒しかけたところでオールマイトの風圧で引き離し、再度襲いかかる体勢をとったところ出久君がミッドナイトさんを連れてきた。

うん、怯えますよ。だって怖いんだもん。

「さあて…抵抗しなくても私を怒らせたんだからねえ…!!気絶するまで容赦しないわよ!!」

「ビクッ きつ…:…きしやあああああああつ!!」

「兎ちゃんの耳をしていた髪があんなに乱れて…まるでケダモノじゃないの。ふんっ!!」

ズンッ!!

「ぶっ…!!」

「痛がっても…知らないから!!」

ドズッ

「ぴっ…:…!!?」

「緑谷少年、私が来なくてもよかった気がしてきた…。」

「いえ、来なかったらかつちゃんがやられていました。助かりました。」

「うへえ…ミッドナイトの攻撃容赦ねえ…:。」

「どーやら俺達の出番はここで終了ってワケだな。アイツもすぐに沈む。動きが固くなつていつからな。」

「しやあああああつ!!」

「しつこいわよ!!いつまで同じ攻撃を繰り返しているワケ!?そんなに死にたいのかしら!!?」

ガシッ

「きっ!?!」

「死にたいなら…このまま眠らせてあげる!!」

「ぎぎ…きいいいいええあああああつ!!」

グイイツ!!

「うわっ…:…ちよっ!?!やめなさい!!!」

グンッ!!

「きやん!!」

「おらあ!!」

バコッ!!

「ぶべっ…:…」

「み、ミッドナイト…これ以上やってしまったら艶星少年が…。」





れ以上の攻撃はしないでおいでしてくれないか!!」

「何よ！急にそんなこと言われてmシユツ!! あっ!!」

「萃君！無茶だ！戻ってくれ!!」

「俺のターボでも追いつかねえなんてよお……！アイツの身体能力どーなっついていやがるんだ!!」

「艶星少年……！一体何処まで成長するんだ……！侵略者め……まだ抵抗していたのか!!」

「俺の硬化した手もミシミシ行ってたからやべえぞアイツ……」

またまた急展開。

ルミ姉が乱入してきたご様子。

吹っ飛ばされたことを耳に入っていたからか、本能的にそれに反応して現地へ向かった。お姉ちゃんに肋骨四本と右腕を折られてヒールで腹部を刺されて出血しているが、全く気にせずに向かっていた。

意識はほんの少しだけど、戻りつつあります。

「マズツたなこりゃ……。腕やつちつたなあ……」

「チビ共が調子に乗るなああああ!!」

「クソおお!!オイラ達でなんとかしていても倒れてくれねえええええ!!艶星いいいい!!」

ザザアツ!!

「あ、萃ちゃんじゃねーか!」

「艶星!!」

「萃っち!!」

「艶星君!!俺達は味方だ!!だから攻撃は侵略者インヴェーダーのみにしてくれ!!負傷者が多すぎるんだ!!」

「ぎぎ……ぎい……!!」

「指揮していたチビじゃねえか!!テメエを殺りや俺達や楽に破壊出来んだよおお!!」

「ぎ……ぎぎい……ツ!!オ……さエ……口……!!さ、サつ……リク……たいしよ……ウ……い……ングエ……ダー……!」

「潰れろおおおお!!」

「きひッ!!!」

ドゴオオンッ!!!

「つ、艶星…:さん…:?」

「きし…:きししし…:!!コリヤあ…:隙だらけだ…:!」

「はあ…:はあ…:間に合わなかったか…:!!」

「いや、違う!オールマイト…:萃君がいつものに戻ってる…:!!だけど  
なんか変!!」

「ああ…:萃ちゃんおかしくなってねエか?暴走したらアタシは容赦  
しねーけど…:あの子、クソデカ野郎の指へし折ってね?」

ミシッ

「ごぷつ…:とつとと…:決着<sup>ケツ</sup>をつけネエと…:きちい…:カもな…:。」

「チビが…:大人しく死んでくれりやいいものをおおおおお!!!」

「すうう…:…:…:弾<sup>ダン</sup>!!!」

パアアアン!!

「ぬおっ…:!?こんの…:雑魚虫めがあああああ!!」

ビュッ!!

「閃<sup>セン</sup>…:…:…:!!」

ズッ…:

「く…:クソ…:がああ…:!!」

「~~ク~~!!!」

ズバキヤッ!!

「ぐおおおああああああ!!!このまま叩き落としてやらあああああ  
あああ!!」

「きししし…:!てメエこそあつケねエ負け方シていな…:!!」

「超重量級ギガントアツパーああああああ!!」

ゴオオオオオッ!!

「すう…:…:…:廻<sup>カイ</sup>!!!」

ギユルルルッ!!!

「回りながら死ねええええ!!」

「閃<sup>セン</sup>!!!」

ズパパパッ!!

「コイツツ…!!潰れr「零!!」は…!?!」

ブシユウウツ!!

ズズウウン…

抵抗し続けていた巨大侵略者インヴェーダーは倒れ、俺はそのまま落下していった。高さ的には即死するレベルの高さからなので誰かが受け止めてくれないと俺は死にます。

「つたく萃ちゃんは無茶しやがるなあ!ほらよつと!!」

バフツ

「……………うつ…ごぼつ…。」

「ミッドナイトにお仕置きされたんだろ?その体だからまあそーなるわな。」

「ミルコ、助かった。私も止めておきたかったのだが…止める出番がなくてだな…。」

「気にすんな、この子の管理責任はアタシにもあるし、リユーキユウは仕事でいねーからしよーがねーもんよ。お仕置きは確定だがな。」

「つ、艶星…:さん…。何があつたの…?」

「まあかくかくしかじかで萃君はこのような状態になって…。」

「そうでしたのね…むうつ…!」

「お、おいヤオモモ…?」

コツコツ…

「……………やオ…よろズ…:さん…?」

「ふんっ!!」

パアアアン!!

「づつ…!」

「おい!死にかけの萃ちゃんになんつーことしてんだよ!」

「どうもこうもないですわ!!艶星さんに無茶をしないでつて言ったはずなのに、また無茶をして死にかけてですよ?!守つて死にかけているのと無茶をして死にかけているなんてワケが違いすぎますわ!!」

「ヾ…め…:なさ…い…。」

「当分の間は外に出ないことを願いますわ。」

「ヤオモモ!それは言い過ぎじゃねーのか!?!」

「確かに言い過ぎだ。だが…賛成するしかないかも知れない。」

「……僕は艶星君を助けたいと思っっているよ。だけど、艶星君の今の状況からしたら辛いだろうが…八百万さんの発言に賛成するよ。」

「青山まで!?!お、おい…何で…皆なんでそんなこと言うんだよ!!」

「上鳴君…。」

「確かに艶星は危ないかも知れねえ! けどよ、おかしいだろ!! 今回の侵略者インヴェーダーの襲撃であのデカブツを足止めできたのだって艶星の指示があつたからだろ!?! 緑谷と一緒に考えて作戦を考えてくれていたんだぞ!!」

「分かっていますわよ!!」

「じゃあなんで…!」

「もう…艶星さんの心が…壊れかけているから…!!」

「んなっ…!?!」

「萃ちゃんは人が目の前で倒れたりするとああなるんだ。アタシがやられた時もそうなっていたことがあつた。もうこれ以上は負担をかけさせられねえし。」

「俺達にできることはねーのかよ! 俺達が助けられて艶星アイツを助けられないっておかしすぎんだろ!! 艶星アイツに助けられればなしでいいのかよ!! 今の状態なんて俺達はヒーロー気取りのただの学生だぞ!! 俺から見れば俺達よりも艶星アイツが一番ヒーローに見えるんだわ!! 艶星アイツは言つてたんだ! 本当は無茶したくなくても無茶しちまうって言つてたんだよー!」

「だけど、この結果でしょう!?!」

「じゃあ分かるのかよ! 努力していたのを目の前で見たのかよ!?!」

「か、上鳴少年…八百万少女…やめないか…?」

「オールマイト、アンタは引つ込んでな。今は出るトコじゃねえ。それにその怪我はマズイだろう?」

「む…ミルコも察していたか…。」

「分かるさ…萃ちゃんの攻撃だろ?」

「ま、まあ…そんなところだ…。」

「緑谷、お前はどうか？」

「ぼ、僕!？」

「そうですね、艶星さんをどうしたいですか？」

「僕は…。」

「……………ツ。」

「助きたい。」

「だろ!?」「だけど…。」「なんだ…?」

「今の萃君は助けられない。」

「なんでなんだよ!!助けられないって…!!」

「助けられる手立てはないんだ…。もう萃君自身の問題なんだよ…ここからどう変わるかが自身で決めなければならぬ…。そうなんですよ、萃君…!」

俺は頷いた。

出久君の言う通り、これは俺自身の問題だ。

俺の中の二人が無理矢理出ようとして暴れていたせいか、それがきっかけで暴走を引き起こしていた。

同じ過ちなんてもう起こしたくない、ていうかめんどくさいから引き起こさないでくれ( )

「とりあえずこの子は少しの間収監しておく。もちろん、アタシがキツチリ管理させてもらうかな。何か面倒事起こしたら蹴り潰すから安心しな。」

「ミルコ相変わらず物騒だ…。」

インヴェーダー侵略者の襲撃は終わり、雄英の修復作業に入った。俺はまた収監されたのだが、今度はかなり厳重な牢に収監された。

敵の刑務所ではない俺の**為だけに作られた牢**だ。

そんなものが存在していたのを知ったのは俺が目覚めてからのことだった。

## #26 はーどなおしおき

ペチッ

「あたっ。」

「そらっ。」

ペシッ

「あうっ。」

「それっ。」

ズブシッ

「いっ だっ。」

今何されているのかつて？

ルミ姉にめちやくちやいじられています。

意識がないまま数日後に収監されていたことに気づいたのだが、目覚めてからは何の変哲もない俺に戻っていた。

記憶はあるかつて？あるけれども、倒して捕らえた後の記憶がはっきりしていない。しかもあれは異例過ぎた異例だった。

だって無理矢理二人が出てこようとしていたんだから。

今は大人しくしてもらっているからなんとかなっているけれど。

「おい萃ちゃん。」

「なに？」

「お前って素でいる時はアタシとかには反撃とかしてこないよな。」

「反撃する時はするよ？」

「どういう時？」

「噛まれた時。」

「噛むぞ？」

「やだ。」

「犯す。」

「やだ。」

「蹴らせる。」

「なんで!？」

「拒否るから。」

ガチャッ

「なんで開けるの!?!」

「ブチ犯したいから。」

「ちよつとやめて!?!ルミ姉怖いよ!?!しかもこれR15なn」うるせえ黙って犯される!!」いやああああああああああ!!!」

「はああ…ミルコだったら…。兎以上に兎なことしているわ…。まあ、あの子の暴走を止めるキツカケが私とミルコであの子にトラウマを植え付けたことだったなんて…。ちよつとやったこと悪魔じゃないかしら…。」

ルミ姉にあんなことやこんなことされてめちやくちや泣きました。

お仕置きにしてはハードすぎるお仕置きに見えました。

俺は此処が何処なのかすら居場所が分からず、教えてもらおうにも教えてもらえずにお仕置きを受けました。めちやくちやすつげー泣いた。

「萃ちゃんよお、これしきのことくだばで斃たるなよ。」

「ひぐつ…いい、いくら俺をガチで犯さなかったとは言え…胸を触りまくった上、首筋を甘噛みしまくったりするのは酷いよ…。」

「やっぱり犯せばよかった!!もつと泣き顔見せやがれ!!!」

「いやああああああ!!!」

「なによこれ…。」↑カメラ越しで見てるおねーちゃんの反応

モニモニモニモニモニ

「ルミ姉ルミ姉。」

「なんだ?」

「なんで皆に会えないの?」

「ピクツ お前…あの時意識があやふやだったのか?」

「討伐した後あんまり覚えてない…。」

「なるほどな…?まあかくかくしかじかつつーわけだ。」

「反省するよ…だけどルミ姉?」

「あ?」

「俺の頬っぺ触りすぎ。」

「いーじやねーかよ。お前の頬っぺ柔らかくて食っちまいたいくらい



なんだよ。」

「北海道産の人参。」

「食わせろ。」

「じゃあ頬っぺ触るのやめてよ。」

「やだね。」

「なら渡せないよ。」

「お前の頬を食うわ。」

「やだ!」

「なら反省しろ!」

「反省する!」

「じゃあ北海道産の人参くれ!」

「連絡手段ないの。」

「じゃあアタシの人形な。」

「うそおん…。」

ガチャツ

「ミルコ、交代よ。」

「えー!?まだ萃ちゃんと居たいんだけど!」

「私も萃ちゃんと居たいのよ!?あなただけ独占するのはズルいわよ!?しかも勝手に入ってるし…。」

「ちえく…分かったよミッドナイト。それじゃあな萃ちゃん、また今度な。」

「はあい…。」

反省はしているものの、この光景だと俺自身も反省しているように感じていないように見えて泣きそうになりました。

ルミ姉が部屋から出た後、お姉ちゃんがズイズイと近寄って来て抱きついてきた。またこの展開ですやめてくれ( )

「お姉ちゃん…苦しい…。」

「すんすん…はああ萃ちゃんエネルギー供給できるわ〜♪」ガブツ

「びいびい!!!」

「こら!ジタバタしない!!もうちよつとだけだから!」

「俺自身が反省しているように感じられないの!泣いていい!」

「私からしたらあなたの泣き顔はぐ褒美よ！」

「やっぱり泣くのやめる。」

「どうしてよ！」

「お姉ちゃんが襲うんだもん！」

「なんで分かるのよ。」

「そんな顔ですぐに分かるよ！」

「顔に出た？」

「出てるし怖いよ!!」

「あなたがおかしくなったから骨を何本か折ってあげたくらいよ？」

「恐ろしいこと言わないで!?!あれ以来二人の俺がお姉ちゃんに対してめっちゃくちや恐怖心抱いているから!!」

「いいじゃない♪怖がっているところが可愛いから怖がらせたいのよ♪」

「やっぱり怖い！」

「…本当に怖いのか？」

「うえ…？」

「私に対して怖がっているのか？」

「い、いや…これは…その……。」

「言えないのか？」

「あ…えつと……。」

「無理もないわね。私もちよつとやりすぎたから反省しているわ。そこまで怖がっていたのは知らなかった…ごめんね？」

「お、お姉ちゃんが謝ることじゃないよ…俺はただ…。」

p r r r r r r r

「電話ね。それじゃあ少し空けるわね。」

ガチャツ

「あ…行っちゃった。はあああああ(クソデカ溜息)…なんであそこで言えなかったのかなあ…。」

ポスッ

「うっ。」

「へ？」

「あ、バレた。」

「きやあああああああああ!?!?」

リユーキュウさんがオフトウンに忍び込んだ。

思わずクソデカイ悲鳴を上げてしまい、リユーキュウさんまでもがびっくりしてた。

さっきまでの状況を見られていたとを考えていたらもう死にたくなかった。

だってさっきまでの状況をこっさり見られていたんだよ? 死にたくなるぞ?!

「うううう…死にたい…。」

「わ、悪かったって…。萃ちゃんの布団いい匂いするからつい…。」

「オフトウンはどーでもいいですが、今までのアレ…:本当に見ていたのですか…?」

「ええ、バツチリ見ていたわ。」

「誰か俺を殺してくれええええええ!!」

「残念ながらそれはできないわ。」

「殻に閉じこもるです…。」

ボフッ

「あ、くるまった。(可愛い。)」

ヒョコッ

「リユーキュウさん…。」

「ん?」

「なでなでしてくれますか…?」

「いいわよ?」

ナデナデ

「落ち着くです…。」

(私が不在だったのも失態ね…。それにしても顔だけ出しているの可愛すぎるんだけど何なのこの子。)

ズブシッ

「ぶやっ。」

「どうやったらそんな発音になるの?」

「分からんれしゆ。あと爪が痛いれしゆ。」

「わぎと痛くさせているのよ。今回は私が不在だったのもあるけれど、映像見たらあれはやばかったわよ？しかもミッドナイトにしばかれて折られたにも関わらず…。」

ズブシツ

「づつ。」

「今度あんなことしたら骨折じや済まさないからね？」

「ご、ごめんにやしやい…。」

「私の言うこと一つだけ聞いてもらえる？」

「にや、にやんでしょか…。」

「ちよつとお尻借りていい？」

「…はい??？」

「萃ちゃんにお仕置きしてないからっていうのと、可愛いお尻を叩きたいから。あと悲鳴が聞きたい。」

「リユーキュウさん、もしかしてですけど…一つ目は分かりますが…あとの二つって…。」

「ええ、私がただやりたいだけ。」

「そんなあ…。」

「ほらお尻出しなさい。今の萃ちゃんには拒否権なんてないわよ？」

「わ、分かりました…。」

お尻をめちやくちや叩かれた。

時には手を変化させて叩かれたからパチンどころか、重い音がしたのだ。しかも鱗だからめちやくちや痛いしグサグサ刺さるから悲鳴を上げっぱなしでいました。

とにかく凄く泣いていたからか、リユーキュウさんの表情はみるみる変わり、お姉ちゃんみたいに目に影がかかった笑みに変わっていった。

めちやくちや怖いです。

「ひぐつ…リユーキュウちゃん…も、もう勘弁しへ…。」

「ダメよ♪もつと反省しなさいっ！」

バチイイイイン!!!

「あびっ…!!」

ガチャツ

「ん?リユークユウじゃねーか。何してんだよ。ミッドナイトが電話来たから交代してくれって言われたが…。」

「見ての通りよミルコ。この子にお仕置きをしてあげているの。」

「へえ…それじゃ足りないからアタシは首をやろうかなつと…。」

「る、ルミ姉…に<sup>何</sup>に<sup>を</sup>を<sup>す</sup>をし<sup>る</sup>ゆる「一氣にやの…?」

「おらあつ!!」

ガシイツ!!

「ぐえっ!」

「脚挟みだおらあ!」

(やば…これ死ぬ…!ルミ姉の太ももの筋肉が凄まじすぎて抵抗が…!!てか体重がかかって苦しい…!!)

「よかったじゃない萃ちゃん。このままトべるね♪」

「がっ…あ…!い、いぎ…が…!」ピクピク

「必死に呼吸しようとしても無駄だ。落ちな♪」

(ヤバい…完全に…殺される…!)

「お、頑張つて抜け出そうとしているな?そんな簡単に逃げられると思ふなよっ…!!」

ギチイイツ!!!

「ぽぶっ…!!?」

「んにひひ♪お前の必死に息を吸おうとしているのいいね♪可愛いぜ?」

「やり過ぎないようにしなきゃね。それっ。」

バシイインツ!!!

「ぶぶっ!!?」

「ほらほら酸素取り入れねえと死ぬぜ?」

ギギギ…

(死ぬ…!く、首がっ…!)

「ぴくぴくしちやつて…そんなに嬉しいのかな…?なら、もっとやつてあげなくちゃ…ねっ!!」

ベシヤアアンツ!!!

「ぎぎゆっ…!!!」パタッ

「あ、落ちた。おいリユーキュウ、萃ちゃん落ちたぞ?」

「あれ?やりすぎた?」

「多分やりすぎたな。泡吹いてる。」

「え?」

「まあ復活するからいいんじゃない?」

「そうね…だけどまだやり足りない…。」

「暴れちゃ困るから四肢をへし折っておくか?」

「ええ、やっておきましょう。」

お仕置きを通り越して拷問に近いことをされ、俺は起きるまで折られていることに気が付かなかった。

もちろん気づいたのは起きた時でした。

次回に続きます。

## #27 女性相手だと調子悪くなる。

パチッ

「んう…?」

「あら、お目覚めのようね♪」

「お姉ちゃん…?」

「相変わらず可愛いわ…。」

「俺確か…ズキッ うぎいいっ!!? いゝででで!!あれ!?なんで折れてるの!?!」

「ミルコとリユーキュウがへし折ったんだって。萃ちゃんが暴れないように。」

「だ、だからってここまでするの…?!」

「いや私もあの人達と同じようなこととしていたんだけれど…。」

「女の人怖い…。」

「まあ可愛いからしようがないじゃない。」

「そういう問題じゃ…。」

「うつ伏せの状態だと喋りにくいんじゃない?」

「そ、そうだけど…。」

「起こしてあげる。痛かったらいいなさいね?」

「急に優しくなるの怖いよ?」

「まーまーいいから♪」

ギョムツ

「あうっ。」

「本当、やられっぱなしね。」

「そりや抵抗できないんだもん。反省しているように見えなくなるのも嫌だし…。ていうか相手二人な上にナンバーズヒーローだし、力の上だから抵抗そのものができないんだもん。」

「ちちゃんと反省の色を見せているの偉いわね♪」

「分かるの?」

「もちろん♪カメラ越しで見ていたし、その兎耳みたいな髪がちやん

と教えてくれているからね♪」

「常に見られていることを忘れちゃダメだな俺…。」

「ちゃんと気づいているのね？それなら私からご褒美をあげるわね♪」

「ご褒美？」

「んっ。」

チュツ

「んツ…!？」

「ん〜…。」

ガツシリ

「んむむむむむ…?!?!？」

♪」

まさかのご褒美がキスとは思わなかった。

さつきまであんなに怖かったお姉ちゃんが今となってはものすごく優しい。だけどキスまでされたら後のことを思うとめちやくちや恐怖で震えるかも知れない。カメラ越しで誰かに見られたりしたら俺は確実に終わる。いやもう死ぬやつ。

「ぷはっ！私のご褒美はどうかしら？」

「あ…あう…お、おね…きゆうう…。」プシユウウ…

「あ、死んだ。」

10分後。

「はっ…!!」ガバツ

ズキイイツ!!!

「ふおおおおおおおああああああああああ!!!？」

「なー一人で騒いでいるのよ…。」

「お、おね…おねおね…おねーちゃんに何にしてくるののしゃさ!!」

「ん？ご褒美のこと？」

「そ、そそそーだよ!!」

「ダメだった…？」

「い、いいいいや…べ…べべ別に…。」

「ふふっ♪萃ちゃんがキスに弱いなんて…かーわいっ♪」



「か、からかわないでよ!!」

「またキスしちゃう?」

「やだ!」

「こんなに乱れる萃ちゃんも悪くないわね…いつその事襲ってしまいたいわ…♪」

「もうおねーちゃんそのものが可愛い!」

一方、ルミ姉とリユーキュウさんは…。

「なーリユーキュウ。」

「何?」

「やっぱやりすぎた。」

「ええ。私もやりすぎた気がする。」

「いや、リユーキュウは萃ちゃんのケツをぶっ叩いていただけだろ? あたしは窒息させた上に泡を吹かせて四肢をへし折ったんだぞ? あたしがやりすぎた。」

「まあけどあの子は自覚してくれると思うから大丈夫じゃないかしら?」

「そーか? そんならいいがなあ…。」

「珍しいね。あの子の心配するなんて。」

「実質的にあたしが育てたもんだからな。そりや心配だつてする。」

「私も心配していたけれど、あの子のことだから分かってくれると思うから心配するのやめたわ。」

「それはダメじゃねーか?」

なんやかんや心配してくれていました。

本当は見捨てられるかと思われるくらいにヤバいことをしでかしたのに、俺を見捨てるなく管理や監視を続けていた。

だけどやっぱリルミ姉達怖いです。

俺視点に戻る。

「ちよっ…お姉ちゃ…そこはっ…!」

「んく…ここがいいのかしら?」

「あっ…そこっ…／／」

「気持ち良さそうね♪だけでもっといくわよっ!」



「ソフトなキスだけなら許してくれるかしら!？」

「そ、それならまだいいよ！」

「じゃあ今させて！」

「やだ！」

「ケチ！」

「いいもんケチで！」

「眠らせたげるわ!!」

「やめろおとおお!!」

「あ、ちなみに今日謹慎明けよ？」

「なんやて？」

「おらああああ!!眠れえええええ!!」

「ぎやああああああ!!」

眠らされた。

数時間後。

「ん…あれ…?この天井…。」

「あ!起きた!!」

「ふえあつ!」ガバツ

ガチコオオオン!!!

「~~~~~!!」

「な、何をやっていきますの二人共…。」

「あ、頭ぶつけたあ…!」

「萃っちの頭結構硬いよお〜!」

「萃が悶絶してる…やっぱり可愛いのは変わってないね。」

「3日くらいスヤスヤ寝ていたから皆で触りまくってたけどね!」

「ピクツ はい…?」

「先生が艶星さんをお姫様抱っこで連れて来た時に言われましたの。起きるまではこの子を襲うなり触るなり何してもいいからって…。」  
「萃の頬が柔らかくて噛みついてしまいそうだったのは焦ったけれど。」

「うちも思わず食べてしまいそうやった…めっちゃぶにぶにしていたんやもん…!」

「もう死んでいいですか!？」

「やらせなあああああああい!!」

ガバァツ!!!

「ぎやああああああああ!!」

リビングにて。

「あ、萃君起きたみたいだね。」

「相変わらず賑やかなかった。」

「まったく世話が焼けるぜ…。」

「艶星に甘いもの食べさせてやりたいんだが…。」

「砂藤、それはいい提案だ。釣れるはずだ。」

「おいしい艶星く!!シフォンケーキ食べるかー!？」

ガチャツ

「食ベrガシイツ!! ぎよえっ!!」

「…艶星、どんまいだ。」

砂藤君がシフォンケーキを作ってくれてすぐに部屋から出たけれど、女子一同一斉に俺をガツシリ驚掴みにされてまた引き摺り込まれた。

安静にしなさいと言われても安静になんかできません( )

何故かって?女子一同にめちやくちやいじくり回されているからです。

「砂藤、どうだった?」

「一度ドアを開けてこっちに来ようとしていたが、女子達が艶星を驚掴みにして引き摺り込んだ。」

「…アイツも大変だな。」

「男女問わず人気だからね。」

「オイラもああいう人気が欲しいぜ…艶星羨ましいぞこんにやるおはおお!!」

「ケーキ…どうするか。」

「俺らで食っちゃまおーぜ?」

「だな!艶星にはわりーけれど、俺らで頂くわ!」

一方、俺の部屋では。

「ねえねえ…。」

「なに〜?」

「思いつきり女子会開いてませんか?」

「いいでしよ〜?だって萃ちゃんに抱きつきながら女子会するの久しぶりだもん。」

「あ、芦戸さん狡いですわ!私にも抱かせてください!」

「次私もいくい?」

「私もいいかしら?」

「あ、あたしも…/ /」

「う、うちも抱いてみたい!」

「ねえ俺っってお人形さんなの?」

「愛玩動物としてなら見るよ♪」

「結局ペットか何かなの!?!」

その日、俺はお風呂やトイレ以外部屋から出られることはなかった。

女子達にいじられていただけではなく、交代交代で俺の監視に入っていたからだ。どうやら俺が眠らされていた際にお姉ちゃんが女子達に伝えていたようだ。

「寝る時は俺一人で大丈夫だよ。出たりしないから。」

「ダメ、一緒に寝るよ。」

「耳郎さん…俺恥ずかしいから大丈夫だって…。」

「それがダメだったの!分かってくれないなら音圧を直接体内に打ち込むよ!」

「それ酷くない!?!」

「酷くなんかない!」

「俺死ぬよ!?!」

「死ぬえ!」

「超絶ドストレート!!」

「あんたを心配してるから言っっちゃってんの!」

「…へ?」

「艶星、あんたはトラウマがあるでしょ?だからそれに似た夢を見て

「暴れないか心配してんの！」

「あう…そ、それは申し訳ない…。やつと納得できたよ…ありがとう。」

「あ、あたしは思ったことだけを言っただけ！」

「えつと…じゃあお願いしてもいい…かな？」

「な、何が…？」

「添い寝。」

「~~~~ツツツ!!？」

ポカンツ!!!

「ぴゃあっ!!？」

「そ、そそそ添い寝なんて軽く言わないでよ！恥ずかしいじゃん!!」

「じ、じゃあ…監視??」

「あーもー添い寝でいいよ!!おやすみ!!」

「お、おやしゅみ…。」

耳郎さんはぶんすこと怒ったまま毛布を強奪し、俺はもそもそと毛布を取り戻した。俺のベッドは一人用なので耳郎さんを壁側に、俺は落ちても大丈夫なように床側の方で寝ました。

ちなみに寝ている俺の頬を容赦なくつつき回していたとかなんとか。

## #28 Enemy of the truth

女子達にいじくり回されてから翌日が経った。  
ちなみに耳郎さんに頬をいじられて起きました。

「萃君おはよう！」

「おはよう出久君…。」

「まだ慣れてないのかい…？」

「うん…女子達が怖い…。」

「髪でできたうさ耳が垂れてる…。」

「そーなの？」

「うん、ロツプレイヤーみたい。」

「お、艶星だ！おはよー！」

「峰田君おはよ。」

「お前、どうだった…？」

「どうって？」

「女子達のことだよ！オイラそれで少し心配してたんだ…羨ましいけどな！！」

「んー…とりあえずめちやくちやいじくり回されて大変だった。」

「何処をだ!？」

「頬っぺ。」

「あー…なるほど納得。」

「確かに分かるかも…。」

プニプニ…

「艶星じゃねーか！具合はどうだ!？」

「あ、切島君！」

ビュンツ!!

「ど、どうした!？」

切島君がリビングに来た瞬間、俺はシュバツと手前まで飛んだ。  
言いたいことだらけで俺は涙目になっていた。

出久君と峰田君は移動の速さにめちやくちや驚いていたらしい。

「あの時は本当に申し訳なかった!!」

「あ、あの時…?」

「俺が暴走していた時、君を傷付けてしまったから…それで…」  
「ああ、俺は大丈夫だ。お前はちよつとやべーとこまで来ていたが、そこまで思ってくれてんなら俺はそれで十分だ。それに、俺や皆は悪くなんか思っていないねーぞ? 昨日は女子達にお前を占領されて話せなかったが、お前の話題で持ち切りだったよ。もちろんいい意味でな。」  
「そ、そう…なの?」

「うん、萃君自身がいい方向に制御できたら戦力としてもサポート役としても凄く助かるかもって話もしていたよ。」

「そうそう! オイラも緑谷と話したけれど、お前はやっぱりオイラ達のクラスに絶対にいねーといけない存在なんだって。それに友達ならお互いの悪いところを改善していけばめちやくちや良くなるって!」

「それとだな、先生方からもお前に何か言いたげなことがあるってよ。」

「え…? ヤバい…俺どうしよう…。このまま何かやられるんじや…。」

「いや、ただの連絡みたい。」

「え?」

心底焦りました。

連絡の内容はただ単に授業の進んだ内容でした。

追いつくまでにめちやくちや時間がかかります。

しんどいです。

「あー…それとだ艶星。」

「な、なんでしようか…?」

「そんなに怯えんじやねーよ…お前、オールマイトと対決してみたらどうだ?」

「嫌です!!」

「まあそうだろうな…今のお前じゃあ無理があるからな。」

「俺、正直…ヒーロー科に向いていないんじやないかって心の何処かで思ってしまったているんです…。あんな暴走を引き起こしたの



うのうとヒーロー科でいられるはずがないんです…。」

「それは違うぞ艶星。」

「え?」

「お前は個性を持っていない方がまだマシだと思え。個性を利用して悪事を働く人もいれば、知らないうちに個性を暴走させて制御ができない人だっている。それを助けたり捕らえたりするのがヒーローを目指すヒーロー科だ。まあ小さな警察みたいなもんだ。お前にだって小さなファンがいるだろう?」

スツ

「あ…そっか…こりゃあ、弱音吐いてる暇はねエかもな。」

「お前の計画のことももう既にクラス全員にバレたから伝えたが…まあ反対はされていたな。お前ばかりに頼るわけにやいかねえってな。暴走する前にお前を全力でカバーしてやるってな。」

「…あの、相澤先生。」

「なんだ?」

「コスチュームがイカれたので直しに行きたいです。」

「……………お前、さっきの話聞いていたのか?」

しんみりとした空気が一気に崩壊して緩くなった。

コスチュームがイカれた理由は大体暴走が原因です。

ちなみに直しに行った次いでに訓練所を借りました。許可下りた。

「とりあえずは肩慣らしと行こうかな。えいやー!!」

ボカンスツ!!

「……………けふっ。」プスプス

「おい!今爆発音が訓練所から聞こえたぞ!」

「誰かが暴れてるに違えねえ!!すぐに捕らえるぞ!!」

バンツ!!

「??」

「誰も…いねえ…?」

「お、おいバクゴー…。」

「あ?」

「踏んでる…。」

「…?うおっ!?てめー艶星!!何してんだ!!驚かせてんじゃねー!!」

「ご、ごみえん…。」

「艶星、訓練所こんなんごろうで何していたんだ?」

「うんとね、肩慣らしにあの岩をぶん殴ったら爆発した。」

「どうしてそうなった!?!」

「私にも分からん(某Z級映画迷台詞)」

「その誰かが殴った衝撃で爆発させるようにしたんだろうな。おい、俺を見るな。」

「もち。爆豪君は二トロに似た汗で爆発を起こすんでしょ?遠隔爆発なんてことはできないよね。」

「できていたらとつくにやってら。そもそもテロを起こすようなことあしねーぞ!!」

「やってそうだけどな!」

「てめーぶっ〇す!!」

「いつものバクゴード!」

(何かあつたのかと思つたが…あいつらがいるなら問題ないか。俺は入らないでおくか。)

めちやくちやわちやわちやした。

そして俺は気づいた。

切島君みたいに硬くしたらいいんじゃないやね?つて思つたのだ。気合いで。

とはいえ、俺は気合いで硬くするだけだから切島君並には硬くはできない。個性は鍛えれば鍛える程より強化されるからそれには勝てない。

だから俺は強化よりも技を練りつつ弱点を即座に見つけ出すことを重視しようと思つております。

そして色々ありました。が帰寮しまして。

「たでーま戻りもーした。」

「萃君お帰り!」

「萃ちやあああああん!!」

バフツ

「ぶぐっ!!!」

「艶星、だいぶ遅かったな。」

「んううう……ぷはっ!!ちよつと特訓をしてたのだ……」

「特訓?」

「暴走しないための……ね……あの、芦戸しゃんぐるじ……」

「萃ちゃんに話をしたいことがあるから皆ずーっと待ってたの!!」

「あ、芦戸さんごめん。僕が伝え忘れてた。」

「それならしよーがないね!萃ちゃんにお仕置きしておk「なんで?!」

私達を待たせたからでしょ!!?」

「ごめんにやしゃい!!」

((和む。))

「よし。お喋りはここまでにして、リビングで話そう。」

少年少女移動中……

「艶星、今お前が相手にしている侵略者<sup>インサエーダー</sup>ってどういう組織なんだ?」

「あー……そう言えば細かく言っていなかったね。その名の通り、国を

乗っ取る組織だよ。」

「敵みたいな感じかな?」

「敵だけどそれよりもアホみたいにバカデカイクソ組織。」

「艶星さん、口が悪くなっていますわよ?」

「それよりも、何で萃がちがその組織を?」

「最初に暴走した時あったでしょ?」

「そう言えばあったね。」

「その時にゴキブロスみたいにカサカサ動き回っていたら、たまたま

そいつらのアジトだったの。」

「某準伝説の○ケ○ンじゃん。」

「そんでアジトを潰したら事がおつきくなった。」

「そしてこうなったわけだな?」

「当時動き回っていた時の体勢ってどんな感じ?」

「覚えてないなあ……ゴキちゃん並の体勢だったと思う。」

「おーい、話がズレてるぞー。」

「あつ。」

「要はその組織を潰さねえと国そのものがマズイわけだな？」

「そゆこと。」

「答え方が緩い……。」

「だけど、今の俺じゃあ潰すこともままならない上に捕まえられないんだよね。」

「どうする？」

「んと……また迷惑をかけてしまうけれど、敵を捕まえるのと同時に侵略者の撲滅を手伝って欲しいのです。お願いしても大丈夫でしょうか!!」

「フン、答えるまでもないな。」

「と、常闇君？」

「お前に協力するに決まっているだろう？」

「常闇に先言われちまったが、既に俺達を巻き込んでいつからなあ！やるからにゃあ全力で潰すに決まってるあ!!」

「そうですね！もう皆に迷惑をかけているのですから、迷惑どんと来い！ですわよ!!」

「僕も君に協力するよ。あの時は急な襲撃だったけれども、今度は萃君だけが考えなくて大丈夫だよ。僕達もいるし、一緒に戦うよ！そして、侵略者を皆の力で全力で阻止するから!!」

「次いでに、俺は暴走した時のお前を阻止してやるからな！」

「艷星の目の前で見苦しいところを見せてしまったが、サポートをしておくからな。」

「み、皆あ……ありがとう……！また迷惑をかけちゃうけれど、これ以上迷惑をかけないようにするし、心配させないように皆の為に……ん……言葉が見つかからないから皆の為にとかく色々頑張る!!」

はい、語彙力が消し飛びました。

俺は恵まれているんだと改めて感じていました。

だからといって無理はしないようにしておかないといつかは見捨てられるかも知れない、避けられるかも知れないと考えていたのですが、八百万さんにハグをされました。なんで？

「考えたりするのはいいですが、深く考えるのはよくありませんわ。」

皆に頼ってもらったらいいことありますわよ?」

「その通りだ八百万君! 艶星君、何かあつたら俺達に教えてくれ! クラスメイトであり友達なのだから!」

「ありがとう飯田君、八百万さん…困った時は頼らせてもらうね?」

会議が終わった後、部屋へ戻つたら不法侵入して凄く自由にダラダラしている女性がいたのはまた別のお話。

## #29 親、襲来。次いでに事件。

「リユーキユウさん？なんで俺のベッドにいるのです？」

「いい匂いがするから♪」

「一緒には寝ませんよ？」

「いやよ？一応監視役なんだから一緒に寝なきやダメでしょう？」

「怖くて眠ることができない寂しがり屋の子供ですか俺は。」

「子供っぽいじゃん。」

「子供じゃないです。」

「見た目がロリじゃないの。」

「ロリじゃない!!」

「可愛いから抱きついていい？」

「お好きにどうぞ!!プンスコ」

「このまま襲っていい？」

「噛みつく。」

「牢獄。」

「勘弁してくださいすみませんでした。グスン」

「♪(この子をいじめ倒すのも悪くないね…♪ミッドナイトがいじめ倒す理由が分かった気がする。)」

「もう寝ますので早く出て行つてギユムツ 分かりましたから早く寝ましゅよ。」

「♪」

侵略者はリユーキユウさんでした。

ミッドナイトさんだと思った？ねえねえミッドナイトさんだと思っただ？

残念、リユーキユウさんでした。

はい、リユーキユウさんに部屋を占領されていました。

ベッドに寝転んで待ち構えていたかのようにはげが少し出た状態で寝ていました。寝顔めちやくちや可愛かったです。

一瞬死にかけました。

そして一緒に寝ることを強要されたので仕方なく一緒に寝ることに。

まあ、監視役としてしているわけだから仕方ないことではあるが…。

「あ、あの…。」

「ん？」

「俺は抱き枕じゃ…。」

「抵抗するの？」

「なんでそうなるのれすか…。」

「なんか母性が溢れる。」

「なでなでされちゃうと…。」

「なに？照れちゃう？」

「…：／／／」

「可く愛いっ♪」

翌日、ゴキツと嫌な音が鳴って気になって目を覚ましたら俺はリユーキュウさんに寝技をキメられて呼吸が出来ない状態になっていました。

ぺちぺちと弱いタップをしていたが、全然起きる素振りもなかったので諦めて落ちました。

数分後には芦戸さん達が突撃してきたが、俺は落ちているので気づくハズもなく彼女達はリユーキュウさんを起こして俺を救出してくれました。

「げほっ…お、おはよ…ごじやいましゅ…。」

「半分死んじやっていたわよ萃ちゃん。」

「うつ伏せヘッドロックで萃ちゃん本体がリユーキュウの体で埋まっ腕だけがピクピクしとったよ？」

「ナンバーズヒーローだからじゃないってことがはつきり分かるよ…。女の人怖い…。」

「わ、私達を嫌わないでくださいまし!？」

「嫌いにならないれしゅ。」

「あー…萃ちゃんごめんね？苦しかったでしょ…？」

「大丈夫ですよりユーキュウさん。寝相がたまたまああなったのは仕

方ないことですから。」

「萃くん!!生きてるかーい?!」

「あいあい生きてるよー!おはよー出久君!」

「おはよー!萃君に会いたいわって人が今玄関で待ってるよ?」

「...?誰かな?」

少年達移動中...

「あいあいお待たせしm...は!!!?」

「やほ、萃。元気にしてた?」

「ママあ!?なんでママが雄英こへいに来てんの!?

「え!?か、萃君のお母さんなの?!」

「え、めつちや綺麗...!」

「萃ちゃんのお母さんってあの人だったんだね。そりや可愛いワケだよ。」

「萃ちゃん、とても話題になりそうね?」

「お母さんと少し似ているようで微妙な感じだけれど萃ちゃんのお母さんめちやくちや可愛い!!」

「ねえママなんで来たの!?!」

「あんたねえ...あの事件以降めちやくちや話題になっっていたの知らないでも思ったあ?」

「ひっ...!!」

「まーた暴走しておいて黙って見ているわけがないでしょ!?!」

「ご、ごべんださい...!」

「ちよつとこつちに來なさい。」ゴゴゴ

「全力脱兎!!」ビュンツ

「...あ、逃げた。」...」

「逃がさないよバカ息子おおお!!」

「いやああああああ!!」

「...あ、捕まった。」...」

俺のお母さんが登場した。

お母さんの名前は艶星つやほし 咲さき、一番反抗できない最強の生物です。

地元が北海道なので、わざわざ雄英にまで脚を運んで来てくれてい



たけれども…何故お母さんが来たのかが全く理解できませんでした。  
「ぐすつ…やつぱりママ怖い…。」

(怯えてる萃ちゃんが可愛いんだけれどどうしよう。余計に泣かせたくなる…。)

「いつもおバカな息子をご迷惑をお掛けしてすみません…。」

「い、いえいえ！そんなことないです!!まさか萃君のお母さんがメタルレディだなんて…あまりにも驚きを隠せなかったもので…。」

「めたるれでい???」

「あれ？萃知らないっけ？」

「うん、知らない。」

「あたし、ヒーローやってたの。」

「今知った。びっくり。」

(萃ちゃんがすごく子供っぽくなって…。待つて?なんであんなに子供っぽくなるの??可愛いにも程があるんだけれど??)

「あ、とりあえず置いておいて。なして雄英うちに来たの??」

((なして??))

「様子見だよ。あたしの職場が長期休暇に入ったから萃に会いに行こうって思ってたね。ダメだった?」

「連絡してくれないと分からんべさ!」

(べさ??)

「まあまあそう怒らないですよ。ほら○eTAOのチーズケーキ、皆で食べなさい?」

「L○TAAO??」

「北海道では有名な洋菓子店!なまら美味しいよ!」

「萃君。」

「ん?」

「お母さんが来た瞬間、方言がすごく出てきたね。」

「あ、ごめんごめん!久々に親と会ったら何故か一気に訛りが放しゅちゅ…ほーしゅ…ほーしゅちゅしゅちゅした。」

(んー…急に噛み噛みイ!!可愛いツ!!)

モ二モ二

「えーつと葉隠しやん??」

「なーにー?」

「起きた時からなんだけれど…俺の頬っぺってそんなにやわっこい??」

「うん! すごくハマるし食べたくなる!!」

「食べないで!」

「…萃。」

「なにママ?」

「あんたが雄英こごに入れて良かった。いい友達ができてあたしは安心してたよ。それとき、ちよつと二人で出掛けない?」

「何そのデートしない? みたいな感覚…怖いんだけど。」

「久しぶりに萃に会ったんだし、少しくらい親子で出掛けようよ。」

「分かったよ…だけど街中でうろちよろしないよね? ママったらすぐに何処か行っちゃうんだから…。」

「大丈夫、知らない場所では萃に付いて行くだけだから。」

「ママが子供になつてどうするのさ!」

(ねえねえ、皆で付いて行こーよ!)

((((さんせー!!)))

お母さんは真面目な声で俺に言葉をかけてきた。

俺がいじめられていたことを知っていたからこそ言ってくれた言葉だった。結構息子思いの親です。

あ、ちなみに親が現れた瞬間に方言がめっちゃめっちゃ出ます。知らんけど。

それと皆は変装をして付いて行っていました。

俺は気づいていません( )

「あたしがここに来たのは修学旅行以来だけど、少し変わったよね。」

「ママ、ここは俺達がよく行くところだよ。品揃えがよくて住みやすいんだけど…。」

「だけれど?」

「そこの二人! 危ない!!!」

ガシヤアアン!!!

「たまに車が飛んでくる。」

「へく…なんで車が飛んでくるのかな？」

（ねえ！萃ちゃんが飛んできた車普通に蹴飛ばしちゃったよ!）

（や、やべえ…！思っていたより強くなつてらあ…!）

（我々が共に歩む道は茨の道、だが艶星はその茨でさえなんのそのでは…?）

「二人とも大丈夫ですか!？」

「あ、大丈夫つす。壊しちゃったんですけど、弁償しておきますか？」

「こ、壊した…?」

「アレ。」

「…え?なんでそつちに?!」

「蹴った。」

「嘘オ…いやいや!怪我は大丈夫ですか!？」

「なんとも。ね、ママ。」

「大丈夫ですよ、息子は強いですから。それとお…。」

「俺を狙ったね?」

「な、何を言ってるんですか!狙ったって…!」

「じゃあ、誰が乗ってたん?」

「…ツ!!」

「正直に言えばお巡りさんだけで済むよ?」

「…わ、分かった。何も抵抗はしない。ここじゃ不味いから場所を変えても…?」

「ああ、ただし…下手に動けば容赦はしない。」

（やべえ…思っていたよりめちやくちや無理じゃん…!幹部とか言ったあの野郎共…無個性だからとかほざいたこと言いやがってエ!!!）

「ねえ、萃ちゃんと萃ママが男の人と話してどっか行っちゃったよ?」

「皆どうする?」

「俺ア見に行くぞ。いくらアイツでも守るものがあるからだ。」

「かつちゃん素直に…!?!」

「うるせえクソナード!!早く追うぞ!!」

俺とお母さんと狙った男の人は人気のない所に移動した。

そして俺達が気づかないように付いてきたメンバー（全員＋リユークユウさん）は一気にバラけて後を追った。

ちなみに影が見えないように皆は慎重に動いていたみたいです。

「さてと…ここだと誰も聞けないな。あんた、名前は?」

「俺は鉄崎てつざき 一閃いつせんだ…。聞きたいことは分かる。何故君達を狙ったのかのも全て話す。」

「ならば話が早くて済むよ。そう言えば個性は何だい?」

「個性は刀剣。自身の体の一部を刀や剣にする個性だ。」

「何故個性じゃなくて車を使っただの?」

「命令さ…。」

「命令?」

「君達は侵略者インヴェーダーを知っているか?」

「あーなるほど理解。」

「あたしも理解したわ。」

「知っているのか!?!」

「もちろんだよ。この子から聞いているから。つまりあんたは俺達に助けを求めているんだね?」

「ま、まあそんなところだ…。」

「雇われ者ってことだな。鉄崎さん、もしかして奴らに脅されているの?」

「な、なんで分かるんだ…?」

「そのペンダント、ネクタイピン、指輪…家族がいるんでしょ?」

「そ、そうなんだ…俺の生活はキツくはないんだが、会社からの呼び出しで急に頼まれて…。断ればお約束の展開ってところだ…。」

「会社は何処です?」

「名刺がありますので…これです。」

「んー…聞いたことない会社だあ…。」

「あたし、聞いたことあるよ。」

「ママが知ってるの?!」

「うん、ここってさ…裏が超ヤバいところじゃないの?」

「いや、社員として働いていたが…俺は知らなかった。今回行った行為も俺は初めてなんだ…。」

「よし、鉄崎さんはシロだ。このことはお巡りさんにも伝えませんが、事情を説明して保護するようお願いをしておきます。」

「い、いい…のか…?君達を殺そうとしたんだぞ…?」

「殺意はなかったが、やらざるを得ない状態だったってことだ。」

「そだね。あたしも同じ立場だったらそんなことされたらやるしかなかったかもだし。」

「一先ずは…保護から始めよっか。」

「あ…ありがとう…本当に…申し訳…ないッ…!!」

はい、しれーつと事件に巻き込まれました。

たまに車がびよんぴよこ飛ぶ場所だけけれど、こんなことが起きたのは初めて。寧ろ俺自身を狙っているかのような感じだった。

加害者であり被害者である鉄崎さんは後ほど先生方に説明をして即刻保護するようにお願いをしました。早速頼りました。

今度こそは本当にバカレベルの事件になりかねないと感じた俺です。

### #30 前夜のように見えて前夜ではない作戦会議。

「う、嘘…でしょ…!?」

「耳郎さん、どんな会話だった？」

「不味い！あの子また巻き込まれたよ!!」

「え…?!内容はという…!?」

「先ずはあの吹っ飛んで来た車は萃ちゃんを狙っていたみたい！その上、あの男性は被害者寄りの加害者だって…！しかも侵略者インヴェーダーと関わりのある会社に務めていて、あの男性は表しか知らなかったから裏のことを言われて断ったらお約束のやつをやらされたって…！」

「おいおい!!情報量が多すぎないか?!」

「不味いね…聞いちやいけないことを聞いてしまったわね…。」

「萃君は言うと思います。彼はもう同じ過ちを繰り返さないって決めていますから。」

「あんにやろ、言わなかったら容赦しねエからな！」

「まだ皆には報告しない方がいい。言ってしまったらアイツも混乱するハズだ。」

「そうだね、待ってみよう！あともう少し聞いてみる！」

「さて…ママどうしよつか。」

「ん？どうするって？」

「先生方には報告して保護をお願いしたけれど…作戦がまだ考えてないし、皆にも報告しないといけないんだ。すぐに戻らないと時間的にもそんなに長くない。」

「それもそうだね。萃もだいたい考えるようになったじゃん♪事件解決したらまた出掛けよっか！」

「うん。久々にママに会えたのは良かったけれど、事件に巻き込みちゃった。」

「親思いにもなったねええ〜!!暴走さえしなければめちやくちやいい子なのになええええ!!」

「ちゃんと暴走しないように制御する練習してるもん!!」

(ん〜:可愛いっ〜:萃ちゃんが子供っぽくなるのはやっぱり親と一緒にいる時なのねえ〜:癒される〜:)

事件に巻き込まれたので帰寮。

先生方にも事情は伝えており、鉄崎さんとその家族は雄英で保護。

俺達I―Aはリビングにて作戦会議。

お母さんも加わっているので心強いけれど、俺としてはやられる姿を見たくないの寮でお留守番してほしかった。

ちなみに血が騒いでいたみたいなので参加したいと親が騒いでいたので参加させました。

「さてと:皆に謝罪をしたい。また事件に巻き込まれました。」

「大丈夫さ、いつものこと!」

「萃つちが事件を連れて来るのは日常茶飯事だからね!」

「いつでも覚悟は決めてるよ萃君!」

「お、オイラも決めてるよ!」

「僕も覚悟は決めているさ!それで:どんな事件だい?」

「あーつとね:多分襲撃事件よりも規模がクソレベルにバカデカくなることは確実だ。」

「あの時よりもか!?!」

「うん、あの時よりも。」

「ヤバい感じか:~?」

「ヤバいです。」

「俺達だけで解決できるのか:~?」

「いや、俺達だけじゃどうしようもできない。だから先生方やプロヒーロー達にも力を貸してもらおうところ。」

「どのくらいの規模になるのやら:~:」

「あと、I―Bやサポート科にも担任を通じて話すところまでいってる。」

「どんだけデカいの!?!」

「バカレベルにクソデカいじゃ分からないから、例えるなら:蟻ありの巣かな?。」

「蟻の巣?!」

「うん、蟻の巣。」

「つまり息子が言いたいのは、表面はたった一つの出入り口だけれど、中もしくは断面図を見たらとんでもないスケールってこと。蟻の巣の断面図って見たことある?」

「…あ!見たことあります!!それにテレビでもやっていました!蟻の巣にコンクリートをいれて固まった後に掘り起こしたらとんでもない量の部屋があつて…まさか…。」

「うん、そのまさかなの。まさにやべーの。ママも意外に目エ付けていたクソ会社らしいの。」

「こら萃、どんどん口が悪くなりすぎていつてる。」

「大丈夫つす!いつもの艶星なんで!」

「本当にいい子達…萃、恵まれすぎて死なないですよ?」

「死なないよ?!」

「だけど本当に死んじやダメだから。」

「それくらい分かってるよ。一人じゃないもん。だけど皆で暴れさせてもらうからな?」

「十分に暴れな!あたしは全然構わないから!責任はあたしが取る!」

「よーし、作戦会議だ!!」

はい、作戦会議は割愛です。

長いもん!眠くなるし欠伸あくびが止まらなかったもん!

ちなみに俺は出久君、八百万さんのペアで行動することに。

八百万さんはサポートに入って出久君は戦闘側に、俺は戦闘兼サポートで動く形となりました。他のペアは後ほど紹介致す。

そして深夜。

(侵略者インヴェーダーはかなり厄介者だ。拠点が海外だから蟻のように巣からわんさか出てくるようなものになるな…。あの鉄崎さんの勤めていた会社は奴らとの関わりは100ある。あそこが侵略者インヴェーダーの日本支部みたいなものだな…)。

コンコン



「ぬぐえああ〜！もう訳分からなくなっちゃうなああ〜！」

「コンコン」

「ふあ?？」

「萃ちゃん、今大丈夫?？」

「んにや、大丈夫ですよ?・とりあえず入ります?？」

「うん、ありがとう:。」

部屋を尋ねてきたのは葉隠さんだ。

あ、ちゃんとパジャマは着て入ってきているので安心して下さい。  
い。

彼女は何か話したいことがあるような感じでもじもじしていた。

「どうしましたん?？」

「電気もつけっぱなしで当日までこうなるのかなって心配していたの。」

「あー:やっぱり分かってました?？」

「分かりやすい。」

「まあそうですねえ:。」

「えいっ。」

ピトッ

「ひゃびっ!!？」

「えへへ〜♪可愛い反応〜♪急にやられるとそうなるんだね♪」

「も、も〜！葉隠さんいじわるー!!」

「あ、怒った！そういうの可愛いからいじりたくなっちゃうんだよね

♪

「むう〜:だけど許します!」

「優しい〜♪」

「あのあの葉隠さん。」

「ん?？」

「俺、皆に会えて良かったって思ってる。皆のおかげで俺は二度成長  
したし、皆の本当の気持ちが伝わって嬉しかった。」

「何言ってるのさ!そんなの、私達も萃ちゃんに会えて良かったんだ  
よ?・無個性の強さが萃ちゃんのおかげで知ることができたもん。萃

ちゃんが雄英に入っていないなかったら無個性のイメージは変わらなかったと思う。」

「イメージを覆すことができなくて良かったのです。」

「あ、あとさ？」

「ふあい？」

「えいつ。」

ギョツ

「ぶえあつ!?あ、あの…!?は、葉隠しやん!？」

「かーわいつ♪ほら、落ち着いて?」

「お、おとおお落ち着けにやい…!!」

「だよね♪だけど、私に身を任せてリラックスしてね?さっきまで当日のことを考えていたんでしよう?」

「う、うにゆ…。」

「頭冷やして今日は寝よ?」

「冷やすどころか暑くなつてきちゃったんですが…。」

「だって、わざとだもん。」

「むう…いじわる…。」

(こんなに可愛いところを見せられたらいじわるしたくなっちゃうじゃん…。そりゃあミッドナイトもリユークユウもいじわるしたくなるよ。)

「すう…すう…。」

「あ、寝ちやったか。さてと…私も寝るとしますか!」

葉隠さんにいじわるされたけれど、可愛いから許すと言う言葉があるからそれで許しました。

ちなみに彼女は俺を仰向けに寝かせて毛布を被らせ、俺の部屋を後にして自分の部屋へ戻った。ちなみに勘違いされたら不味いとかないとか。

翌日。

「けろっ。萃ちゃん、朝よ。」

「んにや…あと5分…。」

「萃ちゃん起きるかあああい!!」

バツサア

「んぎやあああああ!!!眩しいいいいいあああああ!!!」

「毎回賑やかだな。艶星の部屋は。」

「その代わりに萃君はボサ毛で部屋から出てくるよ。」

「お、おはよ…皆…。」

「ほらね？」

「髪のはね方が可愛いのがムカつくな!」

「オイラは思わず女かと思ったぞ艶星イ!!」

「にやははあ…とりあえず寝かせて…。」

ビタアア

「ぴやあああああ!!!?」

「結構疲れているだろうが、学校行く準備しておけ。置いて行くぞ。」

「りよーかい：轟君：冷え冷えの手で項うなじは反則だよお…。」

「だけど目が覚めただろ？」

「うん、めっちゃ目が覚めた。ありがとう。」

((((なにこれ和むっ。)))

「おいお前らチンタラしてっと置いて行くぞ!!」

「今行くー!!」

「……………」

一人だけソワソワしていた人がいました。

クソデカ拠点へ突入まであと一週間と3日。

それまでの期間に迫るものは災さいいか悪戯いたづらか。

あ、この悪戯いたづらはゆるゆるな意味での悪戯いたづらだから気にしないでくれ。

ややこしいけれどな!

### #31 厄介者は何処からでも

「私が来たア!!」

「あ、オールマイトさん。おはようございます。」

「おはようございます! オールマイト!」

「おはようございます。」

「さて、急で申し訳ないのだが…作戦を艶星少年の母から聞いた! 三人一組で挑む形となれば、戦闘をせねばならない時がある!」

「と、いいますと…?」

「はい戦闘訓練ですね理解しました。」

「か、萃君目が死んでるよ…?」

「私が全力で挑むとなれば君達が不味いことになるから、私は仕方なく制御装置を装着して戦闘させてもらおうぞー!」

急に始まった戦闘訓練。

他のクラスメイトも聞いていたようで、皆別々で訓練することになった。相性よりも個別での作戦を練って戦うという形らしい。

それが今回のメインバトルだ。

俺達の相手はまさかのオールマイトさん。

出久君は爆豪君とのペアで戦ったことがあるから分かるが、めっちゃくちゃババらしい。

「オールマイトの戦闘はほぼ脳筋みたいなもんだからなあ…。スピードもある上に攻撃力、体力もある。その上、制御装置を使つての戦闘…いくら制御装置を使っているとしても、どのくらい制御されているのかでさえ分からないよね…。」

「ええ…それに手加減はされないのでサポートするにも…。」

「考えはあるけれど…まずは戦つてからの話だね。オールマイトに攻撃を当てるとしても、半端な攻撃じゃ通用しないし、下手したら捕まるんだ。前のようにはいかないのは分かってる。」

「真っ先に狙われるのは八百万さんかも知れないな。」

「え? 私ですか?」

「オールマイトさんからしたら八百万さんの個性はかなり厄介かと思われるのです。特にあのー…閃光マトリョーシカ?とか…。」

「ヤオヨリョーシカのことですね?はっ…!言われてみれば私…狙われる可能性が高い…!」

「危ないかもだけれど、俺は戦闘兼サポート枠だから八百万さんのサポートにも入るから上手くサポートをします。」

雄英のいつもの巨大な施設にお世話になります。

そして俺達…いや俺達クラスメイト全員が予想していなかった。

別々で訓練するとは言っていたが、他のペアが違うエリアにいるとは言っていないかった。

つまり、先生含める俺達全員がこの施設にいるのだ。

出会い頭になって混戦する可能性も含めているからだ。

ちなみに俺達のペアがそれに気がついたのは戦闘訓練開始してから十分程経過してからだった。

「よし、始まった。先生は手加減無しで攻撃を仕掛けてくる。特にオールマイトの一発は他のヒーローと比べ物にならないからそこは注意!」

「了解!」

「了解ですわ!」

ズドオオン!!

「!?!」

「あの爆発はなんですか?!」

「オールマイトさんが脳筋道開きをしているんじゃないか?」

「私がそんなことをすると思っただかね?」

「…へあ?」

「オールマイト!?!」

ドゴツ!!

「うぐっ!?!」

バガアアン!!

「艶星さん!!」

「萃君!!」

パラパラ：  
ビュンツ!!

「お r r r r あああああああ!!」  
ドツ!!

「うおっ!?!」

「速ツ!?!」

バチバチツ

「静電気…?!」

「上鳴君からもらった電気がまだ残ってたの。あと一回くらいしか使えないかな?」

「そ、それよりも大丈夫ですか!?! さっきの一発かなりいったんじや…。」

「あ、大丈夫なの d ゴフウツ!!!」

「全然大丈夫じゃないですわよ!?!」

「あとちよつと面倒かも知れないのです…。」

「どうしたの?」

「オールマイトさんが言っていた言葉…まるつきりそのものだった…!」

「??」

「つまり、俺達のペアの他にも別のペア達もしくは先生達がこの施設の違う場所に配置されてたんだよ!」

「他のペアもいるの!?! 不味い状況になるかも知れないね…とりあえず一度退こう!」

「退かせないぞツ!!」

「えーいつ!!」

ペカアアア!!

「ぬおっ!?! 閃光手榴弾かつ!!」

「八百万さん掴まってて!」

「は、はい!!」

「全力脱兎!!!」

「は、速いですわ!!」

「萃君、まだ残ってる!？」

「もちろん!!」

「ぬう…判断が早くなってきたな。成長して私は嬉しいぞ!だが、守れなければ意味がないのは分かっているハズだろう!!」

ギョーンッ

やっぱりオールマイルトさんは凄いと思う。

あの状態で制御装置を付けられていてもすぐに追いつかれるし、一撃一撃が強すぎて一人で抑えられるような状態ではない。

いやまず学生がその一撃を抑えられるなんてことは不可能だと思う。

あ、ちなみに五秒程で追いつかれました。

「緑谷さん、来ました!」

「分かった!萃君!」

「あいわかった!!」

シュッ

「垂直飛び!?艶星少年は無個性…人間本来の力を出しているのは分かっているが…まさかな…!」

「オールマイルトさん!もう既に俺達の手の中に入っているのです!!」

(あ、空中歩行はできないのか。)

ググッ

「む?」

「ワンフォーオール・フルカウル…!!」

「八百万さん!今のうちなのです!!」

「はい!!」

「テキサスマアアアアッシュ!!!」

ラビッツキャプチャーショット  
「兔網粘着弾!!!」

「艶星少年と八百万少女は囿で、緑谷少年がメインだったか。だが、私を誰だと思っている!」

ズンッ!!

「!？」

ビューアッ!!

「うわっ!？」

「きゃっ!!」

「やっべー! 八百万さん!!」

バヒユツ

「む!?! 艶星少年…今、空中を…?」

「キヤツチいいいい!!」

「あ、ありがとうございます…! 助かりましたわ!」

「一回中断だ! 艶星少年! 聞きたいことがある!」

「ん? なんでしょう?」

「今空中を蹴らなかつたかね?」

「…??」

「萃君が空中を蹴つたのは少しだけ見えたよ! マンホールから出た時には着地していたけれど。」

「マジすか?」

「うん。」

「私ははつきり見ました。艶星さんは私を助けようとしてこちらに向かいました。この反応は…。」

「うむ、確実に無自覚のようだ。」

「そう言えば、もう一人の自分や獣ビーストが出てないけれどどうしたの?」

「あー…なんか出るのめんどいから今回はパスって言った。一匹もそうだった。だいぶお疲れのようだ。」

「うさ耳の形や髪色がもうミルコなんだよね。」

「ルミ姉に? マジかいな。」

「あ、今私とこのペアは中断という形で終わらせておくぞ。勝敗はな  
い上、驚かせた動きを見せてくれたからなっ!」

ヒュコツ

「なーにー? 萃ちゃんまた成長したのー?」

「あ、ミッドナイト。」

「うげっ! お姉ちゃん!」

「うげって何ようげって。今度は何を習得したの?」

「お、俺も分からないよ…。」



「艶星さんは無自覚ですが、空中を蹴りました。」

「本当!? 凄いいじゃない! ご褒美のキスしたげる!!」

「やめろおとおお!! 恥ずかしいからやめろおとおお!!」

トランシーバーか何かからの情報が来たのか分からないが急に  
お姉ちゃんミッドナイトが現れた。

頬にキスされました。

急にセクハラをしようとしていました。

え? 今何されているのかって? 背後から抱き抱えられてめちやくちやなでなでしてめちやくちや頬擦りしています。彼女曰く、俺成分が欲しかったとのこと。

何それ( )

「うう…もうお嫁に行けないよお…。」

「私がいるじゃない♪」

「お姉ちゃんの変態だからやだ!」

「あら、そうやって私を拒否するの? お姉ちゃん悲しいなく!」

「とにかく恥ずかしいから! はーなーれーてー!!」

「いーやーよおとおお!!」

(( (なんだろう…この和み具合は…。)) )

ドツカアアアン!!!

「ほわあああああああ?!?!」

「きやあああああ?!?!」

「か、かっちゃん?!?!」

「相澤先生?!?!」

「ちつ…! こんな奴がいるとか聞いてねーぞ先生!!」

「予想外中の予想外だ…! 全員戦闘態勢入ってくれ!! 本物の侵略者インヴェーダーだ!!」

「…はあ?!?!」

「移動系の個性を持っている奴がいる! ソイツさえ捕えてしまえばこっちのモンだ!!」

「待て待て待て!! 話が追いつかんど?!?! 急に侵略者インヴェーダーが来たなんておかしすぎる!!」

「空から降って来た…!! と言えば分かるだろう!!」

「了解解!!」

まるでタイミングを見計らっていたかのように現れた侵略者<sup>インヴェーダー</sup>。俺達は分かっていたのかって? 分かるわけないよ?

すぐ戦闘態勢に入りました。

ここからはまた長くなるので次回へ続きます。

## #32 急成長

「爆豪君！他の二人は!？」

「はぐれちまった!!っーかテメエらもいたのか!!」

「俺達もびっくりしたよ！爆豪君がいるってことは他の全ペアが何処かにいるってことが確認できた!」

「かつちゃん！個性はどうだった!？」

「そいつあ相性が最悪だ！空気を扱う個性に重力を扱う個性、光を操る個性だ!!あの空気野郎と重力野郎に俺と尾白で手こずった!!光野郎は常闇との相性が劣悪!」

「いやもう最悪の相性じゃねーか!!相澤先生!」

「なんだ艶星!」

「八百万さんとサポートへお願いします！光野郎の対策は八百万さんが既にしてあります!」

「すまない八百万、助かる!」

「空気野郎は策があるから、爆豪君と出久君で頼む!!重力野郎は俺とお姉ちゃんややる!!」

「おい無個性野郎！俺の話を……ああ分かった!!おいデク！やるぞ!!」

「う、うん!!萃君、無理しないように!!」

「ああ！お姉ちゃん、行くよ!!」

「ちよつと！私に指示しないで!」

「今はそんなことじゃないでしょ!？」

「っ、艶星少年……私は?」

「ヤバくなったペアのサポートをお願いします!!オールマイトさんは切り札なのでまだ温存しておいてください!!」

突如現れた侵略者<sup>インサエーター</sup>。

他のペアにも奴らがいると思うが、上手くやれていることを願うしかない。俺だってやれるか分からないがな。

無理はしないように且つ殲滅することを考えていました。

「お姉ちゃんはサポートお願いできる?！」

「言われなくなつて：サポートするわよ!!」

「そんじゃ俺を投げ飛ばして!」

「あーもー！我儘が多いわね!!いくわよ!!そりやああああ!!」

「人間砲丸を喰らいやがれえええ!!」

「ん。」

ズンツ

「べっ。」

「萃ちやああああん!!?」

「んむっ：んー：！んんんんんー!!」

「俺の個性を知っておいてそれか？笑わせてくれるガキだ：。」

「んんんんん!!!スポン ぷあっ!!上半身だけで助かつたあ：！」

「助かつたじゃないわよ！このおバカ!!」

ペシンツ!!

「痛あツ!!ごめんなさいお姉ちゃん！お願いだから頭叩かないで！縮んじやう!!身長縮んじやう!!」

「……………」

「侵略者が待っているじゃない！戦闘態勢入りなさいよ！」

「準備はいいか？」

「俺はいつでも。」

「いつでもいいような態度取らないで!?ツツコミ入れるの疲れちやうわよーもう疲れちやうたけれど!!」

「それじゃ：俺から行かせてもらうぞ！」

ボンツ!!

「え……?」

「そーれっ!!」

ドンツ

「萃ちちゃん!」

ズズンツ

「見えてなかつた？今アイツが撃つたのは重力弾。<sup>グラヴィティガン</sup>効果は俺が今食らっている状態よ。めっちゃ動きにくい。」

「見えていたか…。だが、守り切れるかな!!」

「上等だ…やってやるよ!」

結局無茶をした。

インヴェーター

重力の個性を持った侵略者は俺を潰すつもりでわざと狙っていた。お姉ちゃんを守っているにしろ、俺にも限界はあった。動きが大分重くなり、体が言うことを聞かなくなっていた。

ズズズ…

「あー…やっぱ無茶しちゃった。」

「萃ちゃんの馬鹿!私の為に守ろうとして何無茶してんのよ!!」

「お姉ちゃんはとりま逃げて?何とかするから。」

「この状態で何とかするって馬鹿なの!」

「ちよつとアイツ呼び出すから。あと、アレお願いしていい?」

「アイツって…制御は効いてるの?っていうか、もう使っちゃうの!」

「大丈夫。同時には出てこない。あと、俺にやお姉ちゃんの力がないと絶対に勝てないし捕まえらんない。」

「分かったわ。あんたが死んだら全てがパーになるから、覚悟しなさいね!!」

「うん。もう一人の自分《エヴィルキラ》、バトンタッチよろびこ。」

『バトンタッチが早えーよ馬鹿野郎。無理だと分かかってんなら先にやっておけよな全く…。』

通常時の俺では上手くいかないと思ったのもう一人の自分エヴィルキラを呼び出した。ちなみに任せつきりにしすぎているかと思っています。

反省してまああああす!!

「すうう…はああ…。うっし、やるか。」

「あら?もう一人キの自分ラ大分大人しくなってる?」

「あ?そりやあな、あんの馬鹿が無茶しやがるからブレーキ役としてもいなきやいけねーからな。とりあえずアンタ、サポートな。」

「ピキツ 生意気な口ね…!後で覚えておきなさいね…?」

「まーそんな怒んなよ。本体俺がビビっちゃうだろ?」

「萃ちゃんに伝えておきなさい!後でお仕置き確定って!!」

「伝えられたら…なっ!!」

ドヒユツ

「…そういや、あのガキって確か抹殺対象のガキじゃねえか？」

「あー…そーだわ。あのガキを抹殺もしくは生け捕りにすることも目的にしていたわ。」

「目潰しさえできりや問題ねえ!!エレクトル・ボルト電光!!」

「しまった!!萃君!!」

「艶星イイイイ!!」

「萃ちゃん!!」

「艶星…!くそ…間に合わなかったか…!」

「艶星少年は大丈夫です。相澤先生!」

「何故そう言い切れる…?!」

「よく見てください。」

「…?」

バリバリバリ!!!

「うおおおおっ?! (…あれ? 光野郎ってピカピカ光る方じゃねエのか…?)」

「うはははは!! どうだ!? 俺の個性『雷光』は!!」

シユウウ…

「…効くかね。」

「は!?!」

「寧ろ! 充電させてもらったわ。」

「あ、そう言えば充電できるの忘れてた…。」

「…そーいやそーだったな。」

「…成長しすぎでは…?!」

「お、おい! 話が違うじゃねーか!! あのガキ無個性じゃねエのかよ!!」

「お、おかしい…! あのガキは確かに無個性のハズ!! 雄英の奴らが何か細工しているに違いねえ!!」

「あー…そろそろこっちの番でよろしくて?」

「俺の重力で潰してやる…。 テメエらはあのガキ共を相手にしておけ。ここは俺一人で十分だ。かかって来な!」

「あ、んじゃご遠慮なく。」

バシユツ!!

(…!?コイツ…速いッ…!!)

ズツ

「おつとつと…。危ねえなあ…危うく腕が消えるところだったわ。」

「…中々やるな。」

「ま、弱点が分かったし。こつから本気で行くぜ?自称重力君♪」

「ピキツ このガキ…!」

「あ、ミツドナイト。捕らえる為のアレ準備できたか?」

「はあ…はあ…ええ、バツチリよ…。」

パシツ

「ありがとう。無茶させちまってすまねえ…少し休め。」

「ごめんね萃ちゃん…今サポートはキツイからまた…無理させちやう…。あと命令形はやめなさい。」

「あ、やつべすまん。てか、アンタは十分にすげーことした。本体の俺がそう言ってる。てか、歩けるか?」

「いいえ…少し休まないと歩けないわ。」

「おっけ分かった。すぐにカタをつけちやるから。」

パリツ…

「重力野郎、準備はいいかあ!」

「来い!生意気なクソガキめ!!<sup>↑ワイグライワイティガン</sup>超重力弾!!」

ボシユンツ!!!

ルナカウンター  
「月脚反射!!!」

パンツ

ドシユツ!!

「跳ね返した…!?できるハズがねえ…なのに…何故!!!」

ヴウ…ン

「終わらせるぜ?」

バリバリバリ!!!!

「あの光は…アイツの…!?」

ルナリング  
「月輪…。」

バシユンツ!!!!

「しまっ…!!」

「フォール落とし!!!」

「ベガアアッ!!!」

「ごがっ…?!?!?! (こ)、コイツが…無個性…だと…?!こんな…勝て…な…!!!」

「シユウウ…」

「バチツ…バチバチツ…」

「はあ…ふう…すうう…疲れた!!」

「重力野郎との戦闘は俺の勝ちだと思った。」

「皆がそう思っていたが、俺は少しだけ油断をしていた。」

「強めにぶち込んだけれど、相手はほんの一瞬だけしか意識が飛んで

おらず、俺が背を向けていた隙に攻撃を仕掛け始めていた。」

「ちなみにお姉ちゃんから受け取ったアレというのはこの後使うと

ころです。はい。」

「ズズンッ!!!」

「あえ?」

「ズズンッ!!!」

「ぷぺっ!!」

「これで勝ったと思うなよクソガキイイ!! 斃くたばりやがれええええええ!!」

「あーしつけー…。念の為電気を残してよかったわあ…この展開は

ゲームと同じだな。」

「ヘヴィグラヴィティ・ブレイク超重力・壊!!!」

「ズズンッ!!」

「よーいしょつと…。」

「どうだガキ…!俺の…って何故立ってんだよ…!?!」

「あ?これ如きで俺を倒せると思ってるの?とりあえずこれでも吸つてろ。」

「グイッ」

「な、何をすr」

「お前の弱点は技を繰り返すと同時に動けないこと。同じように弾を



撃つ時も止まらなないと撃てないこと。そして隙だらけだ。」

「や、やめろおとおお!!」

「とりま寝ろ。」

プシユウウウウ

アレというのは超強力な睡眠カプセルのこと。

お姉ちゃんには無理をさせてしまったが、お姉ちゃんのおかげで引っ捕らえることができました。

ちなみにお姉ちゃんはかなり体力を消耗させてしまっているので、少し休ませています。

「おい、俺本体。もういいか?こっからはお前の番だからな?」

『おけおけ。ありがとねもう一人の自分。ラーお姉ちゃんは俺に任せておいて。』

「りよーかい。」

ススス...

「すううう...はああああ...んにや。お姉ちゃんごめんなさい。無理させてしまつて...。」

「大丈夫よ...クラッ あつ。」

「おつとと...安全な場所に移動しよつか。...つてちよつ!」

ドサッ

「はあ...はあ...ちよつとだけあなたの胸の中で休ませて...?」

「...うん。」

「ふふつ...付き合っていないのにこうやって甘えるのはあまりないわよね...?」

「そだね...。」

「心臓バクバクしてるわよ...♪可愛い♪」

「だ、だつて...お姉ちゃんも女の子でしょ?だからその...／／／」

「あら、私のこと女の子として見てくれていたの?」

「わ、悪かったかなあ?!」

「嬉しいわ♪萃ちゃん、目瞑つて...?」

「...ん?う、うん...。」

チユッ

「ぴゃあっ!?!」

「ふふっ♪可愛い反応♪」

「も、もう…早く休んでよ!他も心配なんだから!!」

お姉ちゃんはかなりお疲れのようなので、甘えさせました。

急に猫さんみたいに甘えてくるお姉ちゃんがあまりにも狡いというか…とにかくズル可愛いのがもう反則です。

他のペアも気になってしょうがないが、お姉ちゃんが万全になり次第向かおうとしています。

ま、俺も動けないけれどな!!

「萃ちゃん、このまま付き合っちゃおう?」

「ん…考えておkギユツ にやっ。」

「返事はいつでも待ってるから♪」

「うん。」

### #333 苦戦、勝敗、波

ズザザザ…

「かつちゃん、萃君が考えていたことって何だと思う?!」

「アイツに聞きやいいじゃねえか!!」

「ごめん! とりあえずあの個性 空気の侵略者インヴェーターをどうにかしないと…! 僕は接近戦でも一気に酸素を消されるし、かつちゃんの爆破も空気がないと爆破ができない…!」

「所詮ガキはガキか。このままあの無個性と消えてもらおうぞ!」

「悪いな、無個性野郎アイツは簡単に死なねえ!! 言っておくが…テメエらは無個性野郎アイツの強さを微塵たりとも分かっちゃいねえ!!」

「萃君は負けるはずがない! 無茶はするけれど、しぶとさは誰よりも負けていない!」

これは俺が戦っている同時刻のお話。

俺は爆豪君と出久君をペアにして空気野郎の討伐を頼んだけれども、上手くいけるか分かっていません。

ただ一つ言えることは、この三人の侵略者インヴェーターの弱点が同じということだ。個性には代償や弱点が必ず付く。

俺が倒して捕らえた重力マンは個性を発動すると同時に動けない状態になる。そして発動した状態で動こうとすれば本人でさえ制御ができなくなり、最終的には個性を再発動しなければならなくなる。

「デク! コイツを片付けたら無個性野郎のところに向かうぞ!!」

「う、うん!」

「何度やっても無駄だ! 空気エアホール消失!!」

「うっ…! 息がっ…!!」

ボスツ…ボスツ

(ちっ…爆破が使えねえ…!! まるで小せエ宇宙空間じゃねえか…!!)

ボンツ

(かつちゃん、掴まって!)

(…ああ！コレはお前しかできねえからな！)

ドツ!!

「ぶはあああああ!!」

「ちっ、抜けたか…!!」

「かつちゃん、ここはバラけよう!!」

「ああ！まとまっていちやあこつちがやられる！デク！息合わせるぞ!!」

「うん！」

出久君と爆豪君は対面で辺りを一定の距離を保ったまま周り始めた。

二人は相手の弱点を見つけたからその行動に移ったのだ。

ちなみに俺は一つしか見つけていません。ハイ。

「今度は何をする気だ…！いや、待てよ…俺の弱点をもう突いたのか…!?!」

「ああそうだ!!無個性野郎はテメエらの弱点を一つだけ見つけてくれてんだ!!個体ごとの弱点も俺らで見つけた!!」

「それはお前の視界に入るところにしか個性を發揮できない!!それともう一つ…!!」

「テメエの一定の周囲に個性を發動することができねえことだ!!」

「ちっ…見破られたか…。だがなあ…。」

「OFA・フルカウル…!!」

「A・Pショット・オートカノン!!!」

「デトロイトスマッシュ!!」

「<sup>エア</sup>爆破!

パアアン!!

「うわっ!!」

「くっ…!!」

「弱点は当たっている。だが、空気を扱うことはできても武器にできないとは言っていないぜえ?」

「ああそうさ、そんなことあもう分かってんだ!!」

ビインツ

「何だこの黒いのは!？」

「デクー！」

「おりゃあああああ!!」

「うおおおっ!？」

わざとやられて動けない素振りをしていた二人。

出久君と爆豪君にしかできないコンビ技である上に、息を合わせないとできない技である。出久君が黒いピロピロを出すようになっていたのは、俺がいなかった時に急に出てきたものらしい。

攻撃には不向きなものらしいが、サポート系の使い方で合っているみたい。ちなみに黒鞭って言うみたいです。

今の状況としては、出久君が相手の脚に上手く黒鞭を引っ掛けることができて、爆豪君が合図を出して空中に投げたところですよ。

ボンッ!!

「テメエは重力野郎がいねえと空中戦をすることができねえ!!そりやバランスが崩れッからなあ!!」

「くそっ……こりや参った……雄英お前らにや適わねえ!!」

ガッ

「爆破エクス式カタパルト!!!」

バゴオオン!!

「はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……こんな相手に二人で苦戦するたあキツいかも知んねえ……」

「僕達も萃君に追いつかないとね……!」

「とりあえず捕縛しとくぞ!目エ覚ましたら尋問してやらあ!!」

「手上げたらダメだからね!？」

インヴェーダー  
侵略者 個性 : 空気

V S  
ヒーローの卵  
雄英 個性 : 爆破&OFA

勝者 雄英

そして侵略者<sup>インヴェーダー</sup> 個性 : 雷光を相手にしている相澤先生と八百万さんはというと…。

「くっ…スタングレネードも持っていたとは…!」

「はあ…はあ…やられましたわ…! 相手は雷と光を扱う厄介な個性ですわ…! 上鳴さんがいれば…!」

「艶星もここに応援してくれたら助かるが…生憎、個性 重力を扱う侵略者<sup>インヴェーダー</sup>を相手にしているからな…。」

「サングラスを持っているとは言え、急な光には対抗できませんわね…。先生、その伸縮性のある布?は使えますか?」

「いや、使えない。アイツは雷を腕のように使ってくるから弾かれる。できていたらとっくにやっている。」

「ゴムで代用できますか?!」

「…ゴム?」

「絶縁性のものを纏わせられれば上手くいけそうかと…!」

「…分かった。頼む!!」

ドルルルルル

「八百万。」

「はい?」

「結構出し過ぎていないか…?」

「こ、これくらいは平気です…! できれば避雷針を作りたいところですが…お生憎、その体力が足りなくて…。」

「いや、お前はよく頑張った。あとは俺に任せろ。オールマイトも応援で来てくれた。」

「私が来たあ!! 八百万少女、君は休んでくれたまえ! 私と相澤先生に任せておきなさい!」

「あ、ありがとうございます…(くっ…私にはまだ遠すぎた…!! 艶星さんにも追い越されてしまって、その上私は一体何をしていたの…!?)」

少々苦戦を強いられました。

どうやら個性 雷光の相手はかなり厄介で、近づかれれば人間閃光弾になったり遠距離となれば雷を操って攻撃を仕掛けるというめちゃくちゃ面倒くさい奴みたいです。

そして俺とお姉ちゃんはどうと…。

「はあ……はあ……お姉ちゃん……逃げて……!!」

「何よ……! あんな大量の相手に萃ちゃんが適うワケないじゃない……!!」

「じゃあ、誰が報告すんだよ……! トランシーバーがぶっ壊れて報告できぬ奴あいなえじゃねーか……!! 携帯も忘れたんでしょ?!」

「萃ちゃんは持っていないの!?!」

「持ってないよ! ぶっ壊れたら嫌だから教室に置いてきたんだもん……!!」

「このぼんこつー!!」

「ポンコツで悪うござーました!! とりあえず俺はアイツらを翻弄させておくから、その間にお願ひ!!」

「分かったわ! あと萃ちゃん!」

「何sチユツ …ツ!?!」

「ぶはっ…無理しないでね。」

「も、もう早く行ってよ! 調子が狂っちゃう!!」

「ええ♪」

タタッ

「行かせねえぞコラあ!!!」

「やらせねーぞオrrrrラあああああ!!!」

ベキヤアツ!!

「このクソガキヤあああああ!!」

『おい、ここは俺に任せられた方がいいんじゃないか?!』

「いや、俺に任せろもう一人の自分!! 君は重力野郎で疲れたんだろ!! 無理されちゃ困るし俺の体が持たねえ!!」

『獣はどうなんだよ!』

「あの子はまだダメだ!! 発動条件がまだ合わねえ!!」

『もうってなんだよ! つーか、発動条件ってなんだよ!!』

「一つは体力や体の状態がほぼ万全な状態、二つは体の一部が破損している時!!」

『条件が矛盾してねえか?!』

「二つだけ条件が合えば発動がきんだ！だが、今の俺は体力が万全じゃねエし疲れ切ってる！その上半端な状態且つ破損を起こしていいエから無闇にバトンタッチできねーんだ！無理にやりやあ暴れるわー！」

『お前の体めんどくせーなおい!!』

「しよーがねーだろ！俺なんだから!!」

『ま、お前が主導権だから判断はお前に任せる!』

「おうよ!!」

第二ウエーブがありましたふざけんな○

お姉ちゃんが大分お疲れだったので先生達がいる場所へ報告をお願いして離れさせて、俺は侵略者インヴェーダーの相手をした。

ざっと20人はいると思います。

ちなみに奴らは何処から来たかと言うと、落ちてきたり歩いて来たりで向かって来ていました。

…は???

「リーダーがやられちゃってる…!」

「あのガキがやったのか!」

「リーダーを助けるぞおお!」

「行くぞクソガキいいいい!!!」

「にひひ…来いやゴミカス共があああああ!!!」



## #34 再来

「丁度瓦礫が大量にあるな…。久々にやりますか…！換装!!」

ガガガ…

「な、何だあのガキ…！無個性じゃなかったのかよ…!!?」

「いやあく、発目さんに改良してくれたコスのおかげで換装時間が五秒も縮まった！吹雪型壱番艦 吹雪!抜錨します!!」

「ただの瓦礫の寄せ集めだ！殺れえええ!!」

「駆逐艦を舐めんなクソ共があああああ!!」

ドッ!!

「標的確認…腕力205%…握力257%…！火力上限300%…連射速度400%!!12.7cm連装砲A型 連射じゃああああ!!」

ボガガガガ!!

「ぬあああああッ!!」

「何だコイツはああああ!!」

「ダメだ！退けええ!!遠距離で攻撃を仕掛けるぞ!!」

プシユウウ…

「ふう…：よし、腕の運動はこれでバツチりつと…：ってあれ?」

「全員構え!!」

「あれ…?もう遠距離に入っちゃったの…?」

「撃てええ!!」

ズダダダダダ!!!

「ひゃっはああああ!!汚物は消毒だああああ!!」

「遠距離個性を持って生まれて良かったわああ!!俺達がいりやありーダーも安心するだろうよおおお!!」

「止め!!」

「オーバーキルしちまったか?」

「ガキ相手にやりすぎだつて」なあにこれ、「豆鉄砲?」いやいやw豆鉄砲のレベルじゃ…：は?」

「直前で航空戦艦に換装したけれど、傷が一つもないんだけど…おつかしーねー?」

「お、おいおい嘘だろ?! あんなに集中砲火喰らっておいてか!」

「いやいやw アレで生きて帰って来れる奴なんていねーよw」

「換装。」

「おい…やっぱり個性持ちじゃねーかよ…!!」

「翔鶴型航空母艦 弐番艦 瑞鶴! 抜錨!! 飛行甲板準備よし。九七式艦攻全機発艦!!」

バシユンツ!!

大量に出てきた侵略者相手は俺に集中砲火を浴びせようとしたけれど、直前に換装していた。

伊勢型航空戦艦式番艦 日向に切り替えていましたので。

侵略者達が個性持ちとか言っているけれども、それは違います。単純に俺の親の技術力と発目さんの追加効果が強すぎるだけなんです。

「や、やべえ…! こんな相手にできねえ!! 逃げろおおお!!」

「奴らが無個性って言ったのに実際無個性じゃねーだろーがあああ!!」

「金に動かされた自分がバカだった畜生おおお!!」

「ふう…追っ払いはできたつと…。」

「おやおや、遊びは終わりか?」

「あ??…:…:…:ツ!!?」

「萃ちゃん…ごめんね…:…:ちよつとドジっちゃった…。」

「この女を解放したければ、我々のところに来い。」

「……………」ズズ…

「大事な人なんだろう? 尚更断れないはずだ。大人しくこっちに来てくれたらいいだけだ。」

「萃ちゃん、逃げて…。こんな奴を相手にしちやったら…!」

「獣…殺るぞ。」

『Grrrrr…』

シユンツ

お姉ちゃんが捕まった。

奴の体に数箇所<sup>ニ</sup>に傷跡や巻き付けた跡があつたので戦つていたんだと察した。けどどやはり手加減はしていないようで、お姉ちゃんが傷だらけになつていた。

お姉ちゃんは強がつていたけれど、俺には助けて欲しい顔をしていたように見えた上、いつもお世話になつていてる人がこんな姿にされていて俺は耐えられなくなつていた。

「選択肢を誤つたことを後悔すゝブシュツ　づつ…!?しまった…女が!!」

「貴様だけは許さねエ…。半殺しにしてやるから安心しておけ…!」

「萃ちゃん…!感情に振り回されちゃダメよ…!!っていうか助けてくれて嬉しいけれど…。」

「俺ア今落ち着いていらねエんだ…!アンタがこのザマにされてよオ…俺が冷静でいられるかよおおお!!!!換装!!」

ガガガガガガ!!!

「赤城型航空母艦壱番艦　赤城…!九九式艦爆、全機発艦からの換装…!!!」

「小虫を飛ばして何になる!お前は無個性の雑魚以下だ!!だが、お前がいるだけで我々の目的が丸潰れになるから消えてなくなれええ!!!」

「断る!!大和型戦艦式番艦　武蔵!!46cm三連装砲!!」

ドカアアアンツ!!!

「私の個性　地雷の感触はどうだ?」

「ああ…最っ高にへなちよこだなア!!」

「ピキツ　あゝあゝ!?!」

「貴様よりも…最強に強エ爆破を持つてる奴がいるんじやボケええええええええええ!!!」

エクス・クインテッド!!!

「五重爆発!!!」

ノー・ネーム・アサルト

「名も無き獣の乱撃!!!」

ボボボボボ!!!

ドガガガガガガ!!!

「換sドゴツ!!　ぶっ!!」

「はっはあ!!お前の腕が使い物にならねえなあ!!このまま死ねええ



障子君達の視点

「艶星の声だ。かなり大きい声してるな…。耳栓の理由ってそういうことか…。」

「だけどそのおかげで位置が分かったよ！皆行こう！！奴らの捕縛は終わった!?」

「OKだ！ギツチギチに縛ったぞ！」

「オイラのモギモギのおかげで捕縛が楽だったから良かったわ！」

尾白君達の視点

「いってて…常闇…大丈夫か？」

「なんとか…な。」

「艶星の声が聞こえた…かなりバカデカイ声だった。」

「ああ、俺達は気絶していたから状況は掴めないが…最悪な方向に向かっていているみたいだ…！」

「すぐに向かおう!!」

「もちろんだ!!」

俺は何者かに体の数箇所を撃ち抜かれた。

アキレス腱を先にやられた為、立ち上がることすらできずに倒れた。

倒れた直後にも腕、肩、太腿<sup>もも</sup>、胸部を一発ずつ撃ち抜かれ、激痛のあまりめちやくちや泣き叫んだ。

ちなみに耳栓の話には出していなかったけれど、コソコソと皆に渡していました。

「くつつつつそ痛てええええええええええ!!!誰じゃゴラああああああああ!!」

「バシンツ!!」

「へぶちっ!!」

「萃ちやんうるさい!!私の鼓膜を破壊する気!?!」

「リーダーも副リーダーもやられて情けねえと思わねえのか…?それに…お前、只者じゃねえな?」

「おうおう貴様かゴラ。小虫のように続々と出てきてはるようじやな

あ!!」

「ふっ：ガキ一匹相手に虫と言われるとはね：舐められたもんだ。」  
チャツ

「お姉ちゃん、渡した耳栓しておいて。」

「まさか本気でやるの：!?!」

「いいからしろ!!」

「わ、分かったわよ! (なんか怖くなったわよこの子：!?!)」  
「すうううううう：。」

耳郎さん視点

「マズイ!!皆!耳栓して!!あの子本気で出すよ!!!先生方も耳栓の準備を!!」

「おいおいマジかよ!?!」

「上鳴君、慌てたらダメだぞ!ここは冷静に付けよう!」

「飯田こそ焦ってないか!?!」

「萃ちゃんの本気の声：相当やばいかも知れないよ：!油断しちやダメだから!私が合図しておくから、それまでは耳栓しておいて!」  
「「「「了解!!」」」」」

常闇君視点

「耳栓の準備をしようか。」

「そうだね、今度は本気でやるかも知れない。本気の声は聞いたことないけれど、周囲が振動したままになっていたことがあったからね。」  
ブラックシヤドヴ

「黒 影、お前も耳栓しておけ。」

「アイ分カツタ!!」

出久君達の視点

「かっちゃん、耳栓の準備!」

「ああ!もちろんだ!」

「先生方!耳栓の準備を!!」

「分かった。」

「もちろんだ八百万少女!」

皆察していたようです。

地震で例えると、余震と本震みたいな感じです。はい。

俺が暴走して謹慎を喰らったからって何もしていなかったワケではなく、暴走の抑制や攻撃の幅を強化とかしていました。

ちなみにこのクソデカヴォイスはたまたま生まれたもので、よくお姉ちゃんにしばかれています。さつき頭叩かれたもん。痛かった。

そして俺の視点に戻る。

「ちよつと萃ちゃん無理しないでよ!？」

「すうううううう……。」コク

「足搔こうとしても無駄だ。貴様の声でさえも遮るこの耳あてさえあれば耳は死なん。」

(たまたま出てきた技だが：一か八かだ：！喰らって壊れる：!!) シヨツト  
「散d」

「K Y y y y y y y y y y y A a a a a a a a a a a a a a a a a a a a a a  
a!!! ハイブーン・デヴィルスヴォイス (『悪魔の高声』!!)」

バリバリバリツ!!!

「ふっ：何度やっつバキツ は：?!」

「A A A A A A a a a a a a a a a a a a a a a a a a a a a a!!!」

「ぐっ：こ、壊れた!? 高品質ものだぞ!! 壊れるハズのないものが：何故だああああああああ!!!」

ピシピシ…

(なんて振動なの：!? 一体どうやったら声だけでそんな振動を出すの：?!)

耳郎さん達の視点

「始まった：!」

「うおっ!? なんつー振動だよ!? これが艶星の声なのか!？」

「聞いてみたいけれど：鼓膜が瞬殺されるみたいだもんね：。」

「先生方にも影響を及ぼす程の声ってよ：俺達のクラスに本当にとんでもねー奴が入ったな!！」

「：どうしよう、耳栓のせいと皆の音が聞こえない：。オイラも艶星の本気の声聞いてみたいけれど：ダメだ!! オイラも艶星の為に頑張らねーと!！」

「響香ちゃん、目の前では厄介なことになったね☆」

「うん…！だけど音で勝負するなら…私も負けられない!!!『ハート  
ビート・サラウンド』!!!」

「俺達も応戦するぞ！耳郎に続けええええ!!!」

出久君の視点

「かつちゃん！」

「ああ！早く着かせるぞ!!デク、掴まれ!!」

「うん!!」

『爆速ターボ』からの『爆破カタパルト』!!!」

八百万さん達の視点

「ぎゃああああああ!!なんだああああ!!この音はああああああ  
ああ!!耳が…耳が壊れああああああ!!」

「先生方！」

「艷星のおかげで奴は悶絶している！オールマイト!!」

「もちろんです相澤先生!!テキサスう…スマアアアアアアツシユ!!!」

俺は一分程声を出し続け、周囲どころか施設全域にまで影響が出ました。ちなみに俺の声の影響が強すぎたせいで窓ガラスが大量に割れたのかなんとか。



## #35 一時的の平和な日常

「はあ……はあ……うっ……おえっ……。げほっ……」

パタッ

「萃ちゃん！」

「あ……が……」

ドサッ

「や、奴は……倒れた……?」

「ええ、倒れたわ……」

「これ……最終手段だったのになあ……また開発しないと……」

「もう十分に開発したじゃない……休みなさいよ……」

「それじゃあダメなんだ……コレ如きで倒れるなんて俺はまだ弱いよ……」

「こら、人をコレ呼ばわりしないの。いくら敵や侵略者でも一応人間インヴェーターなんだから……」

「ごめんなさい。あと歩けないから皆が来るまでちよつと寝る。あとお腹空い……た……」コケッ

「本当マイペースね……だけど、お疲れ様♪」  
侵略者急襲緊急臨時戦闘インヴェーター

雄英 勝利

緊急臨時戦闘が終わり、皆が駆けつけた。

俺は銃を扱う個性を声だけで倒したせいで喉が一時的にぶつ壊れた上、その分一気に疲れが出てきて気絶に近い爆睡をした。

だが……

ススス……

「ひにゃ……んにゃ……ひつくちゅん!!!んにゃ……?」

「萃っちいいいい!!!」

「萃君!!!」

「おいコラ無個性!!何寝てんだコラああ!!」

「艶星さん……!」

「ふあ…う？あれ？俺爆睡しちゃつてズキイツ!! あ、だあああああ  
あ!!?」

「艶星君、両脚のアキレス腱や体の一部を撃ち抜かれて無理に動か  
せない状態だ。だからあまり無理はしないでくれ。」

「俺の死角から撃った銃野郎は?」

「ん。」

「クソツ…外しやがれ!このガキ共が!」

「まだ抵抗してんのか。自称リーダーの重力野郎と地雷野郎は?」

「アレか?」

「オイラのモギモギで個性を塞いでおいたぞ!」

「峰田君ナイス!!」

「萃ちゃん、声が…。」

「うん…めちやくちや痛い。アレとっておきだったけれど使っちゃつた。次に使えるのは多分本格的に攻略入る途中くらいかも…。げ  
ほっごはあ!!?やっべ痛てえ!!ごべばっ!!」

「萃君が吐血した!!死んじやダメだああああ!!」

「だいじよぶ…『悪魔ハイトーン・デヴィルズウォイスの高声』をかました代償だから…。」

「それって…めちやくちや振動していたり建物に罅ひびが入ったりしたア  
レか?」

「え?振動?罅ひび?」

「え??」

「あ、この子アレだ。自覚してない。」

「耳栓のやつ。」

「あ、アレか!うん、耳栓のやつ!」

「聞いてみたいって思ったから録音しておいたわよ。」

「ミッドナイト流石っす!!流石艶星の…なんだ??」

「妻?」

「なっ…!?!」

「あら…／／／萃ちゃんの妻だなんて…／／／」

「ちよちよちよちよ!!?上鳴君!!妻じゃないからね!!」

「でも付き合っているんだろ?」

「つ、つつつつ付き合つてにやああああい!!」

(((((慌てる、可愛い。))))))

「え?萃ちゃん、私と付き合っているんじゃないの?」

「いつから!!」

クイツ

「またしちゃう?」ボソツ

「ふぐうつ…!お、お姉ちゃんそれはツ…!」

「萃つちが顔を真っ赤にしてる!めちやくちや可愛いんだけど!」

「可愛い:女の子にされているように見えるけれど、すっこいい!!」

「ねえ女子組はからかうの勘弁!!余計恥ずかしくなつてきちゃったよ!!」

(((((やつば超可愛い!!!))))))

「それはそれとしてミッドナイト、萃君の声の録音を再生してもらつてもいいですか?」

「ええ、もちろんよ♪」

皆が興味深々に俺の声を聞きたがつていた。

特に得するようなことはないし、なんで聞きたがるんだろうって思つちやつたのです。まあ、興味を持つてくれるのはありがたいけれども…。

ちなみにお姉ちゃんがすっこい執拗に近づいてくるので必死にズイズイ押し返しています。二人きりならまだいいのに…。

「ねえお姉ちゃん近い。」

「いいじゃない♪あ、皆再生するわよ?一分くらいあるから聞いてみてね?」

ペチツ

シーン…

「…あら??おかしいわね…音が小さいのかしら…?」

「……………ミッドナイト!そんなに音を上げたら…!!」

ガアアアアアアアアアアツ!!!

「びぎやあああああああ!!何この不快な音おおおおお!!」

「うわああああああ!!皆耳栓してええええええ!!」

「お姉ちゃん音量どれくらいにしてんのさあああああ!!!」  
「確認してなああああああいい!!!」

※音量MAX

「ぎやあああああああ!!やめろおおおお!!あのガキの声はうんざりなんだよおおおおお!!」

「頼むから消してくれええええええああああああ!!!」

「耳が死ぬあああああ!!!」

パリンパリンッ

耳の被害を受けたのは捕らえた侵略者達インヴェーダーと俺でした。いくら録音した俺の声でも別の声聞こえる上、クソうるせえ。

ちなみにお姉ちゃんがやらかしたせいで窓ガラスが割れ、他の先生方には俺がやったと誤解されて弁償する羽目になりました。

お姉ちゃん許さんぞ。

「か、萃ちゃんごめんっつ〜!あんなに大きくなるなんて知らなかったの〜!!」

「俺のせいにしたのは何処の誰ですかね〜??ニッコリ」

「お、怒らないでよ〜!何でも聞くからさあ〜!」

「ん?今何でもするっつて...?」

「私のできる限りね?!」

「じゃあ奢っつてよ。」

「た、高いものは厳しいかなあ...あはは...。」

「高いものなんて言っつてないよ?早くスイーツ奢っつて!」

「わ、分かったから!お願いだから可愛すぎる動きでポカポカしないで!!襲いたくなっちゃう!!」

「なんでそーなるの!?!」

「萃ちゃんのこと...好き...だから?」

「...は?!」

「な、何よ?!」

「ちよ...それ...本気で...!!?」

「そ、それは...本気よ!!っつて言うか、前にも言ったハズよ?!」

「覚えてねーや。だけどセクハラしたのは覚えてるぞコラ。」

「キスしたこと!?! いいじゃない別に!」

「よかねーよ! なんて俺のファーストキスがお姉ちゃんなんだよ!!?」

「萃ちゃんが好きだからよ!!」

「ド直球すぎるわ!! スイーツ奢ってくれたら俺もお姉ちゃんの言うことを一つだけ聞いてやるよ! 俺の好きなスイーツが分かったらな!」  
「当ててやるわよ! 当てたら言いなりになりなさいよね!!?」

帰り際でまさかの痴話喧嘩みたいになりました。

お姉ちゃんが急に音量MAXのよく分からんクソでけー音を俺の近くでかましたので俺は怒っています。

許す条件は俺の好きなスイーツを奢ってもらうついでに引き当てること。あと満足させてくれること。

その為にスイーツ専門カフェに来たけれども、俺はこの時点で目をキラキラ輝かせていました。

おい誰だ子供っぽいって言った人は。先生怒らないから手を上げなさい。

「んー: 萃ちゃんの好きなスイーツ: 変わっているかも知れないから難しいわねえ: ねえ萃ちゃん」

「んあ?」

「今すっごい目キラキラさせて涎出していないかった?」

「い、いいじゃん別に! スイーツ好きが我慢できるわけないでしょ!?!」

(、、、)?」

「もう可愛いわね♪ (もしかして: 裏面かな?)」

チラツ

「あふあつ?!」

「あら、苺と桃が出て: あ、もしかして?」

「ち、ちちちちち違うもん!! 決して違うもん! 俺が好きな苺と桃がなんか大量に使われたパフェを見て目キラキラさせながら涎垂らしていたとかそういうわけじゃないもん!!」

「だけど本当は?」

「はい大好きなスイーツですごめんによしやい。」

「じゃあ確定ね♪」

「うう…お姉ちゃんの勘が鋭い…。」  
「すみませーん！これ二つd「いや」一つでいいよー。」「なんで？」  
「よ、よく見て…？」  
「ん…？あっ！」  
「…ね？分かったつしよ…？」  
「萃ちゃん…。」  
「？」  
「素直になりなさいよ。」  
「やだ。」  
「どうして？」  
「恥ずかしいもん。」  
「私に言うのが？」  
「そ、そうだけど…。」  
「ちよつと隣に座るわね？」  
「ちよつ…!?ち、近くない?!っていうか隣に座られると恥ずかしいんですけれど!？」  
「こうやってくつついた方がいいじゃない♪」  
「う、うう…恥ずかしい…。」ギョッ  
「そういえば萃ちゃんは利き手はどっち利き？」  
「左。」  
「手を繋いだまま食べられるわね♪」  
「…はっ!!お姉ちゃんの掌で踊らされているじゃん俺!!」  
「今頃!？」  
「お待たせしました〜。苺と桃のウルトラMIXパフェです〜。ごゆっくりどうぞ〜♪（百合カップルだ…凄く尊い…ツ!!）」  
「あ、どうもです。」  
（しかもラビットシップがいる!?実物を初めて見たけれど…すっごく可愛い…!）  
「お姉ちゃんお姉ちゃん。」  
「どうしたの？」  
「早く食べたい。」

「ごはあああああつ!!!」

「えっ!? 店員さん!? 大丈夫ですか!？」

「救急車呼ばないと。」

「ゴフツ だ、大丈夫です…! 尊い成分を摂りすぎただけです…!」

「と、尊い…成分??」

「大丈夫kってまた吐血しちゃったのかい!! うちの店員がすみません!!」

「あ、全然大丈夫です。それに今…またって聞こえましたが…。」

「あー…この子は尊いものを見ると吐血しちゃうんです。尊い成分の過剰摂取をしちゃうみたいで。」

一時はどうなるかと思っただが、いつものことらしいのですぐに解決した。俺とお姉ちゃんほかんとしていたが、店員さんの素早い動きと対応に感動しました。

ちなみにお姉ちゃんも俺をあの尊いものを見て吐血した店員さんのようになってほしいみたいなのを言っていたので俺はポコスカ叩いていました。

## #36 安らぎの一日

「萃ちゃん、はいっ。あーん♪」

「一人で食べられるからいい！」

「むう…そんなに恥ずかしがらなくなってきたっていいじゃない…。」

「いただきまー…はむっ…おいひい〜♪」

(…ッ!!な、なんて可愛いの…!?こ、こんなの…理性蒸発待ったナシじゃないの!!)

「か、萃ちゃん…やつぱりあーんさせたいわ。」

「むぐぐ…お姉ちゃんが当てたからしよーがないな…。んあ。」

「あーん♪」

「はむっ。」

「はい、間接キス♪」

「……………」。ボツ

「あらら??」

「お、お姉ちゃんの…いい、いじわる…／＼／＼」

「普段はポコスカ叩くの、今はやけに静かね？」

「だ、だってえ…／＼／」

(ラビットシップちゃん…あの女性と付き合っているのかな…?)

(あの子ラビットシップちゃんだよね?彼女持ちだなんて知らなかったああああ!!)

(クソおおお!ラビットシップちゃんを襲ってしまったえば既成事実もできたハズなのにいいいい!!彼女持ちとか聞いてないよおおお!)

(ラビットシップガチ勢が多いせいか、皆悶えてるな…。あの綺麗な女性と付き合っていると羨ましいぞクソがつ!!幸せになりやがれラビットシップ!!)

カフェにて皆が俺とお姉ちゃんに注目をしていた。

多分やり取りなのかな?お姉ちゃんにいじわるなことをされて、俺が顔を真っ赤にして恥ずかしそうな感じで喋った上、お姉ちゃんの満面なだらしない笑みで笑っていたからかと思いたい。



なんかやらかした気がする。

「お、お姉ちゃん…恥ずかしいからいじわるなことは…その…やめてね…う…」

「そんなこと言われたらまたいじわるしたくなっちゃうじゃないの♪」

(((((分かるツツ!!)))

クイツ

「ぶあ??」

「目、閉じて?」

「またあーんするの?」

「ええそうよ♪」

「んあ。」

カコツ

「ん?お姉chチユツ ……ツ!」

「ぷはっ…萃ちゃん、顔真っ赤♪」

「…………ツツ／／」

「ねえ萃ちゃん。」

「な、何よ…。」

「キス…まだしたい?」

「嫌よ…恥ずかしいじゃない…。」

「素直じゃないわn女の子になってない?」

「う、うるしやいわ!!お姉ちゃんにキスされてからなんか変になっちゃったじゃないの…!!」

(か、可愛い…!萃ちゃんがすっごく乙女になってる…!!)ジュルリ

「お、お姉ちゃん…はい。」

「あら、お返し??」

「や、やられたらやり返す…そ、そうでしょ…??」

「ありがと♪あ…はむっ。」

「はい間接キス。」

「ぶふっ!!」

「ふにやああー!!お姉ちゃん何するの!」

「あなたもいじわるしているじゃないの!!まさか萃ちゃんにやられるなんて…私も舐められたものね…。」

「ブーメランぶっ刺さってるよお姉ちゃん。」

「あとごめんね?今拭いてあげるから。」

「いやいいよ。俺もいじわるしちやったし。」

「本当にいい子…。抱いていい?」

「なんでそうなるの?」

会計をしようと向かった途中、何故かお客さん達が鼻血を吹き出して倒れていました。意識を保っているお客さんから聞いたところ、俺とお姉ちゃんのイチヤイチヤを見て鼻血を出したみたいです。

ちなみに俺とお姉ちゃんはそれを知らなかったようです。

とりあえずで済ましていいのか分からないけれど、とりあえずお店を後にした。

「あらら、もう暗いわね。」

「家まで送る?」

「助かるわね。それに積極的な萃ちゃんとても好きよ♪」

ポスッ

「えへへ…♪」

(照れながらのその笑顔最高に可愛いわね…!!抱きたいやダメよ香山 睡!萃ちゃんからの正式交際が許可されたらよ…!!)

色々話して気がついたらお姉ちゃんの家に着きました。

「萃ちゃん、本当にいいの?」

「うん、俺もちやんと帰らないと怒られちゃうから。」

「真面目♪あ、そうそう!これあげるわ♪」

ジャラッ

「ブレスレット…?」

「私からのお守り♪」

「ありがとうお姉ちゃん。大事にするね。」

「あっ…待って!」

「ん?」

「え、えつと…最後にまた…キスしていい…?」

「はあ…全くお姉ちゃんったら急に女性らしさ出しちゃって…。いいよ。」

「ありがとう…／＼／＼」

チュツ

帰る前にお姉ちゃんと唇を重ね、長く深い接吻をした。

俺は舌を入れられてびっくりしてたじろいだ。

「ぷはっ。大人のお姉さんのキスはとうだったかしら♪」

「は、初めてお姉ちゃんに女の子にされた気分よ…／＼／＼」

「言葉がもう女の子ね♪かーわいっ♪」

「こ、これはお姉ちゃんのいじわるじゃないからあのことは許すわよ

…／＼／＼」

「ありがと♪それじゃあね♪」

「う、うん…。」

パタン

お姉ちゃんを無事に送り届けられたが、キスをされて女の子にされた感じがしてちよつと違和感があった。だけどお姉ちゃんのが好きになったのはあながち間違っではない…と思う。

そして帰り。

トテテテ

「やつべもう20時になっちゃう！用があつて遅くなつたじゃダメかなあ…？あ、これ通り魔にやられるフラグ？」

「萃ちやあああん!!」

「えっ…お姉ちゃん!? ナンデ!? ギュムウウツ　ぷにゅっ!!」

「やつぱりうちにいて！一人で帰らせたくない！」

「俺はもう子供じゃないよ!？」

「そういうのじゃないわよ！明日送って行くから私の家に来なさい！」

「わ、分かったよ…。」

一方、寮にて。

女子達の視点。

「萃っち、ミッドナイトの家に泊まるって〜！」

「襲われないか心配になっちゃうな…。」

「あの子結構強がるところあるけれど、女の子っぱいわね。」

「萃ちゃんのお母さんと一緒にいた時はうちすっごくびっくりした！子供っぽくなってたね！」

「確かに子供っぽいところあるかも！」

「だけど、そこがまた可愛いのが艶星ですわね♪」

「」「本当それ!!」「」

ちなみに女子達のいる部屋はまさかの俺の部屋。

男子達の視点

「萃君がお泊まりだってかつちゃん。」

「んだと!?あいつ自由奔放すぎだ！」

「いや、帰るところを引き止められて回収されたって○I N Eのグループに書かれてるよ。」

「あ、本当だ。」

「バクゴ―素直だな。いつもは暴れたりしてんのにな！」

「うっせ○すぞ!!」

「ぐぬぬぬ…艶星イイ…!羨ましいぞおお!!オイラも…オイラも泊めさせてくれええええ!!」

「確かに羨ましいなく。そういや俺もミッドナイトに眠らされたんだっけか?」

「そういえばあったね!だけど峰田君が瀬呂君のテープで切り抜けたんだもんね！」

「あん時、峰田じゃなかったら多分落ちていたかもな！」

「お、おいやめろよオイラ照れるだろ！」

「そういえば、艶星の部屋ってあんまり見たことないよな。」

「あ、確かに。どんな部屋なんだろう？」

「確かに…女子達に聞いてみるか？」

「それもそうだね☆艶星君って結構不思議な人って感じだから、もう少し僕達も知りたいね☆」

「あ、そういえば艶星に充電させてねえ!!」

「上鳴と艶星の日課になってるよな。アイツも個性持っていると思っ

だが、無個性で生身の状態だなんてな…。無個性の状態ってあまり分らないけれど、どんな感じなんだろうか？」

「艶星君に聞いてみないと分からないこともあるな。艶星君が上鳴君に充電を頼んでいたりしているが、擬似的な個性にしていると思われる。俺達には特殊な器官や特殊な性質を持っているが、彼はそのようなものを持っていない。どう言った原理で出しているのだろうか…。」

「萃君については僕もある程度聞いたよ。」

「デク、どんなこと聞いた？」

「萃君本人は戦闘時に力を入れすぎると暴発して筋肉の繊維が千切れたり、力が入らなくなるからあまり考えていないんだって。」

「それだけか…？」

「あまりだからちゃんと頭の中に叩き込んでいることはあるんだって。」

「なんだそれ？」

「体の一部一部に腕力、握力、脚力、速度、目標、火力、艦艇の装備名を使った技を言葉にして繰り出すんだって。」

「だから言っていたのか。ただ早くぶっぱなしやいいだけじゃねーんだな？」

「最近だと頭の中で喋るだけでも出せるようになったとか。口よりも早く喋ることができるところから技の繰り出しに6秒も縮まったんだって。」

「つ、艶星すげーな…最早個性じゃねーか…。」

「オイラ達も艶星に追いつかねーと!!」

「だな！クラスメイト同士で擬似戦闘になったらサポート枠の俺達が活躍すっかもな！」

男子組も女子組も盛り上がっていました。

一週間くらいには侵略者日本支部の攻略が始まるので、その前にクラスメイト同士での擬似的な戦闘が始まる為、準備もしていた。ちなみに俺はといと…。

「お、お姉ちゃん…。」

「なあに？」

「なんで勝手にお風呂に入って来てるのさ!!」

「いいじゃない♪久々に一緒に入れたんだから♪」

「なんで俺はタオルを巻いているのにお姉ちゃんはすっぽんぽんなのさ!!」

「え、ダメ??」

「ダメに決まってるでしょ!」

「興奮してくれるのかなって思ったのになあ…。」

「やめてよそういうの!!タオル巻いてくれたら一緒に入ってあげるけれど!!いやもう入ってるけれどさあ!!」

「それじゃあ萃ちゃんのタオルをもらおうわね♪」

「やだ!それだけは絶対にやめて!」

「だーめっ!」

「やー!やだー!!」

バサアツ

「ツ…!!?」

「うう…酷いよ…お姉ちゃん…。」

「ご、ごめんね…萃ちゃん…。」

「うん…大丈夫だよ…。」

「こんなに傷だらけだったなんて…。皆には見せてないの…?前のはこんな傷はなかったわよ?」

「洗っても落ちない特殊メイクをしたからだもん。まさか本当に見られるとは思わなかったな…。ちよつと緩くなっちゃったな。」

ギョッ

「ひゃっ!?お、お姉ちゃん…!!」

「ごめんね…気づいてあげられなくて…。」

「大丈夫だよ…傷これのおかげで強くなれたんだから。お姉ちゃんやルミ姉のおかげで強くなれたんだもん。…お姉ちゃん?」

「萃ちゃん、こっち向いて?」

「む、無理だよ!すっぽんぽんのお姉ちゃんは見られないよ!」

「いいからこっち向きなさいっ!」

グリユンツ

「く、首があ…。」

「あ、乱暴しちゃった。タオル巻いているから入れるでs「今度は俺がすっぽんぽんになってるからダメ!!!」えー!?ダメなのー!?!」

仲良く入りました。

あ、一線は越えていません。

襲われかけたのはあつたけれど、決して一線は越えていません!!

## #37 擬似戦闘訓練

「萃ちゃんやつほー！」

「葉隠さんおはようでござやる。」

「擬似戦闘訓練の話聞いた？」

「聞いたけれど少ししか頭に入っていないかなあ…。」

「萃ちゃんは三奈ちゃんと一緒だつて！」

「セメントス戦の時と同じ感じかな？」

「多分そうなのかな？もしかしたらたまたまかも！」

「葉隠さんは？」

「私？私は踏陰君と！」

「あ、それならたまたまだね。こりやあ葉隠さんと対決ってなつたらかなり大変だな…。」

「その時は私が萃ちゃんにいっぱいいいじわるしちゃうもんねー♪」

「やつべえ負け確定じゃあん…。」

「萃っち透ちゃんと何話してるの？」

「あ、芦戸さんおはようです。今、擬似戦闘訓練のお話をしていたところなのです。」

「また萃っちと一緒になれたから嬉しい♪」

「ボンッ　そ、そう言われたらなんか…照れちゃうなあ…。」

朝から戦闘訓練のお話です。

今度はvs先生方ではなく、クラスメイト同士で戦うことに。

クラスメイトの個性に近い個性を持った敵や侵略者インヴェーダーがいる可能性が十分有り得る為、先生方もそういう決断に至ったとか。

「最近は脳筋授業みたいなことしてないが…近頃は奴らの動きも目立って来た。お前らに近い個性や似た個性が出てくる可能性があるから、しっかりと頭を使うように。個性の相性が悪いから諦めたら最悪の結末を迎えると思え。分かったら返事だ。」

「…「はい！」」」

「よし、早速だが…艶星と芦戸ペアvs轟と蛙吹ペア。点数は付けな



いい、ただこの戦闘訓練で学習したものを本戦で使えるようにしろ。以上だ。」

「芦戸さん、どうしよつか?」

「急に相性が悪いよおおお!!」

「もしかしたら上手く連携取れないかも知れない。別々になっちゃうかも。」

「あ、有り得るかも…。」

「蛙吹、艶星を別の場所へ。アイツの弱点は女子に手を出せないことだ。お前の保護色でやれるハズだ。」

「梅雨ちゃんって呼んでね。分かったわ、萃ちゃんを別の場所へ移動させたらいいのね?」

「アイツのスピードには流石の俺も氷の生成が追いつかない。それに梅雨の弱点にまで響いてしまうからな。上手く暖められるようなものにしたいが…まだ出来ないんだ。すまない。」

「大丈夫よ、弱点は誰にでもあるの。轟ちゃんは悪くないわ。」

「そう言ってくれると助かる。…始まるぞ。」

「ええ、作戦通りに行くわね。」

「芦戸さん、頼みがあるの。」

「どうしたの?」

「酸で真下をすぐに溶かせる?」

「行けるよ?それがどうしたの?」

「多分一発目に大きいのが来る。だから避けられるようにしたいの。轟君は俺のスピードに追いつけないから引き離すつもりだと思う。」

「了解だよっ!あ、始まるね!」

「うん。よし、まずは慎重に探そう。」

「擬似戦闘訓練 開始!!!」

戦闘訓練が開始した。

お互いの作戦に合わせて行動を開始したのだが、俺達側の方には一番の欠点があった。それは…。

「ねね芦戸さん。」

「ん?どしたのー?」

「俺に酸を付けてくれる?」

「ええ!? 流石に危ないよ!」

「やっぱりダメかあ… 芦戸さんの酸を纏わせたらもう一つ上にいけたけれど… 俺の体じゃ限界があったか☆」

「自分自身を実験台にするのは流石にアウトじゃない!」

「だけどそうしないと慣れないじゃない?」

「うーん… 確かにそうかも…。 だけど私の酸はやり過ぎちゃったら私の服も溶かしちゃうし、萃つちの体も溶かしちゃうかも。物理的に。」  
「あ、そりゃ危ないな。 だけど教えてくれてありがとう。 少しでも賢くなれた気がする!」

(うーん可愛い…!!)

欠点は俺がポンコツになる時があること。

芦戸さんは頭を使うことが苦手なこと。

お互いに苦手分野がある為、それをお互いで補って戦うことをほとんどの目的となっている。 ちなみに俺は脳筋特攻しかない時があります。

「蛙吹、見えたぞ。」

「ええ、結構堂々と歩いているわね。」

「アイツらも作戦があるだろう。 艶星はポンコツになることが多いが、戦闘面では比較的に頭を使う。 たまに脳筋だがな。 芦戸は頭を使うことが苦手なタイプだ。 それを艶星がカバーしているが… 蛙吹の保護色には勝てないだろう。 あとは作戦通りに頼むぞ。」

「分かったわ。」

「ふんっ!!」

ゴオオツ!!

「来たか! 芦戸さん!」

「OK!! そりゃっ!!」

ジュワアアツ

「火力強すぎた… 引き離れたか? …… うん??」

ピョコツ

「よし、第一段階は完璧だ芦戸さん!」

「あとはどうしよつか？」

「やっべ考えてない…。」

「えッ…。」

シユルルッ

「ふにやみやっ?!」

「あっ…!!」

「芦戸ちゃんごめんなさいね？萃ちゃんは引き離しちゃうから。」

「梅雨ちゃん待ちなさあああ!!…ってうわああっ!」

パキイッ!!

「芦戸、お前の相手は俺だ。」

「ど、どうしよう萃っち…!負け確ルートじゃないのこれえ…!」

轟君の作戦にそのまま持っていかれた。

俺は梅雨ちゃんの舌でグルグル巻きにされて違う場所に持って行かれ、芦戸さんは追うにも轟君の氷の壁で塞がれた。

多分俺達負ける。

「むむむむっ…!」

「力入れてきたわね。萃ちゃんの相手は私よっ!」

「ぷはっ!こ、呼吸できなかつたよ梅雨ちゃん…。」

「あ、それはごめんなさい。引き離すことに夢中になっちゃったから…。」

「と、とりあえず…芦戸さんのところに行かせてもrズルンッ!! ぷぎゃっ!!」

「私の粘液で滑らせるようにしたの。だから無理に動かない方がいいわよっ。」

「脚がダメなら…腕でッ…!!」

「え…?」

ドビユンッ

(あの子どもここまで成長するのかしら…。だけど向かおうたって、そうわいかないわよ萃ちゃん。)

「よし…!行けッパシッ ふにゃんっ!!」

ビタンッ

「脚よりもスピードが落ちているから仕留めやすいわね。」

「つ、梅雨ちゃん…。」

「このまま終わらせちゃうわね?」

「負けないよっ!!」

バツ

「だけど私の保護色には勝てるかしら?」

フツ

「えっ…?」

(萃ちゃんは反応速度は早い…だけど保護色の私だと反応はできないハズ…。)

「見つけた。」

(えっ?)

ポスッ

「み、見つかったっちゃったわね…。でもどうして分かったのかしら?」

「匂いだよ。」

「匂い?」

「保護色や透明化する相手がいるかも知れないって思っビーストて獣の一部を借りて匂いを辿ったの。」

「あらら、これは参ったわね。だけどこれはどうかしら?」

ヌルッ

「ぬる?」

「えいっ!」

ギユッ

「つ、梅雨ちゃん!?!ちよつとそれはっ…!!」

「萃ちゃんの弱点は女の子に手を出せないこと。あとは充電をし忘れることよ。」

「し、しまったあああ!!充電忘れてたああああ!!だけどなんで抱きつくの?」

「もう分かるはずよ。」

「えあ…?か、体が…:う、うご…:か…:ない…!」

「私の個性は蛙なのをご存知でしょう?だけど蛙には毒を持っている

ことは知っているかしら？」

「……そ、そういうことかっ……!!」

「ええ、そういうことよ。」

俺は梅雨ちゃんの個性に少し疑問を持っていたことがあった。

彼女からには毒を出すことができるのかと思っていたことがあった。だけど、俺は流石に女の子にそんなことを聞くのはマズイと思つてやめていたのだ。

俺や梅雨ちゃんがそういうことと言っていたのは、蛙には毒がある。一般的には毒持ちの蛙と言えばヤドクガエルの類のイメージが強いが、基本的にアマガエル等の一般的に見かける小さくて可愛い種類にも微弱なものだが、毒があるのだ。

何故そう言い切れるのかと言うと、例としてアマガエルを触つたでしょう。その触った手で目を擦る。その触った手で目を擦つてしまったら目が腫れてしまったり、最悪失明を引き起こしてしまうからなのだ。

梅雨ちゃんにはその毒を出すことができ、俺の動きにも影響が出て来ています。現在進行形で動けません。

「萃ちゃんは毒にとつても弱いからね……弱点が増えちゃったわ。」

「に……ヤッ……あ………が……ッ……!!」ピクピク

「蛙吹、どうだ？」

「この子、毒にとつても弱いわ。痙攣まで起こしちゃった。」

「艷星、課題が増えたな。」

「じ、弱点……多しゆぎ……。」

「だけどこの子に保護色は効かなかったわ。匂いで気づかれちゃったの。」

「これはお互いの弱点が新たに分かって良かったじゃないか。」

「轟ちゃんのところは？」

「俺にも弱点があった。芦戸の酸を熱で蒸発しちまって目がやられた。芦戸の方は酸が凍るとあまり効果が出にくいようだ。その代わりにじわじわと溶かしてくる。あとは熱に弱いが、蒸発するとかかなり厄介になった。それとジェル状になるともつと厄介だった。」

「ふええん…萃っちごめくん！負けちゃったあ〜！」

「だ、大丈夫…夫…。(アイルビーバツク感)」パタッ

「あっ、毒をつけ過ぎちゃったわ。」

「艶星に毒の耐性を付けないとマズいな…。」

「ゲーム感覚で言うのはヤバくない!？」

一方、観ていたメンバー達。

「萃君完敗だったね。」

「アイツにも弱点があるのは知ってんだろ。負けてもおかしくはねエぞ。」

「艶星の弱点がまさか女子だけならず、毒にも弱かったのか…。オイラ、轟の方も観ていたけれど…アイツも結構苦戦してたよ。芦戸の酸で目を擦っていたからな。オイラ達の弱点増えるかも知れねーけど…それがまた新しい課題になるよな！なあ緑谷！」

「うん、僕達にも知らない弱点があるから一戦目を観て分かったよ…」  
「その調子だぞお前ら。戦って勝敗は決めていないが、結果が分かった後、お互いに弱点を見つけたら話し合っただけで、結果が分かった。それが自然と出てきた。高く評価できるから、戦った後結果が決まったらお前らも轟達みたいに集まって話し合え。そうすれば攻略の成功率が高くなるぞ。」

「僕には弱点が分かりやすいけれど、多分他にもあるハズだから見つけておかないとね☆」

「うっしー！なんなら成長するのみだ!!」

観戦部屋にいたメンバー達は俺達の戦闘訓練を観て盛り上がった。いた。

一方、俺達はお互いに話し合っていたのだが、俺はまともに話すこともできませんでした。はい、梅雨ちゃんの毒の粘液にまみれてしまっているからなのです。

「萃ちゃんごめんなさいね？拭いても効果がまだ続いてるから…。」

「う、うにゅ…ナデナデんにゃ。」

「轟ちゃんがぶっつけてくれるからゆっくりしてね。」

「粘液まみれで動けない萃っちエロかったなあ…写真撮っておいたよ

！」

「芦戸、お前は変なところで写真を撮るな。艶星の弱みになっているんじゃない?」

「そ、そんなことないよ?!ただ癒されるだけだよ!」

「:そうか、それならいいか。」

(轟君天然だよ:。)

「艶星はまだ喋れないのか?」

「にや。」コクリ

「お前、猫みたいだな。そういえば艶星、毒の耐性は持っていないかったのか?」

「にや。」フルフル

「まさか、持っていたのか?」

「にや。」コクリ

「:.....どうしてだ?」

「なんでだろう?」

「私の粘液の成分によるものかしら。」

「うにや。」コクコク

「萃っち、猫みたいだね。」

「動けなくてこうなっているということは:麻痺性の成分が入っているとかあるか?」

「そこまでは知らないわ。萃ちゃんがこうなっているなら可能性はあるわ。」

「それを本戦で使えたりはできるか?」

「いえ、それはできないわ。この子はこういうものには超敏感なだけでこうなっていただけだから:あまり期待しない方がいいわ。」

「梅雨ちゃんのその粘液と私の酸を組み合わせたら強くなりそうじゃない?」

「今度試してみましょ。」

その後、俺は轟君におんぶされて観戦部屋に戻った。

毒には強くても麻痺性のものに弱いです。

ちなみにどうやって毒の耐性を付けたのかって?毒性のものをと

りあえず水で薄めて注射したり食べたりして、慣れてきたらどんどん濃くしていったと言った感じで耐性が付きました。完全な耐性ではないが。

ちなみにこの日は「にや。」しか言えませんでした。



## #38 変装、下見、ゴキブロス

擬似戦闘訓練が終わり、俺達は寮で休んだり、特訓したりしていた。ただ俺と一部の人はひっそりとやろうとしていたことがあった。「よし…っと。バレないように奴らの下見をしておかないと…。何かしら変更する可能性があるからな。」

ガチャッ

「萃ちやーん！何してrあつ。」

「にゃッ…!!」

「じ、女装…してる…!」

「は、葉隠しやん…み、見にやいで…。あとノックしてくれます…?!」  
「あわわわごめんごめん!!このことは誰にも言わないでおくから！ね?!」

「そうしてくれると嬉しいな…。」

「それで…何しようとしていたの？」

「バレちゃったからには仕方がないかな…。奴らの拠点を下見、盗聴しに行くところ。」

「…ッ!?それはダメじゃない!?皆には!」

「大丈夫、俺だけではできないことがあるから一部に協力願いを出したよ。」

「私は聞いてないよ!」

「昨日の擬似戦闘訓練が終わった後に聞こうとしたら葉隠さんいなかったの…。」

「あ、多分出かけていたかも。ごめん!」

「大丈夫、丁度聞きたかったのです。どうします?」

「もちろん協力するよ!」

「助かります。」

「ねえ萃ちゃん。」

「ん?」

「変装で女装するのはいいけれど、ちゃんとお化粧もしないと。」

「えっ？？」

「三奈ちゃんにしてもらおうよ！」

「いやいやそこまでしなくって遠慮しないで！ほら行こっ！！」グイッ  
にやああああああ！！」

下見や盗聴等の情報を収集する為に向かおうとしていました。

まあその為に変装は必須なので時間をかけていましたかね。

葉隠さんが突撃してきて、俺が女装をしているところを見られて少し興奮気味になっていたようで…。なんで??（すつとぼけ）

ポフポフ

「ふにゅ…。」

「萃っち無理しないでね？？暴れないか心配だからさ？」

「大丈夫にやの…：だけどわざわざ化粧までされるとは思わなかった…。」

「透もいいところを見られてよかったじゃない？萃っちがミッドナイトのところに行つてた時に私達気づいたんだ♪化粧したらめっちゃ可愛いんじゃないかなって♪アイライナーを描いたらアイシヤドウも塗るから目閉じたままね？」

「あい。プニツ ぽにゅ。」

「萃ちゃん本当に肌ぶにぶにしてるよね。何かしてるの？」

「特に何もしてにやいよ？」

「本当に？」

「うん。」

「羨ましいなあ。胸とかどうなの？」

「俺は男なのでちゃんとまな板だよ？お魚挟めないよ？」

「なんで魚…？」

「分からにやい、突発的に出てきた。」

「リップとチークを塗つて…つと。よし！終わったよ！」

「え、何この子…超絶可愛いんだけど…ツツ！！」

「わっ…じ、自分で言うのもなんだけれど…か、かわ…かわわあ…／＼

／

「ねえ、犯つていい？」

「ド直球すぎない?!」

メイクが終わり、早速出発した。

俺の変装は普通にギャルの姿に変装しまさなんでギャルにしたんだろう。↑素に戻った

だけど世の中には男の娘もいるから関係ないよね？

あのV tuberの水色髪でもっこりバベルの塔を持ったた○きちゃんも男の娘なんだから別にいいんだもんね?ね? (威圧)

「本当に萃ちゃんなんだ…可愛いくない??」

「え、えへへ…ありがとう…／／」

「ドキッ 女の子らしくなってない?!」

「そ、そう…かな??」

「ダメ…理性が持たなくなっちゃう…!!手繋がせて!!」

「う、うん…。」

(こんなに弱々しくなる萃ちゃんヤバすぎ…!守りたくなっちゃうじゃん!!いやもう守らないなんて選択肢は処刑ものじゃん!!)

「じ、耳郎さん…。」

「下呼びでいいよ。どうしたの?」

「盗聴場所…教えるね?」

「マジ?」

「うん…ママと一緒に響香ちゃんや口田君の為に隅々まで探したの…。」

「バレたりはしなかったの?」

「大丈夫なの。俺の獣の鼻と耳を頼りにしたの。」

(やつば可愛い…ツ!喋り方まで女子になってるじゃんツツ!!)

「あ、ここから跳ぶから掴まってて。」

「えっ??」

「早く早く。」

「う、うん。背中がいい…かな?」

「もちろん。」

「じゃあ…遠慮なくっ…。」

「んじゃ、行くよっ。んっ…!!!」

ドツ!!

「うわわっ!!そんな脚力どこから出てきたの!?!いつもより倍以上に高いよ!?!」

「このくらいは余裕だよっ。それじゃ、空中散歩でもしながら行くっか。」

「…は!?!」

フアスツ

「えっ…ええ!?!」

「どうしたの?」

「いやいやいや!どうやったらそんなことできるの!?!」

「オールマイトさんに言われて知ったんだけど、何回かやってみたらできたの。」

「それでここまで短時間で出来たってこと…?!」

「うん。」

「凄いよ萃ちゃん、あんた天才的な才能もってるよ。」

「いや、俺はダメダメなんだ。」

「どういうこと?」

「それは…あっ、見えて来た。この話はまた後にしよっか。盗聴位置はここだよ。」

「最高の位置じゃん…ありがとう萃ちゃん。」

「バレたら教えて、すぐに駆けつける。口田君にも伝えてあるから。」

「口田は何処に?」

「あのビルの屋上。口田君には鳥さんや虫さん達にお願いするようにしてあるから。都会であれば蟻さんがとても活躍するからできるだけ蟻さんをお願いしてもらってるの。」

「口田が虫が苦手なのは知ってる?」

「うん、だけど彼も少しだけ克服したって言った。蟻さんくらいは平気って言うっていたから大丈夫だよ。」

「分かった、萃ちゃんは どうするの?」

「ゴキブロスみたいに爪を壁に食い込ませて這い回ってみる。」

「それ〇ケモンの有名なやつじゃん。」

「言ってみたかったの。」

(可愛いしか出てこない…。)

協力をお願いしたのは初っ端からノック無し突撃してきた葉隠さん、俺と一緒に向かった響香ちゃん、先に鳥さん達に運んでもらって指定した場所に向かっていた口田君、俺の母親、口田君がいるビルと似た高さに向かった障子君の五人だ。

俺はゴキブロスみたいに這い回って中に入ろうと思わせての上から侵入する形です。親も一緒にいます。

「萃、いつからゴキブロスになったの？」

「うっさいやい。やってみたらなんかできたんだい。てかよく知ってるね。ゴキブロスだなんて。」

「そりゃあ○ケモンやってたんだから。それくらい知って当然でしょ？」

「あ、俺と同じアニメとゲームのヲタクだったの忘れてた。」

「忘れてたの?!あ、そうだ!前に送ったアレ見た?」

「いんや見てない。見る暇がないねん。」

「そっか、余裕が出来たら見て!私めちやくちや頑張ったんだから!」

「おっけおっけ、頑張ったのはちゃんと分かったよ。オーラが練り込まれていたかのように中身から溢れていたんだもん。それにしても…ママはどうやって手に入れたの?まだ見ていないけれどさ、アレの中身って希少種フィギュアなんでしょ?」

「そうそう!!ちゃんと分かるようになったのママ嬉しいよ!あれサイン入りのオリジナルポーズを取ったフィギュアなの!」

「え、まさか…。」

「あ、やっと分かった!」

「ねええええ!!嬉しいんだけどおおお!!」

「バカバカ!!声がおつきい!!」

☒香ちゃん視点。

「はあ…なんて話で盛り上がっちゃったの…。バレちゃうじゃん…萃ちゃんにはお仕置きしてあげないとね。」

ザザッ

『耳郎さん、そっちはどう?』

「こっちは大丈夫、だけど萃ちゃんのお母さんが萃ちゃん並にめっちゃくちやフタクだったってことが分かったよ。」

『え???』

「ま、それはいいとして…二人は私達の聞こえる声が届かないところまで行くところかな。彼のお陰でここまで情報が分かるようになったし、今回はあのメタルレディもいる。萃ちゃんがいなかったらこんな大きな組織がいたことすら知らなかったと思う。私は信じるよ、萃ちゃんを。」

『僕も艶星君を信じるよ。』

『俺も信じる。…耳郎、艶星に伝えてくれ。奴ららしき姿が屋上へ向かっている。』

「分かった。萃ちゃん聞こえる?」

『あいさー!』

「今奴ららしき影が数人上がって来てる!隠れられる?!」

『おっけーりよーかい!ママ隠れるよー!』

『何処に隠れたらいい?』

『え?!無いの!?!』

『ドアの上の屋根ならあるけれど。』

『それ早く言ってよ!!焦っちゃったじゃん!!』

「萃ちゃん、切り忘れてるよ。」

『わわっ、本当だ!ごめんね!何か変化あったらすぐに伝える!』

「うん、分かった。気をつけてね。」

『響香ちゃん達も気をつけてね!』

ブツツ

「…:萃ちゃんってドジっ子?天然?可愛いんだけど。」

俺視点に戻る。

「萃、どう?」

「やべーなこれ…一か八かだな…。」

「一か八かって言われても…。」

「うん、こんなに人間が屋上に来るとか知らんわクソが。」

「どうしよつか。」

「ドアは…うん、閉められてるね☆ 開けられているなんてお約束なんてないもんねクソが！…あ。」

「何？じつと見て…。」

「ママの個性で行けるじゃん。」

「行けるって…え??まさかね??そんなことしないよね?!

「やってください。考えたから。」

「いやだ。」

「やってよ。」

「ダメ!」

「やれ。」

「うう…：萃がママにそんなこと言うなんて…。失敗しても知らないわよう。」

「分かってる。よししよつと。」

「え?」

「いいからいいから。」

「はあ：分かったよ。『フルメタルボディ重金属化・ドロップ落鐵』!!」ピヨンッ

ドゴオツ!!

「な、何だ!?!敵襲か!?!」

「何か落ちて来たんだ!見に行くぞ!」

「ママ、解除解除!」

「おっけおっけ!」

「よいしょーっ!」

ピヨンッ シュタッ

「なるほどく?普通だと下に降りるけれど、敢えてもう一度戻るんだね?逆の発想を考えたね!」

「そしてこれ。」

ゴンッ

「ごん???」

「ママが穴開けた直後に予めダンベルを用意しておいたからね。名付けて『殺意もりもり物理的な空からの贈り物』作戦。」

「スラ○りの名前から取ったな？」

「うん、ス○もりから取った。」

「あ、伏せよつか。」

「うん。」

お母さんの個性を利用して穴を開けた直後、俺はすぐにダンベルを置いたのだ。大体15kg程度の重さのダンベルです。

念の為に四つ程用意していたので、その二つを今使ってしまった。

え？合計で重さは三桁行っていたのにあんなに跳べたのは何故かって？?細けエこたあ気にすんな。

「おいおい…またダンベルかよ…。」

「筋トレし過ぎなんだよなあ…。回収するか…って重ッ!？」

「15kgもの重さのダンベルを投げるとかどんな化け物なんだよ…あの脳筋野郎…。」

「ねえママ。」

「うん、あの人達またって言ってたね。」

「その前に15kgってそんなに重いのか？俺当たり前のように持っていただけだ…。」

「世間では重い類じゃないかな？私も知らんけど。」

「あ、報告しに行つたみたい。」

「よし、私達も行こうか。」

「おっけー。」

下見なのにこんなに慎重になるなんて思わなかった。

これ本当に下見だけだからね？

なのにここまでなるとは思わないでしょ？

もちろん俺はゴキブロス状態で這い回りました。



## #39 蟻の巣、地上、華

カサカサカサ：

「萃、這い回るのはいいけれど、何処に向かっているか分かっているの？」

「んなもん分かっている。俺をなんだと思ってるのさ。」

「ゴキブロス。」

「それは酷くない？」

「それにしか見えない。」

ピタッ

「え？何で止まるの？」

「んじや、ママはここら辺で…っと。」

「やめてやめて分かった謝るから置いていかないで！ごめんって！」

「心が籠ってない。」

「ごめんなさい。」

「あい許す。」

今、地下何階に来たのか分からない。

ビルの高さからしたら15階程の小さなビル。

俺とお母さんはゴキブロスの如くカサカサと目的の地下まで這い回っていた。そしてとんでもないものを見つけてしまった。

「あ、蟻。」

ツマミ

「蟻さんここまで来ていたのか…口田君流石だなあ…。」

「彼にお願いしている蟻の種類はどんなの？」

「大半がクロオオアリ。」

「それにしてはデカくない？」

「……………」

「どうしたの？」

「撤回。」

「なんで?!」

「こつちに向かつて来てる。」

「た、たまたまじゃないの?」

「たまたまにしては何故俺達についてきてると思う?」

「……??」

「暗くて遠近感覚が分からなかったけれどこのデカさグンタイアリだわ。あと通り道を邪魔したでしょ!」

「えッ…!?!」

「その子をすぐに離しておいて!刺されると激烈な痛みと吐き気の地獄に突き落とされる!」

「えいっ。」

ポイツ

「逃げよう。」

「離れたら追いかけないんじゃないの!?!」

「誰がそんなこと言った?」

「え?!」

「グンタイアリは通行の邪魔をする者や狙った獲物を<sup>ことごとく</sup>尽く喰らい尽くすジャングルの兵隊だ!コイツらに刺されまくられたら最悪、死亡演出確定だぞ!!」

「それ先に言つてよ!」

カサカサカサ

ガサガサガサ!!

はい、何故か地下二階辺りからグンタイアリちゃんが出現してきました。人間の手の他にも他の生き物達を利用していると確信しました。

ゴキブロス状態で本気のカサカサBダツシュを発動し、上手く屋上まで逃げて来た。

「ぜえ…ぜえ…。」

『艶星、どうだった?』

「奴らやりよった。」

『何かあったのか!?!』

「蟻だよ。」

『アリ…?蟻って…今口田が指揮している蟻のことか?』

「こそ、ざっくり言う種類は厄介なグンタイアリだ。」

『ぐ、グンタイアリって…あの密林のジャングルに出てくるあの…!?』  
「うん、しかもただのグンタイアリじゃないんだ。」

『どういうことだ?』

「なんかもちやくちや強化されてた。」

『ますます意味が分からなくなってきた…。』

「安心して、俺も意味分からなくなった。あと、うちのママがやらかしてくれたよ全く…。」

「てへっ☆」

「てへっ☆じゃねーよバカー!!」

ベシッ

「痛いっ!!」

『脳無みたいな形ではなく、そのままの原型を保ったまま強化された生き物ってことでいいんだな?』

「うん、そんなところ。あとは何とか見つからずに上手く逃げられたけれど…突入するならばなるべく範囲攻撃が出来そうな…あ、芦戸さんいるじゃん!!」

『芦戸か?』

「芦戸さんなら行けるんじゃないかって思って『一旦それは後にするか。』アツハイ。」

『どうする?下見だからこれで撤収することはできるが…。』  
「てっしゅー!」

『分かった。口田にも伝えておく、報告は着いてからにする。』

「了解、響香ちゃんにも伝えておくね。」

『ああ、気をつけろよ。』

「もっちー!障子君もね!」

深追いはせずに大人しく撤収しました。

深追いしてしまえば、多分その先は一人や二人だけだと死ぬかも知れない場所だからです。

ゲームで言えば本体がやられるまで雑魚相手が無限湧きするタイプのしんどくてめんどいやつ。

葉隠さんは俺達よりももっと地下に進んでいたようで、えげつない情報を手に入れていたらしいのです。惚れます。

響香ちゃんと葉隠さんを回収して帰寮の途中…。

ピョンッ

「萃ちゃんって本当に力持ちだよね。」

「そうかな?」

「力持ちだよ!可愛くて力持ちなんて凄いいもん!」

「やっぱり萃はモテるね♪ミッドナイトとは上手くいつてるの?」

「付き合ってるようなこと言わないでくれねーか!」

「そういえばそうだよね!ミッドナイト先生とはどうなの?」

「気になる気になる!教えてよ!!」

ギユムッ

「むぐつ!?!ちよつ…お、お胸がつ…!!」

「教えないと帰ったらこちよこちよで吐かせるよ?♪」

「わ、分かった!分かったからそれだけは勘弁してええ!!着いたら教えるからああああ!!」

恋バナになりました。

帰寮した後、すぐに報告はできなかったので翌日報告することになった。もう夜になって遅かったのだ。

あ、親は事務所を借りて住んでいたのので帰らせました。

そして女子全員が俺の部屋へ集まりました。助けて。

ズイツ

「んで、ミッドナイト先生とはどうなってるの?」

「え、えつと…お姉ちゃんとは…その…。」

「付き合っているのかしら?」

「それは…その…まだ…付き合って……ない…かな…?」

「付き合っていないの!?!襲われたとかなかったの!?!」

「襲われてないかな…?多分…。」

「萃ちゃん、なんでそんなにもじもじしてるの?」

「だ、だってえ…恥ずかしいんだもん…。」

「付き合ってしまったばよろしいでしょうに…。もったいないですわよ

「？」

「俺なんかよりもいい人いると思うnモニユツ　ぷおっ!？」

「ミッドナイト先生は萃ちゃんのことを本気で好きですよ?それを踏みにじるのは良くないと思いますの。」

「お、俺だっってお姉ちゃんのことが好きだよ…だけど…。」

「だけど??」

「ここの先生でしょ…?だから…。」

「」「」「あー…納得。」「」「」

「禁断の恋愛はまずいかなって…。」

「いい子すぎない?」

「ええ、あまりにもいい子すぎますわ。」

「そして可愛い。」

「そして癒し。」

「そして抱き枕。」

「そして撫でたい。」

「て、照れちやうからあ…!!」

「撫でくりまわしたれええええ!!」

「にゃああああああ!!?」

頭をめちゃくちゃ撫でくりまわされました。

彼女達曰く、母性本能がくすぐられるらしい。

俺ってそんなに子供っぽいでしょうか?子供じゃないですよね?

そうですね?ね?? (超圧)

「それで、結局のところミッドナイト先生のごことは好きなの?」

「ぴっ!？」

「あ、凶星のようですわね。」

「あんなに可愛がられちゃうと好きになるのも納得するよ。」

「そういう先生と萃ちゃんはどういう関係なの?」

「あれっ?言っていないかったっけ?!」

「」「」「聞いてない。」「」「」

「マジすか。とりあえずかくかくしかじかっところ…。」

「子供の頃からお世話になっていたんだ…。てつきり血の繋がった姉

弟かと思っっちゃった!」

「キスはしたのかしら?」

「ぷあっ!?!にや…にやにやにやにやにやを言うのれしゅ!」

「その動揺はしたっていうより…されたのね?」

「うっ…うん…/」コクリ

「梅雨ちゃん、萃ちゃんがキスをしたんじゃないやなくてされたって何で分かったの?」

「この子、女子に積極的などころ見たことあるかしら?」

「そういえば…。」

「ないね。」

「寧ろ女の子になってるね。」

「めっちゃ可愛くなる。」

「ミルコも好きなの?」

「好きだけど…ルミ姉の発情期が怖すぎるの…。」

「発情期…?」

「その時期が起こると毎回追いかけて回されては水をぶっかけて冷やしの繰り返しなの…。」

「捕まったことは?」

「ないよ?」

「それってどうやって切り抜けたの?」

「トラップで捕らえて水をかけるだけなの。最終的に関節技キメラれて俺落ちるの。」

「結局やられるのですか…。」

「だけどお詫びに耳をもふもふさせてくれる。」

「なにそれうらやま!!」

「尻尾は触ったら殺されるけれど。」

「やっぱり毎回負けとるんやね…。」

気づいたら女子の皆に問い詰められた。

お姉ちゃんの関係やルミ姉の關係に凄く興味を持っていたようです。  
す。

多分俺が毎回毎回お姉ちゃんって呼んでいるからかと思えます。

はい。

ちなみに俺はお姉ちゃんのごとは好きだけでも、それをしていいのかすら分からないので保留にしているのです。

あ、ちなみに寝る時は皆自分の部屋へ撤収しました。

## #40 人と人、愛と相

攻略まであと3日。

俺はお姉ちゃんと一緒にいました。

何故かって?なんか呼ばれました。

ナデナデ

「お姉ちゃん。」

「なに?」

「なでなでするのはいいけれどさ?」

「うん?」

「何で俺が撫でる側になって膝枕しているの?」

「たまにはいいじゃない♪」

「そうだけど…髪がもふもふしてて落ち着かない…。」

「褒めてるって受け止めていいの?」

「うん。だってもふもふしてるんだもん。」

「嬉しい♪ねえ萃ちゃん。」

「ん?」

「キスしたい。」

「…は??」

「私も落ち着かなくなっちゃった…。」

「むう…ん。」

「分かってくれてるの嬉しいわよ♪えいっ!」

「ひあっ!」

ドサツ

お姉ちゃんに押し倒され、俺は起き上がれるような状態ではなくなった。つまり、正座状態で後ろに倒れたのです。

はい、無防備です○

「ちよっ…、心の準備だけはさせろ!待たないっ!」チュツ んむっ  
!んっ…／／／

(可愛い…早く私のものになりたい…♡この可愛さに勝てる子なんて



絶対いないわ…♡このまま一線を越えたいな…。」

お姉ちゃんにキスをされ、俺は力を奪われるかのように力が抜けていった。痙攣のようにピクピクと動いていたのだが、お姉ちゃんはそれを楽しんでいたように見え、俺は何もできませんでした。

あと髪がもふもふしていました。

キスをされ始めてから数十分後。

「ぷはあ…はあ…はあ…お、お姉ちゃんの…え…えっち…」  
「萃ちゃんの養分いっただき♡ 私の愛が伝わってくれると嬉しいな♪」

「じ、十分に伝わってるよ…」

「…！じ、じゃあ…プニツ んっ？」

「だけど今はだーめっ。終わったら答えを言うから…。」

「それフラグじゃない？」

「物理的にへし折ってやるさ。」

「わあ〜、脳筋だあ〜」

「ねえ、お姉ちゃん…何処かに出かけない？」

「ええ♪買いたいものもあるし♪」

ギョッ

「お、お姉ちゃんっ!?!う、腕組みだなんて…俺の方がちっちゃいの分かってるっしよ!?!」

「ほーらそんなこと言わないのっ♪」

「まず攻略が近いのにこんなにゆるゆるでいいの…?」

「やりたいことがあるから今日だけっ！ねっ?」

「むう…お姉ちゃんにそんなこと言われたら…言うこと聞くしかないじゃないの…。」

「ありがとっ♪」

（やっぱり俺はお姉ちゃんと付き合った方がいいかも…ドキドキしてるし…それになんかいつもより可愛さが増してる…。）

ゆるゆるながらも警戒しています。

だけどお姉ちゃんと一緒に出かけたかったので出かけました。

お姉ちゃんは買いたいものが丁度あったため、出かけたかったらし

いみたいです。ちなみに俺も欲しいものがあつたので。

ガヤガヤ…

「わぁ…凄く混んでる…。」

「そうね、これはちよつと心が折れるかも。」

「戦いよりもこつちの戦いがしんどいね…。」

「例えが凄く分かるわぁ…。」

「スイーツでも食べて待つてみない？」

「そうね♪萃ちゃんの頬張る姿も見たいし♪」

「何よそれ！」

「ハムスターみたいで可愛らしいじゃん♪」

プニツ

「うう…そんなこと言われたら何も言えにやい…。」

(可愛すぎるわ…頬っぺも柔らかいし顔真っ赤にしてるし…何この子、天使??!)

近くのスイーツ屋さんに立ち寄りました。

スイーツが好きすぎなので食べすぎないように小さめの可愛らしいスイーツを頼みました。お姉ちゃんはまさかのカップル用のスイーツを頼んできやがりましたふざけんちくせう( )

「ねー！なんでそれ頼むのー!?!」

「別にいいじゃない♪」

「お昼とかどーするのさー!」

「これ頼んだ後に気づいたの。もう遅いからいつかなーって♪」

「良くないよおバカー!」

「萃ちゃんの頼んだのは…何それ可愛い!!」

「ふふーん♪そーでしょ!ちっちゃくて可愛いし、食べすぎずに済むのー!」

「半分ちよーだい?」

「だめ!」

「むう…萃ちゃんと一緒に食べてくれないと、お姉ちゃん食べきれないよ?」

「それは自分でやったことですよ?!」

「だって、萃ちゃんも一緒に食べてくれるかと思って…。」

「はああ…もうお姉ちゃんだったら…。はい、俺のこの可愛い半分あげる。お姉ちゃんと一緒に食べてあげるから…。」

「ありがとっ♪（チョロいわね。）」

（お姉ちゃん表情には勝てないや…。ドキドキしちゃうし…むむむ…。あ、このパフエめっちゃ美味しいな。）

「萃ちゃん。」

「ん？」

「今回、ペアであなたと一緒にだったの。」

「リークすぎない？」

「いいのよ、結局分かっているとと思うし、ブレーキ役としての私がいるから。それにあなたのことが心配で…。」

「ふふん…お姉ちゃん、俺を何だと思ってるの？」

「脱線暴走機関車。」

「うっ！」クリティカルヒット!!

「だけど本当でしょ？」

「何も言い返せません。」

「だけど期待してるわよ？」

「へ？」

「また新しいやつ思い浮かんだんでしょ？」

「なんで分かるの!？」

「私の勘よ♪」

「怖いよこの人。」

「あつ、そろそろあのお店も入れそうね？」

「あ…うん、そだね。早く食べて行こっか。」

スイーツ屋さんを後にしてお互いに目的のものを買い、そのまま寮へ帰りました。ちなみにお姉ちゃんは俺の部屋に居座る気満々でいました。

俺は全力で押し返そうとしたけれども、皆に引き止められてしまったので仕方なく俺の部屋に入れてやりました。

「ねーねー。」

「どーしたの萃っち?」

「男子棟に行きたい。」

「それはダメ!」

「なんで!」

「癒し要素がいなくなるのと同じだから!!」

「俺ってペットか何かなの!」

「兎じゃん。」

「ぐはっ!!」

「あ、クリティカルヒット喰らった。」

「そういえば、萃ちゃんのコスチュームって結構不思議だよな?」

「確かに…少し不思議ですわね…。」

「そんなに不思議?」

「うん、うちも気になってるけれど、どうやったらあんな形になるの?」

「あー…艤装のことか。」

「艤装?」

「うん、言わば装備みたいなもの。コスチュームには特殊機能をぶち込んでもらってね…俺の艤装したい艦にに応じてそこら辺に落ちてる瓦礫とかで艤装を造ってもらえるの。一度壊れたらその艤装した艦に一時的にはなれないけれど…。」

「萃ちゃん結構使い慣れていると思うって思ったけれど、まだ使いこなせていないんだね?」

「ぜんぜん使いこなせてないの。色々艤装はできても、本人の俺自身が使えてないからまだまだ。」

「へえ…萃ちゃんならすぐにできるものかと思ってたわ。」

「寧ろそれが出来ていたら奴らを一人だけで潰せてたわい。」

「戦闘面になると凄く頭回るの凄いや萃ちゃん。緑谷とか爆豪並に頭が回ってるよ。」

「いや、俺はぜんぜん回ってないよ。」

「初めて襲撃された時の証拠があるわよ?萃ちゃんのおかげで捕まえることができたんだから。」

「皆がいてくれたお陰だもん。俺一人の力じゃないもん。俺一人だけだつたら何も考えずに脳筋プレイしてた。」

「なんていい子なの…?!ミッドナイト先生、この子お借りしても…!？」

「いいわよ♪萃ちゃんを存分に味わいなさいね♪」

「えっ…?ちよつと待って!?あつそこはダムギユムツ はにい…。」

「もう抵抗できないですね？」

「固まったわね。」

「人形みたいだね。」

「着せ替えとかしてみたり？」

「いいねそれ!着せ替え人形にしてみようよ!」

「そして私はこうやって…。」サワツ

「んにやああああッ!？」

「反応しましたわね、弱いのでしょうか？」

「弱いわよ。この子の弱点はこういうことをされることだから♪」

「こんなの3日前にやることじゃねーだろおおおお!!！」

俺の悲鳴と叫び声は寮内全域に響いたとか響いていないとか…。

ちなみに着せ替え人形にされただけで卑猥なこととは特にされていませんでした。夜なのにこんなことされた俺の気持ちにもなつてくれ…。

そして就寝時。

「もうお嫁行けない…。ぐすん…。」

「隣にいるじゃない♪私というお嫁がね♪」

「断つてもいい？」

「なら襲うわよ。」

「やめてください。」

「じゃあ断らないで？」

「…………ふーんだ。」

「素直じゃないわねえ…あつ、えいっ!」

フワツ

「んにやっ!？」

「どう?。」

「ど、どうって…何がよ…!」

「私に抱きつかれている感覚♪」

「む、むぐぐぐ…甘えたい…。」

「ポロツと出たわね♪甘えていいわよ♪」

「う、うん…。」

ギョッ

「萃ちゃん、本当の気持ち…教えて?」

「…き。」

「ん?」

「お姉ちゃんのこと…好き…だよ…?」

「本当に?」

「す、好きじゃなかったら…こんなこと……してないもん…。」

「嬉しいわ♪」

「お、お姉ちゃん…。」

「なあに?」

「あつたかい…♪」

「襲っていいかしら?」

「やだ。」

「ちえ…:チャンスだったのに…。」

「奴らを捕まえて一段落したら考えるよ。」

「約束ね?」

「うん、約束する。」

「じゃ、おやすみっ♪」

チュッ

「にゃッ…!!?ほ、ほほ頬っぺにキスだなんて…ッ!ふ、不意打ち…へにゃ。」コケッ

強制睡眠させられました。

お姉ちゃんは俺が眠れないと錯覚していたのだろう。

まああんなことされたら普通に眠れませんかからね!?

そして何だかんだ特訓やら何やら日にちが経ち、攻略当日を迎えたのだがまた次回。

## #41 侵略者（インヴェーダー）日本支部攻略戦、開始

攻略戦当日。

インヴェーダー  
侵略者サイドにも情報が行き渡っていると考えている為、プロヒロー、先生方、俺達I-A、B組は日本支部向へ着くまで変装をした状態にしました。

特に俺の変装はクラスメイトの女子組にしてくれもらったのだが…。

「あのあの?」

「なんででしょう?」

「なんで俺はまた女の子に?」

「男の格好よりも似合うからっ!!— ?? (d\*, ω, \*)」

「男子組が困惑しているんだけども!」

「艶星のやつ…エロいじゃねーかああ!」

「艶星が女子だったら確実に告つてたぜ…!!男の艶星もエロいッ…!!」

「か、萃君…似合いすぎて目のやりどころが…!!」

「艶星の変装何度見ても完璧じゃねーか!ちよつとエロいけれどよ…?」

「ほら、こんなに困惑してる。」

「いーのー!本戦ではこう本気にならないとっ!」

「本気…か…。」

「萃。」

「何ママ?」

「別々になるけれど、死んだら許さないから。」

「そんなことかい。俺は死なねエよ。いや、死ぬわけにやいかねえし、恩返しすらもできねえからな。」

「それでこそ私の息子!!」

ガッ

(ふふっ、最強の親子になりそうね♪)

作戦が開始した。

俺、お姉ちゃんのペアは鉄崎さんの情報を頼りに地下へ繋がっていると  
思われるマンホールのところへ向かった。

その情報が取れたのは当時、本人がたまたま路地へ通りかかったところへマンホールの下へ降りていく怪しすぎる人達を見かけたとのこと。

「お姉ちゃん。」

「どうしたの?」

「絶対コレでしょ。」

「そうよね、絶対コレよね。」

「開けてみる。」

「私は離れてるわよ?」

「分かつてググツ ン ン っ??」

「開かないの?」

「うん開かない。ちよつとぶん殴ってみる。」

「離れるわね…つてちよつと待つて…。」

「ふん っ っ っ!!!」

ドゴオオツ!!

ガンツ!!ガゴンツ!!ガンツガンツ!!ガガガガ…ドゴオオツ!!ガ  
シャアアアアン!!!

「あつ…やつべ…。」

「なんか嫌な音鳴ったわよね!」

「お、お姉ちゃん…。」

「や、やつぱり…。」

「やつ☆ちつ☆た☆スパアアアン!!! へぶちっ!!」

「なーに派手なことしちやつてくれるのさあああ!!コソコソ忍び  
込む手筈だったでしょう!」

「だ、だってえ…硬かったんだもん…マンホール…。」

「たからって…力加減をしないのはおかしい話じゃない…?」



「あ、確かに。」

「ダメだこの子。完璧に可愛いアホの子になってるわ。」

力加減をせずにマンホールをぶん殴り、奥深くまで蓋がガンガン落ちて行き、めちやくちや嫌な音が響いたのだ。

はい、なんか割れたような音がしました。

けど今は侵入することだけに集中し、そのまま地下へ潜って行き  
ました。

カサカサ…

「お、お姉ちゃん…。」

「ん?」

「お、お胸が…。」

「しようがないでしょう? 萃ちゃんに掴まっているんだからあ…。」

ムニユン

「む、むぐぐ…女の子に生まれたかった…。」

「そうなるにあなたはぺったんこよ?」

「今の発言貧乳を敵に回したわよね!」

「あら、女の子口調になってるわよ?」

「う、うるさいわ!」

「かーわいっ♪」

ギユツ

「あ、お姉ちゃんお姉ちゃん。」

「ん??」

「見えた…奴らの中身が…。」

「何あれ…海外のSF映画に出てくる装置が沢山あるじゃない…。」

「へえ…なるほど…あの人達の話…やべーな。」

「何か分かったの?」

「最悪な事態だ。」

「…どういうこと?」

ドッペルゲンガー  
影

「ドッペルゲンガーって…自身と全く同じ存在がもう一人いるっていうアレ?」

「うん、ゲーム内でのものかと思ってたけれど…まさか造っていたなんて…。」

「話が全く見えないわ…完結に話して?」

「生物兵器を造ってる。」

「破壊しなさい。」

「理解が早いわよお姉ちゃん。」

俺達が見えた地下空間は正に蟻の巣。

そして俺達が見つけた部屋はトンデモ重要なお部屋でした。見つけるのが早すぎます。

グンタイアリはちまちまいたので触らずに避けながら逃げました。

阻害したらこっちが死にますので ( )

相手にしたら数の暴力+ただでさえ強すぎる蟻酸で負けますから

( )

「スンスン…お姉ちゃんお姉ちゃん。」

「?」

「奥側からなんか匂いがする。」

「匂い?どんな?」

「ホイップクリームみたいな甘い匂い。」

「行ってみる?」

「うん。」

カサカサ…

ヌツ…

「…??」

「何かしら…あれ。」

「今度こそ皆に美味しいってもらうんだから!!」

「…ジュルリ」

「萃ちゃん?」

「はっ…!だ、大丈夫…だと思っ…。」

「大丈夫じゃないわね?」

「あのケーキ見ると凄くお腹空いてきちゃうの…。」

「そうかしら?私はあまり空いてないけれど…。行く前にいっぱい食

「べなかつた?」

「うん、いっぱい食べた。」

「なのにお腹空いたの?」

「うん、何故か。」

「胃が凄く膨らむとか?ギャル〇根だつてそうらしいから有り得るかもよ?」

「いや、それはないよ。」

「え?」

「ギャル曾〇さんは体質でそうなっているんだけど、俺は普通の人間の体質なの。胃は普通の人間レベルだし、体質的には何の変哲もないただの男だもん。」

「シヨタじゃないの!?!」

「それやめて傷つく。」

「私に言われると傷つくなんて可愛いわ♪」

「とりあえずあの女性はなんなんだ...?」

「スイーツ作っているみたいだけど...。」

「お腹空いた...。」

「だからつて得体の知れないものを口にしないでよ?!」

「た、確かに...どうしよベキツ!! ベキ...??」

「あつ...やば...。」

バキバキバキツ!!ガラララララツ!!!

「ひえあああああああ!?!?」

「萃ちやあああああん!!?」

「お姉ちゃんは一且退いて報告!!」

「分かったわ...!無茶しないでね!」

ガララ...

「あたた...やつbコツン あたつ。」

運が悪すぎたせいかわ、キッチンらしき場所に落ちました。

原因は通気口の整備不足による腐食でしたふざけんな。

ちなみに戦うとしたら、相手が女性なのであまりにも不利中の不利でした。ハイ。

「ああああああ!!私の作ったケーキがああああああ!!」

「ん?あー…ごめんなさい。」

「皆に見返してやろうとして作ったケーキなのにいいいい!!」

「はむっ…あ、この香り辿ったやつだ。この凄く甘い香りなのに甘すぎない甘さだけだろなんだろう…この食べても飽きないこの味…。」

「え、私のケーキ食べたことあるの!?!」

「いや…初めて食べたけれど…。」

「そーなの!?!ねーねー!よかつたら食べない?!スイーツ作りすぎてすつごく余っちゃったの!」

ドツサリ!!

「…ジュルリ。いいの?俺、敵なのかも分からない奴だけど…。」

「私のスイーツを細かく評価してくれたのあんたが初めてだから!うちの会社の偉い人達は文句ばかり!敵同士でもこうやって評価してくれるの嬉しいよ!」

「他の人には食べてもらってないの?」

「食べてもらったんだけど…美味しくないとか、甘さが足りないとか文句ばかり!だーれも美味しいって言ってくれなかったもん!」

「俺は好きなんだけれどなあ…。」

「ほんと!?!」

「うん。ほんと。」

「そういえば、あんたの名前聞いてなかったね。私は浅木あさぎ 甘奈!あまな」

「俺はラビットシップ、ヒーローの卵だ。本名は隠してる。」

「ラビットシップ…え…!?!」

(やべ…敵なのかも分からないのに言っちゃった…!)

「私、あんたの大ファンなの!それに頼みたいことがあるの!!」

「頼みたいこと…?」

「私を…ここから出してほしいの!」

(もう一人の自分ライ、どうする?)

《どうするもこうするも、コイツは嘘を言ってねえ。獣ビーストも嘘の匂いがねえつつつてる。》

(OK分かった。)

「だ、ダメ…かな…?」

「ああ、出したる。」

「ありがとう!」「ただし!」「ただし?!」

「騙すようなことがあるれば無かったことにする。いいかな?」

「うん!」

今更すぎるが、ヒーローは戦うだけではなく、戦って助けることがヒーローなんだと俺は今ここで改めて分かった。

まあもちろん俺は騙されようがなんだろうが助けるつもりですハイ。

## #42 ホイツプクリームの概念

「甘奈さん、君は何故あんなところに？」

「スカウトされたの。」

「スカウト?!」

「私の夢はね、パティシエになることなんだ。それでこの人にスカウトされてずーっと修行していたの。」

「変化はあったの？」

「全然：寧ろ教えてくれるどころか来てくれもしなかったし、ずっと密閉空間でやらされてた。」

「その上、文句ばかりつけると：最低だなそいつら。」

「本当だよ！逆に利用されているんじゃないかって思っちゃうよ！」

「利用されていると思う…。」

「え？」

「個性は？」

「クリームだよ。ホイツプクリーム。」

「可愛い個性だな。」

「ラビットシップの為なら何でも作れるよ！武器でも何でも！」

「武器も作れるんだ：可愛い上に凄い個性だね。」

「ふふーん！サポートなら任せて！」

彼女は浅木 甘奈。

スカウトという名の拉致を受けていたらしい。

彼女はそれをすんなりと受け入れてしまい、数年間ここにいるとのこと。何度か脱走を試みたのだが全て失敗に終わり、脱走させないよくな作りにされてしまったとか。

「…！甘奈さん、すぐ近くに…。」

「私に任せて！」

モコモコモコモコッ

「こ、これは…?」

「いいからいいから！」

「入るの!?!」

「あーもー!早く!」

「ひゃあつ!?!」

モブンツ

「お、お疲れ様です!」

「あ?浅木イ〜:また脱走kんんん??何だこれ?」

「私の部屋に入ってきた愚か者がいたのですぐに捕らえました!今収監させるどころです!」

「お、やるじゃねーか。お前の個性は中々優れているから俺達の計画に役立ててくれよな?」

「あ、ありがたきお言葉です!」

(あの男:甘奈さんの個性しか見てねエな:。)

「ラビットシツプ、アイツ行つたよ。」

「んむむむむむ:ポンツ　ぷはあつ!た、助かった:。」

「私の個性がホイップクリームだから、呼吸しにくかった:?」

「少しだけ苦しかったけれど大丈夫だったよ。んー:どうしよ、ホイップクリームまみれのまま行くのもちよつと不安:。」

「あ、大丈夫大丈夫!ちゃんと回収するから!」

ススウウ

「おお:生きているかのように吸い込まれていくんだ:。」

「ちなみに私の個性は甘いものを食べることで種類が変わるの!」

「へえ:そりや凄いな:よいしょつと。」

ヒョイツ

「きやつ!?!」

ドゴツ!!

てつてこ走っているところ、後ろから気配を感じたので彼女を抱き抱えて俺側に寄せた。

もちろん、さっきの幹部の人間が隠れながら追っていたとのこと。

「ちつ:視ていたのか:。」

「あつぶねあつぶね、ストーリーいたわ。」

「浅木がこういうことをすることはまずないってことくらいは把握し

てんだ。大体助けを求めるのは知ってる。ソイツを俺に寄越しな。」  
「へえ…消しかけるのは彼女なんだ。もしかして…過去に機密な情報  
を見られた、もしくは聞かれたからなのかね?」

「ふん、ガキには関係ない。同じことはもう通用しないつつたよな  
浅木イ…!」

「う、うるさいやいバーカ!!私を三年も閉じ込めておいて死ぬ覚悟す  
ら出来ていないと思っただか!!」

「お、俺にそんな口を聞くとはなあ…!決めた、今ここで殺す…!!バ  
ンツ!! 『回壁突刃』!!」

シユルルルッ

「えっ…?」

「もう遅い…!ここで二匹まとめて死ぬエい!!!」

「あらそう?行きましょ甘奈さん。」

「い、いや待って!?流石にもう終わったよ!!?」

「攻略法見つけたけれど…諦めるの?」

「え??」

「くっ…ちよこまかと…! (まずい…一定距離から離れる…!!ここで  
仕留めておかねば幹部としての存在が!!) 『回壁歪刃』」

「おほほほおおく!!! → → 曲がった曲がったああく!!! → →」

「なんでそんなにテンション上がったんの!!?」

「楽しいから!!」

「はあ?!?いやその前に攻略法は!?!」

「一緒に突っ込みや分かる!!行くよっ!!!」ピヨソツ

「ま、まさかあ…!!」

「脚力105%…腕力200%…火力調整400%…標的確認、砲  
雷撃戦用意!!!」

「待って待って!!心の準備g「人間魚雷、発射ああああああ!!!」い  
やああああああああ!!!」

バギユウウソツ!!

抱き抱えたまま侵略者インヴェーダーに突っ込んだ。

もちろん俺は相手の個性の大半は理解していた。



とは言え、完全に理解したわけではないです。はい。

相手の個性は壁を使った個性で、ネジ巻状に罅状ひびのものを一定の距離まで伸ばし、そこから刃を突き出す個性だ。

弱点としては真ん中に空間ができることと、一定の長さの刃しか出せない上に狭ければ狭い程刃が短くなること。体に出る負担は全く知らんけどな。

「こ、コイツ…俺の個性を瞬時に見破ったのか…!？」

「とりま、寝ておけ。」

「こりゃあ…参ったな…。」

バガアアンツ!!

「ふう…マジで危かった。」

「本当だよ！ラビットシップってこんな無茶したっけ？」

「あ、うん。結構無茶する。」

「思ってたんと違う…。」

「ま、イメージは違うって言うじゃん？それだよ。」

「そういえば、どうして見破れたの？」

「刃だよ。」

「刃？」

「うん、一定の長さしか出ていなかったから行けるんじやね？って思ったの。」

「もしかして…たまたま？」

「うん、タマタマ。」

「この子怖いよ…。」

「あ、そういえばどうする？このままボス部屋に行く？」

「行くしかないでしょ！憧れのラビットシップに会えたんだから！」

「んじや、ボス部屋まで…れつつごおおー！」

「ごー!!」

一方、報告しに行ったお姉ちゃんはどうと…。

「はあ…はあ…はあ…はあ…何とか地上にまでは着いたわ…。萃ちゃん、大丈夫かしら…。いくら大丈夫でも無茶をするから怖いよねえ…。」

「おっと、その女。何してる？」

「あら？待ち伏せされていたの？」

「もう既に追っていたんだよ…あんた一人じゃ、相手できないだろう？」

「へえ…それはどうかしら？」

「ミッドナイト！待たせてすまなかった!!ラビットシップは!!」

「あの子にお願いして脳筋ルートで攻略してもらっているわ！」

「の、脳筋ルート…??」

「助っ人が一人や二人増えたところで…俺達の力には及ばねエ!!お前ら！殺るぞ!!」

「今ならあの子に私の戦いっぷりを見せたいわ…。できればラビットシップを巻き込んでお仕置きとかもしてみたってわねえ…。」

「あんた…ラビットシップをどれだけ虐め倒したいんだ…？」

「泣きじゃくる顔が最高に可愛いから虐めるのよっ♪♪」

「流石ドS…。」

念の為にといいことで、俺の知らないところで助っ人を呼んでいたとのこと。寧ろ俺は助かります。

けど、侵略者インヴェーダーが足止めしていたせいで、報告しに行くのにかかる時間を消費してしまったことにより、戦況がかなり変わってしまったのは全員捕縛した後のことだった。

そして、俺視点に戻る。

ガサガサガサガサガサガサ!!!

「ぴぎやああああああ!!!」

「いやああああああ!!!何アレええええええええええ!!!」

「強化グンタイアリきちやああああああああ!!!」

「なんで説明してくれなかったのさああああああ!!!」

「説明する前にあの子達の邪魔をしちゃったからでしょおおおおお  
おおおおお?!」

「それは…めええええええええええん!!!」

グンタイアリ達に追われていました。

強化されているせいで彼らの移動速度がかなり上昇しており、俺達

を見失うまで追っかけ回しています。

もちろん俺達もとにかく逃げ回っているのだが、行き止まりが出てきてしまえば一巻の終わりです。はい。

「甘奈さん!!その個性で壁作れない!」

「え?!作れるよ!」

「足止めとして壁を作って欲しいの!!俺があんたをお姫様抱っこして全力疾走するから、その間に壁を作って欲しいんだ!!もちろん二重構造で!!」

「できるか不安だけど…やってみる!!」

「んじゃ、頼む!!よいしょと…!!」

「わっ、軽々と持ち上げるね…。」

「ほんじゃ、準備よろぴこ!!脚力現段階最大出力…600%…標的無し…一時的の逃走に集中する。『全力脱兎』!!!」

バヒュッ

「わわわわっ!?こ、これなら作れるかも…!!『ハードホイップ・ウォール』!!」

ポポポポポ!!

「次いでに『ソフトホイップ・ウォール』!!」

モプンッ!!

キキキッ…!!

「ぜえ…ぜえ…な、何とかなった…かな…?」

「30cmくらいの壁にしておいた!」

「どのくらい持つ?」

「触ってみる?」

「うん。」

「ッ」

「??」

「硬いでしょ!」

「硬くするにしても…ホイップクリームの当たり前がないなった…。」

「ふっふーん!凄いでしょ!」

「凄いや…てか、ホイップクリームで撲殺することもできるのか…。」

「ホイップクリームで撲殺ってパワーワード過ぎない？」

「あ、確かに。」

「あと、一応足を取らせるように追加でソフトホイップで60cmくらい分厚くしておくよー。」

「分かった。ん？そーいや代償はどうなってるの？」

「私？えっと、個性の代償はね：見たら分かるよ。」

モコモコモコモコ…

「あんためっちゃ萎んでるじゃん!!? Σ（ ⊠? ⊠ ; 補給できるよ  
うに食料庫探し回るから行くよ!!」

ドタバタでした。

グンタイアリは沸くわ、幹部が何処からか出沒するわ、人質になっていた人は萎むわで何だかんだビツクリしています。

そして今は敵陣の中にある食料庫へ向かい、見つけたのは良かったものの、扉に鍵がかかっていたのでとりあえず扉を破壊して壁を作ってもらいました。バレるかも知れないが、彼女の体調が良ければ本物そつくりで作れるらしい。後でお願いしておこうと思いました。

## #43 お調子者

ども、俺です。

ドアを破壊した食料庫に籠っています。

壁は人質になっていた浅木 甘奈さんの個性《ホイップクリーム》で元の壁の形と同じくして塞いでくれました。

そして今は補給中のところ。

「もっしゅもっしゅ…。」

「ラビットシップ、聞きたいことがあるんだけど…。」

「ん？」

「何で私を人質だと分かったの？」

「匂いだよ。はむっ。」

「匂い？」

「うん、匂い。」

「どういうこと？」

「ざっくり言うと、嘘の匂いがなかった。ただそれだけだよ。あー…むっ。」

「個性があるつてのは…？」

「それはないよ。全部無個性なの。」

「無個性の人って確か、絶滅危惧種みたいな扱いにされていなかったっけ？そのうちの一人なんですよ？」

「うん、ただ俺は普通の無個性よりも何もできないし、不器用な人間よ。いや、人間よりも下って言えるかな。」

「なんでそんなこと言えるの？」

「そりゃ、俺は出来損ないみたいなんだよ。記憶力は乏しくなりがちで、二つのことを同時にできないし、注意力散漫、すぐに体がガタつく。こんなの普通の人間じゃこうはならない。」

「…：…そっか。ごめん、変なこと聞いて。」

「気にしなくていいよ。それくらいで傷つくような奴じゃないから。」  
「ラビットシップ、お願いがあるの。」

「ん？」

「今更だけど、私をこのまま地上に送らないでこのままサポートさせて！」

「んー…断るわけにもいかないし…どうすつか…。」

「憧れのラビットシップに会えたのもそうだけど、一人で戦わせたくない！無個性の子供達や大人達の為にもならないし、私みたいにあんたのファンで憧れを持った人達もいるんだ！だから…！」

「分かった、ただし…。」

「…？」

「ヤバくなったら逃げろ。連絡できるようにしておくから。」

「わ、分かった…！」

「あと、謝罪したいことがある。」

「え？」

「会った時に言ったこと覚えてる？」

「あ、裏切るようなことがどうたらって？」

「うん、俺はそこからずっと匂いで気づいたんだけど、一切裏切りの匂いがしなかった。あの時は圧をかけてごめんなさい。」

「えっ!?!いいよいいよ!私も警戒されるようなことしちやったし…。」

「あと…敬語で喋っていいですか？」

「なんで!?!」

「我慢できなくなっちゃったのです。」

「どゆこと!?!」

「俺、タメ口で強がっていたのですが、やっぱり敬語じゃないと落ち着かなくて…。」

「あー…それ、なんとなく分かる。私は別に構わないよ?」

「じゃあ遠慮なく敬語で喋らせてもらいますわね!!」

「なんか急に女の子口調!!」

ドオオン…!!

「あ、そろそろ出なきやまずいかもです。はむっ。」

「いつまで食べてるの…?」

「奴らが困り果てるくらいに食べ尽くしてあげようかなって。」

「あ、それなら私も余分に食べておかなきゃ。鞆ある?」

「もちろんれしゅ。ちっちゃいれすけど、どぞ。」

「ありがとつ。つめつめつと…よし!」

「んじや、行きましょか。」

「うん!」

そそくさと出る準備をしていた。

ちなみに通路から声が聞こえたので声を殺して過ぎ去るのを待っていたが、少し喧嘩を売るような発言をされていてソワソワしていました。

「なあ、食料庫ってここら辺じゃなかったか?」

「そうだったか?とは言え、いくら日本支部だとしても部屋を作りすぎなんだよな。俺達は蟻かってな。」

「虫の中で最下位レベルに等しいあんな雑魚虫とは一緒にしねーでほしいよな!」

「本当それな!!」

「H A ☆ H A ☆ H A !!」

ミシミシツ…

「ん?」

バガアアアッ!!

「どうびらつしやあああああああ!!!」

「ぎゃああああああ!!」

「な、なんだ!?壁から急に何かが…!!」

「テメエら…蟻さんをバカにしやがったなア!」

「ら、ラビットシツプ…流石に怒りすぎなんじや…。」

「この雑魚共が蟻さんをバカにしたんだ!!絶対に許さん!!」

「あつ…コイツは!!」

「浅木!テメエまた脱走しようとしてやがるな!!?次からは殺せと命じられてっから殺すわ!!」

「あと…あのチビはなんだ?」

「まあいい、アレと一緒に始末するぞ!」

俺は我慢がでずに壁を蹴り破り、相手の位置を声だけで当てずつ

ぼうで引き当てて蹴り破るのと同時に顔面も蹴り飛ばした。

生き物をバカにするかのような発言をする人間には容赦しない俺です。はい。

「ラビットシップ気をつけて！アイツらは厄介な個性を持って…あれ？」

パンパン

「ん？厄介な個性??」

「あー…うん、電気系の個性を使うって言おうとしたんだけど…終わっちゃった?」

「はい、終わっちゃいました。」

「痺れなかったの?」

「平気、だって俺電気効かないですもの。」

「無個性じゃなかったっけ!?!」

「無個性です。」

「どうやったら効かなくなるの!?!」

「気合い?」

「気合いってすげー…。」

「さてと…コイツらに居場所を吐かせてもらおうかな。おい、日本支部（こ）のボスは何処にいる?」

「へっ…誰が教えrグギギ あゝがががつ!!?」

「悪いが、俺は優しくしねエぞ。」

「さ、最下層にいる!!だけどそんな簡単には行けねエ!!エレベーターに乗る際に階層ボタンでパスワードを入力しなきゃならねえ!!」

「パスワードは?」

「し、知らねえ!俺ら下っ端には教えられてねえ!!一部の幹部しかパスワードは知らねえんだ!!」

「お前…なんでそんなに言うんだ!!?それを言ったら俺達の行く末が決まっちゃうだろ!!」

「ま、負けたからにやそれなりのモノを出さんきやいかんだろ!」

「うっ…確かにそれは一理あるけれどよ…!」

「まあそれ以上は深く聞かないでおくわ。揉め事は他所でやってく



れ。」

瞬殺しちゃいました☆

電気系の個性らしかったけれど、それすら気にせずポカスカして倒しました。もちろん居場所は吐かせたけれど、やっぱり漫画と同じ結果でした。漫画とは少し違うのが、幹部ではなくて一部の幹部ということ。つまりは虱潰ししらみに幹部を壊滅したら吐いてくれるということですね（脳筋）

「ラビットシップ、どうするの？」

「一部の幹部って言うていたので…数匹もしくは最悪一匹が知ってるので荒らし周りながら幹部をフルボッコにするしかないですなあ…。それに、監視カメラに堂々と映ってあげているのにこんなに静かなのもやっぱり妙なのです。」

「確かに、漫画みたいに騒ぎ出すってことがないね。ていうか、匹呼ばわりするんだね…。」

「もしかしたら、ただ地下がバカみたいにクソデカくて存在にすら気づいていないってこともあります。」

「それっていけそう？」

「まー…破壊すりゃなんとかなるっしょ☆（思考放棄）」

「あ、完全に考えるの辞めた感じのやつ。」

「とりま破壊じゃー!!」

ドカーン!!

「ラビットシップがあんなに楽しそうに破壊行動を…ちよつと引くかm「ふにゃ!!ズテツ」なんか急にめっちゃ可愛いんだけど。」

「ねーねー!これ何ー?」

ゴウンゴウン…

「何…これ…?デカいっていうか、クソデカくない…?」

でつかい装置とよく分からん生き物が入っている装置があった。なんか見た感じはゲームで言うところ、ボス戦が終わった後に二週目で知らないポイントで特殊イベントが起こって裏ボスルートに行くような感じでした。もちろん破壊しようと思っっています。

「よっしや破壊じゃー!!」

「ラビットシップ!？」

ゴツ!!

「……………」クルツ

「だ、大丈夫…?？」

「痛い…。」グスン

「可愛いなオイ。」

ギロツ

「ラビットシップ…。」

「ん？」

「なんか…こつち見てない？」

「マジですか??」

「うん、マジ。」

「あ、本当だ。こつち見てる！」

「動きそうじゃない？」

「あ、もう動いてるー！やっほー！見えてるー?!」

「無邪気で可愛いけれど…流星に怖いことしてない!？」

「そーですかね？ピシツ　ぴし??」

バキバキバキツ…!!

「ね、ねえ…これ…。」

「やっべ、挑発しすぎちった☆」

「挑発行為にも程があるんじゃないかなー!？」

ガシヤアアアン!!!

ザパアアア…!!

「逃っげろー!」

ヒョイツ

「ひやつ!?ちよつとラビットシップ大丈夫なの!？」

「俺がアレ如きに捕まるもんですか！アレは多分出しちやいけないヤ  
バイやつでしたわ☆」

「なーんかふぎけてないかなこの子!？」

「てへっ☆」

「ねー本当にどうするの!？多分ボス戦よりもっとヤバいの出てき

「ちゃったんだけど!?!」

「ノリで裏ボス出しちやったからそのまま放置しちやいます☆」

「この子無邪気すぎて本当に怖いんだけどー!!」

ザザッ…

『もしもし萃ちゃん聞こえる!?!』

「あ、お姉ちゃんどしたの?てか、ここ繋がるんだね。」

『まずいことになったわ!捕まえた奴から情報を吐き出してもらったんだけど、とんでもない生物を造っていたんだって!!』

「とんでもない生物?んー…なんか人型のクソデカい体の形をしたやつ?裏ボスみたいな感じ?」

『そうー…つてもしかしてそこにいるの!?!』

「うん、ノリで挑発したら怒って出てきちやった☆」

『…は??!』

「やっちゃった☆」

『このおバカああああああ!!』

「キーン!! んにゃああああ!!耳があああああ!!」

『なんてことしてくれちやってるのよ!!あなた本当にバカなの!?!大バカ者なの!?!お仕置きどころじゃ済まないわよ!?!』

「だ、だつてえ…如何にも起こしてくださいと言わんばかりな状態だったから…。」

『はあ…これが終わったら覚悟してなさいよ?しっかりお仕置きあげるんだからー!』

「はあ…い…。」

『返事は延ばさないの!』

「はい…。」

『それじゃあ、後でね?』

ブッ

「誰からだつたの?」

「お姉ちゃんに怒られちやった。」シユン

(可愛い…もうそれしか言えない…。)

あまりにもふざけすぎたことでお姉ちゃんに怒られました。

甘奈さんをお姫様抱っこしたままてってこ走り回った後、エレベーターをたまたま見かけました。

とは言え、ボス戦の前に裏ボスみたいな奴の対策もあつたりと色々起きております。はい。

ちなみに平気そうに見えますが、余裕で疲れています。

## #44 情緒不安定

エレベーター見つめました。

特に何の変哲もないただのエレベーター。

だからといって秘密がないということはありません。  
なので破壊します。

「エレベーターはっけーん！」

「だけど、どうするの?! パスワードが分からないよ?!」

「んなもん知らねエ!! 大体ぶっ壊しや何とかなる!!」

「ダメだこの子考えるのやめて脳筋になってる!!」

「目エ閉じていてくださいにや!!」

「えっ? 何で!?!」

「壊すからです!!」

「本気で言ってるの!?!」

「脚力現在出力100%から現段階最大出力600%に変更: 体内電力を全て脚部に、標的: ただのエレベーター!! 行くぜおらああああああ!!」 バチバチツ

「いやああああああああ!!!」

「九七式艦載爆撃!!」

ドカアアアン!!!

パラパラ:

「ら、ラビットシップ: 私のこと大事にしてくれない:?!」

「ご、ごめんしやい:。」

「あ: だけど予想通りだ! ラビットシップ、もしかして野生の勘が働いてる?」

「ん: とうでしようかね。」

「どうする? 一旦整える?」

「先ずはそうですね。態勢を整えてから行きますか。次いでにデカブツもあまり動けないだろうし、アレも潰しておきましょうか。」

「もしかして考えるのやめたの!?! 脳筋なの!?! 戦闘狂なの!?! ねえ、

狂戦士なの!!?

「くききっ♪楽しくなりそうだぜ♪」

ゾワッ

「えっ…？ラビットシップ…？」

「んあい??」

「なんか一瞬…いや、何でもない…。」

ボス戦前に裏ボスみたいなデカブツの始末をします。

まずは考えるのをやめてフルボッコにすりや倒れるだろうと考えています。もちろん拳で。

ドズン…

「……………」

「で、でかあ…。」

「出られないのでしょうかね？意外と大人しい…？」

「…………!!」

「あ、見つかった。」

「うわわわっ!!逃げなきゃ!!ラビットシップ！何してんの!!」

「んー…もしかして、あのおっきいの…中身子供？」

「え??？」

「おねーちゃんだれー？」

「…？俺？」

「うん。」

「俺はラビットシップって名前だよ。君の名前は？」

「ぼくの…なまえ…？あれ…？おもいだせない…。」

「ラビットシップ、これ罨じゃないの!？」

「いいえ、罨じゃありませんね。こんな純粋な匂いは初めてです。」

「ラビットシップが言うからには信じるけれど…。あのデカいの子供なの…?!」

俺は正直驚いた。

巨人並のデカい体のハズなのに、中身は子供というとんでもない事態が発生しました。はっ倒すつもりだったが、子供じゃあどうしようもできないので、お話をしてみることに。

「思い出せないって……………ん?」

ピラッ

「ラビットシップ、何それ?」

「何かの資料みたいでs……………」

「ラビットシップ??」

「捕らえるだけじゃ物足りねえな。奴らを滅殺する。」

「ら、ラビットシップ…?どうしたの…?」

「甘奈さんはここであの子供と待機をお願いします。ここからは俺がすぐにボスを引き摺り出して細切れにしてやるので。理由はしつかりこの資料このゴミに書かれている通りなので。じゃ、待機お願いします。」

「ちよ、ちよつと待つてもダギンツ!! ひやうっ!?もう…思っていたより乱暴な子なのね。えつと…これに書かれているのは…は???これはラビットシップもブチ切れ案件よね。」

俺は知りたくなかった。

いや、知っちゃいけないものを知ってしまった。

奴らの資料にはこう書かれていたのだ。

【テイターン巨兵製造計画】

【実験素材 子供（日本国籍の者に限る）、ゴリラの腕の筋肉、カマドウマの脚の筋肉、ラーテルの背中、アルマジロの背の皮、ディノポネラの顎の筋肉e t c…】

他にも生物の一部の筋肉が書かれていたのだが、それに気づいてしまったのだ。生き物一体の部位の筋肉の一部さえ入手してしまえば、奴らの特別な実験をすることによって筋肉の成長や繊維の増殖をすることが可能なのだ。麻酔で眠らせた子供に生き物の各部位の一部と特殊な細胞を埋め込み、本体ごと巨大化させると同時に埋め込まれた筋肉が特殊な細胞によって人の筋肉と結合してその部位を侵食。

まとめて言うとは合成です。

タタタタタ

「一応お姉ちゃんにも連絡しておくか。」

ザザツ…

『萃ちゃん今何処!?!』

「ボス部屋に向かっている。お姉ちゃんは何？」

『私は萃ちゃんのところに行くところなんだけれど!!』

「お姉ちゃん、急遽予定が変わった。」

『何?』

「さっき俺が言っていた巨大な人型生物なんだが…あれの報告を追記で頼みたい。」

『はあ!?何言ってるの!?』

「見せかけた。中身が子供だったんだよ。」

『どういうこと!?結論はなんなの!?』

「侵略者の連中が子供を含めたその他の生き物を合成して別の生き物にしやがったんだよ!!!奴らは人間としてやっちやいけねーことを平然としていやがんだ!!!さっき俺達が見ていたドツベルゲンガー影もその類なんだよ!!」

『何ですって!!!?』

「お姉ちゃんは先に本部へこのことを連絡!その後に俺が位置情報を載せた場所に向かって欲しい!!人質にされていた人もいるが、その人に巨人並の子供を見てもらっているから!!」

『次から次へととんでもないものが来るわねえ…!!後で私に何か奢りなさいね?!?』

「ああもちろんだ!!」

『萃ちゃんのところをヒーロー達を数名向かわせているから、合流したらお願い!!』

「了解した!あとは頼んだ!お姉ちゃん!!」

『しっかり任されたわ!』

ブツツ

「ボスを見つけたら絶対に殺す。」

「艶星!」

「障子君…?!」

「ここに親玉がいるのか…?」

「ああ…そうだ。」

「艶星…その反応…。」



「ごめん、俺…今回は本気マジでヤバくなる。」

「…今増援が来る。一度頭を冷やせ。」

「……………分かった。ありがとう。」

「気にするな、友達だろ。」

「……………ッ。」

増援は障子君、尾白君、峰田君、耳郎さん、青山君、Mt.レディさん、ジーニストさんの七名だ。

俺が勢いで破壊したエレベーターから降りたが、結構深かった。

Mt.レディさんがMAXで巨大化しても余裕で収まるくらいの高さだった。エレベーターそのものをぶっ壊しちゃったので、増援組をジーニストさんをお願いお願いして、真っ先に降りて行った。

プロヒーローに止められたけれど止められませんでしたってやつです。

ゴオオオオ…

「デカいな…なんなんだここ…。」

「よくお出ましになられましたねエ。」

「…テメエが親玉か。」

「そうですね。私が侵略者インヴェーダー日本支部 所長の呂 創破です。」

「わざわざ親玉がお出迎えになるたあい度胸してんなあこのドクズがよオ…!!!」

「ふっふっふ…あなたのような子供には私は倒せませんよ。なんとつて…あなた方はここで死ぬのですから!!!」

「おうおう自信たつぷりじゃねえか。お手並み拝見とするか!!」

「ふんっ!!!」

バキバキッ

「へえ…そういうものか。」

ボガアッ!!!

出待ちされてました。

ボスとは名乗っているけれど、流石にボスとは思えない。

「どうです…私の個性は!!素晴らしいでしょう!?!これはあらゆる実験

を積み重ねて三つの個性を手に入れたのですからねえ!!」

「あつそ。(三つの個性を手に入れたつてことは、計四つの個性を持っているのか。代償が気になるなこれは。)」

スルスル…

「出待ちされていたか…。」

「オイオイ! 艶星もう始めてんじやねーか!!」

「萃ちゃん…何してんの?」

「何か動き回っているようには見えるよ!」

「今度艶星から教えてもらわねーとな。」

「あの子ちよつと苦戦してない?!」

「Mt・レデイ、待ってくれ。彼は何か様子を見ている。まだ私達が出る番ではないようだ。」

ボコッ

「あはっ☆」

「ちよこまかと…やかましいですねえ!!そろそろ消えてもらいますよっ!!」

ヒュウウ…

「ふうん…次は風か。艦艇にとつちや難敵だな。」

「はああっ!!!」

ボンッ!!

ドッ!!!

「萃ちゃん!!!」

「二艶星い!!!」

「艶星君!!」

「呼んだ?」

「わあああ!!!」

「なんで!?!さつき…!」

「いやー、アレ喰らうと流石の俺も耐えられなかつたわ。」

「ラビットシップ、あの出待ちの奴は何?」

「普通に親玉でした。」

「何…?!だからあれだけの余裕を持っていたのか…!」

「ちなみにあの野郎は三つの個性を手に入れて現在四つ持ちの厄介な奴になっております故。」

「ど、どういうこと…?」

「結論を言ったらAFOの雑魚版ってところ。」

「あ、分かりやすい。」

「つ、艶星…。」

「どしたの?」

「う…うう後ろ…!!」

「ん?あ。」

「雑魚とは何ですかねえく?聞き捨てなりませんよおく??」

「え、お前雑魚じゃん☆」

ブチッ

「ぶっ殺す!!!」

怒らせちゃいました☆

## #45 表のボス、真のボス

「クソガキがああああ!!」

キュルキュルキュルキュル…!!

「あ、やべ。全員直ぐに降りろ!!!」

「今更遅い!!!」

「んにやる…!!!もう一人の自分!!!」

『おうよ!!』

ドツ!!!

「吹き飛ばせ!!!」

『カウンター・ラビッツ  
「兎の反撃」!!!』

『コンプレクス  
「圧縮!!!」』

メキメキ…ボキツバキバキツ…!!

「ぐっ…!!腕砲台をやりやがったな…!!!月輪蹴菟!!!」

ゴツ…!!

「はあ…はあ…クソガキの分際で…!吸い取れ!!」

ピシユツ

「ふん…!!そんなの視えてんだよ!!」

「やべえ…艶星のやつ、空中戦してるぞ!!オイラ達はもうどうしたらいいんだ!」

「落ち着け、艶星には策がある。俺と尾白に合図が送られるから、それに応じてくれ。」

「あとは彼の体力次第…ってところかな。」

「僕も役に立てたらいいけれど…上手くいくかな?」

「萃ちゃんならきつと上手くいくよ。いや、絶対に。」

「だが、今はラビツトシツプは不利な状況に至っている。合図が来るまでは持たない…!」

「ていうか、そろそろ私達も萃ちゃんをヒーロー名で呼ばない!?」

「あつ…:そういうええそうじゃん!!Σ」

「釣られて名前で呼んでいたね☆」

「それにしても…ラビットシップって本当に無個性なのか疑問に思っちゃうね…。飛行系の個性以外で空中戦なんて普通はできないはずなのに。」

「私もすっかり確認していたのだが、やはりどこの診察を受けても無個性判定だった。」

「何かがあるのかもね…。」

俺と親玉を名乗る奴はボカスカ闘り合いながら着地し、降りたメンバーに合図を送った。援護を頼みました。

親玉らしき者の呂 創破という奴の個性は研究を重ねた計四つの個性を持つているが、本体個性は遠隔ドレイン系の個性。

他の三つは飛行、風、地面や壁を利用する個性でした。

ババツ

ラビット・ラビット  
「菟の集い!!!」

「テナタコル、準備はいいか?!」

「ああ!いつでもだ!!」

タツ

「いっけええええええ!!!」

バシユンツ!!

「オクト…!!」ギギギギ…

ラビット  
「菟月…!!」ギユルルル…!!

「ぬうん!!!」

ボゴゴゴツ!!

「リングフオール「スパンション／輪墮」」

ベガガガガツ!!!!

「くっ…!!」

「ちっ…!!」

スタタツ

「テナタコル、ナイスタイミングだ。」

「お前のタイミングにテイルマンと上手く合わせたからな。」

「だが…コイツ思っていたよりめんどくさい奴だ…。グレープジュースの力がかなり重要だ。」

「サポート系の個性にはなるが、かなり強力な個性だからな。ラビツトシップは一旦休め。」

「いや、まだだ。それに試したいことがある。イヤホンIIジャックはいるっ。」

「いるよ。どうしたの?」

「俺のめちやくちやになった腕に刺してもらえるかな?」

「うっそでしょ…?まさかだけど正気なの!」

「うん、お願い。」

「どうなっても知らないからね!」

ズブシツ

ヴヴヴ…

「何をしているのかねえ!!私はまだビンビンですよ!」

「テンタコル、グレープジュース、テイルマン、Twinkleすまな!!20秒だけ時間を稼いでくれ!プロヒーローもお願いします!!  
奴の個性は本体が遠隔のドレイン系、追加個性は地面や壁を利用した個性、飛行系、風系の個性です!ドレインには気をつけてください!!」  
「任された!!」

「任されたよラビツトシップ☆」

「艶星にお願いされたからにはオイラも負けてられねー!!」

「いっちょやるか!!」

「イヤホンIIジャック、この大破した腕砲台に10秒程強力な振動を出してほしい。」

「わ、分かった。脚にも与えておく?」

「あ、それ言おうとしていたから助かる。あとは君にしかできないことを頼みたい。」

「なに…?」

「この床を壊せたら壊してほしいんだ。」

「…どういうこと?」

「奴の追加個性の一つを使用不可にさせる。硬い床や地面限定の個性なんだ。さつきよりも火力が衰え始めてきているからそこを狙う。」

「合図はどうするの?」

「もちろん菟ラビット・ラビットの集いで送る。」

「分かった…それよりも腕は？」

「あ…腕砲台は使えねーな。中で本体俺が言ってた。火力が一気に下がったからな。」

「振動を与えたのは何か効果があるの？」

「そりやな。振動を利用して筋肉で粉々になった骨を集めつつ、形を治していたんだ。」

「いやもう個性そのものじゃん！」

「なにをお喋りしてるのかねガキ二匹いいいい!!」

ボゴゴゴツ!!

「しまった!!」

「ん? ふんっ!!!」

ズドオオツ!!

「…は!?!」

俺、再起。

☒香ちゃんにお願いをして、一時的にだが腕を治した。

見せかけなので腕そのものは使えない為、この場面はもう一人の自分に任せた。

もちろん殆どが脚技なので腕は使いません。はい。

とは言え、やはり強敵に変わりはない。

障子君、青山君、尾白君、峰田君、ジーニストさんはかなり苦戦している、特に本体個性のドレイン系にかなり手を狂わせているようだ。

もちろん俺も狂っております故。

「さあ、今度こそ貴様をぶっ飛ばすぜ!!行くぞゴラああああ!!」

「数が多ければいいと思っではおるまいなあああ!!」

「算段はついてらア!!菟天脚!!」

ベゴツ!!

「あがごツ…!?! (こ、コイツ…この近い距離を一瞬で脚を使って顎を狙っただと…!?!)」

「どうした雑魚。その程度か? 数が多ければ…なんだって?」

「くっ…クソガキがああ!!」

「テイルマン!!」

「でりやああああ!!」

バゴオオツ!!

「ぶべぼっ!!」

「よしっ!!」

「テイルマンまだ侮るな!来るぞ!」

「ガキ共が私を倒せると思うなあああああ!!」

ビュオツ!!!

「くっ…!!風圧に負ける!!」

「うわっ!?ラビットシップ…どのタイミングで…!?」

ヒュルルル…

「このタイミングで来たか…。グレープジュース!行けるか!!」バチバチ

「オイラはいつでもバチチリだぞ!」

「一発勝負だ!風を潰しに行くぞ!」

「お、おう!!」

(ラビットシップ…もしかして先の先を先読みしていたの?!)

バヒュツ

「ラビットショット…!!」

「ぬおお!!?速い!!!ぐぬぬぬうう…!!」

「そのまま塵と化すがいい!!」

「ぐ、グレープバレットおおおお!!」

ビタアツ!!!

「ど、どうだ…?」

「上手くいったようだな…!ナイスだ…グレープジュース…ガクツあふっ。」

「ラビットシップ!」

「やっべ…脚が動かん。」

「ガキ共がああああああ!!」ドンツ!!

ラビット・ラビット  
「菟の集い!!」



「任せておいてラビットシッブ!!ズブシッ 『ハートビート・サラウンド』!!!」

メキメキ…ボガアツ!!!

「んううううう!!!」

「んなっ…!?あんの小娘ええええええ!!!」

「解ほっれあり!!」

ビシイッ!!

「ぬあっ!?」

「テンタコル、今だ!!」

「はい!!お前…少しだけ大人しくしている!!!」

ボガンツ!!

「ぶべがっ!!く…そ…:…:…:があ…:…:!!!」

ガクッ

「か、確保じゃあああああ!!!」

喜ぶ暇すらなく忙しいです。

親玉はテンタコルの重い一撃で気絶。

俺達は気絶している親玉を一瞬で拘束して地上に戻ろうとそそくさと撤退しようとしていたその時…まさかの隠し扉が開きました。

何処から出てきたのかって?知らね。

プシューウ…

「おいおい勘弁してくれよ…冗談だろ?」

「か、隠し扉…?」

ズキッ

「うぐううっ!!?にやにこれっ…!!頭が…痛い…:…:!!」

「ラビットシッブ大丈夫か!」

「ごめんグレイプジュース…。野生の勘が言ってる…今よりもかなりヤベーわ。TwinkleとMt.レディさんはいるか?」

「呼んだかい?」

「タメ口だなんて何時から偉くなったの?」

「ごめんによしやい。」

「それで…どうしたらいいかな?」

「俺はとんでもねえミスをした…！脱出する際の手段として二人を保っていたんだが…変更だ。最終手袋だが…ベストジーニストさん、Mt.レディさん厳戒態勢に入ってください!!グレープジュース、Tinkle、イヤホンIIジャックはいつでも反撃できるように!!テナタコル、テイルマンは近接態勢入ってくれ!!俺は頭痛すつけどあと83秒したら復帰ができる!!」

カツン…カツン…

「おやおや、日本支部副長を倒すとは…中々の手練だね?」

「…テメエが真の親玉か?」

「そうとも…よく倒せましたね。褒めて讃えようじゃあないか。それに…自ら帰って来てくれて助かるよ。個体No.000。」

「褒められても喜びたかねえ気持ちだ。つーか、何だよその厨二病じみた言い草はよwww いい歳こいて厨二発動すんなやwww」

「ん?君のことだが?個体No.000。」

「……………は????」

## #46 完全個体と真ボス

「No. 000? 何だそれ? ラビットシップ、知ってるのか?」  
「いや知らねエ。クズ組織のことだ。過去をごちゃ混ぜにするに決まってるア。」

「ふむ、あの方の言う通り…やはりあの兵器に回収されたからか…。まあ所詮敗戦国だから誘拐し放題だったから別にどうってことでもないか…。素材を誘拐すれば完成体出来るはずだからな。」

「よし、アレ殺すわ。グレイプジュース、それ一つくれ。」

「お、おい…流石にそんなことはできねエよ!! 抑えろラビットシップ!!」

「アレを始末しなきゃ俺達の住む日本が壊れちゃうんだ!! 怒り狂った獣と本体が出て来る前に早く!!」

「ぐつ…そ、それでもオイラはできねえ…!! 頼られるのは嬉しいけどよ…オイラはヒーローを目指すんだ!! 殺しをする為に使うなんてことはしたくねえんだ!! 分かってくれよラビットシップ!!」

「…すまねえ。目的を見失うところだった。だが…俺はアイツを殺すつもりでいる。他人の個性に任せっきりにはもうしねエ…。俺の全力の本気をあのゴミクズ野郎にぶつけてやらあ…!! 意識そのものをぶっ殺す!!」

「ラビットシップ! そんな野蛮なことはすr「大丈夫です。ベストジーニストさん。」どういうことだ?!」

「今のラビットシップは怒りに満ち溢れているものの、意識をしつかり保っています。言葉は野蛮で少々荒いですが、生け捕りにすることは間違いありません。」

「へえ…成長してるじゃんあの子…。念の為、暴走したら荒っぽくなっちゃうけれど、驚掴みにしても大丈夫かな?」

「どうしようもない時は…お願いします。」

「イヤホン!! ジャック、君はどう思うかな?」

「どうって…何が?」

「ラビットシップは今、かなり危険な状態だと思うよ。抑え切れなくて過去最悪の暴走を引き起こしかねないと僕は予想してしまっているんだ…。」

「その時は…あの子を壊してでも暴走を止める。その後はしっかりと仕置きもしてあげなきゃ。」

「ふふっ、イヤホンIIジャックらしい答え方だね☆」

真ボスが現れて、俺のことを謎に個体No. 呼びしていたり、誘拐を繰り返していたりしていたらしい。

そして俺はその誘拐された人の一人らしい。

その記憶はとつくに星の彼方へと消えていますけどね。

「実験体が私に勝てるでもお思いで?」

「雑魚如きがよくデカイ口で言えるもんだなア!!」バチバチツ

「…ふむ、流石個体No. 000だ。とても美しい…。」

「ゾワツ 気持ち悪…。」

「私のことを雑魚呼ばわりしているが…本当に勝てると思うかな?」バシヤツ

「液体になった?!ラビットシップ気をつけろ!」

「液体系の個性…いや、違エな…これは…ツ!!!」

バシユツ!!

「ほほう…どう見えていたのかは分かりませんが…よく分かりましたね?」

「はあ…お前、本当に雑魚いな。」ヴヴヴヴ

「…!?!」

「テメエの個性は水銀。そして液体窒素だな? 分かりやすく助かるわ。」

「そ、それがどうしたのかな? それ以外にもあるとは分からないだろう?」

「あ? まだあんだろ。爆発系一つ、ドレイン系が二つ、刃物系が四つ、毒系が三つ、地形変化型が二つだろ?」

「…何故それが一瞬で分かった…!?!」

「さあね。つーか、テメエの場合代償がエグすぎて使いにくい上、相性

そのものが最悪だから使っていないねエんだろ？刃物系を使っているりやあ地形変化はできねエし、ドレイン系も使えねえ。毒系を使おうともドレインは併用不可…その他諸々ってところだな。」

「参りましたねえ…ここまで見破られるとは…。」

「とりあえずテメエはここで殺す。日本の未来を奪ってんだからなア  
!!!」

「ふっ…それなら私を倒してみなさい!!!」

「んなこと言わなくてなア!!!」

ドプツ

「やはりな…!!」

「このまま取り込んでさしあげよう!!!」

ズズ…

「…ばーかwww」

ヴヴヴヴ…

「?!」

「俺を個体番号呼びしたこと…後悔してねエよな?」

「実験体の方で…!!」

「音震不通。」  
サウンド・クエイク

パアアン!!

ベチャツ

イヤホンIIジャックがいなかったらこの技は思いつかなかった。実質個性のようなものだが、無個性でここまでやれるとは思ひもしなかった。というか、弾けさせるくらいの強さにまで発展したことに驚いていました。

「まだ終わってねエよなあ?!」

「ねえTwinkle。」

「なんだい?イヤホンIIジャック。」

「あの子、敵側のセリフを言ってるけれどツツコまない方がいいかな?」

「うん…ツツコミはちよつとマズイかもね…ははっ…。」  
ズルツ

「ん？なんだ??」

「グレイプジュース逃げろ!!」

「もう遅い!!」

「何が遅いんだって?」

「ッ!」

「悪いが、俺だとしても本体<sup>俺</sup>じゃねエからなア!!」

「ん？あれ!?オイラさっきまであそこにいたよな!?ラビットシップ、  
どうやったんだ!」

「秘密じゃ☆」

「ちつ：最早アレは個体番号ではない：！我々が求めていた完成個体  
：！日本を乗っ取るのにふさわしい出来だったのに：！！おのれヒ  
ーロー：！ここで死んでもらうしかあるまい!!貴様もだ!!完成個体!!!」

「あ、やっべ：怒らせちった☆」

「このまま戦うか?」

「撤収しよっか☆」

「い、いいのか：?」

「なあに勝ったかのようなことを言っているのかねえ!!このまま逃が  
すでも思っているのかねえ!!」

ガッ!!!

「うおっ!」

「ラビットシップ!!」

「俺に構うな!!先に行け!!!」

「あんたを残して行けるわけないでしょ!!」

「全く：！オラア!!」ブオン

パシッ

「お、おい：何だコレは!!」

「俺が隅々まで探しに探し回った結果だ!!急展開だが、俺は強制的に  
戦わされるイベントになっちまったからお前らに任せる!!頼らねー  
と親にシバかれるからな!!」

「何をごちやごちやと：！！完成個体：そっち側の味方になったのな  
ら、貴様を殺さねばならん!!」

「ラビットシップ!!」

「くっそしつけーなアおい!!お前から任せた!!」

「おいおい嘘だろ!?お前にこれ以上負担かけさせたくねーの!!」

「大丈夫、いつものことだ!!しれつと帰って来てやつからよ!!」

「…皆、行こう。」

「何故その判断なんだ!?!」

「僕は彼を見て分かったんだ!僕達はもう任されたんだよ!あの相手は彼にしかできない…それに、今渡されたこの情報は僕達が奪われないうように全力で脱出しなきゃまたやり直しになるんだ!」

「……。」

「Twinkleの言う通りだ。全員、先に脱出の準備を。」

「……分かりました。」

真のラスボス戦に突入してセリフまみれになっていたけれど、結局俺は一人になってしまったが、一番重要なのはテナタコル達だ。

ほんの一部にしか過ぎないが、唯一の組織の情報が入っているカメラを渡したのだ。

ガシヤアアン!!

「おっほほおお!!→→」

(コイツ…楽しんでいるだど…!?今まで苦労して積み上げた個体をこのままヒーロー側に渡すワケにもいくまい…!!このフロアの最奥まで連れて行ってでも私の手にしなければ…!!)

パシッ

「この俺を最奥まで持つて行って脱出させない形でいたんだろ?」

「…!?!」

「悪いが、家族が迎えを待つてんだ。テメエだけ一人でいやがれ!!」

バチッ!!

「くっ…!?!完全個体だからと言って…私に勝てると思うまいなア!!」

「勝てるンじゃなくてよオ…勝つンだよ。貴様如きがこの俺を殺せると思つてンじゃねエぞゴラあああ!!!」

『鉄碎参刃裂』!!!』

「俺本体!スイッチ!!」

『つしやあああああ!!きちやあああああああ!!長門型式番艦  
陸奥 41cm三連装砲じやあああああ!!』

ガキイイインツ!!

「ぬおっ!？」

ガン!!!

「ぐっ…!!」

バキイイイン!!!

「この私の技が押された…だと…!？」

「ふうん…お前の技…大したことねえな。まだ本気出してねーんだ  
けどなあ…。そろそろテメエも本気出しやがれ。こんなモンじや、俺  
を殺すことも捕らえることもできねエぞ。」

「ふっ…ふふ…。」

「？」

「ふはははは!!その挑発如きで私が乗るとでも思っていたか?!」

「雑魚。」

「ピツキーン!! ぶっ殺す!!」

「あ、キレた。本当短気が多いなあ。」

『脚斬』!!!

「なるほど…こんな一発如き、力技でどうにでもならあああ!!」

ビュオツ

「14cm単装砲!」

バキイイン!!

「やると思っていたが…この連撃は通用しないぞ!完全個体!!『脚斬  
連』!!」

「既に先読み済みだバーカ。標的確認…砲台固定、腕力力量限界突破  
1001%…!!以下割愛!!すううう…。」

「遊びはここまでだ!!貴様を捕らえなければ…日本を奪えないのだから  
なあああ!!『毒斬』!!!」

「超弩級戦艦 大和型壱番艦 大和、46cm三連装砲…ツ!」



## #47 正体

「参ったな…。」

「どうしたのジーニスト。」

「あの子に任せつきりにしてしまつてよろしいものかと思つてな…。」  
「プロヒーローとしてはマズイよね…。」

「…ダメだ。私、やっぱ戻る!」

「何言つてんだイヤホン!!ジャック!」

「ラビットシップが心配なのは確かだけれど、ここから出る時になればあの子は確定でボロボロになる!もし遅れたとしたら…私達はとんでもない失態をする!」

「…もしかして艷星、責任を負わせるつもりだったのか!」

「いや、あの子はアホの子だからそこまで想定してないよ。」

「サラツとひでーこと言つてねーか!」

私達は今地上へ向かつているところ。

テイルマン、ジーニストさんは前衛に、私とグレイプジュースは後衛。Mt・レディさんとテナコルは中衛にという形になった。

本当はMt・レディさんの個性を使ってショートカットできると思つていたけれど、ラビットシップは思つていたより深いから下手にやらない方がいいと言つていた。

ラビットシップがいたところでさえMAXサイズになつても頭が着くか着かないくらいだったから確かに納得。

「まあ…ラビットシップがそこまで考えているとは思わないだろうな。俺達を優先に脱出させたい気持ちでいっぱいだったんだろう。」

「皆、お喋りはそこまでみたいだね。何かが近づいて来てる。」

コツ…コツ…

「…ん?あれは…?」

「お待たせしちやつたわね!ラビットシップちゃんは何処にいるの?」

「ミッドナイト先生!」

「さつきまで地上にいるって情報だったけど…。」

「ふふっ♪やっぱり心配になつて来ちゃった♪」

「あいつにとつちやミッドナイト先生が来てくれるのはかなりのことだなーな、テンタコル!!」

「…お前は誰だ?」

「…ん?」

「は?」

「え??」

「お前は誰だと言っている!ミッドナイト先生はラビットシップの呼び名をヒーロー名で呼ばない!!お前は誰なんだ!何故騙すことをしているんだ!!」

「うっわあ…もうバレちゃったか…。まあ確かにアイツの本名分らないし、それしか教えてもらってないからなあ…。」シユルル…

「…それが、お前の正体なのか…?」

「うん、僕は個体No. 001 ドッベルゲンガ 影。君達ヒーローを殺せと命じられたんだ。」

「ラビットシップの情報通りだな…。どのような攻撃をするかは分からないが、コイツには注意しておいた方がいいと言っていた。とは言え…。」

ドロツ…

「お前、半個体…なのか?」

「アイツとは違って失敗作に近いものだからね。本当はアイツを殺せば僕を完成体に近づけることができたみたいだけど。パパに君達を殺してからにしないやいけなくなっちゃったから代わりに行ってくれて頼まれちゃって…。ていうか、お兄ちゃんをアイツ呼ばわりしたくないから普通に喋ってもいいかな?正直殺る気なんてそもそもないし、逆にあんのクソ親父クソ野郎を殺したいくらいだよ。」

「なんか口調変わった!!しかもすごい友好的じゃねーか!?!」

「いや、まだ警戒しろ。何をしてくるか分からない。」

地上へ向かっている途中、ミッドナイト先生に会ったと思ったたらテナタコルが違和感に気づき、問いたました。

確かにミッドナイト先生は萃ちやんのことをラビットシップと言ったことがなかった。しつかり萃ちやんとしか呼んでいない。

「ぼったり会った正体不明の生物は実験体にされていた子だった。」

ドッベルゲンガー  
「影、お前に聞きたいことがある。」

「なんだい?」

「ラビットシップとは一体どういう関係なんだ?」

「僕は彼の複製体。彼の遺伝子をそのまま移行させて造られた個体だ。最初は彼そのものだった。だけど個性を取り入れられた時には体が崩壊してこんな姿になった。笑えるでしょ?彼の遺伝子は外部から受け付けない特別且つ特殊な体質だったんだよ。」

「…ラビットシップは純血の無個性ということだったの?」

「まあそういうことだね。だけど彼は君達よりも実年齢はかなり上だ。」

「君、それはどういうことだ…?私達よりも彼の方が上…?!あの見た目でそんなことは…!」

「まあ非現実的だよな。だけど彼はかなり昔の人間だよ。彼の記憶そのものが僕にも移されているから。」

「なんなんだよお…!なんか急に話がぶっ飛んでんじゃねーか!結論から言え!!」

「彼は第一次世界大戦に存在していた人間だよ。パパがそう言った。」

「意味が分からねえ…!!」

「意味分らないんだけど!?ラビットシップはこの時代に生まれた存在じゃなかったの?!」

「もしかして…コールド・スリープか…?」

「!?」

「うん、彼のことを興味本位で探っていたらこんなのが出てきたから見てみなよ。」

ピラッ

彼が出してきたのは二枚の紙。

警戒しながら受け取ったけれども、彼には敵意がなかった。

その前に殺意すらもなかった。

私には分からない行動だったけれど、気がつけば助けを求めているような目をしていた。そんな感じに見えた。

「そんなに警戒して受け取らなくても…。」

「まだ敵同士で何されるかはまだ分からないからな…。」

「これは…。」

「萃ちゃん…?」

「紛れもなく彼だよ。正直、僕は可哀想だと思ったよ。まだこんなに小さかったのに実験体にされるなんて。」

「ん? 待てよ? それじゃあ今の親は…。」

「…そういうこと。本当の親はとつくの昔にいない。」

「…。」

「ねえ、確かドツベルゲンガー影 って言っただけ?」

「なんだい?」

「あんたはどっち側?」

「僕? 僕は…正直、お兄ちゃん側…かな?」

「それなら、助けてほしい。」

「イヤホン||ジャック、急に何を言うんだよ!」

「やっぱりあの子は一人にしておけない。私達を傷付けさせない為にやってくれているけれど…全部一人で抱え込んでいるの。テナコルも分かるでしょ?」

「…ああ。アイツは強いが、抱え込みすぎて爆発することがあるからな…。」

「それじゃ、ラビットシップのところへ向かおうじゃないか☆僕だって全く活躍していないからね!」

「私も全ツ然活躍してない! 大事な役割って言われていたけれど、中々出してくれなかったんだもん!!」

「ラビットシップには悪いが、こればかりは従えないな! 俺はアイツのところへ戻る!」

「お、オイラも戻るぞ! あんな良い奴がいなくなってたまるかってんだ!!」

まあ戻ることになったね。

萃ちちゃんはいつも無茶をするから余計に心配になっちゃったし、崩壊するとなった際は誰が助けるんだって思ったしね。

そして、私達側と分かった人？みたいな生物、ドッベルゲンガ影。分かりやすく言うと萃ちちゃんのクローンで実験体にされていた子。仲間になってくれた。

そろそろ萃ちちゃんの視点に戻るね。

ドゴオオオオン……!!!

「くっ……!!」

「…けほっ。」

「完全個体め…何故私側に付かないのだ!!」

「あ？テメエが日本俺らの國を乗っ取ろうとしている上に俺の友達ダチを殺そうとしてっからだ。」

「ダチ…？くっ…ふふっ…ふははははははは!!」

「何がおかしい…？」

「久々に笑わせてくれたな。本当の親も知らないでなあ!!」

「…は？」

「お前はこの約100年…この時代が来るまでずっと眠り続けたのだ!!」

「………。」

「この事実驚いてダンマリか？」

「あーすまん、日本語で話してくれ。」

「……ツツ?!?!」ブチツ

「短気だねえ〜ブオンツ おつとと?!」

「約100年前…!第一次世界大戦中に私の祖父が確保しておいたからな!!この計画は既に始まっていたのだ!!私の曾祖父はお前を戦時中に誘拐し、即座に眠らせたのだ!!」

「言葉をしっかり分かりやすく喋れやゴミクズが!!俺は今を生きている出来損ないだ!!敵である貴様のようなゴミクズ共の発言なんざ一言も耳にしてねエ!!俺が何処で生まれようが、何処で育てられようが知ったこつちやねエ!!」

ザツ!!

「ラビットシップ!!」

「んなっ…!?イヤホン!!ジャック達!?何故戻って来た!!?」

「ふっ…!いい獲物捉えた!!」

バヒユツ

「…ツ!!テメエら伏せろおおおお!!!(あーもーめんどくせーこと  
してくれらああああ!!)」

『毒烈斬』!!」

「え…!?」

「しまった…!間に合わないっ!!」

「馬ッ鹿野郎がああああああああ!!」バリバリツ!!

ズバシユツ!!!

## #48 全力を越えた先

ポタツ…ポタツ…

「…あ、あれ…?」

「つ…艶…星…?」

「ラビットシップ?!」

「ぐぷっ…いやあ…困ったモンだな…」

ドチャツ

急に来たので俺は全力で親玉の攻撃を総受けした。

めちやくちや痛かった。毒も中々だったが、免疫力が凄まじかったせいかすぐに毒が治まった。

だけどもものすごく痛くて膝を着いてしまった。

しかもものすごい出血量だった。

痛かった。(三回目)

「…ツ！萃ちゃん…！ごめん…私達…！やっぱり心配で助けようと思っただけで…!」

「まあ…そうだろうとは思ってたよ…。いやあ…！久々にいいもの喰らったなあ…」ムクリ

「艶星！流石に動いたらまずい！あとは俺達がやるぞ!!」

「いや…俺もアイツを叩き落としてやらねーと俺が落ち着かねエ…」

「それなら艶星君だけじゃなく、皆で戦わないとね！僕だってまだ戦えていないからね！」

「怪我させない為に戦っていたが…限界つつもんがやっと分かったわ…」バチツ…

「お、おい…まだ使うなよ?!」

「いや大丈夫だ…。もう俺だけが戦う相手じゃねエからな…」

「ああ、任せろ。」

俺は思った。

俺は恵まれているんだと。

仲間を傷付けまいと言わんばかりに一人で突っ走っていたけれど、それでも追っかけて追いついて助けてくれる仲間がいる。

無理はするが、それは俺も変わらないし何も言えない。

あとでお礼を言うか。

「お兄ちゃん、僕とは初めましてだよ。ワケはあとで話すね。」

ドッベルゲンガー

「お前… 影 か……。存分に手伝いな…！だが、裏切ったり友達を傷つけたら容赦しねーからな。」

「うん、大丈夫。あと、ありがとう。シユルルルツ それじゃ、」

ドッベルゲンガー

「No. 001 影、貴様も裏切ったか。まあいい…数が増えたところで何も変わらない!!」

「あっそ、んじゃ俺の…いや、俺達の力を見せてやるよ!!」

ヒーロー

「力と言いなながらも同じことだ!!!」

「それはどうかしらねええええええ!!!」

「チツ…!」

ドガツ!!

「私の可愛い可愛い萃ちゃんをよくもこんな状態にしてくれたなあああああああ!!!」

タタタタタ…

「うひゃあ…Mt. レデイさんの全力しゅげえ…。相手にしたら絶対勝てないわ…俺即死☆」

「艶星やベエぞ!ターゲットをこっちに変えてきた!!」

「大丈夫だ峰田君、もう既に計算済み! 斬撃を飛ばして来るから準備をしておいてくれるか?!」

「どうやって対処するんだ!?」

「粉碎させる!」

「あつ…脳筋艶星だ。」

『飛烈斬』!!!

シユババババツ!!!

「7. 7mm機関銃!!!」

ゴガガガガガガツ!!!!

「テイルマン行くぞ!!」



「もちろんだテンタコル!!」

バビユツ!!

「やかましい連中だ…!! 墜ちるがいい!!」

ズバツ

「ぐっ…! 負けるかよおおおおお!!!」

「ま、まだだ…!! こんな傷如きで負けるかあああああ!!」

「なにつ…!?!」

「でりやあああああ!!!」

バギヤツ!!!

「ぐふうツツ!!!」

「からのオ…ネビルレーザあああああツツ!!」

ジュツ

「ぐツ!! このツ…!!」

「うううううっ…お腹がツ…!」

「私のロックを直接聞かせてあげるからこっち見ろ!! 『ハートビート・

サラウンド』!!」

ゴオオオオオツ!!!

「チツ…袋叩きじゃないか…!! しまった…完全<sup>ャ</sup>個体は何処へ行つた

!?!」

ビタツ!!!

「あ?!」

「俺／オイラならこの真下にいるぞ!!」

グインツ!!

「ぐうっ!?!」

「<sup>グレイブフオール</sup>葡萄大落下!!!」

ズドンツ!!!

パラパラ

連携プレーを見せ、奴を地上に引き摺り下ろすことができた。

まあ、常に浮いているから話にならないし。

とは言え、ダメージを与えたとしてもそれはHPゲージで例えるとやっとなんくらいと言える。予想だが、そろそろ第二形態になる頃だ

と思う。

「くくっ…寄って集<sup>たか</sup>って倒せるとでも言えるのか…？この天才的な私を倒せる者などいない!!ただでさえ回復しているのだからア!!」

「…匂いが変わった。ここからが本番らしいな。」

ボゴツ…ボゴボゴツ…

「この…私が…最高の…状態に…させるとどうなるか…分からせてやろう…!!」

「あくあ、巨大化なんてしたら大抵雑魚になるやつじゃん。耐久だけはあるそうだが…弱点さえ見えてりや即殺だな。テイルマン、テンタコル、お願いがある。」

「一発で決めらんדרろう?」

「投擲なら任せな!同時に投げればいいんだよな?」

「それなら私もやらせてもらおう。君達の体に負担がかからないよう強化させておく。」

「ありがとうございます、ジーニストさん。よし影<sup>ドツベル</sup>、俺に合わせてくれ。」

「もちろんだよ。あの技を撃ち込むんでしょ?」

「流石だな…いきなりで申し訳ないが、この技で終わらせてやる。俺の体がこれ以上持続しねエからな。」

「うん、分かった。」

『『極・風烈斬』!!』

「全機能フルスロットル・フルブースト…!!」

「標的確認、超弩級戦艦大和型壱番艦 大和!!」

「超弩級戦艦大和型式番艦 武蔵!!」

ピヨンッ

スタツ

「46cm<sup>センチ</sup>イ…!!」

「照準<sup>エイム</sup>…主砲<sup>ラピット・ショット</sup>発射オオ!!」

ブオンッ!!!

「三連装砲おおおおおおお!!!」

バギイイイン!!

「ぬううっ!?!ならばこれでッ…!! 『重鉄槌』!!!」

「効かねエよバアアアアアカ!!!」

「ダガアアアアアン!!」

「ふあっ!?!」

「とつとと…くたばれええええええええええ!!!」

「メッゴオッオッ!!」

「ぐおおおおおおあああああああああああッッ!!!」

「おおらあああああああああああああああッ!!!」

「ドゴオオンッ!!」

艦装無しで日本最強の戦艦の大和を技名として繰り出したのは何回もあったが、今回ばかりはガチでレベルがおかしすぎるほどの威力をぶちかました。俺がさつきまで最大でぶちかました1001%よりも大幅に上回っていた。奴が出した技の鉄の槌(めっちゃ重かったやつ)をバキバキに破壊していたことがあとになって気がついた。

ちなみに俺は気が付かなかったが、超限凸でぶちかました代償として約三日間の強制シャットダウンがもうそろそろ始まる。

「……………ごぶっ。」ブシュッ!!

「艶星いいいい!!」

「私のこと、忘れてないでしょおおお!!」

ポフンッ

「あ、ありがとうお姉さん…それよりお兄ちゃんが…。」

「ごぶっ……………げぼあっ…。」

「全くラビットシップしたら…あとでミッドナイトに報告だからね!!」

「ラビットシップ!これくらいしか応急処置できないが…耐えてくれ!!」

「ぜえ……………はあ…ごぶっ…。」

「Tinkle!治ったか!?!」

「う、うん…なんとか腹痛は治ったよ…。」

「奴を捕らえました!すぐに地上へ離脱しましょう!!」

「よし、脱出だ!!」

脱出しました。

数話前に会った浅木 甘奈あまなさんという女性と、なんかクソデカイ部屋に閉じ込められていた巨人のような子供も脱出済み。

どうやって脱出したのかは聞かないでおくとして…ちよつと厄介なことがはたまた起きてしまったようです。

ズラッ

「このまま逃がすとも思うか!? 殺されたくなけりや、ボスを置いて行け!!」

「おいおいマジかよお…! こんな相手にしていたらオイラ達がやられちまうよ…!」

「艷星はもう戦えない状態だ…このままでは全滅も間違いなく起きてしま…!!」

「Grrrrrrr…。」バチッ

「まずい、暴走を引き起こしかねん」

「どいてどいてええええええ!!」

ガシヤアアアン!!!

「ぎゃあああああああ!!!」

「今度はなんだ!」

脱出したかと思われていた女子がまさかの登場。

個性 ホイップクリームの浅木 甘奈さんです。

どうやら、地上で何かしら変化が起きて戻ってきたとかなんとか。

いや地上に着くの早いし戻るのも早くない??

「はあ…はあ…ラビットシップ大丈夫!」

「えつと…あんたは?」

「私は浅木 甘奈! その子に助けられたって言うていいのかな? とりあえず説明はあと!! 面倒な奴らが来ちやったから逆走して!!」

「なんで!? 説明してくれないと信じられないんだけれど!」

ガサガサガサガサ!!

「やっぱあく!! もう来ちやった!! グンタイアリがもう来てんの!!」

「ぐ、グンタイアリ…? もしかしてグンタイアリってあのグンタイアリの?」

「そうなの!!しかも魔改造された奴らだからもつとヤバいの!!」  
「ごぶっ…お…これに…や…らせ…て…」

「何言ってるんだ!ただでさえ意識を保つので精一杯じゃないか!流石に無理はさせられない!!」

「たの…む…」

「…、オイラの身長でも大丈夫か?」

「峰田、何をするつもりだ?」

「オイラは艶星を信じる。それしか言えないんだ…だから頼む…」

「…なるほどね。私も加勢しなきゃね!萃ちゃんの今の状態では本気なんて出せないしっ!!」

ブスツ!!

「行くよ萃ちゃん…!!皆は私と萃ちゃんの後ろに下がって!」

「分かった。峰田、艶星をしつかり支えておけよ?」

「んなことあ分かってるぜ…!(それにしても…前よりも軽い気がするな…。)」

「無茶だけはするなよ。」

スツ

「『スタービート・サラウンド星の立体音響』!!!」

メッギヤツ!!!

ズガガガガツ!!バガツ!!!

「ごぶっ!わゝ、悪ィ…俺寝る…。」

「おうゆっくり休め!無茶しやがって!なんか羨ましいぜちくしよー!」

「それはいいんだけど…どうやって出る?」

「「「あっ…。」」」

俺は完全に落ちたのでどう出るかすら教えていなかった。

他に出る場所を知っているとしたら…はい、尋問たいむが始まります。

俺が目覚めた頃は3日後のことでした。

## #49 目が覚めて――

俺がボス戦突破してぶっ倒れてから3日が経った日…病院へ運ばれてそこで目を覚ました。よくお世話になっています。

「ん…あれ…?…?…ここは…?」

「艶星少年!?目が覚めたか!!」

「オールマイトさん…?」

「いやあくよかった…。今はじっとしていた方がいい。君は相当なダメージを受けているから。」

「あ…すみません、ご心配をおかけしました…。ってそうじゃねエ!!皆は大丈夫なんですか?!俺が寝た後はどうなっていたんですか?!  
奴らは!?!」

「大丈夫。怪我人は多少出ているが、君ほどの怪我人は出ていない。  
侵略者インヴェーダーのことは安心していいぞ。峰田少年がとても活躍してくれたからね。ギチギチになっていたよ。」

「流石だな、峰田君は…。傷を付けない方法で捕まえるのはとても難しいから…。俺はまたこんなにならしたんですから…。」

「その右腕かい?」

「まあ…はい。右腕の修復治療ができてても以前のように全力を出すことは不可能になってしまいましたから…。」

「相当な戦いをしていたことはしっかり聞いたから。まあ、無茶をするのが君だからね。」

「うっ…すみません。」

「だが、成長しているじゃないか。前までは全て自分で背負っていたが、今はしっかりクラスメイトに頼ることができている。やらかしたとしても、君のクラスメイト達は絶対に見捨てるなんてことはしないから。」

「あ、あの…。」

「ん?」

「皆に起きたことを言ってほしいです…。」

「それはもちろん伝えておくよ。あ、先に君の彼jゴホン!! お姉さんと面会したらどうかな?もう伝えたんだ。」

「えッ?」

ズドドドドドド!!!

バアアアアン!!!!!!

「お、お姉ちゃん:!?」

「:ッ!!」

カツカツカツ

「あつ:お、お仕置きは:あ、あとにして欲しいなって思っt:。」

ギユムツ

「にやつ?!」

「もう:見ないうちに馬鹿みたいにまた無茶して:!!」

ギユウウ:

「あつ:お、おね:痛い:グググ あだだだだだだだ!!!」

(さて、ここはミッドナイトに任せて私は戻るとするか。)

パタン

お姉ちゃんが全力で入って来て抱きつかれました。

そしてオールマイトさんは空気を読んで俺のいる病室から出て行ってしまいました。なんか嫌な予感しかしませんが助けてください。

「本ツ当におバカ:!!しっかりお仕置きしてあげるから大人しくしていなさい!」

「え、えつと:今怪我しているから優しくして欲しいでち:。」

「目、瞑りなさい。」

「え:??」

「あーもう!鈍感なところは本当に変わらないわね!お仕置きよ!!」

ギユウウ:

「もぶぶ:んむむ:.....」

「本当にお馬鹿なんだから:ぐすつ。」

「:、ごめんにやしい:。」

「萃ちゃん。」

「ひゃい?」

チュツ

「んにやつ…!?あつ…お、おね…おねねね…!!?」

「約束のキスよ。今度また無茶したら強制的に私の女になってもらうから。」

「へ…?よ、嫁…?俺は女の子じゃn「仕草が女の子だからね。」グサツ  
ううっ!!」

「だけど本当に無茶だけはしないで。そのせいであなたの右腕がダメになっちゃっているじゃないの…。」

「気をつけましゅ…。」

唇を重ねられました。

無理矢理の口付けではなく、優しいフレンチキスをされました。

お仕置きではなかったけれども、約束を破った時の内容がもうお察しの通りでした。

お約束を破ったら強制的にお嫁にされてあんなことやこんなことをされる羽目になるとかならないとか…。

俺は怖いです。

「あと、血が足りていないわね。」

「あ…っ…う、うん…。」

「果物食べる?」

「あるの!?食べrズキツ 痛 エ!!」

「そんなに飛び上がらないの。何食べたいの?」

「ブルーベリー食べたい。」

「うーん…入ってないわねえ…。」

「何入ってるの?」

「林檎、蜜柑、葡萄にメロン…これもあるわよ?」

「あつ、李<sup>すもも</sup>食べたい。」

「今切るからね。あと、この果物はテナタコル達が持って来てくれたのよ。」

「障子君達が…?あつ…!!色々お礼言わなきや!ズキツ 痛 ええ  
!!!」

「だから急に動かないの!」



ベシッ

「ごめんによしいー！」

「優先順位は分かっているわよ。だけど、今は無茶しちやダメ。皆が来た時にお礼を言いなさい？」

「はーい…。」

「はい、すもも切り分け終わったわよ♪それにしても、すももから食べたいだなんて珍しいわね？大体大好物から食べるじゃない。」

「燃料補給するには鉄分が多いものを摂っておかにはkガジツ あでっー！」

「萃ちゃんってそんなに舌嚙む子だった？」

「多分：燃料が足りにはいかりや…。」

「滑舌も悪いわね…。後遺症にならないことを祈るわ。」

「俺もそう願いたいにや。」

「たまに『にや』って言うの反則レベルに可愛いからやめて。襲いたくなっっちゃう。」

「やだ怖いこの人。」

イチヤイチャしてました。

キスされた時は脳内が真っ白になってバグを引き起こしたCPUみたいになってたけれども、お姉ちゃんはお構い無しで抱きついたりしていた。

めっちゃいい匂いしました。

ちなみに俺はお姉ちゃんの髪がもふもふしていてそれに埋もれていました。めっちゃもふもふでした。

「そういえば、例の女の子も来ているわよっ。」

バアアアアン!!!

「ラビットシップああああああ!!!」

「浅木さん!? あっちよつとその距離はまずいんじゃない」

「『ホイップ』!!」

モプンツ!!

「んむもっ!? ボフツ むぼっ?!」

「やっと起きてくれたああああ!! 爆睡しすぎいいいい!!」

「むもも…もももも…。」

「ねえ、萃ちゃんクリームで埋もれて凄いことになってるんだけど…。」

「あつ。」

「ぷはっ！な、なんで俺をクリームまみれにするのにや…。」

「抱きつこうとしたんだけど衝撃が強すぎるかもだから緩和させる為にやったー！」

「あ、納得。」

（クリームまみれの萃ちゃん…いいわね。美味しそう…。）ジユルリ

「お姉ちゃん食べようとしてるよね？」

「バレちゃった☆」

「えっ?!ミッドナイトに弟がいたの!？」

「この子の彼女よ♪」

「付き合っていたの!？」

「ちがーう!!」

「違う訳ではないでしょー？」

「うえっ…そ、そーだけど…。」

「先に取りられちゃったかあ〜！狙っていたのにいく!!」

「残念だったわね♡」

「だけどラビットシップが幸せになるならそれでヨシッ！（某現場猫

風）」

「もうやだ泣きたい。」

その後も彼女達と俺でお喋りをしつつも、今の状況がどうなっているのかを聞いた。被害は甚大ではなかったが、負傷者がやたらと多かったみたい。個性+武器持ちが厄介だったらしくて苦戦を強いられた人達もいたとか。

出久君達の視点にいきます。

「萃君が起きたんですか?!」

「緑谷少年ちよつと近い…。」

「早く面会したいんですが!!」

「まあまあ落ち着こうか…。今は安静にしているが、艶星少年のこと

だから上手いこと治しているだろうね。会うのは明日でもいいんじゃないかな?」

「あつ、そうですね…。そういえば、萃君の様子はどうでしたか?」

「血相は良くなかった。血をかなり失っていたからね。今は血を増やす為にあれやこれやと口に入れていると思うよ。」

「変なものまで食べなきゃいいんですけどね…。」

「まあ…彼だからね…。」

そして俺の視点にモドール。

「お腹痛ええええ!!!」

「何か変なもの食べたの!?!」

「知らねえええ!!お手洗いに行ってくる!!」

ダダダダダ!!!バダン!!!

「食べ過ぎてお腹痛くしたんじゃ…あら?何かしらこれ…。さくらんぼの種…の欠片?!」

ジャアアア…

「くつそおお…さくらんぼの種まで普通に食べちゃまった…。気がついてたら普通に噛み砕いていたなんて…。咬合力がないと砕けないはずなんだが…?」

コンコン

「萃ちゃん大丈夫?」

「まだお腹痛い…。さくらんぼの種を気づいたらバリバリ食べていたみたい…。」

「それでお腹壊すつてどういうことなの?」

「さくらんぼの種にはアミグダリンっちゅー天然毒の成分が入っていて、凄く簡単に言えば青酸カリが種の中に入っぺグギョルルルぬおおあああああつ!!!あとで話しゅ!!!」

「あ、うん。分かったわ。え、毒!?!」

変なものどころか、知らないうちに咬合力が上がってさくらんぼの種まで食べてしまいました。もちろん食べていた時は種無しさくらんぼかなとか考えていたけれども、思っていたよりとんでもねーことになっていました。

「それで、なんで種ごと食べていたの？」

「種無しかと思ってたの。」

「硬さくらい分かるでしょ？」

「それさえ気づかなかったの。」

「どんな顎してんの!？」

「俺も聞きたいよ。」

「計測器あるか聞いてくるわね。」

「へ?う、うん…。」

数分後。

「許可貰って持ってきてもらったわよ。」

「あ、ありがとう。」

「この子がさくらんぼの種を致死量以上に食べてお腹壊す程度で済んだのですか…?」

「本当よ?今でも食べさせられるけれど?」

「またお腹壊してお手洗いに行くハメになるからやめて!」

「と、とりあえず測ってみましようか…。はい、お口を開けてね?」

「んあー…かぷっ。」

「はい力入れれミシッ ミシ…??」

バキヤンツ!!!!

「へ?」

「んむむ???」

壊れた☆

## #50 体のバグ、平和な一日

「ねえ、咬合力どうなってるの？」

「俺が聞きたいのだが？」

「これで…無個性…??君、その力は何処から出てきたんだい…?」

「俺の力単体なのですが…?」

「ええ… (困惑)」

「これくらいが個性くらいの咬合力かなって思って鍛えていたんですが…。」

ポニユツ

「もにゅ!!」

「きーたーえーすーぎ!!」

「ご、ごめんやひやい… (何で謝ってんだ俺!?)」

「んー…これで個性を持っていないって言われても中々理解されないのも納得してしまうな…。調べても大丈夫かい？」

「あ、俺は大丈夫つすよ。」

「…変なことに利用しないわよね？」

「大丈夫だ。レントゲンで撮って見てみるだけだから。」

少年達移動中…

「それで…何故お姉ちゃんは俺を抱き抱えているの？」

「落ち着くからよ♪」

「はあ…お姉ちゃんらしい変態さだよ…。」

「頬っぺも柔らかいからすりすりしたくなるのよ♪」

スリスリ

「にやつ!?や、やめろおおー!!離せえええええ!!!」

「やくよ♪」

「なんて賑やかなんだ…。」

イチヤコラしたくないのにめちやくちやされていました。

気がつけば診察室へ着いてそこへ入った。

「はい、お口開けてね。」

「んあ〜…。」

(ん〜可愛い。いじめ倒したいわ。)

「ん〜…やっぱり何の変化もないねえ…。これと言った気になるところがないし、歯も普通の形をしているし…レントゲンとCTスキャンも撮っていいかい？とりあえずお金の心配はしなくていいから大丈夫だよ。」

「あ、お願いします。」

少年診察中…

「何かありましたか？」

「特になかったね。」

「なかったの!？」

「単なる鍛えすぎです。」

「萃ちゃん、少しは休まなきやね。」

「ええー!？」

「ええ〜!?!じゃないの！お仕置きと休むのどっちがいいか今ここで答えなさい！」

「お姉ちゃんの鬼イ!!」

「お仕置き決定ね!!」バチンッ

「ごめんなさい休みましゅ!!!」

(何だこの愉快な二人は…。)

お姉ちゃんにお仕置きされる前にしっかりと休むことを誓いました。

ちなみにこっそり鍛えようとしたりするなどの行為を行った際は

お姉ちゃんからのマジチョップを喰らわされることとなるらしい。

絶対痛い。

後日退院はしたものの、お姉ちゃんは離れてくれずにべったりとくっついて来ていました。

「かーなめちやくん♪」

「や、やめろおー！変な目で見られるでしょーが!?!頬っぺすりすりしないでー!というか、なんでついてきてるのさ!!」

「いいじゃない♪どうせ明日は土曜日なんだし♪」

「…はッ！ま、まさか…!!?」

「おつやすみ〜♪」

眠らされました。

タイミングの悪すぎる金曜日だった。

お持ち帰りされたが、俺は寝ている最中に俺の中にいる二人がようやく顔を出してくれた。

「よ、本体<sup>俺</sup>。」

「あつ、もう一人の俺<sup>キ</sup>と獣<sup>ビースト</sup>。何していたん？」

「あー…悪い。俺らさ、思ったことがあつてさ。」

「何かあつたの？」

「これを見てくれ。」

「えー…??繋がってる?」

「いや、なんか合体しちった。」

「ナンデ!？」

「知らね。」

「何がどうなつたらそうなるん!？」

「分かんね。本体<sup>俺</sup>が戦っている反動でそうなつたんじゃねーか？」

「ええ…ま、まあそんなにデメリットが起きるような感じでも無さそうだし…いっつか。」

「あ、いいんだ。」

「まーね。」

「それにしても…よくそんな体になってまで動いたよなお前。」

「無茶しちまったぜ☆」

「なあ、次また戦闘になつた時は俺を呼んでくれないか？」

「ああ、もちろんだ。お前<sup>キラ</sup>の力が必要だからな。その時は頼むぜ？」

「おうよ。」

「おつと…そろそろ目が覚めるみたいだ。俺ん中で暴れ散らかすなよ?」

「大丈夫だ。制御はできてっからな。」

夢の中で二人に会ったあとそのまま目を覚ましたが、めっちゃめっちゃ眠くて目がすっごくシパシパしていた。

ちなみにお姉ちゃんの家にお持ち帰りされてから二時間くらい経

過して膝の上で目を覚ました。しれっと膝枕しないでいただきたいですね。

柔らかくて困惑します。

パチツパチパチツ…

「ふう…眩しっ…。」

「あら、やつと起きたの？」

「誰のせいでこんなに寝させられたと思ってんのよ…ふわああ…。」

「このまま覚まさないなら襲ってやろうと思っただけれど、ダメだったわね…。」

「強制睡眠からの夜這いですかい。犯罪よそれ。」

「うるさい要注意人物。」

「うっ…お、お姉ちゃんが虐めてくるうう!!」

「ほーらそんなにすぐ動かないの。まだ体が治りきっていないでしょ？私の傍に来なさい。」

「む、むうう…変なことしない？」

「私をなんだと思っているのよ。」

「変態、痴女、いじわるなドSお姉ちゃん。」

「泣かすわよ？もしくは絞めるわよ？」

パキパキ

「ひっ!!」

とても平和です。

お姉ちゃんと一緒に過ごしている時が何かと楽しくなる。

たまーにお姉ちゃんのドスの入った声があつてビビる。怖い。

「さてと萃ちゃん、ご飯は何にしたい？」

「え、ご飯？…どうしよっかなあ…。」

「私でもいいのよ」「ハンバーグで。」なんてそんな面倒なの選ぶのよ  
おお!!」

「お手伝いするつもりなんだけれど…。」

「いや萃ちゃんは座っていないさい！私の未来の嫁なんだから！」

「しれっと女の子扱いしないでくれ。」

「え？私の女でしょ？」



「俺は男だつて!!」

「そうやって認めない子はあ…こうだあぁ!!」

ワシヤワシヤアア!!

「んにやああああツ!!俺の頭をぐしやぐしやにするにやああああ!!」

「それっ!」

ムニユ

「んぶっ!」

頭をわしやわしやされて只管ひたすらに抵抗してポカポカと叩いた。

もちろん強くやっていません。

しかも隙を見計らって俺に抱きついて何がとは言わんが柔らかいマシユマロみたいなナニカに頭を押さえつけて顔を埋うずめられました。

呼吸できない!

「萃ちゃん、少しだけこの状態になりなさい。」

「んむむむむ…!!むぐぐーっ!!」

「こら暴れるな!」

ベシッ

「ぶえっ!」

「こうやって抱くのはいつ頃かしらね…。まだ萃ちゃんが小さかった頃よね?」

「んんん…ぷはっ!!そ、そんなにやの覚えてないよ!急になしたのさ!!」

「さあね?」

「つたく…人前では絶ツツツ対にこれはしないでよ?!俺マジで死んじやうから!!精神的に!!」

「はいはい♪あ、ゆっくりしてなさいね?お手伝いは不要だから♪」

「そこまで言うなら…分かった。ゆっくりしてるよ。」

「あ、それとね?」

「んえ?」

「もしよ?待っている間に新しい技を考えようとするなら、その前に自分の技の一つを鍛たくえることを考えたらどう?」

「あー…確かに。やってみりゆ。」

「試しでやってみたいならその部屋でやってね♪」

「はーい。」

パタム

鍛えるにしても加減を覚えることを考えなきゃいけない。

強力な個性を持つているにしろ、反転させる個性持ちもいるかも知れないしそういった厄介な敵も出てくる可能性も有り得る。

変に力を入れるとお姉ちゃんに襲われる可能性があるのです、イメージをするだけにしようかと思ったり…しています。

(…やっぱり心配ね。少し見てみようかしら?)

チラッ

「あああああッ!!ちよつと待ってちよつと待って!!イメージだけのハズなのになんか力んだら電気バチバチってしちやっただあああ!!」

「何ドジしてるのよおおお!!」

バチインッ!!!

「へぶちっ!!!」

ビンタされちやっただ。

ちゃんと理由も話したけれど、頬っぺに出来た美しく跡が残った手形は凄くヒリヒリしました。しかも吹っ飛んだので顔面から壁にぶつかりました。痛かった。

「全く…イメージするだけでそんなことになっちゃったら何もできないじゃない…。」

「ごめんによしやい…。」

「まあいいわ。ご飯食べてから考えましょ?」

「はーい…。」

「それと、お仕置きね?」

「ひえっ!?!」

「頬っぺぶにぶにの刑ね!」

「ええー!?!」

「痛い方が良かったかしら?」

「やだ!」

「なら我慢してね♪」

「むう…ぐぬぬ…。」

ご飯食べた後からはずっと頬を触られ続けた。それと噛まれた。何故だか分からんけれど甘噛みされた。

必死に抵抗したけれど、やはり力の差もある上に弱点をド突かれてしまっているので何もできなくなっていました。

もちろん翌朝はお姉ちゃんの抱き枕にされていたので身動きすらとれませんでした。